

青山学院大学

総合研究所報

創立30周年記念特集号

第26号



2019年3月

青山学院大学総合研究所

学校法人青山学院は、青山学院大学における教育・研究との有機的な関係のもとに、広く学術を統合し、社会と学術文化の進展に寄与することを目的として、大学に総合研究所を設置する。

《 目 次 》

巻 頭 言	所長 菊池 努.....	1
I. 特集 青山学院大学総合研究所創立30周年記念シンポジウム		
「総合研究所創立30周年記念シンポジウムの開催」.....	所長 菊池 努.....	4
II. 研究部活動報告および研究成果（総括・要約）		
(1) 研究部活動報告		
総合文化研究部門 課題別研究部	研究部長 菊池 努.....	10
総合文化研究部門 キリスト教文化研究部	研究部長 茂 牧人.....	11
領域別研究部門 人文科学研究部	研究部長 佐伯 眞一.....	12
領域別研究部門 社会科学研究部	研究部長 菊池 努.....	13
領域別研究部門 自然科学研究部	研究部長 小池 和彦.....	14
(2) 研究成果（総括・要約）		
①総合文化研究部門 課題別研究部		
研究成果報告論集『タイ人日本語学習者の学びを支援する—書く能力・話す能力向上へ に向けた ICT 活用と日本語教育のコラボレーション—』 (タイ人日本語学習者の学びを支援する—書く能力・話す能力向上へ に向けた ICT 活用と日本語教育のコラボレーション—)		15
研究成果報告論集『自校史研究と教育実践モデルの開発—青山学院史研究—』 (自校史研究と教育実践モデルの開発—青山学院史研究—)		27
②領域別研究部門 自然科学研究部		
研究成果報告論集『大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み』 (大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み)		40
III. 研究プロジェクト・研究ユニット資料		45
IV. 1989年度～2016年度研究プロジェクト資料		53

巻 頭 言

総合研究所所長 菊池 努

青山学院大学の総合研究所は今年で創立30周年を迎えます。この30年間に世界も日本も、そして青山学院も大きく変わりました。創立後まもなく冷戦が終結し、「ポスト冷戦」の世界では、民主主義と市場経済が世界に浸透し、かつて激しく対立した東西の融合が実現するとの展望が語られました。しかし今日、権威主義的な国家が台頭し、経済発展には権威主義の方が効率的だとの主張も見られます。市場経済への疑念も生まれています。国家が経済活動に深く関与する国家資本主義が勢いを増しているかにも見えます。いまや「ポスト・ポスト冷戦」の混沌の時代に入ったとの見方もあります。

1980年代末にバブル景気に沸いた日本は、その後も不沈空母のごとく世界経済を力強く牽引してゆくかに見えました。しかしバブル崩壊とともに日本は長期の経済的低迷にあえぎ、今なおかつての勢いを取り戻すに至っていません。活気ある日本経済を肌で感じたことのない人々が若い世代の大半を占めています。夢を語るよりも足元を直視せよという「現実主義」が彼らの間で力を増しているかにも見えます。「心地よい衰退 (graceful decline)」の気分が彼らを支配しているのでしょうか。

第二次世界大戦が終結して70数年、冷戦の終結から四半世紀がたち、世界は再び大きな転換期に入ったようです。国際自由貿易体制など、戦後の世界の発展を支えてきた様々な国際制度への異議申し立てや抵抗が世界のあちこちに生まれています。国際協調の仕組み作り (グローバル・ガバナンス) を達成するのは難しくなっています。世界は「海図なき航海」を余儀なくされる時代がきたのかもしれない。

技術の発展が社会に及ぼす影響も甚大です。AI (人工知能) やロボット技術の発展は、人間と社会の関係を根本から変える可能性を秘めています。サイバーテロのような新しい脅威も出現しています。かつてあるドイツの社会学者が今日の世界を、自分に何ら責任のない事柄で生命や財産が脅かされる「リスク社会」と表現しましたが、科学技術の発展は恩恵や利便と主に新しいリスクを生んでいます。

青山学院ではこの30年間のうちに、キャンパスの再編が進み、いくつも新学部が設置され、また既存の学部が改組されました。青山学院大学は名実ともに総合大学に生まれ変わりました。

世界も日本も青山学院大学も変化する中で総合研究所は、新しい時代の世界や日本の課題に果敢に取り組むべく数多くの研究プロジェクトを支援してきました。特に総合研究所は、総合大学としての青山学院の特性を生かした総合的・学際的な研究を積極的に支援してきました。異なる分野の研究者が切磋琢磨した成果は総合研究所の研究叢書や報告書として刊行され、内外の高い評価を得てきました。こうした研究支援により、ともすれば蝸壺に閉じこもりがちの研究者に多角的、多面的な視野を提供できたと私どもは自負しております。

実際、発足以来30年間にわたり総合研究所は各分野の知的資産を糾合する「総合」プロジェクトの実施を積極的に支援してきました。支援したプロジェクト数は200件を超え、参加した研究者の数は1300名近くに達しています。この中には学外の研究者も数多く含まれており、総合研究所は研究プロジェクトを通じて国の内外を結ぶ知的ネットワークの中心の一つとして機能してきました。こうした過去の実績と資産は巨大です。実績と資産を最大限に活かし、今日の課題に取り組む体制をいかに拡充するか、引き続き我々に課された大きな課題です。

総合研究所は、新しい時代が求める世界と社会の課題に取り組むべく、大学執行部と協力して過去数年にわたり杉原前所長のもとで組織の再編作業に取り組んできました。総合研究所はこれまでも必要な組織の改革作業を続けてきましたが、発足後30年を経て、包括的な組織の見直しが必要であるとの声に応えたものです。ただ、この組織の改編が青山学院における時代の変化に対応した新しい学問の発展にどこまで貢献できるのか、

まだ判然としません。あらゆる組織の改編がそうであるように、組織の改編が期待された効果を生まないこともありえます。これまで築き上げてきた業績と資産を減価させる可能性もあります。組織の再編や改革にはリスクを伴います。今般の組織の見直しに安住することなく、日々の組織の見直し作業が今後も不可欠です。

2018年度の所報は、これまでの組織運営と新たに導入された運営方式が併存した、いわば移行期のそれです。今年度から、助教・助手、博士後期課程学生を対象とした新たな研究支援プログラム（アーリー・イーグル研究支援制度）及び科学研究費獲得に対する基盤研究強化支援推進プログラムを総合研究所の下で実施することにもなりました。そうした新しい試みが青山学院の研究の一層の活性化に役立つよう切に期待します。

総合研究所は小さな組織ではありますが、転換期の世界と日本社会が直面する課題の解決に、小さくとも意義のある貢献をする研究を今後とも支援してゆく所存です。総合研究所の研究活動全般や本所報に対する忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

I. 特集 青山学院大学総合研究所
創立30周年記念シンポジウム

総合研究所創立30周年記念シンポジウムの開催

総合研究所所長 菊池 努

2018年12月19日、本多記念国際会議場において、総合研究所創立30周年を記念するシンポジウムが開催されました。

総合研究所はこれまで、創立10周年、20周年の節目の年にそれぞれ記念シンポジウムを開催してきました。創立30周年を記念する今回のシンポジウムは「変動するアジアの国際関係と日本の針路」をテーマに基調講演とそれに続くパネル・ディスカッションを行いました。

日本の平和と繁栄はアジアのそれにますます直結する時代になりました。そのアジアの国際関係は今、太平洋戦争終結後最も激しい変動期にあります。アジア諸国の間には貿易や投資などの面で濃密な経済相互依存の関係ができています。人の往来も活発です。しかしその一方で緊張と対立も表面化しています。「中国やインドの台頭」という言葉が示すように、国家間の力関係が変化しています。過去の歴史を見ると、国家間の力関係の変動期には国際関係が不安定化しています。しばしば戦争も発生しました。アジアでは国家間の相互の疑心暗鬼も強まっています。領土や海洋権益をめぐる争いも激化しています。そして、これまでそうした変化の中で「安定要因」としてこの地域の平和と繁栄を支えてきたアメリカにも変調が見られます。「アメリカ第一主義」を掲げた大統領のもとで、アメリカが果たしてこれまで同様にアジアの平和と繁栄に大きな役割を果たす意思を持ち続けるのか、疑念が表明されています。アメリカがその維持に大きな役割を果たしてきた、戦後のアジアの平和と繁栄を支えてきた「自由で開かれた秩序」の将来を懸念する声も高まっています。

日本の平和と繁栄に直接影響を及ぼすアジアの国際関係がますます不透明になる時代に日本はどのような針路をとるべきなのでしょう。我々が自分自身と日本、そしてアジアの将来を考える際に貴重な視点や見方を提供して下さる方々をシンポジウムにお迎えしました。

佐々江賢一郎氏は駐米大使や外務次官として、外交の最前線で指揮をとられた、日本を代表する外交官です。現在は（公益財団法人）日本国際問題研究所の理事長として国際関係の研究機関の育成に尽力されています。山本吉宣氏は、東京大学（駒場）を経て、数年前まで青山学院の国際政治経済学部で教鞭をとられた、日本を代表する国際政治学者です。山本先生のご著書『「帝国」の国際政治学』は名著の誉れの高い業績です。秋田浩之氏は、海外経験の豊かな外交や安全保障のジャーナリストです。日本経済新聞に秋田氏が寄稿されるコラムは、その独創的な発想や視点から内外の専門家の高い関心を呼んでいます。道傳愛子氏は、東南アジアを中心に精力的に取材をされ、その成果をNHKの国際放送を通じて世界に発信してきました。現在もニュースキャスターとして活躍中です。

佐々江氏は基調講演で、アメリカ、中国それぞれの外交政策、米中関係、北朝鮮の核やミサイルをめぐる問題などについて、長年の外交経験に裏打ちされた、幅広い視点から論じました。佐々江氏はアジアの国際関係の厳しい現実を指摘しつつ、外交による打開と日本の役割への期待を述べました。

基調講演に続くパネル・ディスカッションでは、米中の経済的な相互依存関係が崩れ、それぞれが異なる経済圏を構築する（“Decoupling”）可能性、アメリカ社会の分断状況の今後と対外政策への影響、中国の国内政治の不安定化とアジアの国際関係への影響、ハイテク覇権をめぐる米中の争いの今後、「インド太平洋」という新しい地域概念の意味と今後、日本のアジア外交の中でのASEAN（東南アジア諸国連合）の役割と意義、アジアの平和と繁栄に果たすべき日本の課題と役割などについて活発な議論が行われました。パネリストの間で深い経験と豊かな学識に裏打ちされた含蓄のある議論が展開されました。また聴衆とパネリストとの間でも数多くの質疑応答がなされ、我々が直面する課題についての理解の促進に本シンポジウムが一定の役割を果た

えたものと思われます。シンポジウム終了後には、たくさんの聴衆の方々から「もっと時間をとって話を聞きたかった」との声を耳にしました。

なお、シンポジウムの様子は総合研究所のホームページ (<http://www.ri.aoyama.ac.jp>) でも閲覧できます。ぜひご覧いただき、日本とアジアの今後を考える材料にいただければ幸いです。

最後になりますが、本シンポジウムを開催するにあたり、研究推進部総合研究課や研究推進課の皆さんには多大なご支援を賜りました。厚く御礼申し上げる次第です。

変動するアジアの国際関係と日本の針路

“Japan Acts in a Changing Asia”

2018.12.19 (Wed)
14:00 — 16:00

参加費無料・事前お申込み制
No charge, Prior Registration Required
同時通訳(日→英のみ)付
Japanese-English Simultaneous Interpretation

本多記念国際会議場
青山学院キャンパス 17号館 6階
Honda Memorial Hall
6th floor, No. 17 Building, Main Campus
of Aoyama Gakuin University in Shibuya

基調講演者 / Keynote Speaker



佐々江 賢一郎 / Kenichiro Sasae

日本国際問題研究所理事長(前駐米大使、元外務次官)
President, Japan Institute of International Affairs
(Former Japanese Ambassador to the United States and
former Vice Minister for Foreign Affairs)



パネリスト / Panelist

山本 吉宣

Yoshinobu Yamamoto

新潟県立大学大学教授
東京大学名誉教授
青山学院大学名誉教授

Professor at the University of
Niigata Prefecture
Professors emeritus,
University of Tokyo and
Aoyama Gakuin University



パネリスト / Panelist

秋田 浩之

Hiroyuki Akita

日本経済新聞本社コメンテーター
Commentator of Nikkei Shimbun



パネリスト / Panelist

道傳 愛子

Aiko Doden

NHK ワールド シニア・ディレクター
「Eye on Asia」キャスター
Special Affairs Commentator,
NHK World TV.



モデレーター / Moderator

菊池 努

Tsutomu Kikuchi

青山学院大学総合研究所長
国際政治経済学部教授
Director of the University
Research Institute and professor
at the Department of International Politics,
Aoyama Gakuin University

お申込み方法：右のQRコードを読み込んで、お申込みフォームへアクセスしてください。
うまく読み込めない場合は下記のURLへアクセスしてお申込みください。
To register, please scan the QR Code or access the following URL.

<https://goo.gl/n5CLTz>

※メールでのお申込みも受け付けております。 souken@aoyamagakuin.jp



青山学院大学 総合研究所 創立 30 周年記念シンポジウム 変動するアジアの国際関係と日本の針路

日本の平和と繁栄はますますアジアのそれに直結する時代になりました。そのアジアは、太平洋戦争終結後最も激しい変動期にあるといえます。かつての「貧困のアジア」は大きく姿を変えました。アジアは今後世界経済を主導する力を持つにいたりました。

しかしその一方で緊張と対立も顕在化しています。中国やインドの台頭という言葉が示すように、この地域の国家間の力関係が変化しています。国家間の疑心暗鬼も強まっています。領土や海洋権益をめぐる争いも激しくなっています。そして、これまでそうした変化の中で「安定要因」としてこの地域の平和と繁栄を支えてきたアメリカにも変調が見られます。

戦後の世界を支えてきた「自由で開かれた秩序」の将来を懸念する声も高まっています。

そうした時代に日本はどのような針路をとるべきなのでしょう。このシンポジウムでは日本を代表する識者をお迎えして、アジアがいま直面する課題と日本がとるべき針路についてお話いただきます。皆さんがこれからの自分の将来を広いアジアと世界の動きを念頭に考える機会となれば幸いです。



佐々江 賢一郎（日本国際問題研究所理事長）
Kenichiro Sasae

公益財団法人日本国際問題研究所理事長兼所長。1974年東京大学法学部卒業。同年外務省入省。北米第二課長、北東アジア課長、内閣総理大臣秘書官、総合外交政策局審議官、経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官、外務事務次官、駐米大使などを歴任。2018年7月より現職。多くの対外経済交渉を手掛け、また「六者協議」の日本代表、G8サミットの政務局長を務めるなど、外交官として豊富で幅広い経験を持つ。岡山県出身。

Kenichiro Sasae joined the Japanese Ministry of Foreign Affairs after graduating from The University of Tokyo in 1974. His distinguished and illustrious diplomatic career includes prestigious assignments as Executive Assistant to the Prime Minister, Director-General of the Economic Affairs Bureau, Director-General of the Asian & Oceania Affairs Bureau, and Vice Minister for Foreign Affairs. During his period of service in Tokyo, he represented the Japanese Government in the Six-Party Talks on North Korean issues. He also worked as Political Director for the G-8 Summit. From 2012-2018, he was Ambassador of Japan to the United States. Subsequently, in July 2018, Ambassador Sasae was appointed President of The Japan Institute of International Affairs to head Japan's premier foreign affairs think tank.



山本 吉宣 / Yoshinobu Yamamoto

新潟県立大学大学教授
1943年生まれ。
東京大学教養学部（国際関係論）卒業。ミシガン大学博士課程修了。
埼玉大学、東京大学、青山学院大学を経て、新潟県立大学教授。
東京大学名誉教授、青山学院大学名誉教授。
著書『帝国』の国際政治学 など

Yoshinobu Yamamoto, Professor at the University of Niigata Prefecture. He taught at University of Tokyo and Aoyama Gakuin University, specialized in international relations theories and Asia-Pacific Affairs. His Publications include: International Politics of Empire and International Regimes and Global Governance (both in Japanese).



道傳 愛子 / Aiko Doden

上智大学 外国語学部 英語学科卒業。
米コロンビア大学国際関係論 修士
「ニュース9」などニュース番組を担当後、
バンコク特派員としてタイ、ミャンマー、ASEAN 情勢を取材。
「NHK海外ネットワーク」キャスター、
国際情勢担当解説委員を経て現在NHKワールド
Special Affairs Commentator および「Eye on Asia」キャスター。

Ms Doden is Special Affairs Commentator on NHK World TV. Having been a correspondent based in Thailand covering ASEAN countries, she has expertise in reporting on a wide range of global issues from hard security to human security. She has BA from Sophia University and MA from Columbia University.



秋田 浩之 / Hiroyuki Akita

日本経済新聞社本社コメンテーター。
87年、自由学園最高学部卒、日本経済新聞社入社。
92年、米ボストン大学院修了。北京支局、政治部、
ワシントン支局、米ハーバード大研究員を経て、現職。
著書に『暗流、米中日外交三国志』（08年）、
『乱流、米中日安全保障三国志』（16年）

Commentator. He joined Nikkei Shimbun 1987 and served as Correspondent at the Beijing Bureau, the Washington DC Bureau, and Editorial Writer. He received his BA from Jiyu Gakuen College and MA from Boston University. He was also Associate at Harvard University. He wrote two books, which are about US-China-Japan triangular relations.



菊池 努 / Tsutomu Kikuchi

青山学院大学総合研究所長、
国際政経学部国際政治学科教授。
南山大学法学部教授、蒙州国立大学・東南アジア
研究所の客員研究員、ブリティッシュ・コロンビア
大学客員教授などを歴任。一橋大学博士（法学）

Tsutomu Kikuchi is director of the University Research Institute and professor at the Department of International Politics, Aoyama Gakuin University. He was a visiting fellow at the Australian National University (ANU) and the Institute of Southeast Asian Studies (ISEAS), a visiting professor at the University of British Columbia(UBC), and consultant of the Asian Development Bank(ADB). He obtained a doctoral degree from Hitotsubashi University, Tokyo

青山学院大学 総合研究所 創立 30 周年記念シンポジウム

変動するアジアの国際関係と日本の針路

進行プログラム

14:00 14:05	開会のご挨拶 Opening Remarks	菊池努 Tsutomu Kikuchi	総合研究所所長 Director of the University Research Institute
14:05 14:15	ご挨拶 Salutation	三木義一 Yoshikazu Miki	青山学院大学学長 President of Aoyama Gakuin University
14:15 14:45	基調講演 Keynote Speech	佐々江賢一郎 Kenichiro Sasae	日本国際問題研究所理事長 President of Japan Institute of International Affairs
14:45 	パネルディスカッション Panel Discussion	-Panelists-	
		佐々江賢一郎 Kenichiro Sasae	日本国際問題研究所理事長 President of Japan Institute of International Affairs
		山本吉宣 Yoshinobu Yamamoto	新潟県立大学教授 Professor at the University of Niigata Prefecture
		秋田浩之 Hiroyuki Akita	日本経済新聞本社コメンテーター Commentator of Nikkei Shimbun
		道傳愛子 Aiko Doden	NHK ワールド・シニア・ディレクター Special Affairs Commentator, NHK World TV
		-Moderator-	
		菊池努 Tsutomu Kikuchi	総合研究所所長 Director of the University Research Institute
15:30 15:30	質疑応答 Question and Answer Session		
15:55 15:55	閉会のご挨拶 Closing Remarks	菊池努 Tsutomu Kikuchi	総合研究所所長 Director of the University Research Institute
16:00			

Ⅱ. 研究部活動報告および研究成果 (総括・要約)

(1) 研究部活動報告

総合文化研究部門 課題別研究部

研究部長 菊池 努

総合文化研究部門課題別研究部では、「株式市場に関する国際比較調査～投資家心理からのアプローチ～」の研究プロジェクトが2017年度をもって終了した。2018年度中に研究報告書として最終成果が公表される予定である。

「株式市場に関する国際比較調査～投資家心理からのアプローチ～」は2015年度から3年をかけて実施した研究プロジェクトである。株式市場では、投資家はどのように将来を予測し実際の投資判断を行っているのだろうか。このような疑問は、資本市場の誕生とともに多くの投資家によって抱かれてきた。本プロジェクトの目的は、株式市場に関する投資家の認識についてのアンケート調査を継続的に行うことにより、株式市場の変化を投資家心理に焦点をあてて解明しようとするところにある。当初、半年毎の機関投資家調査の実施、結果の公表が主たる目的であった。しかし、本プロジェクト応募後、株式市場の不確実性が急速に高まったため、半年に一度であった日本の調査を月次化して実施した。2017年12月のビットコイン市場でのバブルの崩壊や、中国市場での株価の下落、日米の株式市場を含む世界の市場での2018年2月のリーマンショック時以来の株価の急落により、本調査研究への注目度が高まっている。アンケート調査に基づく最新の研究成果が最終報告書で提示されることを期待したい。

研究部活動報告

総合文化研究部門 キリスト教文化研究部

研究部長 茂 牧人

2017年度は、二つの研究プロジェクトが活動を行った。一つは、「贖罪思想の社会的影響の研究」（代表：森島豊准教授）であり、こちらは3年目であった。もう一つは、「多元共生の思想と動態：現代世界におけるエイレーネーの探究」（代表：藤原淳賀教授）であり、こちらは2年目である。

前者の「贖罪思想の社会的影響の研究」のプロジェクトは、贖罪思想の社会的影響について、旧約聖書時代から現代に至るまでの思想史的考察と人権の法制化に至る経緯を考察し、研究目的にそって概ね進展した。当初フィリピンの社会的影響についての考察を入れる予定であったが、人権の法制化過程がプロテスタント神学の影響を中心としているため、フィリピンの調査をはずすことになった。

タイにおける贖罪信仰の人権法制化の影響については、欧米と同じ仕方で成立していることを発見できたことは大きな成果であった。特にタイ北部チャンマイにおいて、日曜日の礼拝の遵守をした殉教者がでたことをきっかけにして、McGilvary という宣教師がバンコクの国王に訴えることによって1878年に宗教寛容令が生まれたことなどが判明した。

また、本年度この研究プロジェクトは、ハンス・バルト氏の公開講演会を含めて8回の研究会を行うことができた。各研究員との連絡も密に行えて、組織形態は充実したものとなっている。2018年度は、成果刊行物の刊行の予定である。

後者の「多元共生の思想と動態」のプロジェクトも、研究目的に沿って着実に進展した。2017年度は、ドイツ・ケルン大学から Wolfgang Jagodzinski 先生をお招きして、ヨーロッパにおける世俗化と、それに伴う価値観と道徳観の変容についての研究を紹介していただいた。その後には、真鍋一史教授によって「現代における多元共生と宗教多元主義の視座から考える」と題して、宗教多元主義の意義について研究発表をお聞きした。さらに、樺島榮一郎准教授から「メディアと社会変化」と題する研究をお聞きし、最後には、福島安紀子教授によって「文化活動がつむぐ共生」というタイトルの講演をいただいた。これらの研究活動を通して、プロジェクト内のメンバーの相互関係において有機的な連携を形成でき、活発な意見交換が行える環境を整えることができた。

2018年度には、さらに相模原キャンパスにおいて5回の公開講座を行う予定でもある。今後の活動が期待できる。

研究部活動報告

領域別研究部門 人文科学研究部

研究部長 佐伯 眞一

人文科学研究部では、他の研究部と同様、従来は、複数のプロジェクトが並行して研究活動を展開し、あるいは、成果報告を出してきたが、2017年度は、総合研究所の改革のためにプロジェクトの新規募集を停止した関係で、新たなプロジェクトはなく、1件のプロジェクトが2016年度からの活動を継続した。

前年度から引き続き活動したのは「和蘭別段風説書」の研究である。岩田みゆき・文学部史学科教授を研究代表者とし、研究分担者は、篠原進・文学部日本文学科教授、割田聖史・文学部史学科准教授、片桐一男・青山学院大学名誉教授、佐藤隆一・青山学院高等部教諭である。昨年度の人文科学研究部活動報告にも記したように、「和蘭風説書」とは、江戸時代に長崎に入港したオランダ船から提出された書類のうちのニュースにあたるものを言う。日本外交史を研究する上で重要な史料だが、研究の基礎となるべき史料の全体を見渡せる史料集がいまだ存在しない。このプロジェクトは、各地に点在する写本などを蒐集すると共にそれらを厳密に比較検討し、史料集を刊行しようとするものである。

2016年度は各地の図書館・文庫などを訪れ、調査を行うと共に、マイクロフィルムの購入によって研究を進めたが、2017年度は、その原稿作成のために、多くの打ち合わせ会・研究会を開き、活発な活動を進めた。

2017年度の打ち合わせ会・研究会は、2017年4月7日、同14日、同21日、5月12日、6月16日、6月23日、同30日、9月29日、11月17日、12月22日、2018年1月19日、2月9日に行われた。そのうち4月から6月23日までは原稿作成のための打ち合わせ会であったが、6月30日と11月以降の会は公開研究会を兼ねたものであった。

公開研究会の発表者・発表題目は、以下の通りである。発表者には、研究分担者以外の者も含んでいる。

- ・ 6月30日：嶋村元宏「阿部家資料における和蘭別段風説書」
- ・ 11月17日：佐藤隆一「オランダ別段風説書—その公的回覧と私的筆写」
- ・ 12月22日：岩田みゆき「在地社会における別段風説書」
- ・ 1月19日：割田聖史「風説書の中のヨーロッパ・ヨーロッパの中の風説書」
松本英治「風説書から別段風説書へ—長崎における情報操作から考える」
- ・ 2月9日：嶋村元宏「阿部家資料におけるオランダ別段風説書：朱書きの意味を探る」

このように、活発な研究活動が展開され、個々の史料そのものに即した微視的な発表から、世界的な視野から風説書を見直す巨視的な発表まで、多様な視点から和蘭別段風説書の研究が進められた。

こうした多様な検討が進められたが、このプロジェクトの目標は何と言っても正確な史料集の刊行であり、2018年度は成果刊行の年となる。貴重な史料集が刊行され、研究の進展に大きく寄与することが期待される。

研究部活動報告

領域別研究部門 社会科学研究部

研究部長 菊池 努

社会科学研究部では、「わが国の監査規制の変革に関する基礎研究」の研究プロジェクトが2017年度をもって終了した。2018年度中に市販本として最終成果が公表される予定である。

「わが国の監査規制の変革に関する基礎研究」プロジェクトは、2016、2017年度の2年間にわたって実施してきた。監査規制をテーマとしているが、その中でも、2016年3月に金融庁から公表された「会計監査の在り方に関する懇談会」による提言を踏まえて、「監査法人のガバナンス・コード」、「監査法人の強制的交代制度」及び「監査報告書の拡充」の3点に焦点を絞って研究を進めてきた。また、監査をめぐる規制の在り方に関しては諸外国においても新たな議論が行われており、本プロジェクトは我が国における監査規制をめぐる問題に焦点を当てつつも、アメリカやイギリスなどでの最新の動向を文献調査はもとよりヒアリング等を通じて試みた。研究分担者はそれぞれ論文等で成果の一部をすでに公表しているが、それらの成果が市販本としてまとまった形で公表されることによって、監査規制の分野での新たな研究を切り開くことが期待される。社会的な関心も高い問題であり、市販本の公表が待たれる。

研究部活動報告

領域別研究部門 自然科学研究部

研究部長 小池 和彦

2017年度に研究期間を終了したプロジェクトは、「グラフェン／金属錯体ハイブリッド構造を活用した世界最薄発光デバイスの開発」（理工学部教授 黄 晋二）と「ラマンイメージングによるマイクロリアクター中の光反応の解明」（理工学部教授 坂本 章）の2件である。

前者は世界でもっとも薄い発光デバイスの実現をめざした意欲的な研究で、理工学部の中で電気電子学科の黄先生と化学・生命科学科の長谷川先生、それと2017年度から研究に加わった物理・数理学科の三井先生による、今までにない形の学科横断的な研究である。研究期間中に十分な進展を見せ、現在、この研究結果は欧文学術誌に投稿中（1件；最終査読中）と国際学会1件、国内学会3件の発表という形で当初の期待に応えている。

後者は今まで未知であった反応の短時間中間物の検出を目的としたものである。当初の計画から変更せざるを得ないことも出現して、その機器の購入等において最終的にバタバタしたこともあったが、研究としては進展しており、関連論文が国内外の雑誌に採択され、国際学会1件、国内学会2件の発表という形で、当初の期待に応えている。

いずれの研究も、学術雑誌への投稿、学会での発表を主とするものであり、総合研究所の成果刊行に当たっては、まとめを印刷する形で、報告論集の簡易製本という形で出版する。

(2) 研究成果（統括・要約）

①総合文化研究部門 課題別研究部

研究課題：タイ人日本語学習者の学びを支援する一書く能力・話す能力向上へ向けた
ICT 活用と日本語教育のコラボレーション
プロジェクト代表：稲積 宏誠

研究成果報告論集

『タイ人日本語学習者の学びを支援する一書く能力・話す能力向上へ向けた ICT 活用と
日本語教育のコラボレーション』

執筆者 稲積 宏誠 宮治 裕 寺尾 敦 大野 博之 萩原 孝恵 池谷 清美

<統括>

稲積 宏誠

研究概要

【本プロジェクトの目的】

グローバル化の影響は日本語教育をめぐる環境に大きな変化をもたらしている。このことは、国際交流基金から2010年に出された「JF 日本語教育スタンダード」や新日本語能力試験が課題遂行能力／行動志向的コミュニケーション能力に重点を置いていることなどに顕著に表れている。なお、JF 日本語教育スタンダードは日本語教育のコースデザイン、授業設計、評価を考えるための枠組みであり、課題遂行能力（言語を使って課題を達成する能力）と、異文化理解能力（お互いの文化を理解し尊重する能力）を育成する実践をサポートし、日本語を通じた相互理解を目指すものがある。

本研究は、この現状を踏まえて、青山学院大学における ICT（Information and Computer Technology）活用を主たるテーマとするグループと、タイ国チュラーロンコーン大学において日本語教育を主たるテーマとするグループが共同して進めるプロジェクトである。非母語話者の書く能力に関しては、ICT を活用した日本語教育支援をテーマとする稲積を中心としたグループがチュラーロンコーン大学の協力を得て進め、話す能力に関しては、タイ国チュラーロンコーン大学で日本語教育を実践するグループが ICT 活用という点で青山学院大学の協力を得て進める。これらのコラボレーションを積み重ねることで、非母語話者の学びを支援する環境整備を行うことを目的とする。

タイにおける日本語教育の現状の一端を紹介すると、国際交流基金2012年度の海外日本語教育機関調査結果によると、タイの教育上の問題点として「教師数不足（43.7）」、「教師の日本語能力不十分（42.4）」が未だに解決されないままとなっている。書く能力・話す能力の両側面からの産出されたデータ収集は、教師自身が学習者の日本語能力を把握できないことや、それを客観的に評価する方法がわからないといった問題解決に貢献することができる。

そこで、本研究では書く能力と話す能力について以下の取り組みを行う。

書く能力に関しては、基本文型を理解するための支援ツールの開発を通じて、学習者の自学自習環境を整備すること、日本語教師、特に非母語話者である日本語教師の教材作成や添削作業への支援環境を整備することを目指す。このシステム開発においては、シソーラス辞書やコロケーション辞書等の辞書類の活用が必要とな

るが、これらは一般に高コストであり、現場への普及は困難とされる。したがって、無償提供されている辞書群を有効に活用し、独自開発を行うことで、高度なシステムとしていくことが必要とされる。また、システムとしての有効性を検証し、改善を図っていくために、日本国内での母語学習者に加えて、チュラーロンコーン大学等での非母語話者を対象とした実践の場における取り組みも進めていく。

話す能力については、チュラーロンコーン大学で、日本語を主専攻として学習している100名のタイ人日本語学習者を対象に、OPI (Oral Proficiency Interview) でデータを収集し、会話能力の具体的な問題点とその習得状況を提示し考察する。OPIとは、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) によって開発された口頭能力インタビュー試験のことで、最長30分という限られた時間内でインタビューを行い、それを ACTFL 外国語能力基準に照らし合わせ、学習者の口頭能力を判定する評価法である。次に、これを活用することで会話能力の具体的な問題点とその習得状況を検討し、教育実践に結び付けていく。

本研究の特徴は大きく2点ある。書く能力を身につけさせるための指導法に対しては、本学で開発した ICT を活用した日本語教育支援システムを活用することで、その教育に携わる教師の負担が軽減され、より効果的な教育が期待されること、さらにそれによって、貴重な人的資源を従来手薄となっていた話す能力実現のために振り向けることを可能にすることである。2点目は、タイ人日本語学習者を対象に、OPI (Oral Proficiency Interview) でデータを収集し、大規模な言語資料としてコーパス化することで、会話能力の具体的な問題点とその習得状況を提示し考察することである。日本においては、ICT 活用という点で日本語教育関係者と自然言語処理研究者とのコラボレーションは徐々に活発化しているが、タイ国においては従来行われてこなかったものである。このように、1点目については、本学の成果をタイで使用することでのコラボレーションを、2点目については、言語資料のコーパス化を本学で行い、その評価・検討および実践に関するコラボレーションを行っていく。

【本プロジェクトの成果】

本プロジェクトの成果として、ICT を活用した書く能力については、文の難易度評価について、機械学習に基づく評価尺度提案の道を開いたことである。なお、難易度評価に基づく応用研究、さらに日本語非母語話者向け、今回連携できたタイの日本語学習者とのコラボレーションについては、未だ展開の余地を十分残していることから、今後継続して進めていく予定である。関連事項については、以下のとおり公表してきた。

- A) 日本語教育・日本語学習支援に ICT をより広く活用していくために：本取り組みのきっかけになった大野・稲積の従来の取組を紹介し、その可能性を紹介した内容を、2013年3月開催のタイ日本語教育研究会第25回年次セミナー分科会にて発表したものであり、本プロジェクトにつながるものとして取り上げた。
- B) Web クイズを活用した日本語基本文型学習トレーニングシステムの試作：日本語非母語話者向けに特化した ICT 活用事例を紹介。本プロジェクトのきっかけの一つとなった取り組みを2014年3月開催のタイ日本語教育研究会第26回年次セミナー分科会にて発表したものであり、参考のために取り上げた。
- C) 文構造に基づく文の難易度を示す評価指標導出の試み：本プロジェクトの書く能力の根幹をなす「わかりやすい文」と「わかりにくい文」を見分けるための評価指標を導出するための取り組みについて中間報告を、2017年9月に開催された計量国語学会第61回大会にて発表した。
- D) 文の構造的指標に基づくわかりにくい文の分類方法の検討：「わかりやすい文」と「わかりにくい文」の分類指標の導出について、教科書、白書、新聞などのコーパスを活用し、文構造を示す特徴量を抽出し、機械学習における分類アルゴリズムであるサポートベクターマシンを活用することで、どの特徴量が文のタイプを決定づける要因となっているかを推定する取り組みについて、2018年1月に開催された電子情報通信学会教育工学研究会にて発表した。
- E) 文構造からみた NHK やさしい日本語ニュースの読みやすさ評価：文のわかりやすさの指標についての取り組みを、NHK やさしい日本語ニュースと関連付けた分析について、2017年10月に開催された第14回マレーシア日本語教育国際研究発表会にて発表した。

次に、話す能力については、その代表的な成果としては、コーパスの公開を実現したことである (<https://>

ctjc.si.aoyama.ac.jp/)。ただし、コーパスの普及と公開による関連研究の推進については、さらに広く展開する余地を残していることから、今後さらに進めていきたいと考えている。これに関連した事項については、以下のとおり公表してきた。

- F) タイ人日本語学習者話し言葉コーパスマニュアル：コーパスの利用方法、登録方法、検索方法などのまとめについて、主としてオンラインマニュアルとして提供している。(https://ctjc.si.aoyama.ac.jp/)
- G) OPI データの文字化作業における2次チェックの問題点について：コーパス構築に向けた文字化作業の問題点について、2016年日本語教育国際研究大会（インドネシア）にて発表した。
- H) タイ人日本語学習者に特化したOPI レベル情報付き話し言葉コーパス公開に向けて：コーパス公開に向けた準備過程の解説とその意義について、2017年3月開催のタイ日本語教育研究会第29回年次セミナー分科会にて発表した。
- I) タイ人日本語学習者に特化したOPI レベル情報付き話し言葉コーパス公開とその利用方法：コーパス公開にあたって必要な事項について、マニュアルや利用例を用いて2018年3月開催のタイ日本語教育研究会第30回年次セミナー分科会にて発表した。
- J) 日本人は気になるんですけど……発話に共起するタイ人日本語学習者の舌打ち：コーパスの活用による具体的な裏付けデータによる舌打ちに関する分析例を、2018年3月開催のタイ日本語教育研究会第30回年次セミナー分科会での発表（JSPS 科研費 JP16K02633 の助成による）の中で紹介した。

<要 約>

大野 博之

高等教育の現場でも、アカデミックライティングに類する授業が数多く展開されてきている。しかし、学習者のレベルが多様であることや教員による添削を中心とした指導が必要とされることから、適切な教材資料の選定や効率的な作文指導などの教育方法の改善が求められている。そこで本研究では、これらの教育方法の改善を実現するために、自然言語処理技術を活用した新しい学習支援・指導支援方法の提案を目的とし、ここではそれを実現するためのツールを開発する。

適切な教材資料の選定や効率的な作文指導を実現するには、文章を客観的に評価する環境が必要であるが、そのためには文を構成する語彙の難易度や文の構造を概観できなければならない。そこで、主として教科書コーパスと白書コーパスを分析対象として、自然言語処理技術とICTを活用することによって、①語彙の難易度の決定ルールの作成、②文の節構造の判定と図示化、③語彙と構造の特徴量にもとづく文の特徴を表すモデル作成を行い、これらの情報から、④各文が教科書タイプか白書タイプかを判定する。ここで、教科書と白書に注目したのは、高校以下で扱われる教科書で用いられている文は、教育現場で「構造的にわかりやすい」表現で理解を促すことを目的としており、一方白書で用いられている文はそのような配慮が少ないと仮定したことによる。この①から④の取組をもとに、さらに主観評価を加えることによって学習支援・指導支援を行うためのツールとして専用のテキストエディタを開発する。

具体的な取り組みとして、a. 語彙の難易度（語彙レベル）の付与のためのデータ整備とルールの作成、b. 文の節構造（補足節・連体節・副詞節）の判定と図示化の実現、c. 語彙と構造の特徴量にもとづく文の特徴を表すモデルの作成、d. 機械学習に基づく文の教科書タイプ・白書タイプの判定ルールの作成、e. 学習支援・指導支援を行うためのツールの開発であり、その結果を活用するための専用エディタは本研究の中間的な成果物である。

以下、支援ツール・専用エディタについて概説する。文章の難易度推定を学習支援・授業支援に利用するためには、利用者が教員もしくは学生自身であることから、ある程度容易にツールを扱える必要がある。そこで、図1のように、基本的には3つの手順「①文章を入力する、②チェックボタンを押す、③結果を確認する」で利用できるテキストエディタ（以後、テキストめもばと呼ぶ）を開発した。このエディタは、本研究で述べた

語彙レベルと文章タイプの結果だけでなく、表1に示す情報を提示することで、利用者への情報提供を行うものである。

文レベルのサービス機能を概説すると、図2では、5段階の語彙レベルごとに色彩の変化をつけることや、和語と漢語の区別に関する表示、図3では、文字数、文の分割可能性、文における係り受け関係のばらつきの大さに関する表示、図4では、ルビ情報、文の係り受け関係、形態素・係り受け情報および語彙レベル情報の表示などが実現されている。

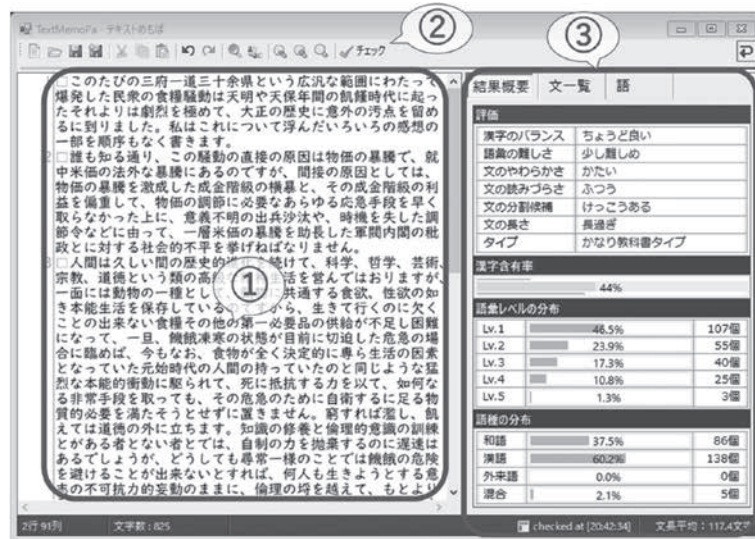


図1：「テキストメモば」利用画面

表1：教科書タイプと白書タイプに分類する指標

表示情報	説明
文章全体の評価	7つの視点で、全体の評価を表示する 漢字のバランス、語彙の難しさ、文のやわらかさ、文の読みづらさ、文の分割候補、文の長さ、タイプ
漢字含有率	全体の漢字含有率をグラフで表示する
語彙レベルの分布	全体の語彙レベル1～5まで割合およびグラフと、個数を表示する
語種の分布	和語・漢語・外来語・混合語の割合およびグラフと、個数を表示する
文ごとの各種情報	<ul style="list-style-type: none"> 教科書タイプか白書タイプかの表示 語彙レベルごと、語種ごとの色分け表示 文字数、分割可能性、係り受けの距離がばらけているもの 係り受け関係の図示、形態素・文節情報、語彙レベル情報



図2：ノーマル表示・語彙レベルごとの色分け表示・語種ごとの色分け表示

結果概要		文	語
		文字数	
ノーマル	語彙レベル	語種	
88	このたびの三府一道三十余県という広汎な範圍にわたって爆発した民衆の食糧騒動は天明や天保年間の飢饉時代に起ったそれよりは劇烈を極めて、大正の歴史に意外の汚点を留		
32	私はこれについて学んだいろいろな感想の一部	分割可能性	
183	誰もが知る通り、この騒動の直接の原因は物価の暴騰で、就中米価の法外な暴騰にあるのですが、暴騰の原因としては、物価の暴騰が主原因で、その結果として米価が暴騰した。その結果として米価が暴騰した。その結果として米価が暴騰した。	係り受け距離のばらつき	
298	学、芸術、宗教、道徳という種の高級な精神生活を営んでおりましたが、一面には動物の一種として、動物に共通する食欲		

図3：文の文字数、分割可能性、係り受け距離のばらつき表示



文情報

係り受け 形態素 語彙

解析結果	* 0	1D 0/0 1.918935
基本情報	せっかく	副詞,一般,*,*,*,せっかく,セツカク,セツカク
形態素	* 1	2D 0/1 1.948636
単語	来	動詞,自立,*,*,力変・来ル,連用形,来る,キ,キ
文節	た	助動詞,*,*,*,特殊・タ,基本形,た,タ,タ
	* 2	4D 0/1 -1.679809
	私	名詞,代名詞,一般,*,*,*,私,ワタシ,ワタシ

文情報

係り受け 形態素 語彙

通常 簡易 ルビ

Lv.1	4個(80.0%)	き わたし いちにと のこ
Lv.2	1個(20.0%)	せっかく来た私は一人取り残された。
Lv.3	0個(0.0%)	
Lv.4	0個(0.0%)	
Lv.5	0個(0.0%)	

「--」:対象外,「↓」:単語単位での判定,「.」:判定不能

図4：係り受け関係の図示、形態素・文節情報、語彙レベル情報

今回紹介したツールを含めて、本研究を構成する一部については、すでに研究会等で対外発表を行っているが、授業内で利用することを想定して開発した学習支援・指導支援ツールについては未発表である。これについては、実際の授業実践を踏まえたうえで、その成果について対外的発表を行っていきたい。また、文のわかりやすさについての各種情報を概観できる環境の提供や、文のわかりやすさの評価についての客観的な分析結果に基づく学習支援・指導支援ツールを開発したが、その有効性についての検討は不十分である。今後、検証実験を含めて実際に授業内で利用していくことによって、教師側と学習者側それぞれにとっての効果的な活用の仕方や支援ツールとしての機能強化について研究を進めていきたい。

宮治 裕

今回のプロジェクトでは、タイにおける日本語教育にとって貴重なデータの活用、特に会話能力の具体的な問題点の発見と改善、習得状況の把握などを可能とするために、タイ人日本語学習者話し言葉コーパスを構築し、公開するための取り組みを進めた。その検索画面の概要を図1に示し、今回構築した話し言葉コーパスの検索システムについて、ICTの観点から、その概要を以下説明する。

タイ人日本語学習者話し言葉コーパス(CTJC)

検索 キーワード: おい

54件ヒット [検索結果をCSV形式でダウンロードする](#)

	上級(A)	中級(I)	初級(N)	合計
上(H)	1	11	8	20
中(M)	2	8	0	10
下(L)	0	24	0	24
合計	3	43	8	54

	上級(A)	中級(I)	初級(N)	合計
上(H)	1人/4人中	7人/36人中	6人/19人中	14人/59人中
中(M)	2人/12人中	6人/26人中	0人/5人中	8人/43人中
下(L)	0人/14人中	9人/16人中	0人/0人中	9人/30人中
合計	3人/30人中	22人/78人中	6人/24人中	31人/132人中

図1：タイ人日本語学習者話し言葉コーパスの検索画面

1. サービス内容：

- ①ユーザ登録：利用者はメールアドレスのほか簡単なプロフィールの登録が必要。IDとパスワードを発行してもらうことで利用可能となる。
- ①学習者のレベル：検索に該当する表現を用いた学習者の運用レベルを、超級、上級、中級、初級およびサブレベルとして（上、中、下）で表す。学習者IDを指定した検索、学習者のレベルごとの検索も可能
- ②検索対象：学習者の発話のみ、テストの発話は検索対象外。
- ③検索方法：表層語としての文字列検索（正規表現も可）と形態素検索の両者に対応。
- ④言い換えの処理：文字化段階で修正した言葉は修正前の表現も形態素として登録。ex. 「いっちょ [一緒]」であれば、「いっちょ」も辞書登録され、形態素検索可能。
- ⑤発話と関係のない音の処理：{笑い} {息を吸う音} {沈黙}などの表現も文字列検索可能。
- ⑥検索結果の出力：該当する学習者の発話を前後のテストの発話と併せて表示。学習者のレベルごとにExcelファイルとして出力可能

- ⑦検索結果の集計表示：検索結果に該当するレベルごとの学習者の人数、発話件数を表示。
- ⑧タイ人特有の言い回しの辞書化：先にも述べたが、今回、一部については、独自辞書を作成しているため、形態素単位での検索も可能となっている。ex. タイ人の発する展型的なフィラーである「おい」については、形態素単位での検索により54件、文字列検索では243件である。文字列検索では、「料理もおいしい」「タクシーのにおいがちょっと」などの表現が混じってしまうが、形態素検索では一部判別誤りもあるが、ほとんどが区別できている。

2. 検索システムの利用、特に正規表現の利用について

本システムでは、文字列検索と形態素検索の両方を使うことができる。文字列検索では「正規表現」による検索を可能とした。正規表現は、メタ文字と呼ばれる記号を使うことによって高度な検索を実現させるものであり、以下、その使用例を示す。

- ①発話の重なりを調べる：学習者の発話中にテストターが割り込む場合には〈○○○〉という形式で表現される。形態素検索や通常の文字列検索では、検索の対象は学習者の発話のみであるが、正規表現では、学習者の発話中のテストターの発話を検索対象として加えることができる。ex. 「¥〈.+¥〉」と記述することで、任意の文字列による発話の重なりをとりだすことができる。ただし、「〈{笑}〉までも、ま、ほんとは〈うーん〉」のように、1ターンの中で、複数の重なり（〈{笑}〉と〈うーん〉）が生じた場合には複数の重なりをまとめて取り出してしまうことになってしまう。
- ②言葉遣いの揺れを考慮した検索：学習者の発話において語尾を伸ばす特徴が多く見られるが、普通の言い回しと語尾を伸ばした言い回しと併せて検索することができる。ex. 「ですー?」あるいは「です|ですー」と記述すると、「です」と「ですー」の2つの表現を併せて検索できる。これは8168件ある。また、文末で利用されているものを検索する場合には、「ですー?\$」と記述することで、2273件抽出することができる。関連して、文末で語尾が伸びているケースを調べると、「ー\$」と記述することで、1132件、132人中129人が該当することがわかる。
- ③構文的な特徴をみる：コロケーションや助詞の使い方の習得状況などを調べる際に有効ではないかと思われる。ex. 「○○とします」以外の言い方を中心に見たい場合、「します」での検索結果は781件、○○としますを「[(と|とー|と、)] します」で740件、それ以外の使い方を見たいときに「[^ (と|とー|と、)] します」で41件。そのなかには、「便利じゃないなーってします」「があるとわたしはします」「わたしはそうします」等の表現が、中・上級にみられることがわかる。

話し言葉の分析は、通常自然言語処理技術の適用も含めて難しいテーマである。この取り組みを通じて、タイにおける日本語教育に関係する方々に有用な情報を提供できることを期待している。

稲積 宏誠

非母語話者を主たる対象とする日本語教育の分野に関連して、日本在住の外国人を対象とした「やさしい日本語」の議論が、災害時等の情報提供の問題をきっかけとして盛んに議論されている。ここで言う「やさしい」は、非母語話者にとって「わかりやすい」文章のことでもあり、理論的な研究に加えて多くの実践的な取り組みがなされている。このような取り組みに対して、母語話者を対象とした支援システムを検討している我々のアプローチが役に立つのではないかと考えている。

これまで行われてきた「やさしい日本語」に関する取り組みは、コーパスに基づくものやさまざまな調査あるいは経験に基づくものなど精力的になされているが、その評価指標としては、文長や語彙に関する制約と意味・内容に関するものが中心である。これに対して、我々の問題意識は、文の構造上の特徴が読み手に対してどのような影響をもたらすかという点である。たとえば、文の長さが比較的長くても読みやすい文や、語彙についてはほぼ同レベルであっても理解しづらい文とそうでない文について、文構造のどの要素がその決定要因となっているのかという点である。

我々はこれまでに、わかりやすい文の典型として日本の教科書で扱われている文を仮定し、わかりにくい文の典型として日本政府発行の白書に書かれている文を仮定した分類システムを提案している。そこで、NHK やさしい日本語ニュースなどで用いられている文が、そのいずれの文構造に類似しているかを判定することを通して、あらためて「わかりやすさ」を分析しようと考えた。もし、わかりやすい文の仮定が正しいとしたならば、ニュースは教科書タイプに分類されるはずであるが、その一部は白書タイプに分類される可能性がある。このような分類結果を精査することによって、文構造を表すような特徴量が文のわかりやすさの指標となり得るのかについて検討する。さらに、これらを通して、日本語学習において、教材として用いるための文章が、その修得レベルに適した文で構成されているか否か、また作成した文がわかりやすい書き方になっているか否かのチェック、および有益な学習支援に結び付けていくことについて議論する。

語彙レベルが付けられた各素材文に対して、語彙に関する特徴量、文構造に関する特徴量をもとにして、SupportVectorMachine (SVM) による分類器を作成した。

図1にはその分類器を用いたやさしい日本語ニュースの分類結果を示す。

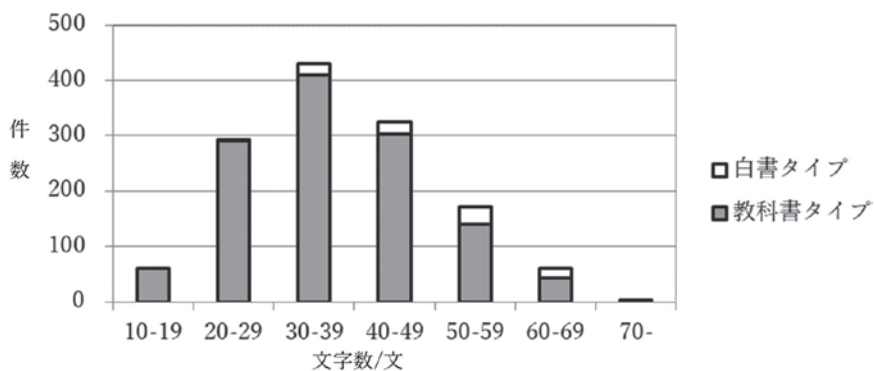


図1 SVMによるやさしい日本語ニュースの文の長さの違いと分類結果

また、SVMにおける重みベクトルからは、形態素・単語レベルの係り受け関係の偏差の大きさが、文のわかりやすさを左右する大きな要因であることがわかる。たとえば、読む順番に意味の塊が生じ、それを順番に理解していけば、文全体の意味が理解できるような構造であることを示している。その結果、意味の塊としての節の数は多くなっており、これも重みベクトルの特徴からは、教科書タイプの方が節による意味の塊を多くつくる傾向があることが推察される。これらは、長い文においてより顕著であるが、図2に示すとおり、短い

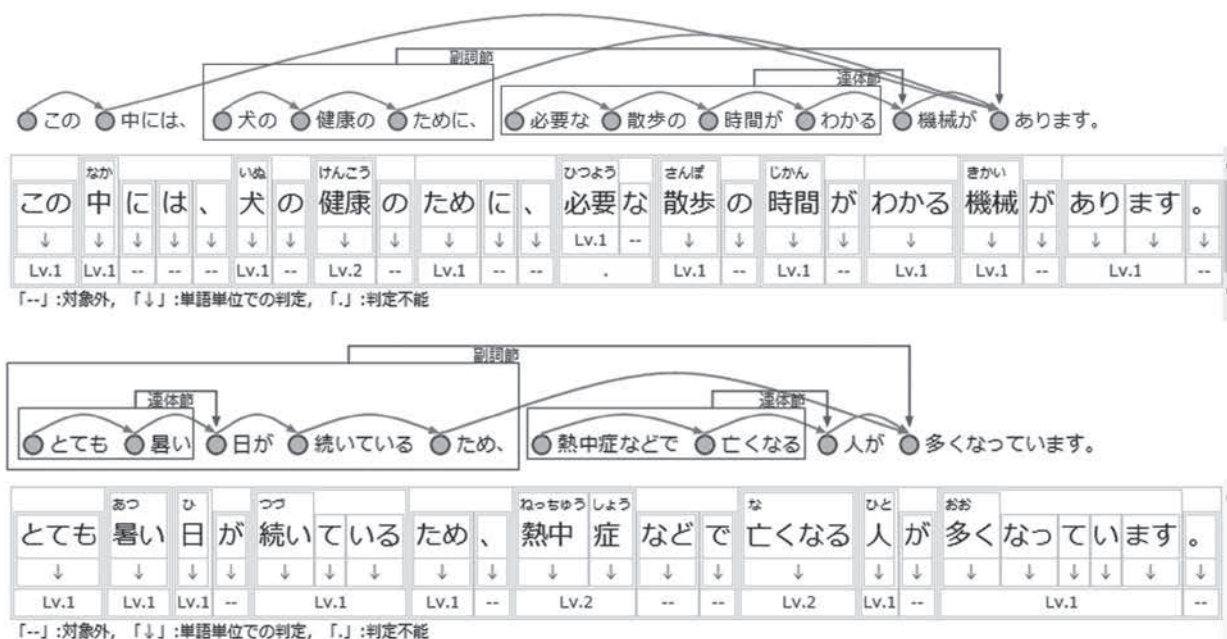


図2 短い文における白書タイプ（上段）と教科書タイプ（下段）の特徴

文においても同様の性質を示していることがわかる。

文のわかりやすさは、あくまでも読み手の感じ方を正確に把握していくことが必要であるが、そのような事例を集めていくことは非常に困難である。そのため、今回は、教科書と白書をわかりやすさとわかりにくさの典型例として扱った。ここで用いた機械学習による分類システムにより、語彙レベルだけでは評価できない特徴の抽出の可能性を示唆している。また、このようなタイプ分類のみであっても、文の読解や例文作成の際に注意するポイントへのヒントにつながるのではないかと考えている。

以上述べてきた指摘は、従来のやさしい日本語ニュース作成の指針では取り上げられてこなかった点であったり、ライターが感覚的に感じていた点であるといえる。このように、本取り組みがそのような経験的なノウハウを数量的に裏付けることにつながることを期待される。

寺尾 敦

チャンクとは、心理学者ミラーの提唱した概念であり、人間が情報を知覚する際の「情報のまとまり」のことである。人が言語理解過程において、形態素解析や構文解析などを脳でおこなう際に、これらの処理結果を一時的・短期的な記憶装置に保持する。これをワーキングメモリやスタックと呼び、通常 7 ± 2 チャンクの容量を持っているとされる。そして、基本要素である複数のチャンクをグループ化し、より大きな1つのチャンクにまとめることをチャンキングという。

チャンキングの考え方は、英語のリスニングやスピーキング、文章理解の方法として導入されている。ここでは、意味のかたまりを理解することで、発話全体、文章全体の内容を理解していくことが容易となる。そのことを意識することで、リスニング、スピーキング、文章理解、それぞれのスキルの上達を図ろうというものである。ただし、何を一つのかたまり、チャンクとしてとらえるかということについての普遍的な定義があるわけではない。すなわち、記号レベル、単語レベル、句や節レベル、慣用句レベルなどが考えられ、それぞれ話し手や聞き手のスキルによってチャンクの単位も変わることになる。

このチャンキングの考え方を、日本語文の難易度評価に利用することができる。すなわち、人間の短期記憶の負荷のレベルが難易度のレベルに対応するであろうという仮説によるものである。そこで、1文節1チャンクを基本とし、3つの方法（レベル1～レベル3）でチャンキングを行い、それによってチャンキングしない場合と比べて、どれだけ短期記憶の負荷が縮小されたかを示すのが「チャンク圧縮率」である。

レベル1は、助詞-連語、助詞-連体化、連体詞を1チャンクとする。AによるB、AのB、あのA、このBなどの表現である。レベル2は、レベル1に加えて（連体・補足）節を1チャンクとする。ただし、節の中に節を含む場合に、一つ一つをそれぞれチャンクとしてカウントするケースをレベル2 A、最も外側にある節のみをチャンクとしてカウントするケースをレベル2 Bとする。次に、節については、通常の文節に比べて物理的な長さが伸びるため、それぞれを2チャンクとしてカウントし、それぞれレベル3 A、レベル3 Bとする。たとえば、「白色の チーズを かじった ネズミを 追いかけた 猫が 止まった。」であれば、文節数7に対して、「白色のチーズ」を1チャンクとして圧縮できるので、レベル1では6チャンクとなる。さらに、連体節「白色のチーズをかじったネズミ」「(白色のチーズをかじった) ネズミを追いかけた猫」をそれぞれ1チャンクずつとすると、レベル2 Aで3チャンク、後者の連体節で括ることで全体を1チャンクとすると、レベル2 Bで2チャンクとなる。さらに、それぞれ2つの連体節に重みづけをする場合には、レベル3 Aで5チャンク、括られた1つの節のみに重みづけをする場合には、レベル3 Bで3チャンクと評価される。

一方、サイモンはチャンクの考え方を人間の情報処理システムに関する特徴と位置付けて次のように定義した。

- (1) アイテム（それを「チャンク (chunks)」と呼ぶ）数で推定された短期記憶の容量、
- (2) アイテムあるいはチャンクを長期記憶に固定化するのに要する時間

人間の行動をコンピュータ・シミュレーションとしてプログラム化した「EPAM (Elementary Perceiver and Memorizer)」では、「チャンク」を刺激に関する「最大熟知単位 (maximal familiar substructure)」と

する。例えば、「戦後レジームからの脱却を考える」と聞いたときに、「戦後」「レジームからの」「脱却を」「考える」と4つのチャンクで理解しようとする人もいるかもしれないが、安倍晋三首相が再三口にしてきた言葉だと知っている人にとっては、1チャンクあるいは2チャンクで処理されていると言える。

EPAMは、チャンクを固定させるのに要する時間を、経験的に1チャンク当たり8秒ないし若干短い時間と推定する。記憶は、リスト構造（その各成分もまたリストであるようなリスト）の体系であり、それは、説明的な部分（2項を結びつける関係）と、短い（3あるいは4個の要素）部分とからなるリストを含む。リスト構造は、命題的（文章的、数式的）な情報と同様、視聴覚的な情報に関する貯蔵現象も、正しく説明しているように思われる。

電話番号を覚えるのに、いつの間にか「市外局番」「局番」「番号」に区切って記憶している。あるいは、別の既知の表現に置き換えて覚えようとしているのは、無意識に記憶の効率化を図っていることになる。また、それが得意な人とそうでない人では記憶量に大きな違いが生じている。

これを、あらためて文の理解に置き換えるならば、語彙やその背景に関する知識の有無、前述のチャンクの定義に捉われない類似表現の理解（読書量、社会経験など）、適切な漢字の使用や読点の配置など、必ずしも文構造のみにより一律に評価できない側面が存在していることがわかる。文の難易度評価のために今回検討したチャンクレベルは、読み手のスキルレベルに応じて異なる基準を設けることによって、より詳細な評価への道を開くものである。このような心理学的な知見のさらなる導入の可能性については、さらに検討を深めていく必要があると思われる。

池谷 清美

話し言葉コーパス作成のための会話データについては文字化作業が行われる。文字化作業の2次チェックを2015年度になってから開始し、そこで見えてきたのが、2次チェックに伴う問題点である。以下この2次チェックを通して浮かび上がってきた問題の改善点について述べる。なお、文字数に関しては、対象データすべてにおいて文字数は2次チェックを行ったことにより増えた。一番多いものでは2割強の増加（6,137字→7,988字）があり、一番少ないものでは3%に満たないもの（9,907字→10,205字）もあった。これだけ文字数の増えてしまった原因がここで扱う問題点とも関係する。

1. 音の伸び：音が伸びる場合、伸びている長さが2モーラ分の場合は「ー」＋「かな」で表記し（例：大学生→だいがくせーえ）、語末にプロミネンスがある場合はそうでない音の伸びと区別してかなで表記し（例：わたしはー→わたしわあ、のでー→のでえ）、一貫性を持たせた。
2. 笑いなどの非言語要素との共起：笑いなどの非言語要素が入ってきた場合、語句の聞き誤りや脱落がみられた。
3. 複数の読み方の漢字表記：複数の読み方のある漢字に関しては、「わたし」「わたくし」などのように複数予想されるものでも「私」と表記されていた。しかし、複数の読み方のあるものについては、かな表記を加えることで、語彙の運用実態の可視化を目指した。
4. 逸脱した発音の解釈：逸脱した発音であっても理解可能な場合、そのまま算用数字で表していたが、これも修正した。
5. 発話の重複とターンの捉え方：字数の増加には関係しないが、発話の重複についても大幅に修正した。発話が重なった場合、発話権の有無は問わず、発話の始まりが遅かった方を〈 〉の中に入れて書き起こし、かつ最小単位を文節とした。また、重複に関しては、重なりがあった場合、重なり部分が語と語であれば、重なっている語の後に〈 〉、文節にまたがっていれば文節の後に〈 〉、文にまたがっている場合は文の後に〈 〉を入れて書くように統一した。
6. タイ人話者特有のフィラー：タイ人日本語学習者の話しことばのフィラーの中には、日本語ではなくタイ語のフィラーの使用がみられた。2次チェックではタイ語の同じフィラーにおいては表記を統一した。
7. フィラーのひらがな表記の統一：ひらがなで全て表記するため、同じフィラーであるにもかかわらず書き

起こし者によって表記の違いが生じたり、音によってはひらがなでの表記に限界がある。したがって、フィラーは特に作業員によって表記のばらつきが見られたものである。たとえば、国際音声記号の [ɑ:] が「あー」で表記されているというわけではなく、タイ語話者の典型的なフィラーである [a:] を「あー」と表記した作業員もいれば「うー」と表記した作業員もいた。そこで、2次チェックでは、タイ語のわかる1名の作業員が、[ɑ:] [a:] [a:] をあー、[u:] をうー、[e] をえー、[a:m] をあーん（「あーむ」になっていた）と統一した。また、「あー」で表されている音には3種類の音を含めて表記した。この他、「うーん／んー」「ん／うん」の区別がなされていなかったため、2次チェックの作業員により統一を図った。

以上が修正、あるいは統一を図った主な点である。文字化にあたり、文末に句点は使用せず、読点をポーズを表すために使用するという処理をしていた。ただし文末で上昇のイントネーションが認められる場合、および文中での上昇イントネーションを表す場合は疑問符を用いている。会話文という性格を考慮し、文の認定基準は設けずに作業を進めたわけである。

発話における文の認定にはどのような基準があるのか。発話文の認定基準を探るためのパイロット調査として、大学生6名に対し、次の2種類の実験を行った。

Aグループ（3名）：音声を聞きながら読点ありのデータに句点を付与する

Bグループ（3名）：音声を聞きながら読点なしのデータに句点を付与する

その結果、ターンの終わり、「す」で終わるものには句点が打たれるという傾向がみられたが、規則化できるほどの一致はみられず、聞き取った音から文を認定することは難しいということがわかった。調査データは3種類（上級、中級、初級）用いたが、中級のデータが最もばらばらに句点が打たれていた点が特徴として観察された。このことは中級話者の文、すなわち中級レベルの発話文の認定が困難であるということを示すものかもしれない。さらにいえば、中級レベルの学習者の習得過程のひとつの側面を表しているものなのかもしれない。

本研究の目指すコーパスはタイ人学習者のデータということに特化したため、文字化作業員はタイ語と日本語の両者を理解し、かつタイ人学習者への教育経験を有し、その実態を把握していなければコーパスの質を向上させることはできないと考えた。今回の2次チェックの実施はこの考えに沿ったものであり、本取組を通じて、より目的にあったコーパス構築のための素材データを作成することができたといえる。ただし、よく指摘されるように完璧な話し言葉の文字化はあり得ない。精度を高めれば高めるほど、文字化されたデータはパラ言語情報および非言語情報が増え、多くの記号が含まれる複雑なものとなり、データとして読みにくいものとなっていくからである。今後、このような課題についての対処方法を示したうえでコーパスの充実化に向けて取り組むことが、タイ人日本語学習者の話し言葉の特徴や傾向の調査研究および教育への活用に貢献しうるものと考えられる。

萩原 孝江

タイの会話教育の現場では、実際の会話の能力を評価するよりもモデル会話に出ている文型や表現が使えるかどうかということの評価するケースが少なくない。そのため、教育現場においては、学習者が話す場面において具体的にどのような能力が必要とされ、どのような問題点に直面しているのかが把握されていない。タイ人学習者のコミュニケーション能力向上を目指すためには、言語運用能力を客観的に測定し分析することが必要である。

そこで、チューラーロンコーン大学では、タイ人学習者にとって何が問題なのかを探ることを目的とし、タイ人日本語学習者を対象に、OPI（Oral Proficiency Interview）によるデータ収集・コーパス構築を目指す取り組みを開始した。しかし、その中間段階で、具体的にどのようなコーパスを構築、公開していくかが定まらず、取り組みが中断してしまった。しかし、あらためてこのプロジェクトによりその取組を引き継いで公開まで結びつけることができたのである。最終的には、このコーパスを利用し、会話能力の具体的な問題点とその習得状況を提示し考察することを目標であったが、それについて、今なお継続して取り組んでいる。

2017年3月、国際交流基金バンコク文化センターで開催された「タイ国日本語教育研究会第29回年次セミナー分科会」にて口頭発表を行ったが、この年次セミナーには、タイ国内の日本語教育関係者およびタイに関する調査研究を行っている日本の研究者や大学院生が年に一度一堂に集まる。発表では、「タイ人日本語学習者に特化したOPIレベル情報付き話し言葉コーパス公開に向けて」というタイトルで、本プロジェクトの取り組みとコーパスの公開状況について解説した。参加者との質疑応答を通して、タイの日本語教育関係者においては「指導にどのように結びつくのか」「何が調べられるのか」「何がわかるのか」といった現場指導に直結したコーパスの利用に興味・関心があることがわかった。分科会終了後は、参加者からの質問を踏まえ、検索方法のガイドラインの必要性、使いやすさを第一に考えたシステムの構築等について意見交換を行い、今後の課題を確認した。

同じく2017年3月、カセサート大学日本語学科を訪問し、①本プロジェクトが取り組んできた「タイ人日本語学習者の話し言葉コーパス」について紹介し知ってもらう、②コーパスの検索画面を実際に見てもらいながらデモンストレーションを行い、現状の検索画面の課題を探る、③タイ人教師の視点から、本コーパスの利用について率直な意見をもらうなどの取り組みを行った。デモンストレーションには3名のタイ人教師が参加してくれたが、文法、発音、作文指導への発展的な利用が考えられるという意見が出された。

タイ人日本語学習者の特徴分析は他の研究プロジェクトで並行して進めているが、その取り組みに、タイ人日本語学習者132名の話し言葉コーパスを利用した例を紹介する。それは、タイ人の発話に共起する舌打ちの生起環境を例示しながら、日本語の舌打ちとは異なる意味と機能があることを説明するものである。また、このことは、タイ人にとって一つの認知行動の現れである舌打ちが、日本人にとってはネガティブな感情表出と解釈されるリスクがあること、また、言語だけでなく非言語にも留意した会話教育の必要性を示すものである。

タイ人の舌打ちの中には、日本人の舌打ちとは異なる意味・機能を持つものがある。日本人の舌打ちは、ネガティブな気持ちの現れ（苛立ち、いまいましさ、不快感、不愉快、不満など）であるのに対して、タイ人の舌打ちは考えているとき、説明するときに出現するもの（フィラー的機能）や感情・評価・態度を伝える前に出現するもの（感情表出マーカ儿的機能）が中心である。たとえば、OPI（Oral Proficiency Interview）で観察される舌打ちの多くが、「考えているとき、説明するときに出現するフィラー的舌打ち」であること、舌打ちは「検討中」という内部状態と結びつくフィラー（例えば「うーん」「あー」「えーと」等）と共起する傾向があることを経験的に示してきた。

『タイ人日本語学習者話し言葉コーパス』を利用し、本研究キーワードの「舌打ち」で検索すると全体での舌打ちの出現数は294件であることがわかる。レベル別には、上級レベルが56件、中級レベルが182件、初級レベルが56件で、件数では中級レベルが多い。しかし、主要レベルの人数内訳で比較すると、上級レベルでは30人中11人（36.67%）、中級レベルでは78人中37人（47.43%）、初級レベルでは24人中7人（29.17%）と、中級、上級、初級の順に舌打ちをした人が多いことがわかる。そこで、各下位レベルをさらに検討してみると、上級-上では舌打ちは一例も観察されないのに対し、上級-中では12人中5人（41.67%）、上級-下では14人中6人（42.86%）と、上級ではレベルが高くなるにつれて減少傾向が見られる。一方、中級レベルでは中級-上で36人中17人（47.22%）、中級-中で26人中12人（46.15%）、中級-下で16人中8人（50.00%）と総体的に舌打ちが多いが、レベルによる傾向は見られない。また初級レベルでも、初級-上で19人中5人（26.31%）、初級-中で5人中2人（40.00%）と、レベルによる傾向は見られない。もちろん、該当する学習者の用法を詳細に確認することもできる。このように、タイ人学習者に特化したコーパスを利用することで、レベルごとの使われ方の違い、学習レベルが向上することと舌打ちとの関係等、タイ人日本語学習者の発話の特徴を把握することができるとわかる。

研究課題：自校史研究と教育実践モデルの開発－青山学院史研究－

プロジェクト代表：杉浦 勢之

研究成果報告論集

『自校史研究と教育実践モデルの開発－青山学院史研究－』

共同研究者 杉浦 勢之 長谷川 信 梅津 順一 杉谷 祐美子 シュー土戸 ポール
小林 和幸 佐々木 竜太 伊藤 真利子 酒井 豊 浅田 厚志

<総括>

杉浦 勢之

本研究プロジェクトの出発は、青山学院140周年記念事業の一環である『青山学院150年史編纂事業』にある。青山学院では、『青山学院九十年史』を最後に、編年史の刊行が行われていない。その後1996年に『青山学院120年』が刊行されているものの、同書はビジュアル資料並びにデータをまとめたものであり、残念ながら本格的な編年史とはなっていない。青山学院のようなキリスト教教育の長い伝統を持つ指導的な学校が自ら編年史を持たないということは異例である。その歴史を刊行するということは、単に学校の来歴を明らかにすることにとどまらず、第一に、日本近代の教育史の研究に多大な貢献をなすものであり、高等教育研究機関を有する学院の学術的かつ社会的責任を果たすことでもある。第二に、このような編年史を刊行することにより、青山学院の教職員、園児、児童、生徒、学生、校友が、変わらぬものとしての学校アイデンティティを共有することにより、学院での学びを「世代の横の拡がり」と「世代を貫く縦の一貫性」を通じ、就学年限を超えた「人間教育」へ展開していくうえでの教育資源となる。そして第三に、このような歴史を踏まえた教育実践によって、大きく変化する21世紀の日本や世界に青山学院が問う、新たな「教育モデル」の礎石、要石としていくことも可能であろう。

以上の認識から、青山学院150年史編纂本部並びに編纂委員会が発足を見たのであるが、『九十年史』以来本格的な編年史の編纂の実現を見なかったこともあり、編纂の前提となる学内保存史料が、合理的、体系的に利用可能な状況にないことが判明した。編年史の編纂においては、編年史刊行年度を目標に、史資料の収集、調査と研究、成果の公表を進め、執筆と刊行を計画的に準備することが求められる。本学院の場合、このような継続的な作業がなされてこなかった。種々事情や経緯があったものと推察される。このため、『150年史』に当たっては、新史料の発掘や調査と並行し、過去の保存史資料の再整理や確認作業を進めることとなり、学院資料センターに新たに「150年史編纂室」が置かれ、実務作業が進められるとともに、同センターに研究機能が置かれていなかったことを受け、編纂本部の依頼により、総合研究所の本研究プロジェクトが立ち上げられ、史資料の整理、発掘、調査分析、研究に加え、その成果を青山学院の教育に活かしていく教育プログラム開発についての実践的研究までを進めることとなった。まずその研究の目的につき、発足時に記された事務文書を掲げておく。

「我が国の教育制度は、明治維新（近代教育の形成）、終戦（戦後教育システムへの転換）に続き、第三の変革期に突入している。このような教育制度ないし教育システムの大転換は、80年代から明らかになったグローバル化の影響とともに、日本社会の長期趨勢、経済成長の鈍化と産業構造変化、少子高齢化の進行、成熟社会の到来などによって規定されている。現在進められている教育制度改革は包括的とは言えないが、課題は全般的であり、幼児教育、初等教育、中等教育、高等教育がそれぞれの上位教育課程ないし社会への接続に意を尽くしながら、「学力の維持向上」、「創造性の涵養」、「グローバル化への対応」などの社会的要請に応えることが急務とされている。その際、教育機関の社会的責任としてこれらの一般的な課題に対応することは当然としても、各教育機関、学校が、それぞれの学校の建学の精神に則った個性的教育プログラムを通じて行っていくことがきわめて重要である。これにより、教育における「競争原理」の導入ということを超え、多様な

価値観に基づく多様な選択肢を次世代に提供し、社会を活力あるものにしていくことが求められる。「創造性」は画一性とは相反するものであり、この点において、固有の建学の精神に基づいて設立され、個性的な教育を展開してきた私立学校への期待はきわめて大きい。

私学の個性は、建学の精神によって規定されるだけでなく、拠点キャンパスの地域的特性や開学後の歴史的経緯等を通じて時間的・空間的に醸成される。一言で述べれば「校風」と称されるものである。青山学院の場合、戦前において建学の精神（3つの源泉）と併せ、「本多精神」と呼びならわされてきたものがこれに近い。この「校風」が上記課題である「国際性」、「学力」、「創造性」との関係で、各学校の教育成果に大きく影響していることは直感的に明らかであるものの、それを定量的に示すことは難しい。「校風」は、「専門教育」と原理的に区別される「人間教育」の一環であるが、さりとして市民教育としての「一般教育」ないし「教養」教育と一致するものでもない。本来リベラルアーツ教育のコアにあったと考えられるこの「校風」を「可視化」し、教育実践に反映させるうえでの参照・準拠枠となるのが編年史である。したがって編年史は歴史研究であるとともに、「人間教育」の実践的基盤の意味を持つ。さらにまた「校風」は、教職員校友などを含む「社会的共通資本」としての意義を有しており、非営利組織である学校においては、教育方針、経営計画や戦略策定、学校法人、学校法人と校友などのステークホルダー、各部間あるいは学内（校内）の合意形成の基盤となっている。「校風」の可視化である編年史は、私学経営にとって「寄付行為」（建学の精神）と並ぶ不可欠な参照・準拠枠であり、さらに「ブランド価値」として無体の経営資源ともなる。この二つの意味において、自校史研究と蓄積、体系化、編年史編纂、その成果の教育及び学校経営へのフィードバックや社会への浸透（戦略的広報マーケティング）は、私学にとってきわめて重要な役割を持つ。

翻って青山学院の現状を見れば、一貫教育、キリスト教精神に基づく人間教育を校是としながら、青山学院としての編年史が長らく作成されていない。編年史の編纂が単なる歴史研究や回顧に終始するものでなく、学校の個性の発見と涵養（スクール・アイデンティティの形成と実践への反映）の役割を果たす以上、青山学院のように幼稚園から大学院までの一貫教育を基盤とし、そのトータルデザインが不可欠な学校の場合、自校史の編成と各種教育や学校経営へのフィードバックはとりわけ重要であり、学院編年史の空白は、学院の「一貫教育」を希釈させ、無体の経営資源を毀損するものであったと言わねばならない。

幸い最近になって、学院内でも自校史への関心が高まり、大学においては2010年『青山学院大学五十年史』の刊行と相俟って、青山スタンダードのカリキュラムの中に自校史科目が設計されるようになった。今後は、このような各部の編年史の編纂にとどまらず、青山学院全体の編年史を編纂するとともに、その成果を各部の教育実践の中に活かしていくことを通じて各部の教育と有機的に連携した学院固有の「一貫教育」、「人間教育」としての「自校史教育」が進められることが望まれる。これにより、①メソジスト監督教会のグローバルな布教活動の一環としてわが国に設立された学校の教育活動を歴史的に明らかにし、日本における多様な教育の可能性を提示するとともに、②21世紀のグローバリゼーションの進行に対し、青山学院がその経験をどのように世界に開き、貢献していくかを示すと同時に、③児童教育、中等教育、高等教育を貫いた「校風」による「人間教育」の実践事例を提示することにより、今後のわが国における「人間教育」のありかたに重要な指針を提供するものとなろう。

このような本研究プロジェクトの発足趣旨、作業および対象範囲の広さ、未発掘資料の想定される膨大さ、資料保存状況の未整備に鑑み、共同研究に当たっては将来の編年史刊行、自校史教育の編成を睨みつつも、一つの視点に絞り込むことはせず、いくつかの方向性を確認したうえで、各自のアプローチ、文体形式、現時点でのそれぞれの評価を尊重し、強いてプロジェクトの結論を急ぐことなく、中間レポートとして編むこととした。したがって、各研究報告書の暫定的結論が、そのまま本研究プロジェクト全員の共通見解ではないということを、まず述べておきたい。このことを踏まえ、各研究報告で扱えなかった研究全体のミッションから求められた研究成果の補遺並びに各研究報告の方向性の整理をおこなった解題を交え、以下に各研究報告書を課題別にまとめ要約することとする。

<要 約>

杉浦 勢之 長谷川 信 梅津 順一 杉谷 祐美子 シュー土戸 ポール
小林 和幸 佐々木 竜太 伊藤 真利子 酒井 豊 浅田 厚志

①世界の中の青山学院—国際メソジスト教育運動と日本の近代化

本研究プロジェクトでは、青山学院の源流を視野に、青山学院は「日本の学校」として設立されたのではなく、19世紀におけるメソジスト宣教／教育運動の一環として日本に設立された学校であるという視点からの研究を進めることとした。これまでの教育史、学校史研究は、学校教育制度に基づいた学校を研究対象とするものが主流であった。しかし、日本の「学校」は、近代的教育制度の設立によって作られたのではなく、すでに（そして当然のことながら）近世に寺子屋や塾、藩校のかたちで多様に展開していた。さらに明治維新を介して、近世から近代に移行する中、日本には時代と社会の求めに応じる膨大な教育施設が自生的に生まれていた。明治新政府は、大きな方針の揺れを伴いつつ、自らの「変革の理念」の浸透と西欧列強へのキャッチアップによる「万国対峙」の必要から、「学制」、「教育令」、「学校令」を矢継ぎ早に打ち出し、これに合わせ、各級の学校が設立され、日本の近代学校システムが確立した、というのが一般的教科書的な理解である。しかしこれでは、近代法制確立前の日本は「教育」がまったく空白であり、その間わが国には近代的学校が存在していなかったかのような錯覚を覚える。それでは法制はあっても実現が遅れた中等教育、実業教育や高等教育などが、その間どのように手当てされていたかなどはほとんど視野から消えてしまう。

「近代化」という用語は、時に歴史的「事実」に対する視野狭窄を生む。やや粗雑な表現となるが、戦前期日本が、「上から」の近代化を進めた結果、官が主であり、民がその補完と考える思考パターンが、最近にいたるまで長らく根づいてきた。このため、法制に根拠を持つ官立学校をスタンダードとし、これに準じた条件を満たすことで、それ以外の教育機関は制度的に認められ（昇格）、「事実」として認定されることによつてはじめて、近代的な私立学校として正式の「歴史」に記入されることになる。確かに初等教育については、かなりの抵抗を受けながらも、「国民の形成」という政策的要請により、官によるスタンダードの独占が早期に確立した。しかし中等教育以上になると、急速に進む近代化に合わせ、職業教育等さまざまな社会的ニーズに応ずる必要があり、戦前期の学校システムは複線型を採るとともに、官による独占が難しく、多数の民間「学校」が生まれることになった。これらは通常「各種学校」として一括りにされている。東京大学名誉教授の土方苑子は、その編著『各種学校の歴史的研究 明治東京・私立学校の原風景』で「各種学校というのは戦前戦後を通じてその外観の大きな変化にもかかわらず、（法令上の規定の有無、職業密着的教育という一つの学校種類的な外観の有無）、基本的な性格は連続しており、またそのような学校種類としての未確立にもかかわらず、膨大な数が存在し続けたという点からみても、単なる例外的な存在ではなく学校制度史上に何らかの必然性をもって存在してきた学校ではないか、と考えられる。すなわち、各種学校の『制度化された学校<以外の>学校』という面に着目すると、近代以降の制度化された学校というのは絶えず制度化されていない学校の存在を伴うものではないかと思われる」と指摘している。

日本近代移行期に開かれた学校は、この意味で制度化以前の学校であり、「制度外」の学校であるため、後の制度化過程を通じて規定された「学校なるもの」に視点を置いて顧みると、時代を隔てることによる錯視を生みやすい。例えば、青山学院で最も古い源流とされ、1874年にスクーンメーカーによって開設された女子小学校の最初の入学者7名には、津田仙の妻初子、長女琴子の他に、長男元親、次男次郎が名を連ねている。その教育目標から学院女子教育の源流であるといえるものの、性別年齢構成で見れば、その実態は国内法で規定された今日考えられるような「女子専門の小学校」であったとは言えそうにない。さらに女子小学校については居留地外に設立された学校に必要とされる「開校届」が発見されておらず、『青山女学院史』では、津田仙を雇用主とする「スクーンメーカーの私塾」であったとの理解を示している。しかしだからといって、同校が「近代的教育」を進めていなかったとは断定できない。さらに1877年に校名を改称した築地海岸女学校は、居留地内にあったことから、公式の届け出を必要としなかった。学年区別がなく、在学年数制限もなく、卒業試験によって卒業認定を認めたとされている。現代であれば、フリースクールに近い相当に自由な教育形態で

あったと考えられる。文字通り「制度外」の学校だったが、その教育は女子小学校時代と比べてもはるかに高度化がすすめられている。1886年に旧制教育制度の基礎となった「学校令」が發布されると、築地海岸学校は高等教育部門への展開を目指すこととなり、その第一歩として東京英和女学校の設置願を提出、これが認められ、1889年に東京英和女学校が設立され、海岸女学校上級生を合流させた。この時点をもって学院の前身の一つである女子教育は、「制度化」された学校となり、1895年海岸女学校と東京英和女学校が最終的に合同、青山女学院と改称することになった。学院男子系教育同様、「制度化」されることにより、同校は教育法制の規制を受ける立場となり、「歴史」に記名されることになったのである。

「制度化」を受け入れた青山女学院は、1899年の「私立学校令」並びに文部省訓令12号によって、男子教育ほどではないものの、キリスト教学校としての厳しい試練を受けることになったが、1903年の「専門学校令」制定を受け、翌年英文専門科が女子専門学校として認められている。私立学校では、日本女子大学（現日本女子大）、女子英学塾（現津田塾大学）と並び、三校が日本の女子高等教育機関に「昇格」している。このうちミッションの学校は青山女学院だけであった。その基盤を担った「制度外」の女子小学校、海岸女学校がすでに「近代的学校」としての実質を備えていたことは、これをもってしても明らかであろう。同校は、ジョン・ガウチャーから、青山学院同様、世界水準の本格的な女子カレッジとなっていくことが希望されていたのである。ところが、1910年のエジンバラにおける万国キリスト教宣教師大会で、アジアにおいては超教派による男女それぞれのキリスト教主義連合大学を各国に一つずつ創るとの方針が決定され、青山学院の最大の支援者であったガウチャーが、その担当者となることになった。青山学院、青山女学院ともにその対象となったが、すでに財団法人となり、国内での経営権が確立していた青山学院が、ガウチャーとの関係を忖度しつつ、最終的にこの道を選択しなかったのに対し、青山女学院は人事等の管理権が婦人外国伝導局（WFMS）にあり、建物はメソジスト監督教会在日宣教師の社団法人所有となっていたこともあって、協力やむなしとの判断に至り、英文専門科を閉鎖、新たに開学される教派に属さないキリスト教主義学校、私立東京女子大学（専門学校令による専門学校）に統合することとなった。その経緯は、青山女学院が「日本の学校」でありながら、それを超える「学校」でもあったことを如実に物語っている。

一方、男子系の青山学院も女学院と同じ年に高等科と神学部が専門学校の認可を受け、高等教育機関として「昇格」している。しかし同校では東京英和学校時代の1892年から、多くの講義が英語で行われ、高等普通学部4年科卒業生で在学4年間にわたって一定以上の成績を得た者については、アメリカのアルビオン大学のバチェラー・オブ・アーツの称号が与えられることとなっていた。要するに、アメリカのスタンダードからすれば「カレッジ」としての要件をほぼ満たしていたのだが、「昇格」以前の日本では「高等教育機関」として認められなかった。青山学院の場合、すでにアメリカのカレッジ水準の高等教育をおこなっていたのが、「制度化」に対応するため、当初の形を変形させ、ドメスティックな基準にあわせていく必要に迫られることになったのである。学院女子教育と男子教育とのその後を分けたのは、青山学院がすでに国内において経営権を確立していたことにより、合同案に距離を持たざるを得なかった事情と、女子教育に比べ男子教育につき政府が著しく規制を強化したことに対応する必要があったことによるものであったと考えられる。この時の青山学院のリバースは、グローバル化という名のアメリカナイゼーションが叫ばれる現今の日本の大学事情を考えると、世紀を超えたきわめて皮肉な歴史と言わねばならない。

ところで、これまでの青山学院史では、ロバート・マクレイ、ジュリアス・ソーパー、ドーラ・スクーンメーカーの3宣教師が重視され、ジョン・ガウチャーについては、マクレイとの関係で、学院最大の貢献者として位置づけられてきた感がある。しかし上記したように、東京英和学校設立後も、ガウチャーは青山学院の方向性、さらには日本のプロテスタント系学校全体に強い影響力を保っていた。さらに日本に限らず、アジアに多くのメソジスト系学校を設立したという事績を踏まえれば、青山学院史研究にとっても、日本やアジアのキリスト教系学校の歴史研究にとっても、ガウチャー研究の深化が是非とも必要となる。残念ながら青山学院資料センターのみならず、日本におけるガウチャー関係史料はきわめて貧しく、アメリカやアジアでの関係史料の発掘を待たねばならない状況にあった。このことを受け、本研究プロジェクトでは、シュー・土戸・ポールがアメリカのガウチャー大学、ラブリーレイン教会、コロンビア大学神学大学院において資料の探索調査をおこ

ない、青山学院関連を含むかなりの量のガウチャー関係文書を発見した。これらについては、ガウチャー大学、コロンビア大学と青山学院との連携による共同アーカイブの作成の可能性を伝え、資料の一部を複製し、本研究プロジェクトの成果の一環として青山学院資料センターに寄贈することとした。その整理は始まったばかりであるが、今後アーカイブ化が進められる予定である。

②教育の「制度」化と本多庸一の「学校」

青山学院の源流となった各学校が、日本の学校としてではなく、世界布教のためのメソジストの教育運動の一環として日本に置かれた学校として出発し、各学校に求められた教育の内容や質も、明治政府の求めていたものとは自ずと異なり、アメリカ型のカレッジないしユニバーシティに準ずる教育が目的とされ、整備されていったこと、日本の近代教育の制度化が進む過程で日本の学校制度に「翻訳」され、教育政策の展開とミッション・ボードの方針双方に影響されつつ、独自の歴史を形づくってきたこと、そして男子系教育と女子系教育の帰趨を分けたものが、日本の学校としての経営権の確立（＝制度化）にあったと考えられること、以上から国粋主義が台頭する中、国際宣教運動の一環としての学校＝ミッション・スクールを日本の学校としても成立させるという、きわめて困難な転換を担った日本人最初の院長本多庸一の存在が、青山学院の歴史にとってとりわけ重要であったと考えられる。

本多の学院のかじ取りの特徴は、キリスト教教育への厳しい反動の中で、「制度化」の方向に抗してでも宗教教育を守り、ミッション・ボードとの関係を良好に保つ一方、日本の学校制度の中に長期的展望で東京英和学校―青山学院を定着させたところにある。1902年に青山学院校友会を設立、1906年には私立青山学院財団法人を設立させている。これにより、青山学院は日本における法人格を得ることとなり、経営権を確立することとなった。校友会の募金活動にも支えられ、1905年には青山学院の収入中伝道会社からの補助金を授業料その他が超えるようになった。第2代院長の本多がこのような基盤を築いた後、第4代院長に就任した神学部教授の高木壬太郎によって学院拡張計画が進められることとなり、校友に対する募金活動が推進され、勝田銀次郎、米山梅吉、間島弟彦などがこれに応じている。さらに、1919年には第一大戦後の日本経済が不安定化する中、経常費不足を賄う「維持会」が設立された。震災被害等に際し、メソジスト監督教会伝導局より多額の寄付を受けたとはいえ、自力による財政基盤の確立が目指され、米山梅吉、間島弟彦、万代順四郎という、三井系校友経済人が学院の運営に積極的に関わり、戦前、戦後に至るまで支援を惜しまなかったということが、今日にいたる青山学院の経営上の礎石をなしている。これらの校友経済人にとって、本多庸一の人格的影響力は決定的であった。このことは残された史料や証言から明らかなのだが、それでは、青山学院のその後を決定した本多という人物、その「人格力」とは、そもそもどのようなものであったかということになると、なかなかつかみ取ることが難しい。

本多は津軽藩時代、宋学の周敦頤、二程子、あるいはその後継者である李氏朝鮮の李滉による太極図説のような、宋学の緻密な二元的コスモロジーに納得できないものを感じていたとされる。徳川政権によって正学とされた性理学の形式的で些末な解釈に飽き足らず、王守仁（陽明）の心学、その日本での継承者である中江藤樹、熊沢蕃山を密かに読んでいたと回想している。武士政権が続き、科举制度を持たなかった東アジア列島部の徳川幕藩体制にあって、「儒学」がいかほどの意味を持ち得ていたかについては別途の考察を要するものの、朱熹（子）の「格物窮理」に対抗する王守仁の「心即理説」に共感していたという青年期の本多が、変革期のリアル・ポリティクスに裂かれつつ、戊辰戦争という「内戦」の過酷な体験を通過することを通して、どのような思想と人格を形成していったか、また津軽藩時代にすでに中国語訳で旧約聖書「創世記」に触れ、そのダイナミズムに惹かれたといわれていることから、本多の信仰「前史」の知的かつ実践的経験の解明は、青山学院の歴史を考えるうえできわめて重要と考えられる。

戦前の青山学院では、「建学の精神」とは別に、「青山の学風は本多精神にあり」ということが言われていた。19世紀のアメリカのリベラルアーツ・カレッジでは、院長の「人格」が学校教育の「求心力」となっていたことを併せ考えると、本多の書かれたものとともに、その書かれざる「思想」が、学祖をもたない戦前期青山学院の求心力となり、教育の「個性」として学生たちに浸透していったことが推測される。よく知られているよ

うに、本多は東京英和学校校長就任を前にして、「日本の各学校各教会よりは色々の人物器量多く出づべし。神学の新説等は京都（同志社）又は白金（明治学院）辺より将来何程湧出るやも知るべからずとも、さまで羨むことにはあらず。希くは神の恵により我輩の学校より所謂 Man を出さしめよ。Man の資質多くあるべしと雖も Sincerity、Simplicity 最も大切なるべし」と述べている。そこには、若き日の本多の知的経験や実践的体験が遠く反響しているはずである。

本多庸一については、『青山学院大学五十年史』編纂事業を機に、東京英和学校の日本の学校＝青山学院としての定着において決定的な役割を果たしたことの再評価が進み、さらなる研究進展の機運が生まれた。これを受け、本研究プロジェクトでは、本多庸一関係の史資料の探索調査、整理をおこなうことが課題とされた。学院資料センター所蔵のものを含め、これまで網羅的、体系的な目録化がなされてこなかったことから、この作業が本研究プロジェクトと資料センター青山学院150年編纂室の連携で進められ、すでにその成果の一端として、『青山学院一五〇年史編纂報告』（2017年）が公刊されている。その成果についてまとめたうえで、分析を加えたのが、小林和幸の研究報告である。本多については、その公式の言葉以外、生の言葉を知る史料はかならずしも多くない。キリスト教史において欠かすことのできない人物の一人であるが、同時代人の人物評だけでは計り知れないその内面にまで踏み入り、総合的に理解することは意外に困難であった。教会関係者や、本多が東京英和学校に着任したときの学生の感想は知られても、その感覚的な表現から、本多庸一その人が、動乱の幕末と、試練の明治期を生き抜き、どのような世界観、人間観、国家観を形成したか、そして政治経済社会の各ドメインの人々とどのように関わっていたかについての考察はこれからであり、一次資料に踏み込んだ小林の分析によって、少しずつ解明されるようになってきているという段階である。「教育勅語」問題、「訓令十二号」問題で示した本多の立ち居振る舞いが、いかなるバックグラウンドによるものであったのかも、このような丹念な史料分析を通じ、次第に明らかになっていくであろう。小林報告が触れている栗原彦三郎に対する言葉、「実地の問題に就て奔走して見るも一つの生きた学問であるからやってみろ」、あるいは櫻井成明に対する「書籍よりも生きた学生の取扱の方が面白し」という言葉は、文字通り白刃の下で幕末維新を疾駆した本多の前半生から、伝道生活を通じて導き出された教育の真骨頂であると感じられる。小林報告はそのような本多の肌のぬくもりに触れつつ、その一端を実証的に明らかにするものである。

③本多精神を求めて一校友を通して見る青山学院の「学風」

本多が目指した「Man」とは、どのような存在だったのであろうか。本研究プロジェクトでは、その輪郭を得ることを目的に、戦前の東京英和学校、青山学院の校友に光を当てることとした。とりわけ、本多の強い影響を受け、社会において活躍し、その後に青山学院の経営に関わった三井系校友経済人に焦点を当て、その企業人、社会人としての活動を通じて、青山学院あるいは本多庸一の教育がどのようなかたちで影響し、継承されたかを追い、その夢見た「Man」とはどのような存在であったかを解明することとした。伊藤真利子の研究報告は、戦前の異色の企業人として、後輩の間島弟彦、万代順四郎を三井銀行で育て、三井家の危機を乗り越える決定的な役割を担うこととなった米山梅吉が扱われている。同報告で取り上げられている「米山一武藤論争」は、従来日本の経営史研究でまったく扱われてこなかったファクト・ファイディングである。自校史研究にとどまらず、日本経営史、企業史研究においても重要な成果といえる。米山梅吉の諸構想を時系列で整理し、明らかにすることを通じ、同時代にあって特異な経済人として知られていた彼の社会観とその特徴、社会事業の構想と実践を描き出すことにより、本多庸一の夢がどのように米山に引き継がれ、青山学院の経営と教育にも活かされていったかを推し量る端緒が得られた。

伊藤報告によって明らかになったのは、米山梅吉の生涯にわたる活動が、日本における近代的経済人の生涯モデルを創造しようとするものであったということであり、それを「官」ではなく、「公」において実践することによって「実業界」と「社会」とを繋ぎ、さらにそのような「あるべき人間観」を「私」による幼児期から始まる次世代育成にまで貫いたという包括性である。その「夢」の遺産が、青山学院の幼児・児童教育として今日にまで残された。これまでの米山研究は、経済人としての活動、社会的奉仕者としての活動、教育者としての活動につき、それぞれの面からアプローチされてきたが、伊藤報告によって彼の構想を時系列で追うと、

その一貫性と徹底性がクリアに浮かび上がる。しかもそれらの構想を自らのライフ・ステージに合せ、後に必ず実行に移していることに驚きすら覚える。「有言実行」の人と称された所以であろう。そこに若き日の本多庸一の夢が、時代の変化の中で異なるかたちで継承され、貫かれている姿を見ることができる。米山梅吉研究は、まだ始まったばかりである。

なお米山梅吉の後輩として、本多庸一から米山に委ねられた万代順四郎についての関係史料の発掘は、三井関係の事情もあり、現在かなり困難な状況にある。今回研究プロジェクトでは、この辺の事情も考慮しつつ、関係者ヒアリングなどで補完し研究が進められてきたが、集まった各報告が力作で、予定した紙幅をオーバーするという事情もあり、残念ながら報告論集に収めることを断念せざるを得なかった。そこで解題(杉浦担当部分)において、この点につき若干トレースし、その欠を補うこととした。従来万代順四郎については、青山学院への大きな寄付およびソニーとの関連で注目されてきたのであるが、経済人としてのほとんどのキャリアが、三井銀行にあったということが留意されねばならない。三井は言うまでもなく、前代に起源を有する日本を代表する同族企業集団=財閥であった。三井の人材確保は、元老の井上馨を仲介者に、福沢諭吉の慶應義塾出身者を中心としていたことはよく知られている。このような関係が確立するのは、明治初期の三井の経営危機に際し、福沢諭吉の甥である中上川彦次郎が三井銀行に招聘され、いわゆる中上川改革を通じて工業化路線が敷かれるとともに、慶應義塾の出身者を大量にリクルートしたことによる。その後、中上川の死によって改革は途絶し、東京高等商業学校(現一橋大学)を大量に採用した三井物産設立者の益田孝によって三田派が排除されたというのが、これまでの通説であった。

しかし最近の研究では、三田派が排除されたというのは必ずしも正鵠を得ておらず、中上川のリクルートした人材としては、後に三井合名理事長となる三井銀行の池田成彬などが引き続き重要な役割を担っており、むしろ諸学校の充実と並行して三田系以外の学校の出身者の登用が進められたと考えられるようになってきている。戦前三井の学卒者全体の出身校としては、慶應義塾、東京帝国大学が双璧をなしたが、これに次いだのが東京高等商業学校と青山学院であったということは必ずしも知られていない。当然そこに米山梅吉の存在を見ざるを得ないが、米山が青山学院から人材を得るにあたっては、本多庸一の推薦によったということが明らかになっている。本多庸一が、キリスト教学校の院長としてのミッションとともに、一貫して日本社会について責任を持つ人材を育てたいと考えていたことは、これをもっても知ることが出来よう。その中で後に頭角を現したのが万代順四郎であった。万代は米山だけでなく、池田成彬にも注目され、伊藤報告で指摘されているように、三井銀行の同族経営からの分離を陣頭で推進していくことになる。池田が万代に注目したのは、名古屋支店長時代、万代が中京財界に圧倒的な信頼を得たことを高く評価したことによるとされている。第一次世界大戦後、日本の金融界が不安定化したため、銀行ガバナンスに問題が生じるようになり、一時重役無限責任制が問われるようになった。当時の三井銀行は預金銀行というよりは、三井のプライベート・バンク的性格が強かったが、その三井にまで預金取り付けが生じるようになると、経営責任の三井家への波及が懸念されるようになり、同行を三井家のプライベート・ハウスに純化するか、三井家と切り離した純然たる大衆的預金銀行とするかで方針が揺れていた。

結果としては三井合名理事長団琢磨暗殺という衝撃的事件を機に、「財閥転向」が進められ、各企業経営からの三井家の退陣と、三井銀行の大衆化=預金銀行化が進められることとなった。これを三井財閥の危機の下で合名に移った池田と合名に呼び戻された米山から託されたのが、万代順四郎であった。万代自身、三井銀行を単に預金銀行化するだけでなく、さらに同族の範囲を超える都市銀行間の合同によって日本経済の重化学工業化に対応する必要を感じており、ここに池田、米山、万代の微妙にニュアンスの異なる路線がシンクロし、万代にその実現が委ねられることになった。三井銀行と第一銀行合併による帝国銀行の設立である。この大合同は巷間言われるような政府ないし「官」や「軍」による政策的要請によるものではなく、内部昇進によって登場したトップ・マネジメント自身によって、財閥家族=同族支配が自律的内在的に克服されるという、世界の経済の歴史で見ても稀な試みであった。三菱銀行も三井銀行の方針転換に際し、急ぎ銀行合同方針への転換を進めることになった。

米山による信託構想が限定的とはいえ実現する一方、万代順四郎の三井・第一・第十五銀行大合同による帝

国銀行が設立を見たものの敗戦によって頓挫したという事態は、その後のわが国金融史の底流に長らく影響し続けることになった。高度成長後の金融自由化・金融再編の流れの中で、信託銀行においては、旧財閥資本系列による業態を超えた合同案（企業グループ別のフィナンシャル・グループ構想）と業態別の資本を超えた合同案（大信託銀行構想）が輻輳した時期があった。バブル崩壊とその後の金融危機を経て、三井および住友の金融機関統合においては、帝国銀行の解体により預金銀行化が相対的に脆弱にとどまった三井銀行に対し、住友銀行がイニシアティブをとったのに対し、三井信託と住友信託の統合の場合、三井信託がイニシアティブをとり、その結果メガバンク中であっても、三井住友が銀行と信託に分かれ、資本関係のない三井住友トラスト・ホールディングスが設立されたところに、その影響が現れたといえそうである。歴史に「if」はないとされるが、戦前期日本の金融界ならびに国際金融における三井銀行の隔絶した地位を考えるならば、米山の初期大信託構想＝同族資本関係を超えた投資信託会社設立が実現し、帝国銀行合同を成し遂げた三井側の万代順四郎が戦後責任をとって現役を離れ、さらに公職追放にならず、あるいは第一側のカウンター・パートであった明石照男が万代に先立って退任していなければ、財閥解体を先取りした戦前の変化が戦後に継続され、戦後の金融システムもまた違う道を歩んだかもしれない。その評価については、戦後日本の金融システムや日本的経営が「制度」としての有効性を失う1998年以降の視点から、改めて問い直す必要があるろうし、さらにアジアの先進国、新興工業国における同族経営の問題点についての注目すべき日本発の先行事例として再評価していくことも必要となろう。いずれにしても、万代の戦後の活動の場となったSONYの歴史も含め、米山や万代の「夢」の真価が問われるのは、むしろこれからのことと言ってよい。そして彼らが生涯の活動の最後に心血を注いだこの国の幼児、初等、中等、高等教育への「夢」が、偏に青山学院のこれからにかかっていることはもはや言うまでもあるまい。

青山学院の校友は、米山、間島、万代のように、卒業後経済界に進出し、後に学院の経営に参加した者ばかりではない。その全てをカバーすることは不可能であるとしても、オーラル・ヒストリーなどを含む研究の進展により、青山学院校友の卒業後に何らかの共通な特徴を示せるかもしれない。その場合、方法論的には、同時代に多くの人間がほぼ同様の条件で例外なく広範な影響を被る「出来事」＝歴史的「特異点」を取り出し、青山学院出身者がどのような経験をし、その後の人生を決めていったかを追うことにより、青山学院の教育の影響、その痕跡を浮き彫りにすることが考えられる。この意味における近代日本のもっとも大きな歴史的「特異点」は、何と云っても第二次世界大戦であろう。それを追ったのが、梅津順一の研究報告である。梅津報告で扱われているのは、「戦争」という「特異点」を共に通過した、しかし個性がかなり異なる永瀬隆および山本七平で、その二人の共通点に青山学院の教育の影響を見出している。永瀬の場合、英語講師を目指し、青山学院に入学したことが陸軍通訳としての「出征」に繋がり、多くの捕虜が過酷な労役の中で死亡した泰緬鉄道建設現場で、憲兵隊の通訳として捕虜を扱い、その後自らが捕虜となるという極限的体験をしている。この経験が、戦後の永瀬による、たった一人から始まり生涯にわたった謝罪と和解の旅となった。梅津報告は、そこに青山学院におけるキリスト教教育の影響を見出している。これに加えるに、永瀬は徴用されたアジア人労働者への謝罪、さらにはタイの若者たちへの教育支援・奨学活動をつづけた。局地的ではあれ、「内戦」を生き抜いた本多庸一が青山に求めた「Man」を、永瀬の戦後の活動に重ねることは、不当ではないように思われる。

もう一人の山本七平はクリスチャンの実業家の家に生まれ、青山学院に中学部から入学している。その後高等商業学部に進学するが、戦況悪化により繰り上げ卒業で陸軍に入隊、山本の部隊はフィリピンに進駐し、凄惨な戦闘の末、敗戦を迎え捕虜生活を送っている。その経験から、山本は戦後、ユダヤ人もどきのイザヤ・ベンダサンの筆名で、「日本」および「日本社会」についての衝撃的な比較文化論を発表、その後山本七平として特異な文筆活動を展開したが、戦争体験と共に、それを相対化する基盤となったのが、クリスチャン家庭での養育、青山学院での学びであったことを梅津報告は指摘している。とりわけ青山学院の教師であった比屋根安定に、宗教についての比較史的視点を学んだという指摘が注目される。比屋根は沖縄出身のキリスト教学者であるが、タイラーやフレイザーを翻訳するなど、日本の宗教史や人類学の先駆者でもあった。「日本」を内在的に相対化することが著しく困難なこの国の思想状況（それは今日においてもさほど解消されていない）を鑑みるに、クリスチャン・ファミリーを出自とするという少数者の視点とともに、このような戦前の青山学

院の教育が、戦後の山本七平の特異な視点を構築するうえでの土壌となったことは間違いないであろう。このことは、イスラム神秘哲学の世界的権威である井筒俊彦が、青山学院中等部においてキリスト教との決定的な「実存」的激突を経験し、その後西脇順三郎を慕って慶應義塾に進学、イスラムとの出会いから、イスラム学の権威として世界に影響を及ぼすまでになったことから傍証されよう。(井筒は信仰として考えるならば、自分に一番近いのはキリスト教神秘主義であるとしている)。戦前の青山学院に学ぶということは、常に世界的視点を求められつつ、少数者としての立場を意識させられるものであった。このことが、「戦争」という凄惨で過酷な現実と直面した時、それぞれの道を通じてではあるが、二人の若者のその後の人生をきわめて特異なものとしたのだと言えそうである。

なお、このことに付随して、第二次世界大戦の末期、高等教育に認められていた徴兵猶予が解除され、繰り上げ卒業によって多くの学徒が戦場に駆り出されていったことは広く知られている。今後の課題となるが、梅津報告で指摘されているように、青山学院の学生、卒業生たちが同時期の他の若者たちと異なる体験を強いられていなかったかという問いが150年史編纂プロジェクトのヒアリングでも提起されている。現状調査はまだ個別的で、一般化していくにはさらに資料を収集する必要があるが、得られた情報からは、クリスチャン、クリスチャン・ファミリーの若者、あるいは教会関係者、そして特にアメリカン・ボードによって創立された青山学院関係者については、かなり特別な、ということでは「敵意溢れる扱い」が入隊とともに待っており、そして、もっとも過酷な戦地に動員されていった可能性が強く示唆されている。軍属であった永瀬隆を含め、戦場に出ていったかつての校友は、ヒアリング等において「素朴な愛国心はあった」と述べている。それは文脈的には「国家」というよりは「家族」を念頭においたものであったと思われる。この点については、山本七平自身による鋭い批判的分析がなされている。しかし彼らの「愛国心」は、戦地に至る前、入営と同時に、信仰や出身校を理由に木っ端みじんに粉碎され、裏切られたようである。梅津報告で取り出された山本七平になされたとされる「警告」は、この間の調査を通じ、現実のものであった可能性が高いことがわかってきており、今回対象とした永瀬隆や山本七平を含め、学院史としては逸することができない歴史上の出来事であることを記しておきたい。

④青山学院の経営とガバナンス

その前身を含め、青山学院の経営は、宣教師たちが主体となり、アメリカのメソジスト監督教会の監督の下、多くの資金をミッションによる寄付に依存したミッション・スクール時代、間島弟彦の側面援助を受けつつ、本多庸一および高木壬太郎の改革により、「日本の学校」として「制度」化し、ガウチャーなどのアメリカのクリスチャン篤志家の支援を随時受けつつも、学費納付金と米山梅吉や万代順四郎らの校友の寄付によって財政的自立を目指した旧制財団時代、戦後復興と成長のためのスタート・アップ支援を万代順四郎に仰ぎつつ、新制へ移行し、学費納付金と私学助成、万代基金などにより、総合学園としての質の向上と高等教育の多角化による総合大学を目指した拡張期、そしてバブル崩壊以後の日本経済の低迷、低成長、先端技術の高度化による教育費や研究費の急増、少子化と人口減少、グローバル競争の激化という現転換期に大雑把に区分することが出来よう。本研究プロジェクトでは、この第一の転換点を主導した戦前の本多—米山のラインにまず焦点を当てることとした。現代のような社会そのものの「制度」的転換期、新制教育制度の再転換期にあっては、「学校史」は制度史や教育史だけに留まることは許されない。時代の中で、どのような経営的選択肢が可能であり、またどのような意思決定が現になされ、それはいかなる目的により、どのように是認されたのかを明らかにするには、やはりその時代の政治経済、あるいは社会変化と対照し、教育法制の変化とも関らせ、教育目的に沿った学校財政とガバナンスのその都度の事情を確定しておく必要がある。

ところでこの経営ガバナンスを取り上げること自体、学校組織に関してはきわめて厄介である。ガバナンスを問題とする以上、その前提として、その組織の目的と、ドメインを異にするステークホルダーの範囲の確定がなされていなければならない。シンプルに目的を営利に還元できる企業などとは異なり、学校組織については、大変複雑なことになる。私立の学校組織の場合、「寄付行為」が置かれており、存命でないファウンダーによる組織設立の理念や目的が謳われることになっている。今すでにいないファウンダーとの明示的な「契約」

があり、多くの校友との暗黙の「契約」がある。さらに青山学院のようなキリスト教系学校では、日々の祈りで再認されるように、「真の創設者」は歴史的諸個人を超える超越的なものに求められている。その上で、青山学院の経営およびガバナンスの流れを明らかにするには、教会ミッション関係や、児童、生徒、学生に、保護者校友、学院の構成員というステークホルダーの全体像を得ることが必要となる。

ところが、この最後のものが歴史研究ではきわめて難しい。日本の企業でも、戦前期の被雇用者は、従業員あるいは社員にカウントされていない者が多く、日本的経営が徐々に進み、臍気ながらその全体像が統計数値として把握できるようになってくるのは、多くの企業の場合、昭和戦前期に入ってからである。青山学院で、事務職員として新学卒者が計画的に採用されるようになるのは戦後の大学拡張期からと考えられる。教育職員、事務職員を含め、現在慣用的に使われている「教職員」の歴史を明らかにする作業はかなり困難なのである。このため本研究では、青山学院の構成員についてのデータ化作業を進めることになった。この作業は、なお相当の時間を要すると見込まれるが、かかる作業から、日本の学校の組織と規律、その運営形態を、教育制度の変遷を踏まえ、歴史的に通観し、その中に青山学院を定位しようと試みたのが、酒井豊の研究報告である。

酒井報告は、戦後までを射程にしている。戦後の青山学院拡張期は、概ね大木金次郎院長時代に重なっており、この時期には、高度経済成長と団塊世代の成長を背景に、初等部の再建、幼稚園の再設置、大学の学部の増設や定員増、中等教育段階についての様々な試み、大学紛争、文学部神学科廃止、厚木キャンパスの開学などの一連の施策が進められた。理事長、院長を兼任した大木金次郎の「強い」手法を巡り、これまで学内ではその評価が極端に振れてきた。他方で大木院長は、キリスト教系学校の細部を熟知しており、私立学校を支援する諸施設の設定等学外での活動を精力的におこなっており、戦後私学史においては逸することのできない事績を残している。学内ではよく知られていないものの、その評価は、学外では青山学院の無形の財産となっている。150年史編纂を機会として、それらを総合的に検討し、青山学院の歴史の中に客観、冷静に位置づける時期に来ているものと考えられる。この意味でも酒井報告はウェスレーのメソジスト運動から始まり、日本への「土着化」過程に規定された学院ガバナンスの変遷を戦後高度成長期に繋ぐものとなっており、今後その問題提起についての実証研究が進められることになろう。

これと並行し、青山学院の経営数値を網羅し、データ化を進めることが本研究プロジェクトの課題であった。従来の学校史は、教育内容、制度改革、組織変更、教員人事を中心とするものが多かった。しかし21世紀の日本の教育は、国内的には少子化、対外的にはグローバル競争に晒され、従来のような国公立と財政資金で一部サポートされつつ学費納付金を基盤とする私学との二層構造の護送船団方式によって支えていくことが難しくなったことは明らかである。これに加えて高等教育においては、グローバル化及び研究の高度化費用が急速に高まっている。この間政府は教育研究改革に着手しつつあるが、概ねまず国立大学改革をターゲットとし、私学はそれに準ずるかたちで影響を受けるという道筋をとってきた。国立大学の場合、「競争的資金」の導入は、旧帝大型総合大学モデルを多層な高等教育機関に再編成することを目的とし、最近では地域への貢献に特化するなど、政策目的に従ったものが増えてきている。わが国の基礎研究が手薄になっていくことが懸念される所以であるが、逆に述べれば、そのような基礎研究や体系的教育の提供にこそ、これからの私学の総合大学としての比較優位と社会的貢献が現れてくるとも言える。

何れにしても、国公立同様の政策が機械的に私学に適用されるようになると、私学は「私学」であることの優位性を失いかねない。私学のレゾン・デートルは、すでに述べたように、「建学の精神」、固有の「教育目的」、それを実行するため自らを律する「ガバナンス」にある。この点は、教育行政においてその特徴をあまり視野に入れられることの少ない宗教系の学校の場合、とりわけ重要である。社会の激変期には、そのような固有の特徴は、得てして「制約」として映りやすい。しかし私学にとって、このような固有性としての「建学の精神」に真摯に向き合いつつ、現代的課題に向けて自らを開いていくという弛まざる努力こそが「個性」であり、財産なのである。戦前・戦後の青山学院の歴史そのものがそのことを証し立てている。なるほどそれは労多きことかもしれない。しかし今この時代であればこそ、自らの歴史に投錨することのできない組織に、本当に未来はあるだろうかと問うてみる必要がある。酒井報告は、その口火を切るものと言えよう。しかしそのためには、歴史を捉えるための分析ツールが充実していなければならない。「経営数値」は、組織が自らの歴史と現在を

計るための認知ツールである。「経営数値」についてのしっかりした時系列データを構築し、青山学院の「過去」と「現在」を一覧できるようにすることが、まず前提作業として求められることになる。これを目指したのが、浅田厚志の研究報告である。

ところがこの作業も大きな壁に阻まれることとなった。もともと学校会計は、きわめて複雑に出来ている。これに加えて、見通しとしての青山学院の時期区分で記したように、「日本の学校」でなかった頃の学院財政は、ステークホルダーであるミッション・ボードに（英語で）報告されていた。端的に日本の学校行政にも会計制度にも馴染むものではなかった。その後「制度化」（＝旧制）が進むが、浅田報告にもあるように、制度変更によってデータ間の突合せが不可能という事態が頻出し、時系列データとして追うことが出来ない。悪戦苦闘の結果、発想を転換することとなり、比較的基準が安定している直近公表された「経営数値」を時系列的に「逆読み」する、すなわち現代から過去に遡行するという奇手を採用することとなった。加えて数値は何を目的とするかで取り方が違ってくる。フレーミング次第で、諸表から与えられる結論が恣意的に操作される危険もある。背景にある、数値に現れないさまざまな与件を考慮しなければ、適切な分析結果は得られない。そこで、学校会計の枠組みを一旦離れ、網羅的な公表数値をそれ自体として取り出し、その範囲で自由に分析し、そこから浮かび上がってくる注目点を確認することとし、試行的分析を進め、研究作業の鍍入れを行ったのが、浅田報告である。

得られた結論はこの段階ではあくまで暫定的結論であるが、リーマンショック後、さらにはゼロ金利、マイナス金利時代の学校財務の難しさと、東日本大震災で遅延を余儀なくされることになった大学の2012年の17号館竣工並びに翌年のキャンパス再配置が、学院財政にとってきわめて厳しい試練であったことを改めて浮き彫りにしている。2年連続の収支赤字、さらに翌年度まで赤字が続くとなれば、当該期の学校行政のフレームにあってはかなり厳しい反応を呼び起こすことが推察されるものであった。キャンパス再配置は、青山学院の高等教育＝大学にとって、厚木移転以来ないしポスト大木体制において長年の宿願とされてきたものであり、今後の青山学院大学の展開余地を大きく広げるものであった。しかしそれは、併行して進められた学部増設とは異なり、費用と見合う増収を短期に生むわけではない。収支の調整にある程度の期間を要することは明らかであった。華やかな教育改革の表舞台の裏で、相当厳しい財政的、経営的試練が課され、そのための地道で評価されにくい経営や現場の努力が学院内で重ねられていたことが、客観的数値を通して読み取れる。これもまた青山学院の歴史であることは言うまでもない。私立学校史は、経営教学両面から検討しなければ、その全体の理解は行き届かない。今後は経営関係の統計資料の長期の時系列データ化とその分析を、年史編纂と対照させることによって、より説得力のある自校史を編纂し、教育だけでなく、現在の経営や将来戦略にも活かしていくことが望まれる所以である。

⑤研究から教育へのフィードバック

本研究プロジェクトの課題のもう一つは、自校史研究により取り出された成果を自校史教育あるいは自校教育にフィードバックさせる実践研究の進展にあった。学校のスクール・アイデンティティを高める教育は、①入学者の当該学校に対する事前学習となり、②モチベーションにより教育課程での学習効果を高め、③卒業生の帰属意識を涵養するという、教育と研究の好循環を生み出すことを期待できる。少子化が進む現代においては、多くの学校にとって教育の質の確保のうえでも欠かすことのできないプログラムとなってきた。青山学院の場合、一貫した自校史教育の実践には固有の困難が三つ存在する。まず、幼稚園から初等部、中等部、高等部、大学という各教育段階で、園児・生徒・学生定員が段階的に、大幅に増加するため、学力選抜によって標準化できる一般教育科目とは異なり、自校史教育については、内部から進学する学生生徒と外部から進学する学生生徒との間で知識基盤に大きな差が生じることが避けられないことである。これに加え、自校史教育を各教育課程で取り組むうえでは、全教育過程を通じて共有し、参照可能な知識基盤が構築されていなければならない。このためには、学院全体としての歴史（学院史）を編むとともに、外部から進学してきた学生生徒と内部から進学してきた学生生徒が、標準年限の中でほぼ同等の知識を獲得できるようなプログラムや仕組みが必要であり、

それをコーディネートしていくことのできる、学院史に専門性を持ち、さらには学院の各教育段階を視野に入れることのできる教員や職員が不可欠となる。加えて、系統化された共通教材、視聴覚教育あるいは体験学習が可能な「場」の設定も必要になる。

現状で見ると、これらのどれについても個別の試みにとどまっており、本来膨大な潜在資源を有しているにもかかわらず、残念ながら本学では、その体系化も活用可能な資源の開発整備もなされていない。ただセカンダリー教育や女子短期大学での教育においては、宗教センターという共通基盤があることで、宗教教育の中に自校史教育が組み込まれ、ある程度の系統性が担保されているようである。一方大学では、青山スタンダードに自校史が科目として取り入れられている。しかし同科目については共通テキストが編まれておらず、講義間の共通性も担保されていない。全学生が学ぶことが望ましい科目としては、属人性の強いきわめて手作りの授業段階にあると言える。加えて大学とセカンダリーの接続については、まったく手がついていない。そこで実践的研究を課題とする本研究の成果として、長谷川信のプロデュースにより、大学の青山スタンダード科目に、本研究プロジェクトの成果の一端を反映させることとした。

これと並行し、自校史教育も包括する自校教育についての先進的研究および先進事例につき、調査検討を進めたのが杉谷祐美子の研究報告である。同研究報告は網羅的であり、先進的な他校における自校教育の現状を具体的に描き出している。これにより、今では当たり前と考えられるようになってきているこれらの教育が、現状においてなお、かなり厳しいものであるという実状が浮かび上がってくる。一貫教育についての機構整備まで進んできている追手門学院大学の展開を踏まえると、課題は常に指導する側に「人」を得ることと、そして校友も含む全学的な支援体制にあるように思われる。学院の場合、まず学院史を編むという、ある意味限りなくゼロからの出発となってしまっているが、杉谷報告の指摘するとおり、青山スタンダード科目で、15回の講義を自校の歴史だけでおこない得るとするのは、学院が「建学の精神」と並び、きわめて恵まれた「歴史と伝統」という教育資源を有していることの証左である。これからの競争環境を考えれば、この資源を教育効果にも、学校経営にも活かし、ステークホルダーのアイデンティティを高めていく最大の資源としていかなければならない。この点で、杉谷報告が指摘する「人」の養成と「支援体制」の構築を年史編纂と連携させながら進めていく必要があることを強調しておきたい。

以上の課題につき、具体的に大学の青山スタンダード教育で実践を進めた佐々木竜太の研究報告は、青山スタンダード科目「青山学院大学の歴史」で研究と教育とをフィードバックさせ、豊富なデータとアンケートを通じ、自校教育がどのような教育効果を生み出すかにつき、定性的、実証的な分析を行い、その意義を極めて説得的に明らかにした。佐々木報告は、実践の場において得られた豊富なデータによって構成されており、単純に要約することは極めて難しい。他の報告もそうであるが、その詳細については、本プロジェクトの一つの方向性である実践的研究を「現場の知」において締めくくる研究として、是非本研究プロジェクトの『研究成果報告論集』の当該箇所に当たっていただくことをお願いしたい。

⑥むすびにかえて

翻って顧みれば、近代日本は、その制度設計の最初に欧化政策とキリスト教との関係をどうするのかという厄介な課題に突き当たっていた。キリスト教と「文明」とを切り分けること、国家神道や大日本帝国憲法に代表される日本の近代国家の基本設計において、あるいは国体論や教育勅語に象徴される旧制の教育制度の設計において、為政者がもっとも緊張感をもって向き合ったのはキリスト教であった。このことが戦前期日本のキリスト教系学校の苦難を生み出したことについてはすでに述べた。敗戦後日本国憲法が施行され、新制の教育制度が生まれた。それがアメリカの教育システムの直輸入であったとの批判はあるにしろ、それにより得られた学問や教育の自由は、戦後70年という時代を支えてきた基盤であることに間違いはない。キリスト教系学校は厳しい拘束から放たれ、戦後教育にのびのびと大きな役割を果たすことが出来るようになったのである。しかし同時に、団塊の世代とそれがエンジンとなった高度成長の時代、単線型教育によって学校はどこも同じようなかたちに変貌し、偏差値が学校選択の唯一の基準となっていった。子供たちに「個性」を求める学校が、自らの「個性」を失っていくアイロニーがそこにある。高度成長が終焉し、バブルが崩壊、団塊の世代も後期

高齢者に突入し、世代の交代とともに「制度」が大きく変わろうとしている現在、「グローバル教育」という課題も、「実践的教育」という課題も、それだけでは一律の「お題目」に過ぎず、そのような「課題」を、固有の歴史に培われたどのような教育基盤のうえに達成するかが、これからの私学の本領となる時代が始まっている。とりわけ、青山学院のような宗教に教育の基礎を置く学校にとって、特にそうである。

自校史研究は、本来オープンエンドのものとして、世代間で引き継がれていくべき性格のものである。この意味で、個々の研究者を超えて本研究プロジェクトの目指すところに終わりはない。本研究プロジェクトが、「自校史研究」とともに、「教育実践モデルの開発」を掲げたのは、青山学院の「学風」は「本多精神」にあるということを踏まえてのものであった。これまで述べてきたことに明らかなように、「本多精神」とは、「人」を育てること、あらゆる「知の営み」を自ら固有の「資産」ととどめるのではなく、次世代の育成に帰着させていくというはっきりとした「意思」にあったと思われる。その姿をわれわれは多くの先達、校友の中に見出すことができた。「学風」とは、長い時間の重みに耐えることで得られた純度と硬度を保ちつつ、カットの仕方や光の射し方に応じて多彩に煌くダイヤモンドの輝きのようなものであろう。粗製の人造ダイヤモンドではその輝きを真似することは出来ず、ただその成分を探求し、光を量るだけでは、その輝きそのものを感じすることはできない。その都度の時代の風に晒されながら、歴史や伝統が今ここで生き活きと光彩を放ちつづけるためには、やはり教育そのものの中で、自らの歴史が取り戻され、アクチュアルなものとして、もう一度、そして常に、生き直されねばならないのである。

末尾になるが、本研究プロジェクト期間を通じ、本学校友である山田周氏に研究マネジメントすべての作業を支えていただいた。山田氏なくしては、本研究プロジェクトを維持することは不可能であった。ここに研究協働者としてお名前を挙げ、記して感謝申し上げる。

②領域別研究部門 自然科学研究部

研究課題：大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み

プロジェクト代表：安井 年文

研究成果報告論集

『大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み』

執筆者：安井 年文 井上 直子 宮崎 純一 遠藤 俊典 加藤 彰浩 田村 達也
有川 星女 片岡 悠妃 吉田 政幸 北村 哲

<総括>

安井 年文

I. 背景として

この研究は、大学生を体育の授業の中で客観的に評価するこれまでの体力診断テストだけで果たして正当に心身まで評価できているのか、といった疑問からスタートしたものである。

青少年の継続的な体力・運動能力の低下と少子高齢化に伴う急速な高齢化社会が同時に進行している現代において、文部科学省は平成23年にスポーツ基本法を策定し、「スポーツは、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動であり、今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものとなっている。」ことを説明している。さらに、その理念の中で「スポーツは、とりわけ心身の成長の過程にある青少年のスポーツが、体力を向上させ、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培う等人格の形成に大きな影響を及ぼすものであり、国民の生涯にわたる健全な心と身体を培い、豊かな人間性を育む基礎となるものであるとの認識の下に、学校、スポーツ団体、家庭及び地域における活動の相互の連携を図りながら推進されなければならない。」ことを掲げている。

一般的に、大学は青少年に「体育・スポーツ」に対する教育を遂行することのできる最後の教育機関である。実際に、教養科目としての体育授業（以下、大学体育という）を開講している大学は、我が国において2016年現在では100%に近いことは、大学における体育授業が、その後のライフステージにおいて重要な役割を果たすことが認識されていることを暗に示すものである。このような体力的側面からみた影響だけではなく、近年ではスポーツ活動を介した他者との関わりによる友人関係の開始や発展、さらには大学適応支援の役割が、大学体育に期待できる教育効果であることが示唆されている（木内・橋本、2012）。このことは、大学体育における教育では、単にスポーツ活動による体力や運動能力の向上からみた効果だけではなく、スポーツ活動をもとにした、学生たちの「精神・心」や「社会性」に対する意義を見出す必要があることを意味している。

II. 目的

以上の背景を踏まえ、受講者全員の平均的な学修成果を高めるとともに、一人ひとりがそれぞれの健康の維持・増進を推進していくことを念頭に置いて、それぞれに適した生涯にわたるスポーツライフを確立していきける素養を身に付ける必要があると考えられる。一方、受講学生がどのような学生で、授業後に到達目標に対してどのような授業の効果があつたのかについては、十分に評価できていないのが現状である。そのためには、大学生（およびそれ以降の社会人）の「心身の健康」を総合的に評価・診断することのできるテストが必要不可欠である。これまでの「体力診断テスト」だけではなく、「精神・心」や「社会性」を含めた総合的なテストの開発と運用が喫緊の課題である。

大学で体育授業を受講する学生の中には、運動技能が低く、スポーツや身体運動に対して消極的でよいイ

メージを持っていない者が少なくない。このような者たちは、国内では運動不振、運動遅滞、運動不器用、諸外国では Clumsy などと表現され、上記の特徴があるために、総じて運動有能感が低いことも報告されている。

以上のことから、体育・スポーツを教育できる最終機関としての大学においては、運動技能が低く、スポーツや身体運動に対して消極的でよいイメージを持っていない運動不振学生に対して、彼らの運動有能感が高くなり、より質の高い楽しさを体験できる教育の可能性について検討することがきわめて重要である。そのことが達成できなければ、将来のスポーツライフのスタートを切ることが不可能になり、生涯にわたる健康の維持・増進の重要な手がかりを1つ失わせてしまうことになる。したがって、本プロジェクトでは大学生の「心身の健康」を総合的に評価・診断するテストの開発を主題とし、それをもとにした運動不振学生に対する大学体育の効果についても検討を加えたものである。

Ⅲ. 本研究の課題・結果

本プロジェクトでは上述した研究目的を達成するために、3つの研究課題を設定し、結果を示した。

【研究課題1】

大学生における運動有能者と運動不振者の特徴

本学の「健康・スポーツ演習」を履修している学生を対象にして、「からだ」と「こころ」の健康が、運動有能感とどのような関係を示すのかを検討した。このことによって、「ヘルステスト」作成のための基礎的資料を得ることとした。その結果、新体力テストの各項目の得点および総合得点、ラケットワークテストの回数、運動有能感に関するアンケートの各カテゴリーの得点および総合得点について、運動有能群が有意に高い値を示した。特に、運動有能感において、顕著に高い値を示した。さらに、本研究では運動有能学生を構成するモデルを示した。

【研究課題2】

運動不振学生のスクリーニング方法の開発を基にした大学生の心身の健康を総合的に評価する「ヘルステスト」の作成を目的として研究課題1で得られた知見を基にして、運動不振学生のスクリーニング法を作成した。その評価・診断法を大学生の心身の健康度を総合的に評価する方法に発展させることによって、「ヘルステスト」の作成を試みた。その結果、本研究では、体育教員による運動観察以外の変数から、運動不振学生を予測することが一定水準以上で可能であることが明らかとなった。これらの結果は運動不振学生における体育授業の学修成果の検証を可能にするとともに、彼らの学修進捗を考慮した授業展開への応用が期待される。

【研究課題3】

大学体育授業が学生の心身の健康に及ぼす影響－ヘルステストを用いた授業前後の心身の健康度の変化に着目して－

研究課題2で作成したヘルステストの有効性および実用性を検証すること、および大学体育の授業効果を検討するために、大学体育授業前後の「ヘルステスト」得点の変化について授業に介入して縦断的に調査した。その結果、ヘルステストのすべての項目が、授業後において有意に向上した。したがって、運動の不振か否かに関わらず、大学体育授業を通して、履修学生の心身の健康度を向上させることができた。特にボール操作能力の項目において、運動不振者群がその他受講者群に比べて、より大きな向上を示した。

Ⅳ. 研究課題のまとめ

本研究プロジェクトでは、大学生の心身の健康を総合的に評価する「ヘルステスト」の作成に対して、大学体育受講学生に含まれる運動有能者および運動不振学生に焦点を当てながら、総合的な知見を収集する手続きを繰り返すことによって、より精度の高いテストを完成させるに至った。また、作成したテストを用いて、大学体育授業の効果を検討した結果、現行の授業形態において、平均的には学生の心身の健康度は向上していることが明らかになった。今後は、さらに大学体育授業の効果を高めていくために、「ヘルステスト」の評価を授業内に活用・応用しながら検討を継続し、データを蓄積していくことが課題である。

V. 総括

これまでの2年間で3つの研究課題を設定し、大学生の健康増進を自己の責任において実践できる能力を養うための基礎的知見を集積した。しかし、この研究課題はまだ発展段階であり、今後さらなるデータの集積や根本に立ち返ることも必要になるのかもしれない。

しかし、大学のもつ教育力と「健康増進」にかかわる実践知が重なり合いながら学生の実践能力の涵養に役立ってくれることを切望する。ひいてはそれらに対する媒体であるスポーツ・体育の立ち位置が確固たる礎になることは勿論のこと、学際的な領域としてその発展にも期待するものである。

<要 約>

安井 年文 井上 直子 宮崎 純一 遠藤 俊典 加藤 彰浩
田村 達也 有川 星女 片岡 悠妃 吉田 政幸 北村 哲

I. はじめに

一般的に、大学は青少年に「体育・スポーツ」に対する教育を遂行することのできる最後の教育機関である。体力的側面からみた影響だけではなく、近年ではスポーツ活動を介した他者との関わりによる友人関係の開始や発展、さらには大学適応支援の役割が、大学体育に期待できる教育効果であることが示唆されている（木内・橋本、2012）。このことは、単にスポーツ活動による体力や運動能力の向上からみた効果だけではなく、「精神・心」や「社会性」に対する意義を見出す必要があることを意味している。

そのためには、大学生（およびそれ以降の社会人）の「心身の健康」を総合的に評価・診断することのできるテストが必要不可欠であり、「精神・心」や「社会性」を含めた総合的なテストの開発と運用が喫緊の課題である。

また、大学で体育授業を受講する学生の中には、運動技能が低く、スポーツや身体運動に対して消極的でよいイメージを持っていない者が少なくない。これらは、国内では運動不振、運動遅滞、運動不器用、などと表現され、総じて運動有能感が低いことも報告されており、これに対する検討はきわめて重要である。したがって、本プロジェクトでは大学生の「心身の健康」を総合的に評価・診断するテストの開発を主題とし、それをもとにした運動不振学生に対する大学体育の効果についても検討を加えた。

II. 結果

本研究では上述した研究目的を達成するために、以下に示す3つの研究課題を設定した。

【研究課題1】

・大学生における運動有能者と運動不振者の特徴

本学の「健康・スポーツ演習」を履修している学生を対象にして、「からだ」と「こころ」の健康が、運動有能感とどのような関係を示すのかを検討した。このことによって、「ヘルステスト」作成のための基礎的資料を得た。その結果、体力診断テストの各項目の得点および総合得点、ラケットワークテストの回数、運動有能感に関するアンケートの各カテゴリーの得点および総合得点について、運動有能群が有意に高い値を示した。特に、運動有能感において、顕著に高い値を示した。

【研究課題2】

・運動不振学生のスクリーニング方法の開発を基にした大学生の心身の健康を総合的に評価する「ヘルステスト」の作成

研究課題1で得られた知見を基にして、運動不振学生のスクリーニング法を作成した。その評価・診断法を大学生の心身の健康度を総合的に評価する方法に発展させることによって、「ヘルステスト」の作成を試みた。その結果、本研究では、体育教員による運動観察以外の変数から、運動不振学生を予測することが一定水準以上で可能であることが明らかとなった。これらの結果は運動不振学生における体育授業の学修成果の検証を可

能にするとともに、彼らの学修進捗を考慮した授業展開への応用が期待された。

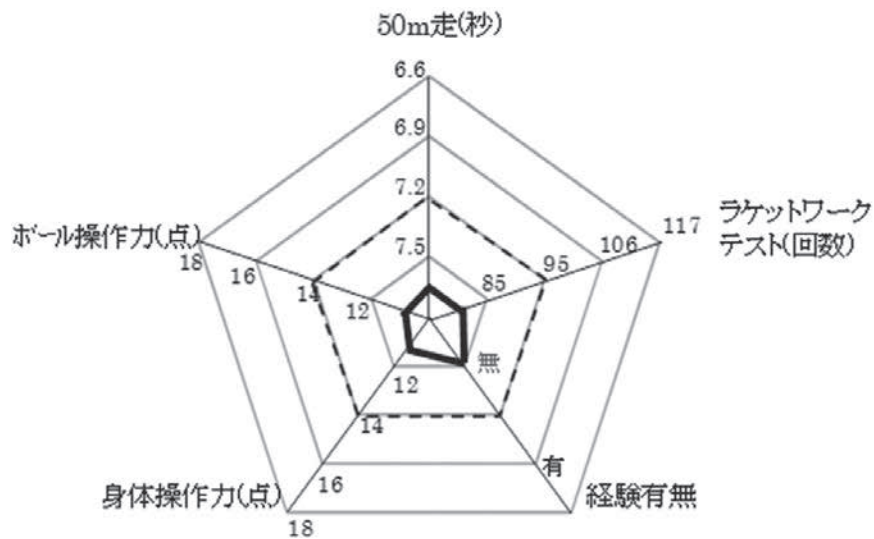


図1 回帰式で求められた運動不振の該当者の一例（男子の場合）

† 50m 走：8.5秒、ラケットワークテスト：50回運動経験：無、身体操作得点：8点、ボール操作得点：7点、予測回帰式：49%

†† 点線は偏差値50の値を結んだもの

【研究課題3】

・大学体育授業が学生の心身の健康に及ぼす影響－ヘルステストを用いた授業前後の心身の健康度の変化に着目して－

研究課題2で作成したヘルステストの有効性および実用性を検証すること、および大学体育の授業効果を検討するために、大学体育授業前後の「ヘルステスト」得点の変化について授業に介入して縦断的に調査した。その結果、ヘルステストのすべての項目が、授業後において有意に向上した。したがって、運動の不振か否かに関わらず、大学体育授業を通して、履修学生の心身の健康度を向上させることができた。特にボール操作能力の項目において、運動不振者群がその他受講者群に比べて、より大きな向上を示した。

Ⅲ. まとめ

本研究プロジェクトでは、大学生の心身の健康を総合的に評価する「ヘルステスト」の作成に対して、大学体育受講学生に含まれる運動有能者および運動不振学生に焦点を当てながら、総合的な知見を収集する手続きを繰り返すことによって、より精度の高いテストを完成させるに至った。また、作成したテストを用いて、大学体育授業の効果を検討した結果、現行の授業形態において、平均的には学生の心身の健康度は向上していることが明らかになった。

今後は、さらに大学体育授業の効果を高めていくために、「ヘルステスト」の評価を授業内に活用・応用しながら検討を継続し、データを蓄積していくことが課題である。

Ⅲ. 研究プロジェクト・研究ユニット資料

1年目

ユニット	研究課題	研究期間	氏名	兼担等の種別	所属・職位	研究実施計画に対する役割分担
一般研究B	渋谷-青山を中心とする新都市領域研究拠点構築にむけての総合的研究	3年	伊藤 毅	兼担・リーダー	総合文化政策学部・教授	研究実施計画の立案・総括
			黒石 いずみ	兼担	総合文化政策学部・教授	都市文化資本形成分析
			高嶋 修一	兼担	経済学部経済学科・教授	近現代都市史
			永山 のどか	兼担	経済学部経済学科・教授	比較研究
			井上 孝	兼担	経済学部現代経済デザイン学科・教授	都市人口分析
			小島 見和	特別研究員	日本女子大学・非常勤講師	ユニットリーダー補佐・近現代都市建築史
	プロジェクト科学の基盤確立と社会的展開	3年	鈴木 宏昭	兼担・リーダー	教育人間科学部教育学科・教授	研究プロジェクトの統括
			薬師神 玲子	兼担	教育人間科学部心理学科・教授	「基礎研究グループ」の研究実施
			荻宿 俊文	兼担	社会情報学部・教授	「教育・社会グループ」研究の実施
			寺尾 敦	兼担	社会情報学部・教授	「教育・社会グループ」研究の実施
			大塚 類	兼担	教育人間科学部教育学科・准教授	「教育・社会グループ」研究の実施
			米田 英嗣	兼担	教育人間科学部教育学科・准教授	「教育・社会グループ」研究の実施
			小野 哲雄	客員研究員	北海道大学大学院情報科学研究科情報理工学専攻・教授	「技術・展開グループ」の研究実施
			岡田 浩之	客員研究員	玉川大学工学部情報通信工学科・教授	「技術・展開グループ」の研究実施
			嶋田 総太郎	客員研究員	明治大学理工学部・教授	「基礎研究グループ」研究の実施
	川合 伸幸	客員研究員	名古屋大学大学院情報科学研究科心理・認知科学専攻・准教授	「基礎研究グループ」研究の実施		
	渤海「日本道」に関する海港遺跡の考古学的研究 ークラスキノ城跡の発掘調査を中心にー	3年	岩井 浩人	兼担・リーダー	文学部史学科・准教授	日・ロ共同調査を主導するとともに、本研究の調査成果を国際シンポジウム及び報告論集上において総括する。
			菅頭 明日香	兼担	文学部史学科・准教授	発掘調査に同行し、遺跡の磁気探査を実施する。また、出土遺物の自然科学分析から、年代比定や材質同定を行う。
			李 芝賢	兼担	文学部史学科・助教	発掘調査に同行し、出土陶磁器について年代比定や産地同定を行う。その結果をもとに、城壁の築城時期や遺跡の性格について検討する。
	人文・社会・自然科学および学際的領域における総合研究を通じた研究ブランディングの探究	2年	菊池 努	兼担・リーダー	国際政治経済学部国際政治学科・教授	ユニットリーダーとして、研究計画全体を統轄する
			佐伯 眞一	兼担	文学部日本文学科・教授	ユニットリーダーの補助並びに研究活動に従事する
			藤原 淳賀	兼担	地球社会共生学部・教授	ユニットリーダーの補助並びに研究活動に従事する
			横山 暁	兼担	経営学部マーケティング学科・准教授	ユニットリーダーの補助並びに研究活動に従事する
			松谷 康之	兼担	理工学部電気電子工学科・教授	ユニットリーダーの補助並びに研究活動に従事する
			山崎 周	兼担	総合研究所・助手	ユニットリーダーの補助並びに研究活動に従事する

ユニット	研究課題	研究期間	氏名	兼任等の種別	所属・職位	研究実施計画に対する役割分担
一般研究C	AI, BIG Data, VRを利用した英語教育	3年	小張 敬之	兼任・リーダー	経済学部・教授	総括、AI授業実験、アンケート調査・分析、学習方略作成
			Thomas Dabbs	兼任	文学部英米文学科・教授	Big Data分析、アンケート調査・分析、Learning Analytics、学習方略作成
			菊池 尚代	兼任	地球社会共生学部・准教授	授業実験、アンケート調査・分析、学習方略作成
			Steve Lambacher	兼任	社会情報学部・准教授	アンケート調査・分析、Editing English.
	芳香族複素環を基盤とする機能性生体材料の開発を目指した化学・生物協働研究	2年	田邊 一仁	兼任・リーダー	理工学部化学・生命科学科・教授	研究全体の統括 細胞実験等の生物学的実験の実施
			武内 亮	兼任	理工学部化学・生命科学科・教授	機能性芳香族複素環化合物の設計と合成 遷移金属触媒反応の開発
	複雑化する社会問題の解決にむけた「混合研究法」の教育・研究拠点の構築	2年	抱井 尚子	兼任・リーダー	国際政治経済学部国際コミュニケーション学科・教授	・プロジェクト全体の総括 ・日本の社会科学・健康科学研究者向けに混合研究法の講演会およびワークショップを企画・実施 ・報告書・論文・書籍の執筆および出版
			高木 亜希子	兼任	教育人間科学部・教授	・日本の外国語教育研究者向けに混合研究法の講演会およびワークショップを企画・実施 ・報告書・論文・書籍の執筆および出版
			John W. Creswell	客員研究員	Senior Research Scientist, Mixed Methods Program, University of Michigan (ミシガン大学医学部混合研究法研究所・共同所長)	・講演、ワークショップ講師 ・報告書・論文・書籍の執筆および出版 ・研究プロジェクトへのコンサルテーション
	「eスポーツ」のスポーツ化に関する探索的研究	2年	川又 啓子	兼任・リーダー	総合文化政策学部・教授	研究代表：理論研究担当（消費者主導型市場形成）
			大島 正嗣	兼任	総合文化政策学部・教授	研究分担：理論研究担当（情報学、情報の視覚化）
			丸山 信人	客員研究員	青山学院ヒューマン・イノベーション・コンサルティング株式会社 主幹研究員	研究分担：現状分析担当（コンテンツ産業）
	国際貿易と国内政策：貿易、政府調達、産業政策の相互作用	3年	鶴田 芳貴	兼任・リーダー	国際政治経済学部国際経済学科・准教授	・統括・貿易政策と競争政策の関係に関する分析・日本の政府調達制度に関するデータベース構築
			沈 承揆	兼任	国際政治経済学部国際経済学科・准教授	・貿易政策と産業政策の関係についての分析
			小橋 文子	兼任	国際政治経済学部国際経済学科・助教	・貿易政策・協定における政府調達規制の扱いについての事実整理および分析 ・国際的な政策のハーモナイゼーションについての実証分析
			高 準亨	兼任	経済学部経済学科・教授	・貿易政策と投資措置の関係に関する分析 ・国際マクロ経済学の視点からの国際的な政策のハーモナイゼーションについての検討
			Andrew Griffen	客員研究員	東京大学大学院経済学研究科・講師	・ミクロ計量経済学の視点からの政策評価
	企業による地域活性化の取り組みの比較研究	2年	宮副 謙司	兼任・リーダー	国際マネジメント研究科国際マネジメント専攻・教授	プロジェクト全体の調整と統括、ケーススタディ、現地調査と執筆とりまとめ、文献レビュー
			黒岩 健一郎	兼任	国際マネジメント研究科国際マネジメント専攻・教授	マーケティング研究面・ケースライティングでのアドバイス支援、文献レビュー
			澤田 直宏	兼任	国際マネジメント研究科国際マネジメント専攻・教授	企業戦略研究面でのアドバイス支援、東京での研究関係者の紹介、文献レビュー
佐伯 悠			客員研究員	日本精工株式会社 HR 本部 人事部人材開発室	ケーススタディ（食品企業・半導体企業など）、現地調査と執筆とりまとめ、地域関係先の調整	
藤井 祐剛			客員研究員	株式会社CALICO DESIGN 代表取締役	ケーススタディ（鉄道企業・地方銀行など）、現地調査と執筆とりまとめ、プロジェクト経費管理	

【総合文化研究部門】（3年目）

研究部	研究課題	研究期間	氏名	兼担等の種別	学部（研究科）・職位	2018年度研究内容
キリスト教文化	多元共生の思想と動態：現代世界におけるエイレーネーの探求	3年	藤原 淳賀	兼担・代表	地球社会共生学部地球社会共生学科・教授	キリスト教的エイレーネー発表の論文化、研究会とりまとめ、公開講座
			高橋 良輔	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・教授	平和観の変容の発表の論文化、公開講座
			真鍋 一史	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・教授	多元共生の経験理論と規範理論の架橋の試みの研究発表
			梅津 順一	兼担	総合文化政策学部総合文化政策学科・教授 青山学院院長	エイレーネーと青山学院との関係について
			樺島 榮一郎	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・准教授	メディアとナショナリズム発表の論文化
			福島 安紀子	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・教授	文化活動が紡ぐ共生の論文化
			菊池 尚代	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・准教授	メディアが与える教育的価値観の変容の研究発表
			齋藤 大輔	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・助教	都市空間におけるトランスナショナリズムの研究発表
			橋本 彩花	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・助教	日本の教育における多元共生の研究発表、公開講座
			小堀 真	兼担	地球社会共生学部地球社会共生学科・助教	宗教団体と社会参加の国際比較
			東方 敬信	客員研究員	青山学院大学・名誉教授	和解とソフトパワー発表の論文化、研究会でのレスポンス、公開講座

2018年度総合研究所 研究プロジェクト成果刊行

【総合文化研究部門】

研究部	研究課題	研究期間	氏名	兼担等の種別	学部(研究科)・職位	研究分担
課題別	株式市場に関する国際比較調査～投資家心理からのアプローチ～	3年	亀坂 安紀子	兼担・代表	経営学部経営学科・教授	調査の総括、データ構築、調査結果の分析と公表、学会等での成果発表
			高橋 文郎	兼担	国際マネジメント研究科・教授	調査全体へのコメント、回答者の紹介、調査結果の公表
			島田 淳二	兼担	経営学部マーケティング学科・教授	調査結果についての報告書原案へのコメント
			芹田 敏夫	兼担	経済学部経済学科・教授	調査結果についての報告書原案へのコメント
			小林 孝雄	客員研究員	千葉工業大学国際金融研究センター・所長	国際ワークショップ企画
			筒井 義郎	客員研究員	甲南大学経済学部・特任教授	過去の調査の引継、作業全体へのコメント
キリスト教文化	贖罪思想の社会的影響の研究	3年	森島 豊	兼担・代表	総合文化政策学部総合文化政策学科・准教授	英国贖罪思想史とアジアへの影響
			大島 力	兼担	経済学部・教授	旧約聖書における贖罪理解
			高砂 民宣	兼担	経営学部マーケティング学科・准教授	新約聖書における贖罪理解
			須田 拓	客員研究員	東京神学大学・准教授	ピューリタン神学における贖罪思想

【領域別研究部門】

研究部	研究課題	研究期間	氏名	兼担等の種別	学部(研究科)・職位	研究分担
人文科学	「和蘭別段風説書」の研究	2年	岩田 みゆき	兼担・代表	文学部史学科・教授	研究総括・在地社会における「和蘭別段風説書」の研究及び「和蘭別段風説書集成」(仮題)作成のための調査と研究
			篠原 進	兼担	文学部日本文学科・教授	19世紀の言語と文化の比較研究
			割田 聖史	兼担	文学部史学科・教授	19世紀のヨーロッパ情勢と「和蘭別段風説書」の比較研究
			片桐 一男	客員研究員	青山学院大学・名誉教授	「和蘭別段風説書集成」(仮題)作成のための調査と研究
			佐藤 隆一	客員研究員	青山学院高等部・教諭	幕府・諸藩における「和蘭別段風説書」の研究及び「和蘭別段風説書集成」(仮題)作成のための調査と研究
社会科学	わが国の監査規制の変革に関する基礎研究	2年	町田 祥弘	兼担・代表	会計プロフェッション研究科・教授	研究統括・文献研究・国内及び海外調査・学会報告
			八田 進二	兼担	会計プロフェッション研究科・教授	文献研究・国内調査
			多賀谷 充	兼担	会計プロフェッション研究科・教授	文献研究・国内調査
			矢澤 憲一	兼担	経営学部経営学科・教授	文献研究・海外調査
			松本 祥尚	客員研究員	関西大学大学院会計研究科・教授	文献研究・海外調査
自然科学	グラフェン/金属錯体ハイブリッド構造を活用した世界最薄発光デバイスの開発	2年	黄 晋二	兼担・代表	理工学部電気電子工学科・教授	研究プロジェクトの統括、及びグラフェンの結晶成長と錯体/グラフェン複合体の作製と評価
			長谷川 美貴	兼担	理工学部化学・生命科学科・教授	発光性錯体の合成と錯体/グラフェン複合体の発光特性評価
			三井 敏之	兼担	理工学部物理・数理学科・教授	レーザー顕微鏡を用いた錯体/グラフェン複合体の評価
	ラマンイメージングによるマイクロアクター中の光反応の解明	2年	坂本 章	兼担・代表	理工学部化学・生命科学科・教授	研究計画全体の推進、顕微ラマンイメージング測定による光反応機構の解明
			鈴木 正	兼担	理工学部化学・生命科学科・教授	マイクロアクターの開発、光化学反応生成物の同定と反応機構の解明
			岡島 元	兼担	理工学部化学・生命科学科・助教	光化学反応の時間分解共焦点顕微ラマンフローイメージング測定と反応機構の解明
			磯崎 輔	兼担	理工学部化学・生命科学科・助教	マイクロアクターの開発、光化学反応の実行と反応機構の解明

2017年度 総合研究所研究成果一覧

○印 プロジェクト代表
 ※印 所員以外の執筆協力者・研究協力者
 市販本の価格は本体価格（税抜）

研究部	形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
課題別	報告論集	タイ人日本語学習者の学びを支援する一書く能力・話す能力向上へ向けたICT活用と日本語教育のコラボレーション— (タイ人日本語学習者の学びを支援する一書く能力・話す能力向上へ向けたICT活用と日本語教育のコラボレーション—)	○ 稲積 宏誠 宮治 裕 寺尾 敦 勝谷 紀子 東 るみ子 森田 武史 大野 博之 萩原 孝恵 池谷 清美 Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI	本プロジェクトの目的 本プロジェクトの成果 ・タイ人日本語学習者話し言葉コーパスマニュアル ・PIデータの文字化作業における2次チェックの問題点について ・タイ人日本語学習者に特化したOPIレベル情報付き話し言葉コーパス公開に向けて ・タイ人日本語学習者に特化したOPIレベル情報付き話し言葉コーパス公開とその利用方法 ・日本人は気になるんですけど… 一発話に共起するタイ人日本語学習者の舌打ち— ・日本語教育・日本語学習支援にICTをより広く活用していくために ・Webクイズを活用した日本語基本文型学習トレーニングシステムの試作 ・文構造に基づく文の難易度を示す評価指標導出の試み ・文の構造的指標に基づく分かりにくい文の分類方法の検討 ・文構造からみたNHKやさしい日本語ニュースの読みやすさ評価	2018.3.30	—	—
	報告論集	自校史研究と教育実践モデルの開発—青山学院史研究— (自校史研究と教育実践モデルの開発—青山学院史研究—)	○ 杉浦 勢之 長谷川 信 梅津 順一 杉谷 祐美子 シュエ 土戸 ポール 小林 和幸 佐々木 竜太 伊藤 真利子 酒井 豊 浅田 厚志	I. 自校史研究解題 II. 草創期青山学院関係の史料 「青山学院資料センター所蔵 本多庸一関係資料」について III. 米山梅吉の組織ガバナンス構想 IV. 戦時下青山学院の二人の学生—永瀬隆と山本七平 V. 青山学院の管理・運営機構と構成員 VI. 青山学院の経営数値の推移から読み取る歴史：2006年度—2015年度 VII. 自校教育のプログラム内容と自校史の位置づけ VIII. 自校史研究と教育実践モデルの開発—「青山学院大学の歴史」の実践を通して	2018.3.30	—	—
自然科学	報告論集	大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み (大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み)	○ 安井 年文 井上 直子 宮崎 純一 遠藤 俊典 加藤 彰浩 田村 達也 有川 星女 片岡 悠妃 吉田 政幸 北村 哲	I はじめに II 本研究の目的および課題 III 大学生における運動有能者と運動不振者の特徴 IV 運動不振学生のスクリーニング方法の開発を基にした大学生の心身の健康を総合的に評価する「ヘルステスト」の作成 V 大学体育授業が学生の心身の健康に及ぼす影響 —ヘルステストを用いた授業前後の心身の健康度の変化に着目して— VI 結論 参考文献 付録	2018.3.30	—	—
	レポート	大学生のためのヘルステスト (大学生の健康増進のためのヘルステスト開発の試み)			—	—	—

2017年度総合研究所 公開講演会等開催状況

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
17.6.30 14:30～ 17:00	2017年度 青山学院大学総合研究所研究プロジェクト 「別段風説書の研究」公開研究会 論題 「阿部家資料における『和蘭別段風説書』」	講師 嶋村 元宏 (神奈川県立歴史博物館主任学芸員)	総合研究所 研究室(1)	人文科学研究部 「『和蘭別段風説書』の 研究」
17.9.20 16:00～ 18:00	宗教改革500年記念 公開講演会 ルターにおける十字架の神学の今日的意義	講師 ハンス＝マルティン・バルト博士 (Dr. Hans-Martin Barth) (マールブルク大学プロテスタント神学部 組織神学・宗教哲学名誉教授)	総研ビル 9階 16会議室	キリスト教文化研究部 「贖罪思想の社会的影 響の研究」 共催 一般財団法人日本聖書 協会 ビュウリタニズム学会 青山学院宗教センター
17.11.17 15:00～ 17:00	2017年度 青山学院大学総合研究所研究プロジェクト 「別段風説書の研究」公開研究会 論題 「オランダ別段風説書 その公的回覧と私的筆写」	講師 佐藤 隆一 (青山学院高等部教諭)	総合研究所 研究室(1)	人文科学研究部 「『和蘭別段風説書』の 研究」
17.12.22 15:00～ 17:00	2017年度 青山学院大学総合研究所研究プロジェクト 「別段風説書の研究」公開研究会 論題 「在地社会における別段風説書」	講師 岩田 みゆき (文学部史学科教授)	総合研究所 研究室(1)	人文科学研究部 「『和蘭別段風説書』の 研究」
18.1.19 15:00～ 17:00	2017年度 青山学院大学総合研究所研究プロジェクト 「別段風説書の研究」公開研究会 論題 「風説書の中のヨーロッパ・ ヨーロッパの中の風説書」 論題 「風説書から別段風説書へ —長崎における情報操作から考える」	講師 割田 聖史 (文学部史学科教授) 講師 松本 英治 (開成高校教諭)	総合研究所 研究室(1)	人文科学研究部 「『和蘭別段風説書』の 研究」
18.2.9 15:00～ 17:00	2017年度 青山学院大学総合研究所研究プロジェクト 「別段風説書の研究」公開研究会 論題 「阿部家資料におけるオランダ別段風説書 ：朱書きの意味を探る」	講師 嶋村 元宏 (神奈川県立歴史博物館主任学芸員)	総合研究所 研究室(1)	人文科学研究部 「『和蘭別段風説書』の 研究」

IV. 1989年度～2016年度 研究プロジェクト資料

研究所概要
研究所沿革
歴代所長
歴代研究部長
歴代センター室長
研究プロジェクト一覧
研究成果一覧
総合研究所公開講演会等開催状況

研究所概要

青山学院大学総合研究所は、「青山学院大学における教育研究との有機的な関係のもとに、広く学術を統合し、社会と学術文化の進展に寄与することを目的として、」1988年9月27日に設立されました。

その後、何度か改革がなされ、2018年4月1日より「総合研究所は、統合研究機構が策定する全学的な研究推進に係る方針に基づいて、青山学院大学の教育研究との有機的な関係のもとに広く学術を統合し、各専門領域及び学術領域の研究を行うほか、国内外の大学及び研究機関との交流を図り、社会と学術文化の進展に寄与することにより、本学の教育研究の基礎を培い、その水準を高めるために学内資金による研究ユニットを設置し、研究活動を行うことを目的とする。」という新体制となりました。

研究所沿革

1988年9月27日	青山学院大学総合研究所設立
1988年10月1日	7つの研究センターが設置される <ul style="list-style-type: none"> ・人文学系研究センター ・経済研究センター ・法学研究センター ・経営研究センター ・国際政治経済研究センター ・理工学研究センター ・キリスト教文化研究センター
1994年4月1日	個々の学問分野を超えた学際プロジェクトを設置
1997年4月1日	所長直轄の特別研究プロジェクトを設置
2003年4月1日	各研究センターが廃止され研究部門・研究部による体制となる <ol style="list-style-type: none"> 1. 総合文化研究部門 <ul style="list-style-type: none"> ・課題別研究部 ・キリスト教文化研究部 2. 領域別研究部門 <ul style="list-style-type: none"> ・人文科学研究部 ・社会科学研究部 ・自然科学研究部 3. 特別研究プロジェクト
2005年4月1日	eラーニング人材育成研究センター（eLPCO）を設立
2011年3月31日	総合研究所よりeラーニング人材育成研究センター（eLPCO）を分離
2018年4月1日	研究部門・研究部体制が廃止され研究ユニットによる新体制となる <ul style="list-style-type: none"> ・キリスト教文化研究ユニット ・一般研究ユニット

所長（1988.10.1～）

	在職年月	氏名	役職（当時）
1	88.10.1～90.9.30	諸井 勝之助	国際政治経済学部・教授
2	90.10.1～92.9.30	廣島 敏史	文学部（フランス文学科）・教授
3	92.10.1～94.9.30	原茂 太一	法学部・教授
4	94.10.1～98.9.30	岡本 康雄	国際政治経済学部・教授
5	98.10.1～00.3.31	半田 正夫	法学部・教授
6	00.4.1～01.3.31	渡邊 昭夫	国際政治経済学部・教授
7	01.4.1～05.3.31	佐伯 胖	文学部（教育学科）・教授
8	05.4.1～09.3.31	秋元 実治	文学部（英米文学科）・教授
9	09.4.1～13.3.31	本間 照光	経済学部・教授
10	13.4.1～15.3.31	渡辺 節夫	文学部（史学科）・教授
11	15.4.1～17.3.31	浅井 和春	文学部（比較芸術学科）・教授
12	17.4.1～18.5.31	杉原 正顯	理工学部（物理・数理学科）・教授
13	18.6.1～	菊池 努	国際政治経済学部・教授

研究部長（2003.4.1～）

研究部門	在職年月	氏名	役職（当時）
課題別	03.4.1～05.3.31	佐伯 胖	文学部（教育学科）・教授
	05.4.1～09.3.31	秋元 実治	文学部（英米文学科）・教授
	09.4.1～13.3.31	本間 照光	経済学部・教授
	13.4.1～15.3.31	渡辺 節夫	文学部（史学科）・教授
	15.4.1～17.3.31	浅井 和春	文学部（比較芸術学科）・教授
	17.4.1～18.5.31	杉原 正顯	理工学部（物理・数理学科）・教授
	18.6.1～	菊池 努	国際政治経済学部・教授
キリスト教文化	03.4.1～09.3.31	大島 力	理工学部・教授（～08.3.31） 経済学部・教授（08.4.1～）
	09.4.1～13.3.31	西谷 幸介	国際マネジメント研究科・教授
	13.4.1～17.3.31	伊藤 悟	教育人間科学部・教授
	17.4.1～	茂 牧人	総合文化政策学部・教授
人文科学	03.4.1～07.3.31	木村 松雄	文学部（英米文学科）・教授
	07.4.1～09.3.31	重野 純	文学部（心理学科）・教授
	09.4.1～13.3.31	佐藤 泉	文学部（日本文学科）・教授
	13.4.1～	佐伯 眞一	文学部（日本文学科）・教授
社会科学	03.4.1～06.10.11	田中 隆雄	経営学部・教授
	06.10.12～07.3.31 （代行）	秋元 実治	文学部（英米文学科）・教授
	07.4.1～08.3.31	山崎 敏彦	法務研究科・教授
	08.4.1～10.3.31	大石 紘一郎	法学部（法学科）・教授
	10.4.1～13.3.31	申 恵手	法学部（法学科）・教授
	13.4.1～	菊池 努	国際政治経済学部・教授
自然科学	03.4.1～07.3.31	降旗 千恵	理工学部（化学・生命科学科）・教授
	07.4.1～11.3.31	吉田 篤正	理工学部（物理・数理学科）・教授
	11.4.1～	小池 和彦	社会情報学部社会情報学科・教授
eLPCO	05.4.1～07.4.5	佐伯 胖	文学部（教育学科）・教授
	07.4.6～11.3.31	玉木 欽也	経営学部・教授

研究センター室長（1988.10.1～2003.3.31）

研究センター	在職年月	氏名	役職（当時）
人文学系	88.10.1～89.5.31	岡 保生	文学部（日本文学科）・教授
	89.6.1～91.3.31	松浪 有	文学部（英米文学科）・教授
	91.4.1～94.3.31	堀内 秀晃	文学部（日本文学科）・教授
	94.4.1～95.3.31	片桐 一男	文学部（英米文学科）・教授
	95.4.1～98.3.31	谷 清	文学部（英米文学科）・教授
	98.4.1～01.3.31	青山 富士夫	文学部（英米文学科）・教授
	01.4.1～03.3.31	土方 洋一	文学部（日本文学科）・教授
経済	88.10.1～89.3.31	原 豊	経済学部・教授
	89.4.1～91.3.31	榎本 弘	経済学部・教授
	91.4.1～95.3.31	石畑 良太郎	経済学部・教授
	95.4.1～97.3.31	大住 栄治	経済学部・教授
	97.4.1～01.3.31	石井 信之	経済学部・教授
	01.4.1～03.3.31	松下 正弘	経済学部・教授
法学	88.10.1～89.3.31	半田 正夫	法学部・教授
	89.4.1～93.3.31	高窪 貞人	法学部・教授
	93.4.1～97.3.31	佐々木 高雄	法学部・教授
	97.4.1～00.4.30	山崎 敏彦	法学部・教授
	00.5.1～03.3.31	関 英昭	法学部・教授
経営	88.10.1～89.3.31	石川 信男	経営学部・教授
	89.4.1～91.11.30	鈴木 安昭	経営学部・教授
	91.12.1～95.3.31	小林 保彦	経営学部・教授
	95.4.1～97.3.31	小林 健吾	経営学部・教授
	97.4.1～01.3.31	東海 幹男	経営学部・教授
	01.4.1～03.3.31	寺東 寛治	経営学部・教授
国際政治 経済	88.10.1～89.3.31	伊藤 文雄	国際政治経済学部・教授
	89.4.1～91.3.31	中川 敬一郎	国際政治経済学部・教授
	91.4.1～93.3.31	速水 祐次郎	国際政治経済学部・教授
	93.4.1～95.3.31	山本 満	国際政治経済学部・教授
	95.4.1～97.3.31	館 龍一郎	国際政治経済学部・教授
	97.4.1～00.3.31	柘山 堯司	国際政治経済学部・教授
	00.4.1～03.3.31	木村 光彦	国際政治経済学部・教授
理工学	88.10.1～89.3.31	北村 則久	理工学部（物理）・教授
	89.4.1～90.5.31	國岡 昭夫	理工学部（電）・教授
	90.6.1～93.3.31	松本 修	理工学部（化学）・教授
	93.4.1～95.3.31	鮫島 達也	理工学部（化学）・教授
	95.4.1～99.3.31	秋光 純	理工学部（物理）・教授
	99.4.1～00.3.31	隆 雅久	理工学部（機）・教授
	00.4.1～03.3.31	竹本 幹男	理工学部（機）・教授
キリスト教 文化	88.10.1～90.7.31	深町 正信	国際政治経済学部・教授
	90.8.1～92.5.31	東方 敬信	経済学部・教授
	97.4.1～03.3.31	廣瀬 久允	文学部・教授

研究プロジェクト一覧・年度順（2003年度～2016年度）

注1 ○はプロジェクト代表・〈 〉内は年度

注2 在職期間は研究期間年度中であるが、単年の場合は氏名の後に在職年度・年度途中は日付を（ ）内に記載

研究年度	期間 (年)	研究部	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
2003-2005	3	課題別	協働型まちづくりの実践的研究 一渋谷・青山地区における大学と地域との連携実験一	○井口典夫 山下勝・(客員研究員)鈴木勉・遠藤新・早川淳・太田雅文	2006	市販本	成熟都市のクリエイティブなまちづくり
2003 (04.7.14停止)	一	人文	「政治」が言語を規定するのか、言語が「政治」を規定するのか	○夏目博明 九頭見一士・川口悦・北川依子(03)・(客員研究員)北川依子(～04.7.14)			
2003-2004	2	人文	都市社会の歴史的な基本構造の分析	○相田洋 押村高・手塚直樹・北村優季・小名康之	2005	報告論集	東西都市の歴史的諸相
2003-2004	2	社会	ビジネスプロセスマネジメントに関するプロセスパフォーマンスの視点からの研究	○田中正郎 堀内正博	2005	報告論集	エンタープライズ・アーキテクチャーとビジネスプロセス改革
2003-2004	2	社会	変化する労働と生活の国際比較 一国際基準・生産システムと競争力・職業訓練教育・セーフティネット一	○本間照光 白井邦彦・松尾孝一 (客員研究員)石畑良太郎	2006	市販本	階層化する労働と生活
2003-2004	2	自然	ペロローズ管の振動および疲労強度の評価	○渡辺昌宏 小林信之・小川武史	2005	報告論集	ペロローズ管の振動および疲労強度の評価
2003-2004	2	自然	先端光ファイバー応用技術開発と実用化	○水澤純一 竹本幹男・長秀雄・市村顕(03)	2005	報告論集	先端光ファイバー応用技術開発と実用化
2003-2006	4	キリスト	キリスト教の霊性	○〈03・04・05〉大庭昭博(06.4.3 退任(逝去)) ○〈06〉大島力(04・05・06) 支倉壽子・鈴木有郷(03)・宋連玉(05・06)・(客員研究員)野村祐之・大倉一郎・笠原義久・鈴木有郷(04・05・06)	2006	市販本	翻訳本 キリスト教のスピリチュアリティ その二千年の歴史
2004-2005	2	人文	ベケットにおける日本、日本におけるベケット	○堀真理子	2006	市販本	ベケット巡礼
2004-2005	2	社会	情報工学による政府活動の検証	○矢吹初 吉岡祐次・高橋朋一(05) (客員研究員)高橋朋一(04)	2007	市販本	地域間格差と地方交付税の歪み 地方財政の外れ値の探索
2004-2005	2	社会	投資家の相互作用と証券市場のダイナミクス 一マルチエージェント・シミュレーションによる複雑系アプローチ一	○中里宗敬 清水康司・大島正嗣・高森寛(04)	2006	報告論集	投資家の相互作用と証券市場のダイナミクス 一マルチエージェント・シミュレーションによる複雑系アプローチ一
2004-2005	2	社会	企業経営に関するボン・デジタル情報の利活用に関する研究	○戒野敏浩	2006	市販本	デジタルコンテンツマネジメント
2004-2005	2	自然	オリジナルDNAマイクロアレイ「シナプトアレイ」を用いた神経変性及び神経老化過程の解析	○田代朋子 降旗千恵	2006	報告論集	オリジナルDNAマイクロアレイ「シナプトアレイ」を用いた神経変性及び神経老化過程の解析
2004-2005	2	自然	柔軟な壁面に沿う流体摩擦抵抗低減メカニズムの解明	○三栖功 藤松信義	2006	報告論集	柔軟な壁面に沿う流体摩擦抵抗低減メカニズムの解明
2004-2006	3	キリスト	青年期におけるモラル教育の危機と可能性 一キリスト教モラル教育の構築へ一	○伊藤悟 三嶋輝夫・東方敬信・今井重孝・大森秀子・(客員研究員)朴憲郁・小池茂子(05・06)	2007	市販本	モラル教育の再構築を目指して モラルの危機とキリスト教

研究年度	期間 (年)	研究部	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
2005-2006	2	人文	前近代における王の権力と表徴 — 日欧比較研究 —	○渡辺節夫 平野隆文・狩野良規・阪本浩・ 北村優季・矢島泉・土方洋一	2007	市販本	王の表象 — 文学と歴史・日本と 西洋 —
2005-2006	2	社会	コーポレート・ガバナ ンス改革と企業業績・ 企業価値の関連性に関 する国際比較	○〈05～06.10.11〉田中隆雄 (06.10.11 退任(逝去)) ○〈06.10.12～07.3.31〉高橋邦丸 島田淳二・(客員研究員) 劉慕和	2007	報告論集	コーポレート・ガバナ ンス改革と企業業績・ 企業価値の関連性に関 する国際比較
2005-2006	2	自然	素粒子論に基づいた時 空と物質の創生	○山口昌英 川口俊宏 (06)	2007	報告論集	素粒子論に基づいた時 空と物質の創生
2005-2006	2	自然	健康な脳を維持する食 生活因子の解析	○福岡伸一 有井康博・田代朋子・降旗千恵・ 木村純二・武井史郎 (06) (客員研究員) 山科正平・小林謙 一・武井史郎 (05)	2007	報告論集	健康な脳を維持する食 生活因子の解析
2006-2007	2	人文	「声」と「身体」の探求 — 現代詩劇における「ギ リシア劇」と「能」の 再生 —	○佐藤亨 廣木一人・堀真理子・外岡尚美・ 伊達直之・(客員研究員) 中條忍・ 村田真一	2008	市販本	ギリシア劇と能の再生 — 声と身体 — の諸相
2006-2007	2	人文	大学における基本アカ デミックスキルの育成 プログラムの開発	○鈴木宏昭 小田光宏・杉谷祐美子 (特別研究員) 長田尚子	2008	市販本	学びあいが生みだす書 く力 — 大学におけるレポート ライティング教育の試 み —
2006-2007	2	人文	帝国官僚と支配— 興隆 と崩壊 —	○平田雅博 伊藤定良・安村直己・相田洋・ 小名康之・小林和幸 (客員研究員) 佐々木洋子 (06)	2008	市販本	世界史のなかの帝国と 官僚
2006-2007	2	社会	IT 革命と企業経営— IT ビジネス・IT 企業・IT 産業 —	○森川信男・芹田敏夫・内田達也 (客員研究員) 佐久間一浩・山口 秀文	2008	市販本	IT 革命と企業組織
2006-2007	2	社会	日本・モンゴルの FTA (自由貿易協定) 結成に 係わる研究	○岩田伸人 加藤篤史・瀬尾佳美・Karl- Friedrich Lenz・(客員研究員) 高瀬保・桜井雅夫	2009	市販本	モンゴルプロジェクト — 日本・モンゴルの FTA (自由貿易協定) 結成の意義と課題 —
2006-2007	2	自然	マイクロサイズのセル と 1 次元電極の製作、 そして、それによるア ハラノフ・ボーム効果 の測定	○三井敏之 小林夏野	2008	報告論集	マイクロサイズのセル と 1 次元電極の製作、 そして、それによるア ハラノフ・ボーム効果 の測定
2006-2007	2	自然	ジャストインタイム・ スケジューリングに対 する最適化手法の開発	○宋少秋	2008	報告論集	ジャストインタイム・ スケジューリングに対 する最適化手法の開発
2007-2008	2	人文	イギリス・ルネサンス 期の言語と文化	○佐藤紀子 武内信一・佐野弘子・(客員研究 員) 北田よ志子・永瀬紘子	2009	市販本	イギリス・ルネサンス 期の言語と文化— 時代 精神と自己形成 —
2007-2008	2	自然	高精細画像利用遠隔医 療授業 システムの北里大との 共同研究	○水澤純一 佐久田博司 (客員研究員) 長谷川建治	2009	報告論集	高精細画像利用遠隔医 療授業 システムの北里大との 共同研究
2007-2008	2	自然	スマートな多重連結車 両システムのための制 振装置の開発と知的制 御	○山口博明 渡邊昌宏	2009	報告論集	スマートな多重連結車 両システムのための制 振装置の開発と知的制 御
2007-2009	3	課題別	青山文化の総合的研究	○井口典夫 杉浦勢之・東伸一・(客員研究員) 和多利浩一・平野暁臣 (07・08)	2010	市販本	青山文化研究— その歴 史とクリエイティブな 魅力 —
2007-2009	3	キリスト	大学におけるキリスト 教教育 — その歴史・現状・展 望 —	○大島力 シユエ土戸ポール・嶋田順好・ 酒井豊・梅津順一 (08.6.1～)・ 伊藤悟・東方敬信・河本洋子	2010	市販本	キリスト教大学の使命 と課題 — 青山学院の原点と 21 世紀における新たな 挑戦 —

研究年度	期間 (年)	研究部	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
2008	1	人文	ホロコーストの影を生き て一表象と継承	○佐川和茂	2009	市販本	ホロコーストの影を生き て ユダヤ系文学の表象 と継承
2008-2009	2	人文	国家の歴史的形成と文学 および言語の動態的 研究	○土方洋一 渡辺節夫・北村優季・阪本浩・ 山内一芳・藤原良章・西澤文昭・ 狩野良規	2010	市販本	国家と言語 一前近代の東アジアと 西欧
2008-2009	2	社会	市町村合併の経済分析	○矢吹初 高橋朋一・吉岡祐次・内山義英 (09)・(客員研究員) 深江敬志	2011	市販本	市町村合併のシナジー 効果 改革時代の自治体「意 識」の分析
2008-2009	2	自然	強磁性を示す電荷移動 錯体の複素誘電率スペ クトロスコピー	○北野晴久 糸井充穂	2010	報告論集	強磁性を示す電荷移動 錯体の複素誘電率スペ クトロスコピー
2008-2009	2	自然	超臨界ガス降着現象と 銀河・ブラックホールの 進化	○川口俊宏 柴田徹	2010	報告論集	超臨界ガス降着現象と 銀河・ブラックホールの 進化
2008-2009	2	自然	イリジウム錯体触媒を用 いる環境調和型有機合 成反応の開発	○武内亮 小野寺玄	2010	報告論集	イリジウム錯体触媒を用 いる環境調和型有機合 成反応の開発
2008-2009	2	特別	戦争記憶の検証と平和 概念の再構築	○平田雅博 松尾清文・佐藤泉・北村文昭・ 宋連玉・杉浦勢之・新倉修 (09) (客員研究員) 君塚仁彦	2010	市販本	戦争記憶の継承 一語りなおす現場から 一
2008-2009	2	特別	科学技術の発展と心的 機能から探る安全と危 険のメカニズムに関する 総合研究	○重野純 福岡伸一 (客員研究員) 柳原敏夫	2010	市販本	安全と危険のメカニズ ム
2008-2010	3	課題別	拡大ヨーロッパと東ア ジアの地域再編一地域 統合・安全保障・社会 政策の比較研究	○羽場久美子 山本吉宣・袴田茂樹・押村高・高 木誠一郎・納家正嗣・岩田伸人・ 手塚和彰・菊池努 (~09.12.1)・ (客員研究員)・山影進・森井裕 一・柴宜弘・清水聡 (09.8.1~)・ 吉野良子 (09.8.1~)	2011	市販本	国際政治から考える東 アジア共同体
					2011	市販本	Regional Integration and Institutionalization Comparing Asia and Europe
2008-2011	4	課題別	社会情報学のための先 端情報テクノロジーに基 づく知の創成と共有環 境の構築	○増永良文 稲積宏誠・伊藤一成・宮川裕之・ 清水康司・飯島泰裕・福田亘孝 (09・10・11)・宮治裕 (09・10・ 11)	2012	報告論集	社会情報学のための先 端情報テクノロジーに基 づく知の創成と共有環 境の構築
2009-2010	2	人文	18世紀~19世紀にお ける文書行政の発展に 関する比較研究	○小名康之 安村直己・岩田みゆき・小林和 幸・(客員研究員) 黒沢文貴	2011	市販本	近世・近代における文 書行政 一その比較的研究一
2009-2010	2	社会	日本・中国・ロシアの 企業組織意思決定の国 際比較 実験経営学による実証 的アプローチ	○堀内正博 岩井千明・大島正嗣・森田充	2011	報告書	日本・中国・ロシアの 企業組織意思決定の国 際比較 一実験経営学 による実証的アプロ ーチ一
2009-2010	2	自然	自然言語処理技術に基 づく論理的文章作成能 力育成支援	○稲積宏誠 竹内純人・(客員研究員) 又平恵 美子・益井岳樹・竹田晃子・高梨 美穂	2013	報告論集	自然言語処理技術に基 づく論理的文章作成能 力育成支援
2010-2011	2	社会	東アジア資源開発にお ける日本の役割と環境 保全型 FTA 形成の課題	○岩田伸人 カール・レンツ (客員研究員) 櫻井雅夫 (特別研究員) 松岡克武 (11)	2012	市販本	日本・モンゴル EPA の 研究 一鉱物資源大国モン ゴルの現状と課題一
2010-2011	2	社会	中小企業の企業連携 一組織的・産業的・地 域的連携一研究	○森川信男 中野勉・須田敏子・三村優美子 (10.6.1~) (客員研究員) 加藤篤志・佐久間 一浩・樋口和彦 (11.12.1~)	2012	市販本	中小企業の企業連携一 中小企業組合における 農商工連携と地域活 性化一

研究年度	期間 (年)	研究部	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
2010-2011	2	自然	大変形を伴った剛体運動を行う機械システムの姿勢制御系の構築	○〈10〉菅原佳城 (10) ○〈11〉小林信之 原謙介・(客員研究員) 菅原佳城 (11)	2012	報告論集	大変形を伴った剛体運動を行う機械システムの姿勢制御系の構築
2010-2012	3	課題別	文化資源マネジメント論に資する都市農村交流の研究	○黒石いずみ 鈴木博之・荻宿俊文・矢野晋吾・ (客員研究員) 沼野夏生・岡島正明 (11・12)・板谷慎 (11)	2014	市販本	東北の震災復興と今和次郎 ものづくり・くらしづくりの知恵
2010-2013	4	キリスト	キリスト教大学の学問体系論の研究	○西谷幸介 大森秀子・茂牧人・東方敬信 (10・11)・伊藤悟 (10・11)・塩谷直也 (11・12・13)・高砂民宣 (12・13)・(客員研究員) 清水正・佐藤貴史・濱崎雅孝・東方敬信 (12・13)・深井智朗 (10・11) 小柳敦史 (12.7.1~)	2014	市販本	21世紀の信と知のために キリスト教大学の学問論
2011-2012	2	人文	エスニシティとナショナリズム—近代国家形成の比較史的考察—	○渡辺節夫 藤原良章・佐伯眞一・青木敦・山田央子・伊達直之・阿部崇・安村直己	2013	市販本	代国家の形成とエスニシティ 比較史的研究
2011-2012	2	社会	情動・共感および社会的知性の脳科学的実験 経済学研究	○中込正樹 馬場弓子・水上英貴・井出英人 (11)・石井信之 (11)・浅野裕俊 (11) 堀健夫 (12)・平澤典夫 (12.10.1~) ・(客員研究員) 田中久弥・井出英人 (12)・石井信之 (12)・浅野裕俊 (12)	2013	報告書	情動・共感および社会的知性の脳科学的実験 経済学研究
2011-2013	3	課題別	人権教育の手法に関する多国間分析と青山モデルの構築	○大石泰彦 申恵丰・伊藤敬也・楊林凱・安藤泰子 (11・12)・高佐智美 (12・13)・五十嵐宙 (13.10.1~)・(客員研究員) 藤田早苗・野中章弘・別府三奈子・坂上香 (12・13)・森本麻衣子 (13.10.1~)	2014	市販本	ヒューマン・ライツ教育 一人権問題を「可視化」 する大学の授業—
2012-2013	2	社会	企業戦略と経営機能別戦略との影響関係の分析	○須田敏子 宮副謙司・澤田直之・(客員研究員) 山内麻理 (13)・内海里香 (13)	2014	市販本	「日本型」戦略の変化 経営戦略と人事戦略の 補完性から探る
2012-2013	2	社会	財務報告の利用者から見た国際財務報告基準の意義と課題	○橋本尚 八田進二・北川哲雄・多賀谷充・小西範幸・市野初芳・町田祥弘・尹志煌・(客員研究員) 佐藤淑子	2014	市販本	利用者指向の国際財務報告
2012-2013	2	自然	宇宙線の起源をさぐる理論・観測研究	○山崎了 馬場彩・井上剛志 (~14.2.28) (客員研究員) 柴田徹	2014	報告論集	宇宙線の起源をさぐる 理論・観測研究
2012-2013	2	自然	海洋生物の医薬品等への活用とその知的資産マネジメント	○木村純二 田代朋子・菊池純一・根岸隆之 (11)・澤野恵梨香 (12)・山崎正稔 (12.10.1~)・(客員研究員) 松本芳嗣・後藤康之・三條場千寿・内山真伸 (12.10.1~)	2014	報告論集	海洋生物の医薬品等への活用とその知的資産 マネジメント
2012-2014	3	キリスト	3.11以降の世界と聖書—言葉の回復をめぐる	○福嶋裕子 大宮謙・(客員研究員) 左近豊	2015	市販本	3.11以降の世界と聖書 言葉の回復をめぐる
2013-2014	2	人文	現代詩・演劇と戦争・紛争・災害—癒しの倫理と表現の探求	○伊達直之 外岡尚美・佐藤亨・堀真理子	2015	市販本	戦争・詩的想像力・倫理 —アイルランド内戦、 核戦争、北アイルランド紛争、イラク戦争
2013-2014	2	社会	国際刑事法の形成と日本法を受容・発信についての基礎研究	○新倉修 安藤泰子・高佐智美・宮崎万壽夫・Coop Stephanie (14) (客員研究員) 竹村仁美・Coop Stephanie (13)	2015	報告論集	国際刑事法の形成と日本法を受容・発信についての基礎研究
2013-2014	2	社会	ラテンアメリカにおける地域統合・地域主義の新たな展開	○幸地茂 菊池努・岩田伸人・安村直己 (13)・(客員研究員) Philippe De Lombaerde・José Briceño Ruiz	2016	報告論集	ラテンアメリカにおける 地域統合・地域主義の 新たな展開

研究年度	期間 (年)	研究部	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
2013-2014	2	自然	機能性分子骨格ジア リールポリインの電子 励起状態	○鈴木正 武内亮・磯崎輔	2015	報告論集	機能性分子骨格ジア リールポリインの電子 励起状態
2013-2014	2	自然	数学系講義を補完する 自習システムの構築	○寺尾敦 矢野公一・伏屋広隆・高村正志	2015	報告論集	数学系講義を補完する 自習システムの構築
2013-2015	3	課題別	青山キャンパス防災時 空間情報システムの開 発研究	○岡部篤行 日吉久礎・杉浦勢之	2016	報告書	履修登録データを利用 した時限ごとの帰宅困 難者算出と建物内避難 危険個所推定シミュ レーションのマニユ アル
2014-2015	2	人文	英日語の「周辺部」と その機能に関する総合 的対照研究	○小野寺典子 澤田淳・Joseph Dias (客員研究員) Elizabeth C. Traugott・東泉裕子	2016	市販本	発話のはじめと終わり 語用論的調整のなされ る場所
2014-2015	2	人文	“近世”とは何か —世界史的考察—	○〈14〉青木敦 ○〈15〉武内信一 狩野良規・佐伯眞一・大屋多詠 子・岩田みゆき・秋山伸子 (客員研究員) 渡辺節夫 (15)	2016	市販本	世界史のなかの近世
2014-2015	2	自然	原子を用いた新量子技 術創成のための基礎研 究	○前田はるか 高峰愛子 (14)・北野健太 (15) (客員研究員) 水谷由宏	2016	報告論集	原子を用いた新量子技 術創成のための基礎研 究
2014-2015	2	自然	英語化授業における日 本語注釈つき学習教材 の半自動生成と、当該 教材を用いた学習促進 の研究	○鷺見和彦 戸辺義人・佐久田博司・ Guillaume Lopez・David Reedy	2016	報告論集	英語化授業における日 本語注釈つき学習教材 の半自動生成と、当該 教材を用いた学習促進 の研究
2014-2016	3	課題別	タイ人日本語学習者の 学びを支援する—書く 能力・話す能力向上へ 向けたICT活用と日本 語教育のコラボレー ション—	○稲積宏誠 宮治裕・寺尾敦・東るみ子・森田 武史・勝谷紀子 (15~)・(客員研 究員) 大野博之・Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI (~ 15.9.1)・萩原孝恵・池谷清美	2017	報告論集	タイ人日本語学習者の 学びを支援する—書く 能力・話す能力向上へ 向けたICT活用と日本 語教育のコラボレー ション—
2014-2016	3	課題別	自校史研究と教育実践 モデルの開発—青山学 院史研究—	○杉浦勢之 長谷川信・梅津順一・杉谷祐美 子・シユール・土戸・ポール・小林 和幸・佐々木竜太 (14)・(客員研 究員) 酒井豊・伊藤真利子・浅田 厚志・佐々木竜太 (15・16)	2017	報告論集	自校史研究と教育実践 モデルの開発—青山学 院史研究—
2015-2016	2	自然	大学生の健康増進のた めのヘルステスト開発 の試み	○安井年文 井上直子・遠藤俊典・宮崎純一・ 加藤彰浩・有川星女・田村達也・ 片岡悠妃 (客員研究員) 吉田政幸・北村哲	2017	報告論集	大学生の健康増進のた めのヘルステスト開発 の試み

研究プロジェクト一覧・年度順（1989年度～2002年度）

注1 ○はプロジェクト代表・〈 〉内は年度

注2 在職期間は研究期間年度中であるが、単年の場合は氏名の後に在職年度・年度途中は日付を（ ）内に記載

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1989-1990	2	人文	外国文化の輸入と言語	○松浪有 秋元実治・篠原進・武藤元昭・酒井豊・植田祐次・片桐一男・戸部松実（89）・尾形こづえ（90）	1991	研究叢書	外国文化の輸入と言語
1989	1	理工学	機能性炭素化合物に関する研究	○松本修 鯨島達也・星敏彦・光延旺洋・犬塚直夫・魚住清彦	1991	研究叢書	機能性炭素化合物に関する研究
1989-1990	2	理工学	高温超伝導体の研究	○秋光純 國岡昭夫・池田正幸・松本修・藤木英夫・中田時夫・澤博・内田孝幸・北村則久（～90.4.7退任（逝去））・永田勇二郎（89）	1991	研究叢書	高温超伝導体の研究
1989-1990	2	理工学	生産管理用知識ベースシステムの構築に関する研究	○田部勉 辻正重・平野順三・坂元克博・古谷野英一・黒田充・阿部俊一・安瀬美知子	1991	研究叢書	生産管理用知識ベースシステムの構築に関する研究
1989-1990	2	理工学	画像解析にかかわるデジタル信号処理とその応用	○隆雅久 豊田吉顕・馬渡鎮夫・二宮理憲（90）・矢頭攸介（90）・岡田昌志（90）・竹本幹男（90）・富山健（90）・小川和雄（90）・中村厚子（90）・鈴木祥加（90）（特別研究員）矢野文彦（89）（客員研究員）矢野文彦（90）	1991	研究叢書	画像解析にかかわるデジタル信号処理とその応用
1989-1990	2	理工学	生体機能をモジュールしたロボットの開発	○井出英人 柏木浩光・富山健・林洋一	1991	研究叢書	生体機能をモジュールしたロボットの開発
1989-1990	2	キリスト	信仰（キリスト教）と科学技術	○廣瀬久允 高橋道雄 （客員研究員）小畑耕郎	1991	研究叢書	信仰（キリスト教）と科学技術
1989-1991	3	人文	中世ヨーロッパの総合研究	○〈89・91〉西澤文昭（89・91） ○〈90〉鳥居正文（89・90） 岡三郎・大曾根良衛・今野國雄（89）・小佐井伸二（90・91）・支倉壽子（90.6.1～91.6.30）	1992	研究叢書	中世ヨーロッパの総合研究
1989-1991	3	経済	経済成長と経済政策	○〈89・90〉石畑良太郎 ○〈91〉三和良一 原豊・石井信之・小林襄治・大谷登土雄・高橋俊治・米澤義衛	1992	研究叢書	経済成長と経済政策
1989-1991	3	法学	協同組合制度の総合的研究	○和座一清 菊地元一・神長勲・関英昭・山崎敏彦	1992	研究叢書	協同組合法の研究
1989-1991	3	法学	各法領域における戦後改革	○佐々木高雄 高窪貞人・佐藤和男・梶善夫・江泉芳信・清水英夫（89・90）・本田尊正（89・90） （特別研究員）大石泰彦（91）	1992	研究叢書	各法領域における戦後改革
1989-1991	3	経営	国際環境の変動と企業の対応行動	○小林保彦 林伸二・橘川武郎・鈴木安昭・大矢知浩司（89）	1992	研究叢書	国際環境の変動と企業の対応行動
1989-1991	3	経営	わが国会計制度の成立にインパクトを与えた外国会計思考	○小林健吾 岡下敏・万代勝信・稲垣富士男・杉山学・東海幹男・斎藤真哉	1992	研究叢書	わが国会計制度の成立にインパクトを与えた外国会計思考
					1993	市販本	日本会計制度成立史

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1989-1991	3	国政経	米ソ関係の総合的研究	○(89) 猪木正道 (89) ○(90・91) 永井陽之助 入江通雅・木村明生・阪中友久・ 土山實男・伊藤憲一・山本満 (91)・吉田靖彦 (89)・袴田茂樹 (89・91.10.1~) (客員研究員) 吉田靖彦 (90・91) (顧問) 猪木正道 (90・91)	1992	研究叢書	米ソ関係の総合的研究
					1992	市販本	秩序と混沌
1989-1991	3	国政経	契約の概念と形態に関する国際比較	○(89・90) 速水佑次郎 ○(91) 港徹雄 深町正信・本名信行・丸山孫郎・ 太田浩・井出静・McIlroy, R.・ 櫻井雅夫・斎藤鎮男 (89)・ 萬勲 (89.10.1~) (客員研究員) 大塚啓二郎 (91) (顧問) 斎藤鎮男 (90・91)	1992	研究叢書	(第1分冊) 取引と契約の国際比較 (第2分冊) Issues in The Concepts and Forms of Contracts (第3分冊) The Economics of Contract Choice
					1992	市販本	取引と契約の国際比較
					1992	市販本	The Economics of Contract Choice
1989-1991	3	キリスト	メソジスト教会の歴史資料収集	○Krummel, J. 気賀健生・井田昌之 (90.10.1~) (客員研究員) 清水正	1992	研究叢書	メソジスト教会の歴史資料収集
1989-1991	3	キリスト	キリスト教生命倫理研究	○(89・90) 東方敬信 ○(91) 三輪修三 石原博子・棚村政行 (89・90)・ 茂牧人 (90.5.1~)	1992	研究叢書	キリスト教生命倫理研究
					1992	市販本	キリスト教と生命倫理
1990-1991	2	人文	死生観の比較文化論的研究	○小原信 堀内秀晃・永藤武・石崎晴己・ 加茂雄三・谷清・丸山千秋	1992	研究叢書	死生観の比較文化論的研究
1990-1991	2	経済	都市機能と経済政策の研究	○松下正弘 中込正樹・大住圭介・平澤典男・ 中澤進一・熊谷彰矩 (特別研究員) 山下隆之	1992	研究叢書	都市機能と経済政策
1990-1991	2	経営	国際化時代における国内経営基盤再構築に関する企業研究	○石川信男 大島國雄・坂井正廣・寺東寛治・ 徳重宏一郎・林勲	1992	研究叢書	国際化時代における国内経営基盤再構築に関する企業研究
1990-1991	2	理工学	動的 AI とそれに基づくインテリジェントロボットシステム	○富山健 原田実	1992	研究叢書	動的 AI とそれに基づくインテリジェントロボットシステム
1990-1991	2	理工学	遺伝子操作と化学合成による生理活性タンパク質の構造機能相関の解明	○鮫島達也 伊藤尚・梶裕之・津吹聡	1992	研究叢書	遺伝子操作と化学合成による生理活性タンパク質の構造機能相関の解明
1990-1991	2	理工学	(90) 常温核融合に関する基礎的研究 (91) 重水素-固体系核反応に関する基礎的研究	○(90.5.31) 松本修 ○(90.6.1~) 木村幹 宇山晴夫・中村弘 (91)	1992	研究叢書	重水素-固体系核反応に関する基礎的研究
1990-1991	2	理工学	耐環境性極限電子材料の開発に関する基礎的研究	○犬塚直夫 太田恵造・國岡昭夫・中田時夫・ 内田孝幸・今井靖子 (90)・永田 勇二郎 (91)	1992	研究叢書	耐環境性極限電子材料の開発に関する基礎的研究
1990-1991	2	理工学	居眠防止システムの基礎的研究	○二宮理憲 井出英人・矢頭佑介 (91) (客員研究員) 船田真理子 (91)	1992	研究叢書	居眠防止システムの基礎的研究
1991-1992	2	人文	外国文化の定着過程と言語	○片桐一男 秋元実治・片山宏行・酒井豊・ 植田祐次・尾形こづえ	1993	研究叢書	外国文化の定着過程と言語
1991-1992	2	経済	各国における財政制度・財政政策の実態調査と国際比較	○深澤實 牛丸聡・堀場勇夫・日向寺純雄 (特別研究員) 白井邦彦 (92)	1993	研究叢書	各国における財政制度・財政政策の実態調査と国際比較
1991-1992	2	国政経	日米経済関係の経済学的・経営学的研究	○高森寛 小菊喜一郎・本田重美・仙波憲一・ 堀内正博	1993	研究叢書	日米経済関係の経済学的・経営学的研究

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1991-1992	2	理工学	強相関電子系の理論的研究	○金徳洲 池田正幸・塩谷百合	1993	研究叢書	強相関電子系の理論的研究
1991-1992	2	理工学	機能性物質の合成と物性に関する研究	○西尾泉 魚住清彦・稲吉倫子・星敏彦・小野勲・光延旺洋 (91)	1993	研究叢書	機能性物質の合成と物性に関する研究
1991-1992	2	理工学	デジタルデータの構造依存型雑音処理	○竹本幹男 隆雅久・岡田昌志・豊田吉顕・矢頭攸介・小川和雄 (客員研究員) 矢野文彦	1993	研究叢書	デジタルデータの構造依存型雑音処理
1991-1992	2	理工学	ソーラーカーの開発研究	○寺崎和郎 國岡昭夫・村尾麟一・中田時夫・武士俣貞助・田中秀明・松浦健児・岩井實 (91)・林洋一 (91.6.1～)・(客員研究員) 岩井實 (92)	1993	研究叢書	ソーラーカーの開発研究
1991-1992	2	理工学	メカトロニクス高性能化のための要素技術	○林洋一 井出英人・柏木浩光・持丸正義	1993	研究叢書	メカトロニクス高性能化のための要素技術
1991-1992	2	理工学	戦略的生産管理システム	○辻正重 坂元克博・坂本泰祥・田部勉・大石進・河内谷幸子・阿部俊一・安瀬美知子・古谷野英一 (91)	1993	研究叢書	戦略的生産管理システム
1991-1992	2	キリスト	キリスト教教育研究	○伊藤久男 大曾根良衛・野里房代・東方敬信・(客員研究員) 佐藤敏夫・松川成夫 (92)	1993	研究叢書	キリスト教教育研究
1992-1993	2	人文	「中世」と「近代」	○岡三郎 渡辺節夫・西澤文昭・原恵・青山誠子・西村哲一	1994	研究叢書	「中世」と「近代」
1992-1993	2	人文	日本と西洋における死生観の研究	○小原信 堀内秀晃・沼田哲・永藤武・石崎晴己・谷清	1994	研究叢書	日本と西洋における死生観の研究
1992-1993	2	経済	東京経済圏の課題と対策	○西岡久雄 高橋重雄・北見俊郎 (92) (客員研究員) 北見俊郎 (93)	1994	研究叢書	東京経済圏の課題と対策
1992-1993	2	法学	住民としての外国人の法的地位に関する諸問題	○神長勲 芹澤齊・江泉芳信・久保茂樹・棚村政行 (92.8.1～)	1994	研究叢書	住民としての外国人の法的地位に関する諸問題
1992-1993	2	経営	グローバル時代の日本市場に関する総合的研究	○小林保彦 田中正郎・堀越比呂志・仁科貞文・橋川武郎 (～93.9.30)・(客員研究員) 橋川武郎 (93.10.1～)	1994	研究叢書	グローバル時代の日本市場に関する総合的研究
1992-1993	2	国政経	中国の将来像に関する研究	○石川滋 中川敬一郎・奥崎裕司・井出静・森本三男・港徹雄 (客員研究員) 杜進	1994	研究叢書	中国の将来像に関する研究
1992-1993	2	国政経	東欧および旧ソ連の市場化 —組織、個人、社会心理的側面	○丸山孫郎 佐藤和男・寺谷弘壬・袴田茂樹・相澤啓一・茂牧人・加藤勝康 (92)	1994	研究叢書	東欧・中欧及び旧ソ連の市場化 —組織、個人、社会心理的側面
1992-1993	2	理工学	総合研究所研究用ネットワークのあり方に関する研究	○富山健 井田昌之・坂元克博・有田浩三・武藤元昭・近藤泰弘・堀内正博・廣島敏史 (92.10.1～)・美添泰人 (93.6.1～)・鈴木宏昭 (93.6.1～)・大金一二 (93.6.1～)	1994	研究叢書	総合研究所研究用ネットワークのあり方
1992-1993	2	理工学	核酸の配列特異的開裂反応の研究	○光延旺洋 鮫島達也・藤澤敬一・梶裕之 (～92.12.31)・櫻井宣彦 (93.5.1～) (客員研究員) 梶裕之 (93)	1994	研究叢書	核酸の配列特異的開裂反応の研究
1992-1993	2	理工学	新しい高温超伝導体の設計と探索	○永田勇二郎 秋光純・富本晃吉・内田孝幸 (～92.9.30)	1994	研究叢書	新しい高温超伝導体の設計と探索
1992-1993	2	理工学	時系列処理の応用に関する研究	○橋本修 井出英人・柏木浩光・二宮理恵・持丸正義	1994	研究叢書	時系列処理の応用に関する研究

研究年度	期間 (年)	セン ター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1992-1993	2	理工学	多階層的システムの構造解析とその応用	○豊田吉顯 富山健・石津昌平 (客員研究員) 矢野文彦 (93)	1994	研究叢書	多階層的システムの構造解析とその応用
1992-1993	2	理工学	ファジー構造及びフィードフォアーループ構造を含むヘルスダイナミックスモデルの構築とその適用—血液事業を例として—	○藤澤敬一 長谷川輝紀・馬渡鎮夫	1995	研究叢書	ファジー構造及びフィードフォアーループ構造を含むヘルスダイナミックスモデルの構築とその適用—血液事業を例として—
1992-1993	2	キリスト	来日メソジスト宣教師等の資料収集	○Krummel, J. 気賀健生・井田昌之・佐藤元洋・橋本清一 (92)・矢部義之 (92.11.1~)	1994	研究叢書	来日メソジスト宣教師等の資料収集
1992-1993	2	キリスト	アメリカ・プロテスタント思想史	○山岡健 古賀節子・小玉晃一・東方敬信・ (客員研究員) 清水正・鈴木有郷	1994	研究叢書	アメリカ・プロテスタント思想史
1993-1994	2	人文	外国文化の変容過程と言語	○片桐一男 秋元実治・片山宏行・酒井豊 植田祐次・尾形こづえ	1995	研究叢書	外国文化の変容過程と言語
1993-1994	2	経営	経営学教育論の研究—理論の実践化をめざして	○坂井正廣 林勲・玉木欽也	1995	研究叢書	経営学教育論の研究—理論の実践化をめざして
1993-1994	2	国政経	国際コミュニケーションにおける言語と文化	○中田清一 本名信行・橋本光郎・田辺正美・ Reniker, S.・狩野良規・Evanoff, R. (客員研究員) 竹下裕子 (94)	1995	研究叢書	国際コミュニケーションにおける言語と文化
1993-1994	2	理工学	ハイブリッド光弾性応力解析システムの開発	○隆雅久 馬渡鎮夫・富山健・西尾泉・小川 和雄 (特別研究員) 鈴木祥加 (93)	1995	研究叢書	ハイブリッド光弾性応力解析システムの開発
1993-1994	2	理工学	ソーラーエネルギーの有効利用	○井出英人 國岡昭夫・中田時夫・寺崎和郎・ 松浦健児・村尾麟一・田中秀明・ 武士侯貞助・林洋一 (94)	1995	研究叢書	ソーラーエネルギーの有効利用
1993-1994	2	理工学	協調的意思決定支援システム	○石津昌平 辻正重・坂元克博・阿部俊一・安 瀬美知子・田部勉・大石進・坂本 泰祥 (93.5.1~)・伊藤好美 (93)	1995	研究叢書	協調的意思決定支援システム
1993-1994	2	理工学	ネットワーク上のCAIプラットフォームの開発と評価	○原田実 佐久田博司・鈴木讓 (93)	1995	研究叢書	ネットワーク上のCAIプラットフォームの開発と評価
1993-1994	2	キリスト	キリスト教教育思想 (キリスト教学校におけるキリスト教教育の理念)	○伊藤久男 大曾根良衛・野里房代・東方敬 信・(客員研究員) 佐藤敏夫・ 松川成夫	1995	市販本	現代におけるキリスト教教育の展望
1994-1995	2	人文	東西死生観の現代的展開	○小原信 堀内秀晃・沼田哲・永藤武・石崎 晴己・谷清	1996	研究叢書	東西死生観の現代的展開
1994-1995	2	人文	「物語」の構造と変換の研究	○岡三郎 渡辺節夫・植田祐次・土方洋一・ 篠原進	1996	研究叢書	「物語」の構造と変換の研究
1994-1995	2	経済	各国の財政理論と財政制度の国際比較研究	○ (94) 深澤實 (94) ○ (95) 日向寺純雄 牛丸聡・堀場勇夫 (客員研究員) 深澤實 (95)	1996	研究叢書	各国の財政理論と財政制度の国際比較研究
1994-1995	2	法学	アメリカ政治社会の諸相	○大石紘一郎 石井光・田中愛治 (客員研究員) 神長百合子	1996	市販本	現代アメリカのこころと社会
1994-1995	2	経営	ヨーロッパの市場統合と企業活動	○岡下敏 田中正郎・相澤啓一・万代勝信・ 齋藤真哉 (95)	1996	研究叢書	ヨーロッパの市場統合と企業活動

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1994-1995	2	国政経	ファイナンスの国際化と研究・教育	○諸井勝之助 高森寛・堀内正博・中里宗敬・ 蜂谷豊彦(95) (客員研究員) 齊藤進	1996	研究叢書	ファイナンスの国際化と研究・教育
1994-1995	2	理工学	固体の磁性と電子相関	○池田正幸 金徳洲・秋光純・永田勇二郎・ 藤木英夫・塩谷百合・杉原稔 (客員研究員) Peter Entel (96.1.1 ~3.31)	1996	研究叢書	固体の磁性と電子相関
1994-1995	2	理工学	ソフトウェアの生産性向上と開発環境整備のための基礎的研究	○稲積宏誠 田部勉・原田実・岩堀信子 (客員研究員) 西島利尚・曾根和 美・樋山淳雄(94.6.1~)	1995	研究叢書	ソフトウェアの生産性向上と開発環境整備のための基礎的研究
1994-1995	2	理工学	老化のメカニズムの解明を指向したタンパク質・核酸の研究	○伊藤尚 鮫島達也・光延旺洋・西尾泉・ 佐藤高則(95)	1995	研究叢書	老化のメカニズムの解明を指向したタンパク質・核酸の研究
1994-1995	2	キリスト	日本における初期メソジスト各教派の史料蒐集	○Krummel, J. 気賀健生・深町正信 (客員研究員) 塩入隆	1996	研究叢書	日本における初期メソジスト各教派の史料蒐集
					1996	市販本	来日メソジスト宣教師事典
1994-1995	2	キリスト	現代キリスト教文化・倫理研究	○山岡健 古賀節子・関田寛雄・鈴木有郷・ 小玉晃一・東方敬信 (客員研究員) 清水正	1996	市販本	キリスト教と現代
1994-1995	2	学際	二一世紀における自由・権利・正義	○佐藤節子 鮫島達也・石井信之・関英昭 (客員研究員) 梅津順一・坂本百 大(95)・高本美也子(95)	1996	研究叢書	二一世紀における自由・権利・正義
1994-1996	3	法学	国際結婚の今日的問題の法学的検討	○神長勲 江泉芳信・McAlinn, G.・棚村政 行(94・95)・Lenz, K.(95・ 96)・藤川久昭(96)	1997	研究叢書	国際結婚の今日的問題の法学的検討
1995-1996	2	人文	東西の言語・文化の比較研究	○尾形こづえ 小名康之・片桐一男・片山宏行・ 阪本浩・佐久間康夫	1997	研究叢書	東西の言語・文化の比較研究
1995-1996	2	経済	金融史の国際比較	○小林襄治 杉浦勢之・中川辰洋・平出尚道	1997	研究叢書	金融史の国際比較
1995-1996	2	経済	統計調査の精度	○美添泰人 本郷茂・後藤文廣・(特別研究員) 荒木万寿夫(96)・細倉昌子(96)	1997	研究叢書	統計調査の精度
1995-1996	2	法学	コーポレート・ガバナンスの総合的研究	○吉田直 土橋正・(客員研究員) 済藤友明・ 高橋衛	1997	研究叢書	コーポレート・ガバナンスの総合的研究
1995-1996	2	経営	経営学教育における教材の開発	○林勲 坂井正廣・玉木欽也・長谷川信	1997	研究叢書	経営学教育における教材の開発
1995-1996	2	経営	情報ネットワーク社会における企業経営の諸問題	○小林保彦 徳重宏一郎・森本三男・森川信男	1997	研究叢書	情報ネットワーク社会における企業経営の諸問題
1995-1996	2	国政経	冷戦後の国際政治学キーワードの再検討	○土山實男 永井陽之助・袴田茂樹・(客員研 究員) 山本吉宣・山影進	1997	研究叢書	冷戦後の国際政治学キーワードの再検討
1995-1996	2	国政経	歴史的転換期を歩むアジアの位相と展望	○天見慧 井出静・押村高・(客員研究員) 杜進・秋山紀子(95.6.30)・ 戸崎肇(95.7.1~)	1997	市販本	アジアの21世紀 歴史的転換の位相
1995-1996	2	理工学	ソーラーカーの高性能化	○林洋一 井出英人・三栖功・田中秀明・ 松浦健児	1997	研究叢書	ソーラーカーの高性能化
1995-1996	2	理工学	表現関数構成型応力・ひずみ解析法の開発	○馬渡渡夫 隆雅久・小川和雄	1997	研究叢書	表現関数構成型応力・ひずみ解析法の開発

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1995-1996	2	学際	ヒューマニズム理念の再構築と共生	○伊藤定良 芹沢齊・茂牧人・松尾精文・丸山千秋・三嶋輝夫・酒田利夫(95) (客員研究員) 酒田利夫(96)	1997	研究叢書	ヒューマニズム理念の再構築と共生
1995-1996	2	学際	変容する英語圏の社会と文化	○芦原貞雄 九頭見一士・佐川和茂・堀眞理子・須々木斐子(～95.4.30)	1997	研究叢書	変容する英語圏の社会と文化
1996-1997	2	人文	現代文明における生と死	○小原信 酒井豊・石崎晴己・永藤武・谷清・堀内秀晃	1998	研究叢書	現代文明における生と死
1996-1997	2	人文	ドラマツルギーの研究	○廣木一人 中條忍・佐伯真一・外岡尚美 (客員研究員) 根岸徹郎	1998	研究叢書	ドラマツルギーの研究
1996-1997	2	人文	比較物語研究	○岡三郎 渡辺節夫・植田祐次・土方洋一・篠原進・大上正美	1998	研究叢書	比較物語研究
1996-1997	2	経済	経済理論とその政策的含意に関する研究	○大住栄治 平澤典男・中込正樹・堀場勇夫・矢吹初	1998	研究叢書	経済理論とその政策的含意に関する研究
1996-1997	2	経営	公益事業政策の動向と料金	○東海幹夫 井口典夫・(客員研究員) 浅沼美忠・野村宗訓(96.6.1～)	1998	市販本	公益事業の評価と展望
1996-1997	2	国政経	アメリカの対外関係と経済政策	○本田重美 小菊喜一郎・栢山克司・仙波憲一	1998	市販本	現代アメリカの経済政策と外交政策
1996-1997	2	国政経	国際コミュニケーションの研究課題と教育方法	○本名信行 中田清一・田辺正美・狩野良規・Evanoff, R.・村田真一・Rueda de Leon, H. C.・林世景・Reniker, S(～96.12.18)	1998	市販本	21世紀の国際コミュニケーション 一言語・文化論の研究課題と教育方法
1996-1997 (97継続見送り)	2	理工学	グローバリゼーションと戦略的意思決定支援システム構築	○田部勉 原田実・地主創			
1996-1997	1	理工学	数理物理とその周辺	○小池和彦 井上政久・中村弘	1998	研究叢書	数理物理とその周辺
1996-1997	2	理工学	非線形問題の数値シミュレーションと実験による研究	○林光一 岡田昌志・斎田暢三・佐久田博司・西尾泉・三栖功・立野昌義(96)・(客員研究員) 立野昌義(97.6.1～)	1998	研究叢書	非線形問題の数値シミュレーションと実験による研究
1996-1997	2	キリスト	ジョン・ウェズレーと18世紀欧米キリスト教教育思想	○大曾根良衛 池田稔・大森秀子・東方敬信 深町正信・(客員研究員) 三浦正	1998	市販本	ジョン・ウェズレーと教育
1996-1997	2	キリスト	キリスト教と人権・平和問題研究	○山岡健 鈴木有郷・関田寛雄(96)・支倉壽子(97)・(客員研究員) 深津容伸・関田寛雄(97)・水野誠(97.12.28退任(逝去))	1998	研究叢書	キリスト教と人権・平和問題研究
1996-1997	2	学際	創造的問題解決法に関する学際的研究	○辻正重 小林三郎・本郷茂・Lenz, K.・堀内正博・高森寛・坂元克博・高梨公孝・安瀬美知子・鈴木宏昭	1998	研究叢書	創造的問題解決法に関する学際的研究
1996-1997	2	学際	ヨーロッパ統合の理念と現実	○村田良平 原豊・中川辰洋・押村高・申恵多・(客員研究員) 飯野由美子(96)・大島美穂(96)	1998	市販本	EU—21世紀の政治課題
1997-1998	2	人文	言語・文化の東と西	○小名康之 片桐一男・佐久間康夫・阪本浩・尾形こづえ・片山宏行	1999	研究叢書	言語・文化の東と西
1997-1998	2	法学	ニュージーランドにおける人権と法	○平松紘 McAlinn, G.・申恵孝・住吉雅美・石井光(97)・藤川久昭(98)	1999	市販本	ニュージーランド先住民マオリの人権と文化

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1997-1998	2	経営	ネットワークコンピューティング時代における経営組織に関する総合的研究	○田中正郎 三村優美子・玉木欽也・蜂谷豊彦(97)・(客員研究員) 森政俊(98)・蜂谷豊彦(98)	1999	研究叢書	ネットワークコンピューティング時代における経営組織に関する総合的研究
1997-1998	2	経営	上場会社沿革データベース作成と財務分析法の開発	○大矢知浩司 薄井彰・(客員研究員) 金川一夫・黒川哲夫	1999	研究叢書	企業情報の長期時系列に関する研究—上場廃止会社沿革データベース作成と財務分析法の開発—
1997-1998	2	理工学	コンピュータ入門教育環境と方法論の開発	○矢頭攸介 大島永生・石津昌平・稲積宏誠・高梨公孝・安瀬美知子・竹田賢・地主創・藤木英夫・(客員研究員) 倉次秀夫(98)・植田晶子(98)・小倉裕司(98.12.1~)	1999	研究叢書	コンピュータ入門教育環境と方法論
1997-1998	2	理工学	テンソル場CT法開発のための基礎研究	○隆雅久 魚住清彦・馬渡鎮夫・小川和雄(97)・米山聡(98.5.1~)・(客員研究員) Berezna, S. (98)・小川和雄(98.5.1~)	1999	研究叢書	テンソル場CT法開発のための基礎研究
1997-1999	3	特別	日本の福祉の現状と課題—国際比較の視点も含む—	○(97・98・99.4.1~99.12.31) 石畑良太郎 ○(00.1.1~00.3.31) 小原信 神長勲・富山健・平田雅博・藤川久昭・太田浩・杉山学(97)・稲生勁吾(97)・本間照光(98・99)・斎藤真哉(98・99) (客員研究員) 三輪修三・稲生勁吾(98・99)・宮治裕(99.5.1~)	2001	市販本	日本の福祉 福祉の多様化と介護 保険制度
1998-1999	2	人文	演劇とその成立要素	○廣木一人 中條忍・堀真理子・村田真一 (客員研究員) 細井尚子	2000	研究叢書	演劇とその成立要素
1998-1999	2	人文	古典に見る「文学と政治」の諸相	○大上正美 三嶋輝夫・渡辺節夫・植田祐次・土方洋一・篠原進	2000	研究叢書	古典に見る「文学と政治」の諸相
1998-1999	2	経済	情報処理技術の展開と経済行動分析への応用	○美添泰人 本郷茂・後藤文廣 (客員研究員) 荒木万寿夫(98)	2000	研究叢書	情報処理技術の展開と 経済行動分析への応用
1998-1999	2	理工学	高機能性を有する無機薄膜材料	○重里有三 永田勇二郎・澤邊厚仁・小川武史・松本修	2000	研究叢書	高機能性を有する無機 薄膜材料
1998-1999	2	理工学	レーザーを用いた高度な計測技術の開発とその応用に関する研究	○岡田昌志 竹本幹男・西尾泉・林光一・三栖功	2000	研究叢書	レーザーを用いた高度 な計測技術の開発とその 応用に関する研究
1998-1999	2	キリスト	キリスト教と社会科学	○東方敬信 榎本弘・小沼進一・大谷登士雄・芹田敏夫・大島力 (客員研究員) 梅津順一	2000	市販本	聖書と共同体の倫理
1998-1999	2	キリスト	19世紀欧米におけるキリスト教教育に関する研究	○池田稔 大森秀子・北本正章・茂牧人・(客員研究員) 上野亮・三浦正(99.7.31)	2000	研究叢書	19世紀欧米におけるキ リスト教教育に関する 研究
1998-1999	2	学際	ニューヨーク都市文化研究：周縁なるものの豊かさ	○金田由紀子 田中啓史・後藤雄介・佐川和茂・堀真理子・須田昌弥 (客員研究員) 椿清文	2000	市販本	ニューヨーク 周縁が織りなす都市文 化
1999-2000	2	人文	イギリス・アメリカ・アイルランドにおける文学と自然	○青山富士夫 倉本護・佐藤紀子・高田賢一・橋本清一・佐藤亨	2001	市販本	自然とヴィジョン —イギリス・アメリ カ・アイルランド の文学—
1999-2000	2	経済	財政と経済構造の研究：理論的・実証的検討	○大住栄治 平澤典男・中込正樹・堀場勇夫・矢吹初・日向寺純雄(99) (客員研究員) 日向寺純雄(00)	2001	研究叢書	財政と経済構造の研究： 理論的・実証的検討

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
1999-2000	2	経済	ファイナンスとファン ダメンタルズ	○米澤義衛 杉浦勢之・芹田敏夫・深川由起 子・清水克俊 (客員研究員) 原田泰	2001	研究叢書	ファイナンスとファン ダメンタルズ
1999-2000	2	法学	日米政治意識比較	○大石紘一郎 河野勝・(客員研究員) 田中愛治	2001	研究叢書	日米政治意識の研究
1999-2000	2	法学	非営利法人法の研究	○関英昭 山崎敏彦・中村芳昭	2002	研究叢書	非営利法人法の研究
1999-2000	2	経営	鉄道産業の総合経営力 評価	○井口典夫 加藤篤史・荒木万寿夫・須田昌 弥・(客員研究員) 高嶋裕一・ 太田雅文	2001	研究叢書	鉄道産業の総合経営力 評価
1999-2000	2	国政経	国際貢献としての日本 「環境外交」の現状とそ の評価	○太田宏 渡邊昭夫・菊池努・河野勝	2001	研究叢書	日本の国際貢献として の「環境外交」の現状 とその可能性
1999-2000	2	国政経	知的活動と国際マネジ メント	○石川昭 高森寛・堀内正博・仙波憲一・ 吉田耕作・中里宗敬・清水康司・ 内田達也・内山義英	2001	市販本	知識管理活動とイン ターナショナルマネジ メント
1999-2000	2	国政経	ヨーロッパ的価値観の 変容 —21世紀のヨーロッパ 学をめざして—	○支倉寿子 押村高・茂牧人・村田真一・ 狩野良規 (客員研究員) 押場靖志	2002	市販本	21世紀ヨーロッパ学 —伝統的イメージを 検証する—
1999-2000	2	理工学	マルチボディシステムの ダイナミクスと制御 に関する研究	○小林信之 富山健・二宮理恵・古田貴之・ 渡邊昌宏 (客員研究員) 山口巧 (99)	2001	研究叢書	マルチボディシステムの ダイナミクスと制御 に関する研究
1999-2000	2	学際	少数民族—辺境からの 創造	○九頭見一士 夏目博明・寺谷弘壬・宋連玉	2001	市販本	辺境のマイノリティ —少数グループの生 き方—
2000-2001	2	人文	言語理解の理論と実際	○谷美奈子 Smith, D.・Robinson, P.・吉波弘・ Strong, G.・野邊修一	2003	市販本	Language and Comprehension: Perspectives from Linguistics and Language Education
2000-2001	2	人文	怪異の表象・言語と文 化交流	○平野隆文 片桐一男・小名康之・荒木善太	2003	報告論集	怪異の表象・言語と文 化交流
2000-2001	2	経済	資本主義はどこに行く か Quo Vadis, Capitalism	○三和良一 田野慶子・平出尚道・(客員研究 員) 加藤榮一・馬場宏二	2003	市販本	資本主義はどこに行く のか —二十世紀資本主義の 終焉—
2000-2001	2	経営	現代の企業組織の変革 に関する会計学的考察	○高橋邦丸 東海幹夫・尹志煌 (01) (客員研究員) 田中隆雄	2003	市販本	グループ経営の管理会 計
2000-2001	2	理工学	生理活性物質の検索と 合成	○木村純二 小野勲・光延旺洋・稲積宏誠	2003	報告論集	生理活性物質の検索と 合成
2000-2001	2	理工学	大規模PCクラスター並 列計算機におけるノー ド間通信の最適化問題	○久保健 古川信夫・羽田野直道・山崎雄一 郎・中田寿穂 (00)・戸塚圭介 (01.5.1~) (客員研究員) 中田寿穂 (01)	2004	報告論集	大規模PCクラスター並 列計算機におけるノー ド間通信の最適化問題
2000-2001	2	キリスト	民族主義とキリスト教	○大庭昭博 鈴木有郷・佐川和茂 (01) (客員研究員) 牧野信次・朴憲郁	2002	市販本	民族主義とキリスト教
2000-2001	2	学際	サプライチェーン・マ ネジメントの学際的研 究	○黒田充 天坂格郎・三村優美子・坂元克 博・竹田賢 (客員研究員) 西岡靖之	2003	市販本	サプライチェーンマ ネジメント 企業間連携の理論と 実際
2000-2001	2	学際	メディアの異文化間影 響力	○Jungheim, N. Browne, C.・Whittle, J.・Menish, M.・(客員研究員) Culligan, B.	2003	報告論集	メディアの異文化間影 響力

研究年度	期間 (年)	センター	プロジェクト名	所員・客員研究員等	研究成果刊行		
					刊行年度	形態	書名・タイトル
2001-2002	2	人文	古典詩歌の方法	○大上正美 露崎俊和・伊達直之・渡辺節夫・ 土方洋一・高田祐彦	2003	報告論集	古典詩歌の方法
2001-2002	2	人文	コーパスに基づく言語 研究	○秋元實治 近藤泰弘・遠藤光暁・尾形こづえ	2003	市販本	コーパスに基づく言語 研究 文法化を中心に
2001-2002	2	経済	経済統計と情報技術の 新展開	○本郷茂 後藤文廣・美添泰人	2004	報告論集	経済統計と情報技術の 新展開
2001-2002	2	経済	GISを用いた大学教育 支援システムの構築と 実証的検討	○高橋重雄 井上孝・三條和博・須田昌弥 (02)・(客員研究員) 戸田真夏・ 吉崎光哉・高橋朋一 (02)	2004	市販本	事例で学ぶGISと地域 分析 ArcGISを用いて
2001-2002	2	法学	オーストラリアの司法 システムと法学教育	○平松紘 江泉芳信・久保茂樹 (客員研究員) 金城秀樹 (01)	2004	市販本	現代オーストラリア法
2001-2002	2	経営	ビジネスコミュニケーション (現代企業にお けるビジネスコミュニ ケーションの諸問題)	○森川信男 秋山武清 (客員研究員) 樋口和彦	2005	市販本	ビジネスコミュニケー ションの基礎理論
2001-2002	2	国政経	インターネットによる 大学院国際共同授業の 研究開発	○本名信行 田辺正美・井田昌之 (客員研究員) 瀬尾昌也	2004	市販本	国際言語としての英語 —世界へ展開する大 学院 e ラーニング コースの研究開発—
2001-2002	2	理工学	機能性硬質表面処理材 料の創製と評価	○小川武史・澤邊厚仁・重里有三	2003	報告論集	機能性硬質表面処理材 料の創製と評価
2001-2002	2	キリスト	キリスト教と人間形成	○〈01〉東方敬信 ○〈02〉大森秀子 池田稔・大島力・酒井豊・深町正 信	2004	市販本	キリスト教と人間形成 ウェスレー生誕三〇 〇年記念
2001-2002	2	学際	WTO の制度および管轄 領域に関わる分野横断 的研究	○岩田伸人 谷原修身・松下正弘・飯田敬輔・ (客員研究員) 高瀬保・会田弘継 (02.7.1~)	2003	報告論集	WTO の制度および管轄 領域に関わる分野横断 的研究

特別研究研究プロジェクト一覧

研究年度	期間 (年)	プロジェクト名		所員・客員研究員 等 (のべ人数)	研究成果刊行			
		略称	正式名称		刊行年度	形態	書名・タイトル	
2000-2004	4	AML II	新教育方法の開発及び経営・技術戦略IT研究 (Aoyama Media Lab II)	兼担所員 22名 客員研究員 56名	2001	研究叢書	第1巻第1号～第1巻第5号	
						2002	研究叢書	第2巻第1号～第2巻第5号
							市販本	eラーニング実践法—サイバーアライアンスの世界—
						2003	研究叢書	第3巻第1号～第3巻第5号
						2004	研究叢書	第4巻第1号～第4巻第2号
市販本	サイバーマニュファクチャリング—eラーニングで学ぶモノづくり—							
2002-2010	9	A ² EN	Aoyama & Asia e-Learning Network	兼担所員 9名 客員研究員 21名 特別研究員 8名				
2005-2007	3	AML III	Aoyama Media Lab III	兼担所員 7名 客員研究員 32名 特別研究員 6名				
2005-2010	6	eLPCO	eラーニング人材育成研究センター	兼担所員 24名 客員研究員 74名 特別研究員 5名	2005	研究叢書	第1巻第1号～第1巻第3号	
						成果報告書	平成17年度青山学院大学現代的教育ニーズ取組支援プログラム「e-Learning 専門家の人材育成」成果報告書	
					2006	研究叢書	第2巻第1号～第2巻第4号	
						成果報告書	平成18年度青山学院大学現代的教育ニーズ取組支援プログラム「e-Learning 専門家の人材育成」成果報告書	
						市販本	eラーニング専門家のためのインストラクショナルデザイン	
					2007	研究叢書	第3巻第1号～第3巻第2号	
						成果報告書	平成19年度(最終年度)現代的教育ニーズ取組支援プログラム「e-Learning 専門家の人材育成」—世界に通用する専門家育成プログラムの開発と普及—	
						市販本	ブレンディッドラーニングの戦略 eラーニングを活用した人材育成	
					2008	評価活動報告書	「e-Learning 専門家育成プログラム」評価活動報告書—持続可能なeラーニングの鍵	
						研究叢書	第4巻第1号～第4巻第3号	
						市販本	BSCによる戦略志向のITマネジメント	
					2009	研究叢書	第5巻第1号～第5巻第4号	
						評価活動報告書	「e-Learning 専門家育成プログラム」評価活動報告書	
市販本	これ一冊でわかるeラーニング専門家の基本 ICT・ID・著作権から資格取得準備まで							
市販本	国際言語環境の認識と対応—企業・行政における国際言語管理の考え方—							

特別研究プロジェクト所員一覧

	AML II			A ² EN	AML III		eLPCO		
兼担所員	玉木 欽也	齋藤 裕	本名 信之	佐伯 胖	玉木 欽也	佐伯 胖	田辺 正美	松田 岳士	
	田中 正郎	高梨 公孝	田辺 正美	玉木 欽也	田中 正郎	木村 松雄	鈴木 宏明	矢吹 太朗	
	江泉 芳信	小酒井 正和	井田 昌之	本名 信行	堀内 正博	小張 敬之	小田 光宏	猿橋 順子	
	辻 正重	北本 正章	木村 松雄	小酒井 正和	本名 信之	田中 正郎	野末 俊比古	吉田 猛	
	佐久田 博司	戒野 敏浩		木村 松雄	木村 松雄	玉木 欽也	Evanoff, R. J.	山口 博明	
	水澤 純一	Lenz, K. F.		小張 敬之	小張 敬之	富山 健	林 伸二	伊藤 一成	
	酒井 豊	堀内 正博		佐久田 博司	佐久田 博司	佐久田 博司	山本 寛		
	小田 光宏	小張 敬之		田中 正郎		本名 信行	山下 勝		
	岸波 宗洋	野末 俊比古		猿橋 順子		堀内 正博	佐藤 正勝		
客員研究員	久田 美由紀	八木 英一郎	安西 弥生	原 潔	宮川 裕之	原 潔	松村 伸一	齋藤 裕	横田 政郎
	John. R. Williams	山田 義照	渡辺 節子	高橋 勝彦	浦野 義頼	小酒井 正和	望月 俊男	原 潔	細川 健
	Kevin Amaratunga	古田 貴之	梅田 富雄	古谷 千里	鈴木 克明	後藤 正幸	於勢 泰子	小酒井 正和	大沼 博靖
	古賀 節子	杉野 周	進藤 昭夫	MYRESHKA	堀内 淑子	竹下 裕子	松田 美和	後藤 正幸	齋藤 智恵
	河路 武志	齋藤 早苗	堀内 淑子	齋藤 裕	木村 みどり	松田 岳士	加藤 浩	山田 政寛	米岡 ジュリ
	小林 史典	笹島 茂	南部 泰堂	鈴木 克明	安西 弥生	坪根 康介	宮川 裕之	鈴木 克明	荒川 雅裕
	松島 桂樹	寺内 一		浦野 義頼	渡辺 節子	石井 信明	堀内 淑子	浦野 義頼	橋本 論
	永澤 茂	Celia P. Rivera		森川 克己	南部 泰堂		木村 みどり	竹内 俊彦	柴田 亜矢子
	小倉 裕司	谷守 正行		宮川 裕之	松村 伸一		安西 弥生	合田 美子	齋藤 長行
	鈴木 俊夫	山崎 敦子		木村 みどり	小林 史典		渡辺 節子	松本 明子	三輪 眞木子
	椎木 武	木村 みどり		安西 弥生	永澤 茂		南部 泰堂	生越 秀子	長島(湯山) 万里子
	福田 好朗	伊藤 和憲		松村 伸一	鈴木 俊夫		坪根 康介	苅宿 俊文	坂井 まさみ
	渡辺 一衛	宮川 裕之		竹下 裕子	Jerome J. Conner		竹下 裕子	中原 淳	松田 順
	原 潔	後藤 正幸		松本 明子	渡辺 一衛		八木 英一郎	大鳥 純	前嶋 玲子
	高橋 勝彦	西澤 紘一		横田 政郎	高橋 道哉		梅田 富雄	古川 智子	阿川 敏恵
	吉江 修	MYRESHKA		齋藤 智恵	高橋 勝彦		越島 一郎	長沼 将一	李 瑩玉
	松井 正之	高橋 信弘		米岡 ジュリ	森川 克己		吉江 修	志村 光太郎	具 承桓
	山田 哲男	松村 伸一		下山 幸成	松井 正之		高橋 勝彦	木暮 祐一	萱 忠義
	青木 章道	瀬尾 昌也		木暮 祐一	山田 哲男		森川 克己	下山 幸成	山根 信二
	藤川 博巳	宮治 裕		古山 みゆき	吉江 修		進藤 昭夫	権藤 俊彦	孫 晶
	古谷 千里	越島 一郎		柴田 亜矢子	八木 英一郎		高橋 道哉	古山 みゆき	沢田 憲一
	工藤 正敏	瀬尾 明志			越島 一郎		石井 信明	半田 純子	相川 良子
	西尾 雅年	鈴木 克明			進藤 昭夫		山田 哲男	佐々木 典夫	長田 尚子
	伊東 俊彦	森川 克己			梅田 富雄		渡辺 一衛	新目 真紀	笥 宗徳
	高橋 道哉	福原 康司			齋藤 裕		松井 正之	野尻 寛	
	特別研究員				大網 千鶴	権藤 俊彦		三宅 ひろ子	
					権藤 俊彦	橋本 論		原田 満里子	
					松田 岳士	原田 満里子		井上 直子	
					高橋 徹	三宅 ひろ子		岡部 大祐	
					須原 綾乃	猿橋 順子		小川 悦史	
					須藤 賢太郎	笥 宗徳			

<総合文化研究部門 課題別研究部研究成果>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

形態	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	成熟都市のクリエイティブなまちづくり (協働型まちづくりの実践的研究—渋谷・青山地区における大学と地域との連携実験—)	○ 井口 典夫 遠藤 新 山下 勝 太田 雅文 鈴木 勉 早川 淳	第1章 成熟都市への道標 第2章 協働型まちづくりと分化創造の実験 第3章 成熟時代の都市デザイン 第4章 コンテンツとしての映画産業 第5章 都市基盤の計画と事業化方策 第6章 歩行者本位のまちづくり 第7章 美しい景観を実現するための制度設計	2007.3.20	宣伝会議	2,000円
市販本	青山文化研究—その歴史とクリエイティブな魅力— (青山文化の総合的研究)	○ 井口 典夫 杉浦 勢之 東 伸一 和多利 浩一 ※ 大房 潤一	序章 青山文化の定義 第一章 青山の源泉 第二章 文化産業の集積 第三章 文化施設の立地 第四章 クリエイティブ青山 第五章 青山からの発信 終章 青山文化の全体像 資料 青山文化年表	2011.3.25	宣伝会議	2,100円
市販本	国際政治から考える東アジア共同体 (拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究—)	山本 吉宣 ○ 羽場 久美子 押村 高 ※ 中村 民雄 山影 進 ※ 李 鍾元 ※ 天兒 慧 柴 宣弘 高木 誠一郎 森井 裕一 袴田 茂樹 岩田 伸人 ※ 宮島 喬 吉野 良子 清水 聡	第I部 国際政治と東アジア共同体 第1章 地域統合の理論化と問題点 第2章 アジアの地域統合とアメリカの関与—「東アジア共同体」から TPP の諸問題— 第3章 地域統合と主権ディスコース—EU 事例と東アジアへの適用— 第4章 東アジア共同体と憲章草案 第II部 東アジア共同体をどうつくるか 第5章 ASEAN に見るいびつな鏡に映したヨーロッパ統合 第6章 東アジア共同体と朝鮮半島 第7章 アジア太平洋国際関係と地域統合の新機軸 第8章 バルカンにおける地域史の試み—東アジアとの比較— 第III部 安全保障と東アジア 第9章 アジアの地域安全保障制度化と中国—1990年代~2007年— 第10章 EU と東アジアの安全保障におけるアメリカの役割 第11章 「東アジア共同体」への疑問—ロシア研究者の視点から— 第IV部 FTA・人の移動と東アジア 第12章 日本とモンゴルの経済連携協定—鉱物資源エネルギーをめぐる交渉— 第13章 地域統合と移動するマイノリティ—ヨーロッパとの比較における東アジア— 第V部 欧州からのまなざしと東アジア統合 第14章 地域統合とアイデンティティ 第15章 戦後ドイツと地域統合—西ヨーロッパと東アジアの国際政治—	2012.3.31	ミネルヴァ書房	3,360円
		※ G. John Ikenberry ※ Fraser Cameron Yoshinobu Yamamoto	Preface Part I 1. East Asia and Liberal International Order: Hegemony, Balance, and Consent in the Shaping of East Asian Regional Order 2. The European Integration Model: What Relevance for Asia? 3. Regional integration, regional institutions, and national policies: A Theoretical and Empirical Examination of Regional Integration in Asia and Europe			

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市 販 本	Regional Integration and Institutionalization comparing Asia and Europe (拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究—)	○ Kumiko Haba Seiichiro Takagi ※ Kenichiro Hirano Susumu Yamakage ※ Tadashi Kimiya ※ Antoni Z. Kamiński ※ Ken Endo Yuichi Morii Nobuhiro Shiba Shigeki Hakamada Takashi Oshimura Nobuto Iwata Satoshi Shimizu Ryoko Yoshino	4. Asian Regional Integration and Institutionalization comparing the EU and Asia: Reconciliation and the Alliance with the US Part II 5. China and the Shanghai Cooperation Organization, 1996 to 2007 6. East Asian Community as Seen from Regional Communications 7. ASEAN and Asia-Pacific Security 8. South Korea-Japan Relations in the “East Asian Community” 9. Polish Presidency of the Council of the EU and the European International Politics 10. Is Comparative Regionalism Possible?: The Security-Economy-Normative Nexus in Europe and East Asia 11. Germany’s Changing Role in the European Union 12. Various Kinds of the Regional Cooperation in the Balkans: In Hopes of “New Balakans” Part IV 13. Вопросы безопасности в Северо-Восточной Азии и отношения доверия между Японией и Россией 14. The Japan-U. S. Alliance and a Rising China: A Quest for New Realism 15. Free Trade Agreement and Economic Partnership Agreement in Mongolia in the Global Age 16. Integration of Postwar Germany Experience of Western Europe and Integration of East Asia 17. The Construction of Identity in the European Integration and the USA as the Other: 1969-1973	2012.3	Shoukandoh	2,100円
報 告 論 集	社会情報学のための先端情報テクノロジーに基づく知の創成と共有環境の構築 (社会情報学のための先端情報テクノロジーに基づく知の創成と共有環境の構築)	○ 増永 良文 飯島 泰裕 伊藤 一成 稲積 宏誠 清水 康司 福田 亘孝 宮川 裕之 宮治 裕	はじめに 1. 増永良文、莊司慶行、伊藤一成: 集合知形成手法を用いた学際的学問分野の知識体系記述の試み—その問題提示と分析—、第1回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2009) (第7回日本データベース学会年次大会) 会議録、C3-5 (2010年3月). 2. Yoshifumi Masunaga, Yoshiyuki Shoji, Kazunari Ito: Collective Intelligence Approach for Formulating a BOK of Social Informatics, an Interdisciplinary Field of Study, Proceedings of the 5th International Symposium on Wikis (WikiSym 2009), Article No.34, Orlando, FL, USA (October 2009). 3. 莊司慶行、伊藤一成、増永良文: 集合知的手法による学際的学問分野の知識体系構築システムのプロトタイプング、第2回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2010) (第8回日本データベース学会年次大会) 会議録、C1-5 (2010年3月). 4. 増永良文: “ソーシャルコンピューティングとは何か—ソーシャルコンピューティングはコンピュータサイエンスの一分野に過ぎないのか—、” 日本データベース学会論文誌、Vol. 9, No. 1, pp.1-6 (2010年6月). 5. Yoshifumi Masunaga, Yoshiyuki Shoji, Kazunari Ito: A Wiki-based Collective Intelligence Approach to Formulate a Body of Knowledge (BOK) for a New Discipline, Proceedings of the 6th International Symposium on Wikis and Open Collaboration (WikiSym'10), Article No. 11, Gdansk, Poland (July 2010). 6. 増永良文: “ソーシャルコンピューティング序説、” 青山社会情報研究、第2巻 (2010年度刊).	2012.3.31	—	—

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集	社会情報学のための先端情報テクノロジーに基づく知の創成と共有環境の構築 (社会情報学のための先端情報テクノロジーに基づく知の創成と共有環境の構築)	○ 増永 良文 飯島 泰裕 伊藤 一成 稲積 宏誠 清水 康司 福田 亘孝 宮川 裕之 宮治 裕	7. 増永良文、石田博之、伊藤一成、伊藤守、清水康司、荘司慶行、高橋徹、千葉正喜、長田博泰、福田亘孝、正村俊之、矢吹太朗：“集合知アプローチに基づく知の創成支援システム WikiBOK の研究・開発、”第3回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2011) (第9回日本データベース学会年次大会) 会議録、A2-1 (2011年3月). 8. Yoshifumi Masunaga, Masaki Chiba, Nobutaka Fukuda, Hiroyuki Ishida, Kazunari Ito, Mamoru Ito, Toshiyuki Masamura, Hiroyasu Nagata, Yasushi Shimizu, Yoshiyuki Shoji, Toru Takahashi, Taro Yabuki: “Developing WikiBOK: A Wiki-based BOK Formulation-aid System,” Proceedings of the 2011 International Conference on Data Engineering and Internet Technology (DEIT 2011), pp.960-963, Bali, Indonesia (March 2011). 9. 増永良文、石田博之、伊藤一成、伊藤守、清水康司、荘司慶行、高橋徹、千葉正喜、長田博泰、福田亘孝、正村俊之、矢吹太朗：集合知アプローチに基づく知の創成支援システム WikiBOK の研究・開発、日本データベース学会論文誌、Vol.10, No. 1, pp.7-12, 2011年6月. 10. 増永良文、石田博之、伊藤一成、伊藤守、清水康司、荘司慶行、高橋徹、千葉正喜、長田博泰、福田亘孝、正村俊之、森田武史、矢吹太朗：知の創成支援システム WikiBOK における構造化オブジェクトの編集競合解決法、第4回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2012) (第10回日本データベース学会年次大会) 会議録、神戸、2012年3月3日～5日. 11. Yoshifumi Masunaga, Kazunari Ito, Taro Yabuki, Takeshi Morita: Edit Conflict Resolution in WikiBOK: A Wiki-based BOK Formulation-aid System for New Disciplines, Proceedings of the 2012 ASE/IEEE International Conference on Social Computing (SocialCom 2012), pp.210-218, Amsterdam, 2012. 「社会情報学のための先端情報テクノロジーに基づく知の創成と共有環境の構築」プロジェクトに関連した学会発表・研究論文等の公表リスト	2012.3.31	—	—
市販本	東北の震災復興と今和次郎 ものづくり・くらしづくりの知恵 (文化資源マネジメント論に資する都市農村交流の研究)	○ 黒石 いずみ	はじめに I 震災復興の観点から II 先人の努力を掘り起こす 一、地域のくらしからの創造 ものづくりとくらしづくり 二、日常からの創造 住まいと女性の力 あとがき 参考文献	2015.3.30	平凡社	3,000円
市販本	ヒューマン・ライツ教育一人権問題を「可視化」する大学の授業— (人権教育の手法に関する多国間分析と青山モデルの構築)	○ 大石 泰彦 申 恵丰 別府 三奈子 坂上 香 森本 麻衣子 野中 章弘 高佐 智美 楊 林凱 藤田 早苗	はしがき I なぜいま、ヒューマン・ライツ教育なのか II ヒューマン・ライツ教育の実践 —青学と「ヒューマン・ライツコース」の取組み III ヒューマン・ライツ教育の諸課題 IV 諸外国のヒューマン・ライツ教育 資料 あとがき 索引	2015.3.30	有信堂 高文社	2,800円
報告書	履修登録データを利用した時限ごとの帰宅困難者算出と建物内避難危険個所推定シミュレーションのマニュアル (青山キャンパス防災時空間情報システムの開発研究)	○ 岡部 篤行 日吉 久礎 杉浦 勢之	はじめに マニュアル 第1章 履修データと住所データを統合するデータの作成マニュアル 第2章 履修登録データを利用した時限ごとの帰宅困難者算出マニュアル 第3章 建物内避難危険個所推定シミュレーションのマニュアル	2016.12.22	—	—

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告書			謝辞 資料 時限ごとの帰宅困難者算出データ処理 VBA プログラム			

<総合文化研究部門 キリスト教文化研究部研究成果>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	翻訳本 キリスト教のスピリチュアリティ その二千年の歴史 (キリスト教の霊性)	○ 大庭 昭博 大島 力 支倉 壽子 大倉 一郎 野村 祐之 笠原 義久 鈴木 有郷	キリスト教のスピリチュアリティ イエス 初期教会教夫 ケルトとアングロサクソン 聖人と神秘家 東方キリスト教の伝統 ロシアのスピリチュアリティ ヨーロッパ・プロテスタントの伝統 カトリックの聖人と改革者たち アングリカンのスピリチュアリティ アメリカにおけるプロテスタントの伝統 二十世紀のスピリチュアリティ 新しいミレニウムのスピリチュアリティ	2006.4.21	新教出版社	7,350円
市販本	モラル教育の再構築を目指して モラルの危機とキリスト教 (青年期におけるモラル教育の危機と可能性—キリスト教モラル教育の構築へ—)	○ 伊藤 悟 東方 敬信 今井 重孝 三嶋 輝夫 大森 秀子 朴 憲郁 小池 茂子 ※ 関根 清三 ※ 安 料善 ※ ロバート・ジャクソン	はじめに 第一部 公開講演 第二部 現状と課題 第三部 史的・体系的考察 あとがき	2008.3.22	教文館	1,680円
市販本	キリスト教大学の使命と課題—青山学院の原点と21世紀における新たな挑戦— (大学におけるキリスト教教育—その歴史・現状・展望—)	シュー土戸ポール 嶋田 順好 酒井 豊 梅津 順一 ○ 伊藤 悟 大島 力 東方 敬信 河本 洋子	はじめに 第一部 明治期の原点 第一章 日本におけるキリスト教学校の創立と宣教師の役割 第二章 津田仙と学農社農学校 第三章 本田庸一と日本の高等教育の基盤 第四章 福澤諭吉とキリスト教 第二部 現代の大学とキリスト教教育 第一章 キリスト教大学における教養教育 第二章 現代の環境教育とキリスト教 第三章 「真の大学」へのパラダイム転換 第三部 実践と展開 第一章 キリスト教に基づく「全人教育」の可能性 第二章 ソーバー・プログラムの成立と 基本理念 第三章 サービス・ラーニングの理論と実践	2011.3.25	教文館	1,680円
市販本	21世紀の信と知のためにキリスト教大学の学問論 (キリスト教大学の学問体系論の研究)	○ 西谷 幸介 清水 正 小柳 敦史 ※ 中井 章子	まえがき 第一部 神学の学問論／知のあり方 第一章 学問論の文脈における青山学院大学教育方針の意義 第二章 知と超越—理性の真実の復権を目指して 第三章 共同体形成としての学問 第二部 哲学の学問論／知のあり方 第四章 一八〇〇年前後のドイツ大学論・学問体系論	2015.2.28	新教出版社	5,000円

形態	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	21世紀の信と知のために キリスト教大学の学問論 (キリスト教大学の学問体系論の研究)	茂 牧人 東方 敬信 大森 秀子 塩谷 直也 濱崎 雅孝 西谷 幸介	第五章 現象学の学問論 第六章 解釈学の学問論 第三部 社会倫理と学問論/知のあり方 第七章 キリスト教神学と社会科学 第八章 社会的証しのキリスト教倫理(社会起業家の時代に) 第四部 キリスト教大学における教育の諸問題 第九章 日米女子高等教育におけるリベラル・エデュケーション—その発祥と展開 第一〇章 聖書学から見た大学の知—授業評価と知の伝え方 第十一章 大学における道德教育と宗教との関係について 第十二章 宗教としてのキリスト教 あとがき 青山学院大学教育方針	2015.2.28	新教出版社	5,000円
市販本	3.11以降の世界と聖書 言葉の回復をめぐる (3.11以降の世界と聖書— 言葉の回復をめぐる)	○ 福嶋 裕子 大宮 謙 左近 豊 ※ スコット・ハイフマン	まえがき 第1章 記憶と証言 第2章 創造から新しい創造へ ——イエス、審判、そして津波・福島災害 第3章 混沌の記憶と言葉の回復 ——危機を生き抜く信仰者と教会 第4章 嘆きの記憶と言葉の回復 ——哀歌における imprecation について 第5章 絶望の記憶と言葉の回復 ——イエスの湖での奇跡をめぐる 第6章 苦難の記憶と言葉の回復 ——パウロの使途としての苦難とⅡコリント2:14-16aの重要性 第7章 死者の記憶と共同体の回復 ——ヨハネ黙示録の修辭的・歴史的分析 第8章 技術から見る人間の回復 ——プロメテウスの火と技術をめぐる聖書解釈への展望 初出一覧 あとがき	2016.3.25	日本キリスト教団出版局	1,700円

<領域別研究部門 人文科学研究部研究成果>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集	東西都市の歴史的諸相 (都市社会の歴史的 基本構造の分析)	押村 高 小名 康之 ○ 相田 洋 北村 優季 手塚 直樹	ボルドーにおける L. U. A. トゥルニーの都市計画—18世紀フランス地方港湾都市の一断面— ムガル時代の都市と社会 居住空間としての唐都長安 都城における街路と宅地—古代都市変容の一面— 貿易陶磁器(壺・瓶・香炉)から見た中世都市鎌倉	2006.3.31	—	—
市販本	学びあいが生み出す書く力 大学におけるレポートライティング教育の試み (大学における基本アカデミックスキルの育成プログラムの開発)	○ 鈴木 宏昭 小田 光宏 杉谷 祐美子 長田 尚子 ※ 白石 藍子 ※ 小林 至道	1章 レポートライティング教育の意義と課題 2章 レポートにおける問題設定と論証 3章 相互レビューによる論証スキルの獲得 4章 ジグソー法を活用した問題発見の支援 5章 協調学習を通じた気づきと問題設定の深まり 6章 ブログの積極的・継続的利用が促す問題への振り返り 7章 書く力としての文献調査力・文献活用力の育成 8章 総括と今後の課題	2009.3.30	丸善プラネット	2,520円

形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	世界史のなかの帝国と官僚 (帝国官僚と支配 — 興隆と崩壊)	○ 平田 雅博 ※ 割田 聖史 安村 直己 小名 康之 相田 洋 小林 和幸 ※ 黒沢 文貴 伊藤 定良	序 第一章 イギリスの帝国官僚 第二章 十九世紀プロイセンにおける「帝国官僚」 第三章 十八世紀スペイン帝国における地方官僚 第四章 ムガル帝国の官僚 第五章 中華帝国の官僚制 第六章 近代初期の日本官僚制 第七章 帝国日本の軍事官僚 あとがき	2009.3.20	山川出版社	2,940円
市販本	イギリス・ルネサンス期の言語と文化 — 時代精神と自己形成 — (イギリス・ルネッサンス期の言語と文化)	○ 佐藤 紀子 武内 信一 北田 よ志子 永瀬 紘子 佐野 弘子	はじめに 第1章 ジェフリー・チョーサー 第2章 イギリス・ルネサンス期の英語観 第3章 フアン・ルイス・ビベス 第4章 『ファウスト (フォスタス)』劇におけるヒューマニズムの変遷 第5章 イギリス・ルネサンス詩人における自己成型の系譜 あとがき	2010.3.20	英宝	2,730円
市販本	ホロコーストの影を生き て ユダヤ系文学の表象 と継承 (ホロコーストの影を生き て—表象と継承)	○ 佐川 和茂	I 第一章 一九六〇年代アメリカとホロコースト文学 第二章 ソール・ベローとホロコースト文学 第三章 バーナード・マラマッドと ホロコースト文学 第四章 アイザック・バシェヴィス・シンガーとホロコースト文学 II 第五章 闇に光を求めて — イスラエル・ジョシュア・シンガーの『カノフスキー家』 第六章 ホロコースト生存者の覚醒 — エドワード・ルイス・ウォーランドの『質屋』 第七章 記憶とディアスポラ — エリ・ヴィーゼルの『忘却』 III 第八章 アモス・オズ — イスラエルへ向かう旅 第九章 ホロコーストの影を生きて — ヘレン・エプスタインの軌跡	2009.5.15	三交社	2,100円
市販本	国家と言語 前近代の東 アジアと西欧 (国家の歴史的形成と文学 および言語の動態的研究)	北村 優季 ※ 大上 正美 阪本 浩 山内 一芳 土方 洋一 藤原 良章 ○ 渡辺 節夫 西澤 文昭 ※ 大屋 多詠子 狩野 良規	序 論 前近代の言語と国家・王権 第一部 古代の社会・言語 第一章 日本古代の国家と「ことば」 第二章 ふたりの武帝と表現者たち — 古代中国の皇帝権力と文学 第三章 ローマ属州エジプトにおけるラテン語 第二部 中世の社会・言語 第四章 アングロ・サクソンイングランドの翻訳文化 第五章 仮名文の成立とその領域 — 平安朝の表記体をめぐって 第六章 庭中・寄沙汰 第七章 フランス中世国家の法と概念 — 慣習法と学識法 第三部 近世の社会・言語 第八章 十五、十六世紀フランスにおける国家起源論 第九章 日本近代文学における王権 — 一馬琴・京伝読本における南北朝 第十章 三組の恋人たち — ジェイクスピアにおける個人と国家 あとがき	2011.3.20	弘文堂	3,360円

形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	近世・近代における文書行政 —その比較的研究— (18世紀～19世紀における文書行政の発展に関する比較研究)	○ 小名 康之 小笠原 弘幸 安村 直己 岩田 みゆき 小林 和幸 黒沢 文貴	序論 第一章 ムガル時代の文書行政について 第二章 オスマン帝国における官僚制と修史 第三章 スペイン帝国と文書行政 —植民地期メキシコにおける 文書行政ネットワークとその外部— 第四章 江戸時代における文書行政の実態と特質 —幕末期の在地社会を中心に— 第五章 明治期における「共同体」と「公共文書」 —長野県の一事例を通じて— 第六章 日本外務省の文書行政 —占領期までの管理・分類・編纂・保存—	2012.3.30	有志舎	2,940円
市販本	近代国家の形成とエスニシティ比較的研究 (エスニシティとナショナリズム—近代国家形成の比較史的考察—)	山田 央子 佐伯 真一 青木 敦 ○ 渡辺 節夫 阿部 崇 伊達 直之 安村 直己	序論 第1章 日本近代国家創設期における「ネイション」像の相剋 第2章 日本人の「武」の自意識 第3章 「地峡人稠」と「地曠人稀」 —宋朝疆域の土地人口比率のイメージ 第4章 フランス中世における国家とネイションの形成 第5章 フランス現代思想における「国家」批判 —ミシェル・フーコーを中心として 第6章 二〇世紀アイルランド詩に見るエスニシティの意識とその脱歴史化 —詩人W・B・イエイツの独立運動・内乱・文学 第7章 スペイン帝国とネイション形成 —植民地期メキシコ先住民の経験を中心に	2014.3.25	勁草書房	3,500円
市販本	戦争・詩的想像力・倫理 (現代詩・演劇と戦争・紛争・災害—癒しの倫理と表現の探求)	○ 伊達 直之 堀 真理子 佐藤 亨 外岡 尚美	まえがき 一九二〇年代建国期のアベイ劇場 —ロビンソン、オケイシー、イエイツとの戦争の記憶 黙示録的時代を見据えて —第二次世界大戦後のサミュエル・ベケット 北アイルランド紛争とギリシア悲劇 —シェイマス・ヒーニー『トロイの癒し—ソポクレス「ピロクテテス」—変奏』をめぐって 痛みの唯物性について —イラク戦争とアメリカ演劇の<倫理>を問う あとがき	2016.3.30	水声社	3,500円
市販本	発話のはじめと終わり —語用論的調節のなされる場所 (英日語の「周辺部」とその機能に関する総合的対照研究)	Elizabeth Closs Traugott (日本語訳) ※ 柴崎 礼士郎 ○ 小野寺 典子 東泉 裕子 澤田 淳	まえがき 第I部 理論・方法 第1章 周辺部研究の基礎知識 第II部 ケーススタディ 第2章 A constructional exploration into “clausal periphery” and the pragmatic markers that occur there 第2章 (日本語訳) 「節周辺」と同領域に生起する語用論標識の構文的考察 第3章 語用論的調節・文法化・構文化の起きる周辺部 —「こと」の発達を例に 第4章 近代日本語における左右の周辺部表現の発達 —『太陽コーパス』に見る接続助詞「から」の用法を中心に 第5章 日本語の卑罵語の歴史語用論的研究 —「～やがる(あがる)」の発達を中心に	2017.3.16	ひつじ書房	3,800円

形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
		Joseph V. Dias (日本語訳) ※ 岩井 恵利奈	第6章 <i>Sort /kind of</i> at the peripheries Metapragmatic play and complex interactional / textual effects in scripted dialog 第6章 (日本語訳) 周辺部の <i>sort /kind of</i> —台本の対話に見られるメタ語用論的遊びと複雑な相互作用/テキストの効果 あとがき			
市販本	世界史のなかの近世 (“近世”とは何か —世界史的考察—)	○ 青木 敦 武内 信一 狩野 良規 渡辺 節夫 佐伯 真一 大屋 多詠子 岩田 みゆき 秋山 伸子	序章 「近世」と「アーリー・モダン」 第一章 イギリス近代における中世観の変容 —アーサー王伝説受容史を手掛かりとして— 第二章 シェイクスピア劇に見る「近世」 第三章 西欧における中世から近世への移行 —フランス中世後期の貴族層の動向を中心に— 第四章 熊谷・敦盛説話の近世の変容 —父子関係を中心に— 第五章 馬琴の古典再解釈 ——『椿説弓張月』と昔話・神話—— 第六章 近世村社会における文化の大衆化について —西伊豆戸田湊に来る旅芸人を事例として— 第七章 フランス人の見た文楽 編者あとがき	2017.3.31	慶應義塾 大学 出版会	4,500円

<領域別研究部門 社会科学部研究成果>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

形態	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集	エンタープライズ・アーキテクチャとビジネスプロセス革新 (ビジネスプロセスマネジメントに関するプロセスパフォーマンスの視点からの研究)	○ 田中 正郎 堀内 正博	第1章 EAの目的とITガバナンス 第2章 EA論における問題点 第3章 ビジネスプロセス革新の前提条件 第4章 ビジネスプロセスの意味と考え方	2006.3.31	—	—
市販本	階層化する労働と生活 (変化する労働と生活の国際比較 —国際基準・生産システムと競争力・職業訓練教育・セーフティネット—)	○ 本間 照光 白井 邦彦 松尾 孝一 ※ 加藤 光一 石畑良太郎	第1章 労働と生活という視点 第2章 ミニマムの欠如と労働=生活問題 補論 団体生命保険の国際的受容と変容 —保険に映った労働と生活— 第3章 競争戦略と雇用・生活保障システム —企業競争力の視点から— 第4章 職業教育の現状・課題・国際比較 —内部労働市場型から生活連携型へ— 第5章 中国における出稼ぎ労働者の「労働世界」 —「珠江デルタ」の日系・香港系企業の比較— 第6章 社会的排除とホームレス問題の研究動向 —イギリスおよび日本—	2006.10.10	日本経済 評論社	4,800円
市販本	デジタルコンテンツマネジメント (企業経営に関するボン・デジタル情報の利活用に関する研究)	○ 戒野 敏浩	第1章 ICTの動向とコンテンツの時代 第2章 コンテンツの共有とコラボレーション 第3章 メディア・コンテンツ産業 第4章 デジタルコンテンツ・ビジネス 第5章 インターネット上のデジタルコンテンツ資産 第6章 デジタルコンテンツに関する法制度・行政	2007.3.30	同文館出版	3,500円

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
			第7章 コンテンツ制作のファイナンスと会計 第8章 デジタルコンテンツに関連する技術 第9章 コンテンツ関連の人材育成 第10章 企業コンテンツの感性マネジメント			
報告論集	投資家の相互作用と証券市場のダイナミクス—マルチエージェント・シミュレーションによる複雑系アプローチ— (投資家の相互作用と証券市場のダイナミクス—マルチエージェント・シミュレーションによる複雑系アプローチ—)	○ 中里 宗敬 清水 康司 大島 正嗣 高森 寛	0. はじめに 1. 市場のマイクロ・ダイナミクスとCAPM均衡の安定性 2. 投資家の相互作用と市場のダイナミクス 3. 投資家の相互作用と市場のダイナミクス：マルチエージェントシミュレーション 4. Web サービスを用いた市場マルチエージェント・シミュレーション 5. 市場シミュレータ・マニュアル	2007.3.31	—	—
報告論集	コーポレート・ガバナンス改革と企業業績・企業価値の関連性に関する国際比較 (コーポレート・ガバナンス改革と企業業績・企業価値の関連性に関する国際比較)	○ 田中 隆雄 島田 淳二 劉 慕和 高橋 邦丸	第1章 コーポレート・ガバナンスと企業価値—買収防御に関連して— 第2章 委員会設置会社とその評価 第3章 コーポレート・ガバナンスとアーニングス・マネジメント 第4章 M&A戦略と企業価値	2008.3.31	—	—
市販本	地域間格差と地方交付税の歪み 地方財政の外れ値の探索 (CD-ROM付) (情報工学による政府活動の検証)	○ 矢吹 初 高橋 朋一 吉岡 祐次	はしがき 第I部 総論 第1章 格差の是正と財政調整 第2章 財政調整の捉え方 第3章 交付税の歪み 第4章 外れ値の発生原因 第5章 外れ値の経年変化と地域分布 第II部 各論 第6章 財政調整の論点 第7章 ジニ係数の論点 第8章 遺伝的アルゴリズム概論 第9章 論理的な外れ値の導出 第10章 継続性グラフとフラクタル次元	2008.3.30	勁草書房	2,940円
市販本	IT革命と企業組織 (IT革命と企業経営—ITビジネス・IT企業・IT産業)	○ 森川 信男 芹田 敏夫 内田 達也 佐久間一浩 山口 秀文 ※ 樋口 和彦	第1章 ICT化とバーチャル化社会 第2章 ITによる企業組織構造の変革 第3章 企業実践からみたIT革命の影響 第4章 株式市場からみたIT革命の影響 第5章 中小企業政策と中小企業情報化施策の変遷 第6章 中小企業組合のIT活用領域とIT活用内容 第7章 中小企業組合における情報化の実態 (I) 第8章 中小企業組合における情報化の実態 (II)	2009.3.30	学文社	2,625円
市販本	モンゴルプロジェクト 日本・モンゴルのFTA (自由貿易協定) 形成の意義と課題 (日本・モンゴルのFTA (自由貿易協定) 結成に係わる研究)	○ 岩田 伸人 加藤 篤史 櫻井 雅夫 Karl-Friedrich Lenz 高瀬 保	第1章 モンゴルの資源開発に関わる一考察 第2章 モンゴルのEPA形成、その動向と展望 第3章 日・モ環境保全型FTA形成の可能性と課題 第4章 モンゴル経済の成長可能性 第5章 モンゴルと環境保全型FTA 第6章 モンゴルの直接投資 第7章 EUの『2008年GSP規則』の翻訳 おわりに	2010.3.31	日本地域社会研究所	3,675円
研究成果報告書	日本・中国・ロシアの企業組織意思決定の国際比較—実験経営学による実証的アプローチ— (日本・中国・ロシアの企業組織意思決定の国際比較実験経営学による実証的アプローチ)	○ 堀内 正博 岩井 千明 大島 正嗣 森田 充	o 研究成果報告論集刊行にあたって • PART I 論文編 o An Experiment on Group Decision-Making using a Business Game: An International Comparison of MBA Students in Japan, China, and Russia o A Study on Collectivism and Group Decision-Making: An International Comparison of Japan, China, and Russia using a Gaming Simulation	2012.3.31	—	—

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
研究成果報告書	日本・中国・ロシアの企業組織意思決定の国際比較 —実験経営学による実証的アプローチ— (日本・中国・ロシアの企業組織意思決定の国際比較実験経営学による実証的アプローチ)	○ 堀内 正博 岩井 千明 大島 正嗣 森田 充	<ul style="list-style-type: none"> ○ ビジネスゲーム "MBABEST21" の開発と実践 ○ 組織内集団的意思決定と集団主義・権力格差・男らしさ—日本・中国・香港・ロシアの国際比較— • PART II Research Conference 編 ○ An Experiment on Group Decision-Making using a Business Game — International Comparison of MBA Students in Japan, China and Russia ○ Group Decision Making in Russia ○ Study on Group Decision-Making of Top Management Team in China ○ A Study on Collectivism and Group Decision-Making—An International Comparison of Japan, China, and Russia using a Gaming Simulation • PART III 資料編 ○ 活動記録 ○ ゲームマニュアル ○ ゲーム説明プレゼンテーション資料 ○ 2009年度 質問票 ○ 2010年度 質問票 ○ ABSEL 参加記 ○ 写真編 	2012.3.31	—	—
市販本	市町村合併のシナジー効果 改革時代の自治体「意識」の分析 (市町村合併の経済分析)	○ 矢吹 初 内山 義英 高橋 朋一 吉岡 祐次 深江 敬志	第1章 平成の大合併 第2章 合併シナジーの源泉 第3章 合併アンケートのテキストマイニング 第4章 質的クラスタリング 第5章 経済的クラスタリング 第6章 クラスターの費用削減効果 第7章 リスクと地方自治体 付録A テキストマイニング補論 付録B 多変量解析補論 付録C クラスタ分析 関連図書	2012.3.30	日本評論社	2,940円
市販本	日本・モンゴル EPA の研究 —鉱物資源大国モンゴルの現状と課題— (東アジア資源開発における日本の役割と環境保全型 FTA 形成の課題)	○ 岩田 伸人 松岡 克武 櫻井 雅夫 カール・レンツ	まえがき 第1章 鉱物資源エネルギーからみた日本・モンゴル EPA の現状と課題 第2章 モンゴルの経済発展に伴う諸問題と解決の方向性 第3章 資源大国モンゴルのナショナリズムと投資規制法 —日本・モンゴル EPA の視点から— 第4章 鉱業分野における政府＝外国投資家間紛争 —ドルノド・ウラン事件を中心に— 第5章 EU・日本・モンゴルによる「砂漠共同体」設立の提案	2013.3.31	文眞堂	2,940円
市販本	中小企業の企業連携 中小企業組合における農工商連携と地域活性化 (中小企業の企業連携—組織的・産業的・地域的・連携—研究)	○ 森川 信男 三村 優美子 須田 敏子 中野 勉 樋口 和彦 加藤 篤志 佐久間 一浩 ※ 小畷 正稔	第一部 中小企業の企業連携 第1章 企業連携の本質と類型 第2章 中小企業の連携プロセスと連携支援のあり方 第3章 日本のオーディオ産業と中小企業の連携 —ネットワークと文化の視点から— 第4章 地域商業再生と地域マーケティング 第5章 組織フィールド内の人事制度変化の分析 —技術・制度環境と企業間関係— 第二部 中小企業組合における農工商連携 第6章 中小企業組合における農工商連携の現状と課題 第7章 「農工商連携実施組合実態調査」の単純集計分析結果	2013.3.30	学文社	5,040円

形態	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	中小企業の企業連携 中小企業組合における農 商工連携と地域活性化 (中小企業の企業連携—組 織的・産業的・地域的・ 連携—研究)	○ 森川 信男 三村 優美子 須田 敏子 中野 勉 樋口 和彦 加藤 篤志 佐久間 一浩 ※ 小寫 正稔	第8章 「農商工連携実施組合実態調査」の相関 分析結果 第三部 中小企業組合における地域活性化 第9章 地域活性化に貢献する中小企業組合の 現状と課題 第10章 中小企業組合におけるソーシャルビジ ネスの現状と課題 第11章 中小企業の知的資産経営と中小企業 ネットワーク 第四部 中小企業組合事例：農商工連携と地域活 性化 第12章 農商工連携に取り組む中小企業組合事 例 第13章 地域活性化に貢献する中小企業組合事 例 索引 図表目次一覧表	2013.3.30	学文社	5,040円
研究成果報告書	情動・共感および社会的 知性の脳科学的実験経済 学研究 (情動・共感および社会的 知性の脳科学的実験経済 学研究)	○ 中込 正樹 井出 英人 石井 信之 平澤 典男 馬場 弓子 水上 英貴 堀 健夫 田中 久弥 浅野 裕俊 ※ 藤森 美和 ※ 牧 和生	はじめに 第1章 全体の要約 第2章 The Generation of Perception Gap and Ambiguity Aversion Under Uncertainty: An EEG Experimental Study of Contingent Negative Variation (CNV) 第3章 Ambiguity as Feelings: A Neuroeconomic Study Using the Functional Near-Infrared Spectroscopy (fNIRS) 第4章 A Neuroeconomic Study on Nudge and Social Cognition Using an Electroencephalography 第5章 A Neuroeconomic Study of Herd Behavior in Financial Laboratory Markets Using the Brain Decoding Experiment Method 第6章 A Brain Decoding Analysis of Framing Effects on the Change in Characteristics of Herd Behavior in Laboratory Financial Markets 第7章 Our Choice of Cognitive Frames is Affected by the Frames of Others in Financial Economy: A Neuroeconomic Study Using Brain Decoding Methods 第8章 Our Free Choice of Reason-based Actions Can Produce Herd Behavior in Financial Markets: A Neuroeconomic Study Using Brain Decoding Methods 第9章 人は本当にアダム・スミスのな道德判断を行うの か？ ：ニューロエコノミクス実験による検証	2014.3.31	—	—
市販本	「日本型」戦略の変化 経営戦略と人事戦略の補 完性から探る (企業戦略と経営機能別戦 略との影響関係の分析)	○ 須田 敏子 澤田 直宏 山内 麻理 宮副 謙司 内海 里香	はしがき 序章 「日本型」戦略の変化——研究のフレーム ワーク 第1章 経営戦略論 —環境変化に対する企業の適応プロセス の考察 第2章 制度組織論 —組織フィールドにおける複雑な変化の メカニズムに迫る 第3章 国際経営比較論 —各国の競争優位・劣位を制度補完性か ら解明	2015.3.12	東洋経済 新報社	4,000円

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	「日本型」戦略の変化 経営戦略と人事戦略の補 完性から探る (企業戦略と経営機能別戦 略との影響関係の分析)	○ 須田 敏子 澤田 直宏 山内 麻理 宮副 謙司 内海 里香	第4章 日本型戦略の特色と変化 第5章 電機産業 一本格的に動き始めた「日本型」からの 変化 第6章 製薬産業 一進む商品・労働市場と人事戦略の変化 第7章 金融産業 一多様化の進展とグローバル化への遠い 道のり 第8章 流通産業 一百貨店・専門店の業態特性と市場環境 変化への適応	2015.3.12	東洋経済 新報社	4,000円
市販本	利用者指向の国際財務報 告 (財務報告の利用者から見 た国際財務報告基準の意 義と課題)	○ 橋本 尚 多賀谷 充 八田 進二 市野 初芳 小西 範幸 佐藤 淑子 北川 哲雄 町田 祥弘 尹 志煌	第1章 利用者指向の国際財務報告のフレーム ワーク 第2章 利用者から見た IFRS 第3章 IFRS の導入に係る会計制度上の考察 第4章 会計基準の設定のあり方と適用に関する 課題 第5章 法人税法第22条第4項にいう公正処理基 準の再検討 第6章 IFRS 会計思考の展開にみる統合報告の可 能性 第7章 IFRS 任意適用と IR 第8章 わが国医薬品企業における制度変化への 先駆性 一IFRS、ガバナンス、アニュアルレポー トにおける先進事例の研究一 第9章 IFRS 導入に関する財務報告利用者および 作成者の意識のギャップについて 付録 「アンケート」 質問用紙と回答用紙 索引	2015.3.30	同文館出版	4,200円
報告論集	国際刑事法の形成と日本 法の受容・発信について の基礎研究 (国際刑事法の形成と日本 法の受容・発信について の基礎研究)	○ 新倉 修 安藤 泰子 高佐 智美 宮崎 万壽夫 Coop Stephanie 竹村 仁美	1 本研究プロジェクトの目的 2 中間報告 3 検索データベースの設計 3-1 国際刑事裁判所の判例調査 3-2 事例研究：国際刑事裁判所ルバンガ 判決 4 国際刑事裁判所の法情報支援プロジェクト (ICC-Legal Tools Project, LTP) との提携契 約 5 検索データベースの資料 6 今後の展開 参考文献	2016.3.31	—	—
報告論集	ラテンアメリカにおける 地域統合・地域主義の新 たな展開 (ラテンアメリカにおける 地域統合・地域主義の新 たな展開)	○ 幸地 茂 菊池 努 岩田 伸人 Philippe De Lombaerde José Briceño Ruíz ※ 桑山 幹夫 ※ 細野 昭雄 ※ Antoni Estevadeordal	はじめに 第1章 太平洋同盟のメルコスールとの関係強化 ：その意義と可能性 第2章 アジア太平洋とラテンアメリカ：地域統 合と国際協力のダイナミズム 第3章 競合する地域制度とアジア太平洋の通称 秩序：TPP の意義と役割 第4章 多様化する世界の地域統合：FTA は関税 同盟へ移行するか ＜参考資料＞ I 国際シンポジウム資料 (国連大学共催) INTERNATIONAL SYMPOSIUM (2014)プロ グラム・当日資料 INTERNATIONAL SYMPOSIUM (2015)プロ グラム・当日資料 II Latin American Regionalism and the Role of Theory A Review Article /José Briceño Ruíz and Philippe De Lombaerde International Regionalism and National Constitutions: A Jurimetric Assesment /Philippe De Lombaerde and Liliana Lizarazo Rodríguez	2017.3.31	—	—

形態	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集			What the TPP means for Latin America and the Caribbean /Antoni Esteveordal Ⅲ COLLECTIVE HEADGING: WHAT DRIVES REGIONAL INSTITUTION-BUILDING IN THE ASIA-PACIFIC? /Tsutomu Kikuchi			

<領域別研究部門 自然科学研究部研究成果>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

形態	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集	ベローズ管の振動および疲労強度の評価 (ベローズ管の振動および疲労強度の評価)	○ 渡邊 昌宏 小林 信之 小川 武史	第1章 研究プロジェクトの概要 第2章 ベローズ振動の物理モデルの構築と理論解析 第4章 内部流体流れによるベローズ振動評価 第3章 内部圧力変動によるベローズ振動の実験的評価 第5章 繰返し負荷を受けるベローズの疲労強度評価	2005.6.30	—	—
報告論集	先端光ファイバー応用技術開発と実用化 (先端光ファイバー応用技術開発と実用化)	○ 水澤 純一 竹本 幹男 長 秀雄 市村 顕亮 野村 亮	研究総括 研究成果概要 安定化・高感度光ファイバ AE 計測システムの開発とガス漏洩による AE の検出 光ファイバ AE 計測システムの開発と応用 光ファイバ AE システムの開発と応用 直列マルチチャンネル光ファイバ AE 計測システムの開発と音源位置標定 Development of Novel Optical Fiber AE Sensor With Multi-Sensing Function 光ファイバ AE センサを用いた配管漏洩検出 マルチセンサ光ファイバ AE システムを用いた CFRP 板の損傷源位置標定 光ファイバ AE センサを用いた管内高温酸化による円筒波 AE モニタリング Development of AE Monitoring System Under The High Temperature by Using Optical Fiber Sensor 液中浸漬光ファイバ AE センサを用いた腐食損傷方向標定 直接露光法を用いた光導波路作製に関する研究 ポリマファイバガイドの検討 光ファイバを用いた振動検出センサの分類と考察 光ファイバを用いたマツハツェンダ干渉計センサの原理と性能 マツハツェンダ干渉型光ファイバ複合センサの研究 光ファイバ振動センサの理論的アプローチ	2006.3.31	—	—
報告論集	オリジナル DNA マイクロアレイ「シナプトアレイ」を用いた神経変性および神経老化過程の解析 (オリジナル DNA マイクロアレイ「シナプトアレイ」を用いた神経変性および神経老化過程の解析)	○ 田代 朋子 降旗 千恵	I. オリジナル DNA マイクロアレイ「シナプトアレイ」の開発 II. 脳を維持する二つのシステム III. 細胞ストレスと神経変性 IV. 老化促進モデルマウス SAM の脳における遺伝子発現の特徴	2007.3.31	—	—

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集	柔軟な壁面に沿う流体摩擦抵抗低減メカニズムの解明 (柔軟な壁面に沿う流体摩擦抵抗低減メカニズムの解明)	○ 三栖 功 藤松 信義	1 柔軟壁材料が乱流摩擦抵抗に及ぼす影響 2 柔軟壁に沿う境界層の自然遷移過程 3 急加速乱流境界層に及ぼす柔軟壁面の影響 4 シリコーンゲル表面の乱流境界層の特性と表面変位の挙動 5 柔らかい平板上に発達する乱流境界層の数値計算	2007.3.31	—	—
報告論集	素粒子論に基づいた時空と物質の創生 (素粒子論に基づいた時空と物質の創生)	○ 山口 昌英 川口 俊宏	序章と概要 第一章 インフレーションモデルと原始密度揺らぎ 第二章 宇宙紐と宇宙の大規模構造 第三章 暗黒物質とバリオン数の非対称性 第四章 原始重力波 第五章 物理定数の時間変化 第六章 超臨界ガス降着現象と超高光度X線源 第七章 原子活動銀河核の母銀河における棒状構造 謝辞	2008.1.17	—	—
報告論集	健康な脳を維持する食生活因子の解析 (健康な脳を維持する食生活因子の解析)	○ 福岡 伸一 田代 朋子 降旗 千恵 木村 純二 有井 康博 小林 謙一 武井 史郎 山科 正平	略語一覧 第1章 緒言 第2章 材料と方法 第3章 結果 第4章 考察 要約 参考文献 おわりに	2008.2.28	—	—
報告論集	マイクロサイズのセルと1次元電極の製作、そして、それによるアハラノフ・ボーム効果の測定 (マイクロサイズのセルと1次元電極の製作、そして、それによるアハラノフ・ボーム効果の測定)	○ 三井 敏之 小林 夏野	Growth and observation of micro-organic crystals in two-dimensional glass nanovolume cell Vibrationally assisted diffusion of H ₂ O and D ₂ O on Pd (111) 小型セルを用いた微小有機導体結晶成長 Nanoscale Volcanoes: Accretion of Matter at Ion-Sculpted Nanopores Abstract Submitted for the MAR08 Meeting of The American Physical Society Electric-Field Effect on the Angle-Dependent Magnetotransport Properties of Quasi-One-Dimensional Conductors Abstract Submitted for the MAR09 Meeting of The American Physical Society 層状低次元導体における磁気抵抗角度効果II ～高電場下の層間磁気伝導～ 微小セルを用いた有機導体結晶成長の試みIII Simultaneous Surface and Conduction Study of the Macrocylic C ₂ h Schiff-base Complex [Cu ₂ (thdd)] Cl ₂ 有機超伝導体の表面構造評価と接合構造作製 マイクロサイズ有機導体結晶の伝導特性 Organic Maicro-Crystal Growth in Micro-Sized Glass Cell 微小セルを用いた有機導体結晶成長の試み 微小セルを用いた有機導体結晶成長の試みII Manipulation and Patterning of the Surface Hydrogen Concentration on Pd (111) by Electric Fields	2009.2.16	—	—
報告論集	ジャストインタイム・スケジューリングに対する最適化手法の開発 (ジャストインタイム・スケジューリングに対する最適化手法の開発)	○ 宋 少秋	1 はじめに 2 問題の定式化 3 単一機械モデル 4 並列機械モデル	2009.2.25	—	—

形態	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集	高精細画像利用遠隔医療授業システムの北里大との共同研究 (高精細画像利用遠隔医療授業システムの北里大との共同研究)	○ 水澤 純一 佐久田博司 長谷川建治	1. 研究総括 2. 研究成果概要 2.1研究経緯 2.2研究成果事例 資料	2010.2.26	—	—
報告論集	スマートな多重連結車両システムのための制振装置の開発と知的制御 (スマートな多重連結車両システムのための制振装置の開発と知的制御)	○ 山口 博明 渡邊 昌宏	第1章 はじめに 第I部 操舵性向上のためのマルチステアリング装置の開発とマルチトレーラの知的制御 第2章 序論 第3章 協調搬送システムの構造 第4章 経路追従動作 第5章 パラメトリック曲線による経路計画 第6章 経路追従制御系の設計方法 第7章 実験環境と実験機構成 第8章 実験 第9章 結論 第II部 流れ制御に基づく制振デバイスの開発と多重連結車両の知的振動制御 第10章 序論 第11章 解析モデル 第12章 実験 第13章 数値シミュレーション結果と考察 第14章 結論 第15章 おわりに 参考文献 図目次 表目次	2010.3.1	—	—
報告論集	強磁性を示す電荷移動錯体の複素誘電率スペクトロスコピー (強磁性を示す電荷移動錯体の複素誘電率スペクトロスコピー)	○ 北野 晴久 糸井 充穂	はしがき 研究成果の概要 研究発表 発表論文集	2011.3.11	—	—
報告論集	超臨界ガス降着現象と銀河・ブラックホールの進化 (超臨界ガス降着現象と銀河・ブラックホールの進化)	○ 川口 俊宏 柴田 徹	総括と要約 第一章 中間質量ブラックホールは存在するか？ 第二章 原始ブラックホールと超高光度X線源 第三章 活動銀河核ダストトラスの近赤外線光度変動モデル 第四章 宇宙線から探る宇宙の構成要素 謝辞	2011.3.11	—	—
報告論集	イリジウム錯体触媒を用いる環境調和型有機合成反応の開発 (イリジウム錯体触媒を用いる環境調和型有機合成反応の開発)	○ 武内 亮 小野寺 玄	はしがき 研究発表 2008年度研究成果報告 2009年度研究成果報告 結言	2011.3.11	—	—
報告論集	大変形を伴った剛体運動を行う機械システムの姿勢制御系の構築 (大変形を伴った剛体運動を行う機械システムの姿勢制御系の構築)	○ 小林 信之 原 謙介 菅原 佳城	第1章 緒言 第2章 ANCFモデルの検証 第3章 ANCFモデルを用いた制御系設計 低次元化手法の検討 第4章 ANCFモデルを用いた制御系設計における 第5章 結言 参考文献 付録	2013.3.31	—	—

形態	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
報告論集	自然言語処理技術に基づく論理的文章作成能力育成支援 (自然言語処理技術に基づく論理的文章作成能力育成支援)	○ 稲積 宏誠 竹内 純人 又平 恵美子 益井 岳樹 竹田 晃子 高梨 美穂	取組概要 開発された支援ツールの概要 文章校正理解支援ツール 文章見直し支援ツール 日本語文章校正・推敲ツールと演習問題作成支援ツール	2014.3.31	—	—
報告論集	宇宙線の起源をさぐる理論・観測研究 (宇宙線の起源をさぐる理論・観測研究)	○ 山崎 了 馬場 彩 井上 剛志 柴田 徹	1. 研究目的と研究成果の要約 2. 研究成果リスト 3. 謝辞 4. 出版論文集	2014.9.30	—	—
報告論集	海洋生物の医薬品等への活用とその知的資産マネジメント (海洋生物の医薬品等への活用とその知的資産マネジメント)	○ 木村 純二 田代 朋子 菊池 純一 山崎 正稔 根岸 隆之 澤野 恵梨香 松本 芳嗣 後藤 康之 三條場 千寿 内山 真伸	はじめに：本プロジェクト研究の背景と目的 第1章 強い細胞毒性をもつ kulokekahilide-2 誘導体の構造活性相関の研究 第2章 抗リーシュマニア活性化合物 ciliatamide 誘導体の合成と構造活性相関の検討 第3章 抗リーシュマニア活性化合物 sargaquinoidatic acid の研究 第4章 生理活性物質測定法 第5章 知的資産マネジメント	2015.3.31	—	—
報告論集	機能性分子骨格ジアリールポリインの電子励起状態 (機能性分子骨格ジアリールポリインの電子励起状態)	○ 鈴木 正亮 武内 亮輔 磯崎 真伸	はじめに 第1章 序論 第2章 実験 第3章 ジフェニルポリインの二光子吸収 第4章 クロロジフェニルアセチレンの二光子吸収 第5章 1置換、2置換ジアリールアセチレンの二光子吸収 第6章 総括 研究発表 参考文献 謝辞	2016.3.24	—	—
報告論集	数学系講義を補完する自習システムの構築 (数学系講義を補完する自習システムの構築)	○ 寺尾 敦 矢野 公一 伏屋 広隆 高村 正志	報告論集の構成について 数学の講義を補完する自習ウェブサイトの構築 (PCカンファレンス北海道2013 発表論文) 初等解析学の講義を補完する自習ウェブ教材の開発 (CIEC 研究大会 2014 PC conference 発表論文) 初等解析学の講義を補完する自習ウェブ教材の開発 iBooks Author で作成したデジタル教材への移植	2016.3.31	—	—
報告論集	原子を用いた新量子技術創成のための基礎研究 (原子を用いた新量子技術創成のための基礎研究)	○ 前田 はるか 高峰 愛子 北野 健太 水谷 由宏	I 序章 II 研究の背景 III 実験 IV 結果と考察 V 総論 成果発表 参考文献 謝辞	2017.3.31	—	—
報告論集	英語化授業における日本語注釈つき学習教材の半自動生成と当該教材を用いた学習促進の研究 (英語化授業における日本語注釈つき学習教材の半自動生成と当該教材を用いた学習促進の研究)	○ 鷺見 和彦 David Reedy 佐久田 博司 戸辺 義人 Guillaume Lopez	第1章 本プロジェクト研究の背景と目的 第2章 理工学部における英語教育と専門教育 第3章 日本語注釈つき学習教材の半自動生成システム 第4章 講義動画生成システムの構築 第5章 脳波計測による学習理解に関する検討 第6章 音声を利用したオンラインテストにおけるリスニングエージェント	2017.3.31	—	—

<20周年記念特別研究プロジェクト研究成果>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
市販本	戦争記憶の継承 語りなおす現場から (戦争記憶の検証と平和概念の再構築)	佐藤 泉 ※ 宮城 晴美 ※ 吉川 麻衣子 北村 文昭 宋 連玉 君塚 仁彦 ○ 平田 雅博 新倉 修 杉浦 勢之 松尾 精文	はしがき 序 章 戦争記憶を記憶する 第1章 沖縄戦「集団自決」をめぐる「記憶」の抗争 第2章 沖縄県の戦争体験者のいま 第3章 戦争記憶の戦後世代への継承 第4章 映画に見る朝鮮戦争の記憶 第5章 加害記憶の伝達と承継を支える方法とはなにか？ 第6章 ロンドンの帝国戦争博物館 第7章 戦争の記憶と戦争犯罪追及 第8章 いま「戦争」を語ること 第9章 学生たちは戦争記憶とどのように向き合ったか 補 章 私たちは戦争体験をどのように受け止め、引き継げばよいのか	2011.3.20	社会評論社	3,360円
市販本	安全と危険のメカニズム (科学技術の発展と心的機能から探る安全と危険のメカニズムに関する総合研究)	○ 重野 純 福岡 伸一 柳原 敏夫	まえがき 第1章 家庭生活における安全と危険 第2章 食の安全と危険 第3章 市民の科学への不信はいかにして形成されるか —「歪曲」されたリスク評価の事例の検討	2011.3.20	新曜社	2,520円

<中間報告・研究期間中刊行物>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

研究部	形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
課題別	報告論集	研究成果中間報告 国際会議 拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—和解、安全保障、人の移動— (拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究—)	○ 羽場 久美子 山本 吉宣 袴田 茂樹 押村 高 岩田 伸人 手塚 和彰 高木 誠一郎 菊池 努 納家 政嗣 山影 進 森井 裕一 柴 宣弘 ※ 宮島 喬 ※ 李 鐘元	第一部 『拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究プロジェクト』について 第二部 国際会議 『拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—和解、安全保障、人の移動—』 第三部 2008年中間報告論集 2008年度研究参加者主要業績	2009.3.25	—	—
	報告論集	研究成果中間報告 拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究プロジェクト— (拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究—)	○ 羽場 久美子 山本 吉宣 袴田 茂樹 押村 高 岩田 伸人 手塚 和彰 高木 誠一郎 菊池 努 納家 政嗣 山影 進 森井 裕一 柴 宣弘 吉野 良子 柴 宣弘	第一部 『拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究プロジェクト』について 第二部 2009年度研究論文 「拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究—」 2009年度 研究業績一覧	2010.3.24	—	—

研究部	形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
課題別	報告論集	研究成果報告 拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究— (拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究—)	○ 羽場 久美子 山本 吉宣 袴田 茂樹 押村 高 高木 誠一郎 岩田 伸人 手塚 和彰 納家 政嗣 山影 進 柴 宣弘 森井 裕一 清水 聡 吉野 良子 竹田 憲史 ※ 宮島 喬 ※ 李 鍾元	はしがき 2010年度 第3年目年間研究会報告 1月国際会議：ポスターと海外招聘者ペーパー 2010年度 研究論文 「拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究」 2010年度 研究業績一覧	2011.3.24	—	—
	報告論集	キリスト教系中学校・高等学校生徒の 道徳意識に関する研究 2004年度～2005年度 調査研究報告書 (青年期におけるモラル教育の危機と可能性—キリスト教モラル教育の構築へ—)	○ 伊藤 悟 東方 敬信 今井 重孝 三嶋 輝夫 大森 秀子 朴 憲郁 小池 茂子	はじめに 序章 調査実施の概要 第一部 調査結果の概要 第一章 被調査者の概要 第二章 被調査者の生育歴 第三章 被調査者の生活環境 第四章 被調査者の道徳意識 第五章 キリスト教教育の影響 第二部 調査結果の分析と提言 第六章 生育歴と道徳意識・道徳的行為の判断基準との関連性に関する分析と提言 第七章 生活環境と道徳意識・道徳的行為の判断基準との関連性に関する分析と提言 第八章 道徳意識・道徳的行為の判断基準とキリスト教教育との関連性に関する分析と提言 付録資料	2006.8.31	—	—
	報告論集	キリスト教系中学校・高等学校生徒の 道徳意識に関する研究 2004年度～2005年度 調査研究報告書 《別冊》日本と韓国との比較調査研究 (青年期におけるモラル教育の危機と可能性—キリスト教モラル教育の構築へ—)	○ 伊藤 悟 東方 敬信 今井 重孝 三嶋 輝夫 大森 秀子 朴 憲郁 小池 茂子 ※ 森本 倫代 ※ 熊谷 明子 ※ 設楽 舞	はじめに 序章 調査概要 第一章 被調査者の概要 第二章 被調査者の生育歴 第三章 被調査者の生活環境 第四章 被調査者の道徳意識 第五章 キリスト教教育の影響	2007.3.31	—	—
	報告論集	Credo Ut Intelligam, Vol.1 研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」 研究報告論集第1号 (キリスト教大学の学問体系論の研究)	○ 西谷 幸介 東方 敬信 深井 智朗 大森 秀子 伊藤 悟 茂 牧人 清水 正 佐藤 貴史 濱崎 雅孝 ※ 小柳 淳史	巻頭言 学問論と大学制度論 —明治期におけるドイツの大学制度と神学的学問論移入という歴史的サンプルから学び得ることは何か— 大学人は生を捉えられるか —トレルチの目に映った「学問における革命」— フリードリヒ・E・D・シュライアマハーの学問体系論と大学論 現象学の学問論 社会科学性合理性への神学的挑戦—ヴェーバー・デーゼを巡って バウル・ティリッヒ『諸学問の体系』(仮題) 序文・基礎論・結論 翻訳 バウル・ティリッヒ『諸学問の体系』(仮題) 英訳者序文より抄訳(一部意識を含む) キリスト教大学の学問的体系論研究について キリスト教大学の学問的体系論について	2011.3.12	—	—
報告論集			巻頭言 【シンポジウム 「フンボルト理念の終焉？現代日本の大学教員の課題」] フンボルト理念の終焉？ 再び「大学の孤独と自由」の方へ				

研究部	形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
キリスト教文化	報告論集	Credo Ut Intelligam, Vol.2 研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」研究報告論集第2号 (キリスト教大学の学問体系論の研究)	○ 西谷 幸介 東方 敬信 深井 智朗 清水 正秀 大森 秀子 潮木 守一 ※ 西山 雄二 ※ 富張 唯	一潮木守一『フンボルト理念の終焉?』によせてフンボルト理念をこえて「フンボルト理念の終焉 現代日本の大学教員の課題」というテーマと「キリスト教大学の学問体系論」という研究プロジェクトが取り組むことの意味 「大学教員の課題」でシンポジウム 【論説】 神律の概念、学問体系論におけるその意義 アメリカ女子教育におけるリベラル・エデュケーションの変遷 一ホーム論から家政学成立のプロセスに着目してベルリン大学創設前後のドイツの学問論・大学論の状況	2012.3.10	—	—
	報告論集	Credo Ut Intelligam, Vol.3 研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」研究報告論集第3号 (キリスト教大学の学問体系論の研究)	○ 西谷 幸介 東方 敬信 茂 牧人 佐藤 貴史 濱崎 雅孝 ※ Gunther Wenz ※ 西山 雄二 ※ 福嶋 揚	巻頭言 【2011年度「ティリッヒとパネンベルクの神学的<学問論>」シンポジウム報告】 グンター・ヴェンツ教授(ミュンヘン大学)講演 ティリッヒ パネンベルク ヴェンツ教授講演和訳 ティリッヒ 「精神における思惟と存在の統一〜パウル・ティリッヒの『対象と方法による諸学の体系』(1923)について〜」 パネンベルク 「全体の意味について〜『学問論と神学』(1973)におけるヴォルフハルト・パネンベルク〜」 ヴェンツ教授講演へのリスポンス 「ティリッヒの学問体系論について」 「Wenz 教授へのリスポンス」 「Wenz 教授講演への質疑」 ヴェンツ教授のリスポンスへの応答 ドイツ語 和訳 (「西谷幸介先生、西山雄二先生、濱崎雅孝先生の御発表へのリプライ」) 【2012年度研究報告】 「解釈学の学問論」 「フランクリンとベンシルヴェニア大学」 「パネンベルクの学問論」 「民主教育における平和の神学」 「日本のキリスト教大学における神学と制度—青山学院大学の場合」 新刊紹介『諸学の体系』 執筆者紹介	2013.3.9	—	—
	報告論集	Credo Ut Intelligam, Vol.4 研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」研究報告論集第4号(最終号) (キリスト教大学の学問体系論の研究)	○ 西谷 幸介 中井 章子 塩谷 直也 東方 敬信 ※ 西山 雄二	巻頭言 【2013年度講演会「人文学と制度」報告】 「人文学と制度」 「『人文学と制度』コメント」 【2013年度研究報告】 「ノヴァーリスにおける学の球体としてのエンツリュクローペディー」 「シェリングの学問体系論」 「平凡な時〜ローワン・ウィリアムズに感謝して」 「正しい人々の形成」 執筆者紹介	2014.3.9	—	—
	市販本	学問論と神学 W.パネンベルク著 (キリスト教大学の学問体系論の研究)	○ 西谷 幸介 (訳者) 濱崎 雅孝 清水 正 小柳 敦史 佐藤 貴史 ※ 福嶋 揚	まえがき 序論 学問論と神学 第一部 諸学問の統一性と多様性の緊張における神学 第一章 実証主義から批判的合理主義へ 第二章 精神科学の自然科学からの解放 第三章 意味理解の方法論としての解釈学 第二部 学問としての神学 第四章 神学史における学問としての神学の理解 第五章 神についての学問としての神学 第六章 神学内的区分 訳者あとがき 人名索引	2014.3.20	教文館	6,000円

研究部	形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
キリスト教文化	市販本	大学のあり方 諸学の知と神の知 スタンリー・ハワーワス 著 (キリスト教大学の学問体系論の研究)	○ 西谷 幸介 (監訳) 東方 敬信 (訳者) 西谷 幸介 大森 秀子 塩谷 直也 高砂 民宣 清水 正 ※ 山室 吉孝 ※ 東方 和子 ※ 清水 香基	まえがき 序文 序章 第1章 神学の知と大学の知—探求の開始 第2章 廢墟をあとにして—福音と文化形成 第3章 教育の危機とはいかなる危機なのか？ —アメリカの状況からあれこれ考える 第4章 「宗教多元主義」の終焉 —聖十字架修道会デイヴィッド・パレルに敬意を表して 第5章 大学の悲哀—スタンリー・フィッシュの立場 第6章 キリスト教大学の将来の理想の姿とは？ —ウエンデル・ベリーに示唆された試案 第7章 石を彫るか、もしくは、キリスト教という言語を学ぶか 第8章 エレクシアのため、テキサスのため —テキサスの核心にある心を教育する 第9章 キリスト者と(私たちが住む)国家と呼ばれるもの —二〇〇一年九月一日以降の忠誠についての黙想 第10章 民主主義の時代—ヨーダーとウォーリンから学んだ教え 第11章 世俗の国家—神学、祈り、そして大学 第12章 神と貧しい人々と学問とを愛すること —ナジアンゾスの聖グレゴリウスから学んだ教え 付論A デューク大学—この場所の善さ 付論B 苦境に立たされる神学校 —ベタニア神学校設立—〇〇周年を深く省みて 付論C 平凡な時—ローワン・ウィリアムズに感謝して 訳者あとがき 人名索引 訳者一覧	2014.3.31	株式会社ヨベル	3,500円
			○ 森川 信男 芹田 敏夫 内田 達也 佐久間 一浩 山口 秀文 ※ 樋口 和彦	第1章 中小企業政策と中小企業情報化施策の変遷 第2章 中小企業組合と中小企業組合制度の現状 第3章 中小企業における IT 活動 第4章 中小企業組合の IT 活用事例	2008.2.22	—	—
			○ 森川 信男 芹田 敏夫 内田 達也 佐久間 一浩 山口 秀文 ※ 樋口 和彦	第一部 「中小企業組合情報化実態調査」調査分析結果 第1章 「中小企業組合情報化実態調査」の概要 第2章 「中小企業組合情報化実態調査」の単純集計結果 第3章 「中小企業組合情報化実態調査」のクロス集計結果 第4章 「中小企業組合情報化実態調査」の相関分析結果 第二部 「中小企業組合情報化実態調査」データ処理結果	2008.2.22	—	—
			○ 岩田 伸人 加藤 篤史 瀬尾 佳美 Karl-Friedrich Lenz 高瀬 保 桜井 雅夫	日本・モンゴル国際学術シンポジウム グローバリゼーションとエコツーリズム —モンゴルの観光・環境資源をどう活かすか— I シンポジウム研究活動報告 開会の辞 第1セッション 基調講演 第2セッション プレゼンテーション 第3セッション プレゼンテーション 巻末資料	2008.2.22	—	—
社会科学	報告論集	研究成果中間報告論集 1 中小企業組合の情報化 (IT 革命と企業経営—IT ビジネス・IT 企業・IT 産業)	○ 森川 信男 芹田 敏夫 内田 達也 佐久間 一浩 山口 秀文 ※ 樋口 和彦	第一部 中小企業組合における農商工連携の現状と課題 —「農商工連携実施組合実態調査」の単純集計分析結果からみた— 第1章 農商工連携を取り巻く期待と施策 第2章 「農商工連携実施組合実態調査」の実施			
	報告論集	研究成果中間報告論集 2 中小企業組合の情報化(実態調査編) (IT 革命と企業経営—IT ビジネス・IT 企業・IT 産業)	○ 岩田 伸人 加藤 篤史 瀬尾 佳美 Karl-Friedrich Lenz 高瀬 保 桜井 雅夫				

研究部	形態	書名(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
社会科学	報告論集	研究成果中間報告論集 1 中小企業の企業連携—組織的・産業的・地域的・国際的連携— (中小企業の企業連携—組織的・産業的・地域的・国際的連携—)	○ 森川 信男 三村 優美子 須田 敏子 中野 勉 加藤 篤志 佐久間 一浩	第3章 中小企業組合における農商工連携の活動状況 第4章 中小企業組合における農商工連携の基本的課題 第二部 中小企業組合における農商工連携—中小企業組合と農林漁業者の連携事例からみた— 第1章 農商工連携に取り組む中小企業組合事例 第2章 農商工連携に取り組む中小企業組合事例の概要 第3章 活動目標レベルからみた農商工連携組合事例 第4章 市場活動レベルからみた農商工連携組合事例 第5章 中小企業組合における農商工連携の展開	2011.3.14	—	—
	報告論集	研究成果中間報告論集 2 中小企業組合における地域活性化 (中小企業の企業連携—組織的・産業的・地域的・国際的連携—)	○ 森川 信男 三村 優美子 須田 敏子 中野 勉 樋口 和彦 加藤 篤志 佐久間 一浩	第一部 地域活性化に貢献する中小企業組合の現状と課題 —中小企業の企業連携としての「中小企業組合」による地域活性化— 第1章 地域活性化と中小企業組合 第2章 地域活性化に貢献する中小企業組合事例 第3章 地域活性化に貢献する中小企業組合事例の概要 第4章 地域活性化に貢献する中小企業組合の事業活動 第5章 地域活性化に貢献する中小企業組合の成功要因 第6章 地域活性化貢献中小企業組合の活動成果 第7章 地域活性化貢献中小企業組合の資本効率性 第8章 中小企業組合が目指す組織的・産業的・地域的連携の方向性 第二部 中小企業組合における農商工連携—「農商工連携実施組合実態調査」の相関分析結果からみた— 第1章 「農商工連携実施組合実態調査」の実施 第2章 「農商工連携実施組合実態調査」の関連性分析結果 第3章 「農商工連携実施組合実態調査」の因果性分析結果	2012.3.14	—	—

<人文学系研究センター研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第1号	外国文化の輸入と言語	○ 松浪 有 秋元 実治 植田 祐次 酒井 豊 尾形こづえ 篠原 進 武藤 元昭 片桐 一男	日・英語に見られる 'Idiomacity'—プロトタイプとの関係で— 革命期ジャーナリズムにおける民衆呼称をめぐって 近代日本語の形成と「日本教育史略」の編纂 動詞 devenir の意味・統辞特性 西鶴と郭巨伝説 京伝と馬琴—初期読本界の動向 「阿別舌字様説」について	1992.3.31
第2号	中世ヨーロッパの総合研究	今野 國雄 岡 三郎 大曾根良衛 ○ 小佐井伸二 西澤 文昭 鳥居 正文 支倉 壽子	中世における聖と俗の一形態—Constitutio Romana の生成と転生— Jean Bodel の Fabliau: <i>Gombert</i> から Chaucer の The Reeve's tale まで—中世的「笑い」の変換— ヨーロッパ中世末期(14・15世紀)民衆教育思想に関する研究(1)—Devotio moderna の教育史的意義— 『アルビジョワ十字軍の歌』研究テキスト研究と翻訳の試み 『アルビジョワ十字軍の歌』研究 アルビジョワ十字軍—ページ攻略にいたるまで	1993.3.31

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第3号	死生観の比較文化論的研究	○ 小原 信 丸山 千秋 加茂 雄三 谷 清 石崎 晴己 永藤 武 堀内 秀晃	現代思潮における死生観の争点 生命倫理の3C—医学・倫理・宗教 アメリカ合衆国と日本における障害児教育 ラテンアメリカにおける死生観 『神曲』における彼岸の世界 『自死の日本史』を読む—現代フランス思潮における死生観の一例として 日本の近代文学者の死生観—尾崎一雄と正宗白鳥の場合 平安時代における佛教的死生観—『源氏物語』の柏木・桐壺・宇治八の宮を中心に	1993.3.31
第4号	外国文化の定着過程と言語	秋元 実治 植田 祐次 ○ 尾形こづえ 片桐 一男 酒井 豊 片桐 一男 片山 宏行	イディオムのタイポロジー的研究—日・英・仏・独語を中心に— 十八世紀末フランスの作家の目に映じた日本像—レチフ『アンドログラフ』第二部より項目「日本」— 属詞動詞の機能と移動動詞の機能—動詞 <i>rester</i> をめぐって— 蘭学者のオランダ語会話書—サーメン・スプラークの流布・定着— 日本語の近代化における言語借用とその基層（1） 日本英学資料総合目録 菊池寛・イギリス、アイルランド文学の投影	1994.3.31
第5号	「中世」と「近代」	○ 岡 三郎 渡辺 節夫 西澤 文昭 原 恵 青山 誠子 西村 哲一	聖アウグスティヌスの『神の国』における「トロイ物語」の解釈 西欧中世における封建制の展開と騎士身分の形成—フランスの事例を中心に— <i>Grands Rhetoriciens</i> をめぐって—作詩法理論解説の試み 讚美歌自国語化の過程に関する一考察 <i>The Winter's tale</i> の民衆性—Shakespeare と民衆文化の関わりに関する再考	1995.3.31
第6号	日本と西洋における死生観の研究	○ 小原 信 谷 清 石崎 晴己 永藤 武 堀内 秀晃 沼田 哲	技術社会における生と死—日本と西洋における死生観の研究 有終の倫理学—死にむかう生をどう生きるか 『神曲』地獄篇第五歌—バオロとフランチェスカ カミュの自殺観再考 中原中也・晩年の詩三篇—そこに見る死生観 藤原道長の来世観 国学者における「死生観」小論—本居宣長と平田篤胤をめぐって	1995.3.31
第7号	外国文化の変容過程と言語	○ 片桐 一男 酒井 豊 秋元 実治 尾形こづえ 片山 宏行	阿蘭陀通詞・蘭学者の単語帳—辞書に見えない世界を覗く— 日本語の近代化における言語借用とその基層（2） イディオム化の史的考察—「前置詞+名詞句+前置詞」句を中心に— 属詞動詞の機能と位置動詞の機能— <i>etre</i> 構文分類の試み— 菊池寛とトマス・ハーディ —「姉の覚書」と「アリシアの日記」をめぐって—	1996.3.31
第8号	東西死生観の現代的展開	○ 小原 信 堀内 秀晃 石崎 晴己 谷 清 永藤 武 沼田 哲	死の排除と看取りの倫理 〈いのち〉をめぐって こころのいたみ 倫理的判断のための基本的な考え方 助産婦はいるのに、助死者がいません アメリカのホスピス訪問記 死に生きる—あるホスピスの現場より 永遠の不在 生と死を超えるもの 兼好の遁世 映画『ショア』の問題系 ダンテ『神曲』覚え書—ユリシーズの冒険と挫折 斎藤茂吉の「死にたまふ母」に表現された生と死 平田篤胤の「鬼神」観	1997.3.31
第9号	「物語」の構造と変換の研究	渡辺 節夫 植田 祐次 ○ 岡 三郎 土方 洋一 篠原 進	物語史料 (sources narratives) とその周辺 —西洋中世史料類型化の試み— 『恋の罪』語りの定式、または仮定の読者 Narratological Parallel Texts of The Story of Othello, the Moor, in Prose, Play and Opera—Pt.1, Prose in Italian, English and French 宇治の物語の始動—『源氏物語』の第二部から第三部へ— マルチストーリーとしての浮世草子	1997.3.31

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第10号	東西の言語・文化の比較研究	阪本 浩 小名 康之 ○ 尾形こづえ 佐久間康夫 片桐 一男 片山 宏行	帝政期の北イタリアにおける宗教生活 17世紀におけるムガル宮廷とヨーロッパ東インド会社—ムガルの対外政策をめぐって— フランス語の属詞構文—devenirの属詞をめぐって— 別役実とハロルド・ピンター—言語空間と悲劇性— 新井白石と今村源右衛門英生の『外国之事調書』 菊池寛「火華」—「ジェルミナル」の受容を視点としつつ—	1998.3.31
第11号	現代文明における生と死	○ 小原 信 谷 清 石崎 晴己 酒井 豊 堀内 秀晃 永藤 武	日本人の死生観とその問題点 ホスピスと生命倫理 「有終の倫理学」における〈助死者〉 The Brain-Death Controversy: The Japanese View of Life, Death, and Bioethics 現世の詩人 ダンテ J. = D. ナシオにおける喪 近現代日本における人間的生の可能性 『一言芳談』の死生観 中原中也の「羊の歌」と「いのちの声」に表現されたくいのちなるもの>	1999.3.31
第12号	ドラマツルギーの研究	中條 忍 根岸 徹郎 外岡 尚美 ○ 佐伯 真一 廣木 一人	能のドラマツルギー 「墓地」としての劇場、「死者」としての登場人物—場所と時間をめぐるジュネのドラマツルギー— ドキュメンタリー演劇と多文化主義アメリカの国民的物語 <small>ナショナル・ナラティブ フェテラル・シアター・プロジェクト</small> 連 邦 劇 場 計 画 と Twilight: Los Angeles, 1992に見るナショナル・アイデンティティの構築 屋島合戦と「八島語り」についての覚書 世阿弥の夢幻能—「幽霊」能・「現在」能及び曲舞の考察を通して—	1998.7.31
第13号	比較物語研究	○ 岡 三郎 植田 祐次 渡辺 節夫 大上 正美 土方 洋一 篠原 進	能「隅田川」とオペラ 'Curlew River'—「物語」の伝播と変換 内蔵された二つの語り シュジュールとその時代の王国観—『ルイVI世伝』の分析を中心として 「達莊論」と「大人先生伝」 『源氏物語』の語りの諸相—信頼できない語り手の問題— 物語の終焉—金陵と蛙井	1999.3.31
第14号	言語・文化の東と西	○ 小名 康之 阪本 浩 片桐 一男 尾形こづえ 佐久間康夫 片山 宏行	ムガル軍によるフーグリー包囲事件 (1632年)—東洋と西洋— 重装騎兵 (カタフラクトゥス) とローマ人 海外情報の翻訳過程と阿蘭陀通詞 位格補語と与格補語—フランス語動詞 arriver の場合— 別役実とハロルド・ピンター (その2)—関係の演劇ということ— 菊池寛「藤十郎の恋」生成考	2000.3.31
第15号	演劇とその成立要素	中條 忍 堀 真理子 村田 真一 ○ 細井 尚子 廣木 一人	Paul Claudelの劇作術成立要素中国演劇 —Le Repos du Setieme Jour をめぐって— ベケットと映画 20世紀ロシア演劇における台詞と仮面 —N. エヴィレノフと M. プルガーコフの戯曲を例に— パフォーマンスの包装紙—中国四川省の端公戯— 「ことにへ平家の物語のまゝに」ということ —歌論から見た世阿弥の「本説」論—	2000.7.31
第16号	古典に見る「文学と政治」の諸相	植田 祐次 渡辺 節夫 三嶋 輝夫 ○ 大上 正美 土方 洋一 篠原 進	サドの『ジュステータ』と「政治」 フランス封建王制の確立過程と聖俗諸候層 —ジャン・ド・ジョワンヴィル『ルイ9世伝』の資料的検討— 大政治の中の個人 —ソフォクレス『フィロクテテス』をめぐって— 中国文学研究から見た高橋和巳 (三) 雪山をめぐる言説—『枕草子』を読む— 猪熊事件と世之介	2001.3.31
報告 論集	怪異の表象・言語と文化交流	片桐 一男 小名 康之 荒木 善太 ○ 平野 隆文	江戸におけるカピタンの売り物と買い物 —江戸参府の江戸と京— 17世紀のムガル帝国とヨーロッパ東インド会社 —ヨーロッパ東インド会社の貿易活動に関する フェルマー ンをめぐって— 「怪異」と「崇高」 —山をめぐる文学的表象についての一考察— 『魔女への鉄槌』: スコラの魔女学	2003.9.30

号数	プロジェクト名	所員	内容	刊行日
報告論集	古典詩歌の方法	伊達 直之 (訳) 伊達 直之 露崎 俊和 渡辺 節夫 (訳) 渡辺節夫・青山由美子 土方 洋一 高田 祐彦 ○ 大上 正美	初期モダニズムの中の「古典主義」 — Pound、Hulme と Ford の詩的探求— エズラ・パウンド 「プロヴィンキア・デゼルター不毛なるプロヴァンス地方」 ボードレールによる「古典」の脱構築をめぐって — 『白鳥』における神話、歴史、寓喩— 武勲詩の中のフランス中世王権 — 『ルイの戴冠 (Le couronnement de Louis)』を中心に— 13世紀における王権の発展：その基盤、内実、メカニズム アルベール・リゴディエール 朗詠の政治学— 『枕草子』 「故殿の御服の頃」 段私解— 『枕草子』 注釈ひとつ 序詞と屏風歌— 古今集撰者に即して— 西順藏 < 替康論 > から文学研究へ (上)	2004.3.31

<経済研究センター研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号数	プロジェクト名	所員	内容	刊行日
第1号	経済成長と経済政策	米澤 義衛 小林 襄治 原 豊 ○ 三和 良一 石畑良太郎 石井 信之 大谷登士雄 高橋 俊治	混雑現象の経済分析— 首都圏鉄道主要路線の場合 EC 証券市場の『統合』 経済成長と産業政策— 「日本型」と「フランス型」 近代日本の政策決定機構の変遷	1993.3.31
第2号	都市機能と経済政策	中込 正樹 大住 圭介 熊谷 彰矩 山下 隆之 中澤 進一 ○ 松下 正弘 山下 隆之 平澤 典男	SPATIAL COMPETITION IN HIERARCHICAL URBAN MARKETS 都市開発の動学的分析 京都景観論争の経済学的分析 都市と廃棄物	1993.3.31
第3号	各国における財政制度・財政政策 の実態調査と国際比較	○ 深澤 實 日向寺純雄 白井 邦彦 堀場 勇夫 牛丸 聡	インドのエクサイズ制度 イタリア財政学における「価格」の諸概念 アメリカの移転価格税制 カナダの法人税制と調和 英国と日本における公的年金と企業年金の関連	1994.3.31
第4号	東京経済圏の課題と対策	○ 西岡 久雄 高橋 重雄 北見 俊郎	東京一極集中と対策について オフィス立地から見た東京経済圏の課題と対策 東京圏における湾・港・臨海部の近代化	1995.3.31
第5号	各国の財政理論と財政制度の国際 比較研究	深澤 實 堀場 勇夫 ○ 日向寺純雄 牛丸 聡	インドのエクサイズ税制の改革— 租税改革委員会報告書— 各国地方税制の理論的分析— 租税外部性の観点から— イタリアにおける消費課税論と資産課税論 医療に対する公的関与に関する判断規準	1997.3.31
第6号	金融史の国際比較	中川 辰洋 平出 尚道 ○ 小林 襄治 杉浦 勢之	フランス銀行の独立性の強化— 中央銀行法改正の意義と背景— 第二合衆国銀行と地域間分業 英国貨幣史序説 戦後金融システムの生成— 「日本の金融システム」の原型創 出過程—	1998.3.31
第7号	統計調査の精度	○ 美添 泰人 本郷 茂 後藤 文廣 荒木万寿夫 細倉 昌子	非標本誤差の問題 ブートストラップの漸近理論 日本の消費関数に関する実証研究 データリンケージ手法の基礎的考察 産業分類におけるクラスター分析の利用 研究開発費に関する実証研究	1998.1.31
第8号	経済理論とその政策的含意に関する 研究	○ 大住 栄治 平澤 典男 中込 正樹 堀場 勇夫 矢吹 初	ポスト・ケインジアンの一つのモデル分析 — カレッキ理論に関するモデル分析— 代議制および委員会方式による集団的意思決定について 「華僑的ネットワーク」の理論 資本課税の共同方式に関する理論的検討 補助金政策の公共財供給に与える影響	1999.3.31

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第9号	情報処理技術の展開と経済行動分析への応用	○ 美添 泰人 後藤 文廣 本郷 茂	動態統計調査における統計的推論 標本調査法の基礎理論 指数理論の基礎解説 混合モデルの理論と応用 経済情報システム—経済学部データベースの紹介—	2001.3.31
第10号	財政と経済構造の研究：理論的・実証的検討	日向寺純雄 ○ 大住 栄治 中込 正樹 平澤 典男 堀場 勇夫 矢吹 初	第1章 デ・ヴィーティの臨時財政論—その独自の公債論を中心に— 第2章 カレッキの価格設定方式とインフレーションに関する覚え書 第3章 ケインズの投機理論の再構築 第4章 公共財供給における代替的行動原理の帰結—2×2ゲームの利得関分析— 第5章 垂直的外部性 第6章 階層的政府構造と所得再分配政策	2002.3.31
第11号	ファイナンスとファンダメンタルズ	○ 米澤 義衛 芹田 敏夫 清水 克俊 原田 泰 杉浦 勢之 深川由起子	企業業績予想情報の信頼性の評価と差別化の分析 取引データから見た日経平均オプション市場の特性と裁定機会 の検証 内部資金と銀行貸出の投資への影響：非定常時系列分析 マネー及び信用の実体経済への影響 信用乗数の変化と90年代の低下 日本の経済成長と産業資金供給 —高度成長期前半の金融と証券市場の役割— 新興国の市場機能強化とコーポレート・ガバナンス構築 ：韓国の経験と示唆点	2002.3.31
報告 論集	経済統計と情報技術の新展開	○ 本郷 茂 美添 泰人 後藤 文廣	第1章 経済情報システムの構築 第2章 探索的データ解析と景気指標 第3章 ノンパラメトリック最小2乗法について 第4章 経済分析における統計的手法の問題点 第5章 統計データアーカイブと今後の展望 第6章 小地域統計の推定手法と応用 第7章 全国物価統計調査の特徴 第8章 経済統計に関するいくつかの話題	2005.3.31

<法学研究センター研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第1号	協同組合法の研究	山崎 敏彦 関 英昭 神長 勲 ○ 和座 一清 菊地 元一	農業協同組合のなした「員外保証」の効力についての最近の下級審判決例 協同組合の法的性質—商人性・営利性・企業性を中心として— 協同組合と「理事会」制度—改正農協法の問題点— 協同組合法研究への行政法学的アプローチ	1993.3.15
第2号	各法領域における戦後改革	○ 佐々木高雄 大石 泰彦 高窪 貞人 梅 善夫 佐藤 和男 江泉 芳信	戦後改革におけるマッカーサー・ノートの役割 言論法における戦後改革—名誉毀損における“真実性証明による免責”の導入を中心に 刑事訴訟法における英米法の導入 民事訴訟法の戦後改革序説—昭和23年法律149号「民事訴訟法の一部を改正する法律」— 国際法と極東国際軍事裁判所 国際私法における戦後改革	1993.3.15
第3号	住民としての外国人の法的地位に関する諸問題	○ 江泉 芳信 棚村 政行 神長 勲 芹沢 斉 久保 茂樹	外国人労働者の事故補償の問題 外国人労働者の労働災害と民事責任 外国人の公務就任をめぐる問題	1995.3.31
第4号	国際結婚の今日的問題の法学的検討	Gerald Paul McAlinn ○ 神長 勲 江泉 芳信 Karl- Friedrich Lenz 藤川 久昭	International Marriage—An American Perspective 「国際結婚と出入国管理行政」 国際結婚をめぐる国際私法問題 国際結婚と国際年金法	1998.3.31

号数	プロジェクト名	所員	内 容	刊行日
第5号	コーポレート・ガバナンスの総合的研究	○ 吉田 直正 土橋 友明 済藤 高橋	第I部 定義 (Definitions) 第II部 会社の目的および活動 第III部 会社の構造 第IV部 注意義務および経営判断の法理 第V部 公正取引義務 第VI部 支配権取引および公開買付における取締役および株主の役割	1998.3.31
第6号	日米政治意識の研究	河野 勝 田中 愛治 ○ 大石絃一郎	I 日米国民の意識に関する比較分析 II Electoral Participation in Japan: A Comparison of Two Different Levels of Elections, 1999-2000 III アメリカ政治社会と女性—GSS データ分析	2002.3.31
第7号	非営利法人法の研究	○ 関 英昭 山崎 敏彦 中村 芳昭	I 非営利法人制度の基本問題 II 非営利法人における情報開示・公開について—状況の整理と若干の検討— III 非営利法人税制の諸問題	2002.5.31

<経営研究センター研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号数	プロジェクト名	所員	内 容	刊行日
第1号	国際環境の変動と企業の対応行動	○ 小林 保彦 林 伸二 橋川 武郎 鈴木 安昭	企業の外部環境への対応行動としての広告コミュニケーションに関する国際比較研究 —クリエイティブディレクターに関する国際比較研究— 国際間の企業の合併・買収 (M & A) 後の組織統合についての組織理論的研究 —日本企業— 外国企業・外資系企業の日本進出に関する研究—国際カルテルと日本の国内カルテル・1932年の石油カルテルをめぐって—	1992.7.31
第2号	わが国会計制度の成立にインパクトを与えた外国会計思考	岡下 敏 万代 勝信 稲垣富士男 杉山 学 斎藤 真哉 ○ 小林 健吾 東海 幹夫	わが国への簿記の導入とその定着 ドイツ会計思考の導入 わが国の会計に影響を与えたアメリカの会計思考 わが国における複会計思考の導入 監査思考の導入とわが国監査制度の確立 工業会計における部門費勘定の処理 NAA 活動のわが国管理会計実践への影響	1993.1.31
第3号	国際化時代における国内経営基盤再構築に関する企業研究	大島 國雄 坂井 正廣 林 勲 寺東 寛治 ○ 石川 信男 徳重宏一郎	経営の再編成と経営文化 リストラクチャリングのための経営教育：ケース「株式会社・古垣製作所」を中心として 情報システム部門の再構築 —エンドユーザー部門とのかかわりを中心にして— 自動車産業の制度摩擦と戦略 わが国の労働組合の変遷とその再構築 経営多角化と子会社	1993.3.31
第4号	グローバル時代の日本市場に関する総合的研究	田中 正郎 堀越比呂志 橋川 武郎 仁科 貞文 ○ 小林 保彦	日本のマーケティングチャネル戦略の研究 日本のマーケティング理論導入と展開に関する研究 外国企業の日本市場参入とその発展に関する研究 日本のマーケティングコミュニケーションの社会心理的側面に関する研究 日本のマーケティングコミュニケーションに関わる制度の研究	1995.3.31
第5号	経営学教育論の研究—理論の実践化をめざして	○ 坂井 正廣 林 勲 玉木 欽也	第1章 ケース・メソッド研究：ケース・メソッドとその教授法 第2章 ケース研究：「北斗ソフトウェア・プランニング株式会社」とその分析 第3章 意思決定のためのシミュレーション・システム 第4章 DSS モデリング技法としてのシミュレーション 第5章 生産管理および生産技術に関する理論と実態調査方法 第6章 生産管理および生産技術に関するケース研究の結果	1995.3.31
第6号	ヨーロッパの市場統合と企業活動	○ 相澤 啓一 岡下 敏 齋藤 真哉 万代 勝信 田中 正郎	統合ヨーロッパのアイデンティティをめぐるヨーロッパ共同体における会計制度の確立過程 EUにおける会社法の調整—ドイツにおける第4号指令の国内法化— ヨーロッパ共同体における会計基準の調和化のもう一つの流れ—ヨーロッパ株式会社— ヨーロッパ市場におけるマーケティングチャネル管理	1997.3.31

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第7号	経営学教育における教材の開発	坂井 正廣 ○ 林 勲 長谷川 信 玉木 欽也	第1章 ケース・メソッド学習準備論：ケース分析とケース討論の基礎—ロバート・ロンシュタットの所説に拠りながら 第2章 ケース研究：「営業所長の困惑：安藤工業株式会社」とその分析 第3章 ビジネス・ケース・モデルの開発 第4章 教育用シミュレーション対管理者用シミュレーション 第5章 経営史教育のためのケース研究（1）—戦前期のテレビジョン開発 第6章 経営史教育のためのケース研究（2）—戦後のテレビジョン開発 第7章 生産技術・生産管理に関する教材の事例研究 第8章 「コンピュータグラフィックシミュレータを利用した生産情報管理」のマルチメディア演習用教材の計画	1998.3.31
第8号	情報ネットワーク社会における企業経営の諸問題	森本 三男 徳重宏一郎 森川 信男 ○ 小林 保彦	企業統治と経営者組織 組織の部門間調整と情報技術 情報ネットワーク化とオフィス環境の革新 メディア革新とマーケティング・コミュニケーション	1998.3.31
第9号	ネットワークコンピューティング時代における経営組織に関する総合的研究	森 雅俊 玉木 欽也 蜂谷 豊彦 三村優美子 ○ 田中 正郎	サプライチェーンマネジメントにおける理論と支援する情報システムの考察 SCMを支えるERPパッケージ導入の評価と課題 SCMにおける最適化の検討 新製品開発段階におけるサプライチェーンマネジメント指向 資材調達計画のフレームワーク 制約条件の理論とスループット会計 卸売業の構造と機能 リテイル SCMの動向と課題	2000.3.31
第10号	企業情報の長期時系列に関する研究—上場廃止会社沿革データベースの作成と財務分析法の開発—	○ 大矢知浩司 黒川 哲夫 金川 一夫 薄井 彰	上場廃止会社沿革データベースの作成 全国上場会社の上場異動と社名変更 紙・パルプ業界における合併の会計処理と効果分析 クリーンサープラス会計と株式評価：モデルとその検証	2000.3.31
第11号	鉄道産業の総合経営力評価	○ 太田 雅文 須田 昌弥 井口 典夫 高嶋 裕一 加藤 篤史 荒木万寿夫	第1章 都市構造と鉄道経営との関係分析 第2章 補論：鉄道各社の特色とその経営環境 第3章 鉄道事業の市場特性分析と分離・分割政策への示唆 第4章 不完備契約理論に基づく鉄道事業の上下分離政策の評価 第5章 鉄道産業におけるIT化の現状分析	2002.2.28

<国際政治経済研究センター研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第1号	米ソ関係の総合的研究	○ 永井陽之助 木村 明生 吉田 靖彦 土山 實男 阪中 友久 伊藤 憲一 袴田 茂樹 山本 満 猪木 正道 入江 通雅	歴史の中の冷戦 ソ連邦の消滅と今後 米ソ経済の比較と経済計算論争 冷戦後の核抑止 西太平洋の安全保障レジームを求めて 変容する米ソ関係の展望と意味 ソ連社会主義とベレストロイカの再検討 国際政治経済秩序の模索	1993.3.15
第2号	契約の概念と形態に関する国際比較（第一分冊）取引と契約の国際比較：学際的アプローチ	○ 深町 正信 速水佑次郎 本名 信行 港 徹雄 井出 静 櫻井 雅夫 斎藤 鎮男 太田 浩	キリスト教における契約の概念とその社会的含意 アジア農村共同体の基礎理念と契約形態 雇用契約の概念と表現の日米比較：社会言語学的アプローチ 企業間取引構造：日米欧比較分析 経済改革下の中国国営企業の契約 中国の契約についての歴史的展望 日本法上の契約と国際合弁契約 国際機関におけるコンセンサス 社会契約による都市形成モデル：空間経済的アプローチ	1992.10.10

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第2号	契約の概念と形態に関する国際比較 (第二分冊) Issues in The Concepts and Forms Contracts	速水佑次郎 本名 信行 丸山 孫郎 太田 浩 萬 勲 R.MCILROY	Agrarian Contracts, New Technology and Land Reform in the Philippine Rice Bowl The Concept of Employment Contracts: A Cross-Cultural Study Non-legal Contract-like Practice and Paracontractual Requirements A Spatial Theory of Social Contract Formation Economic and Judicial Views of Contract: A Comparative Note	1992.5.11
	契約の概念と形態に関する国際比較 (第三分冊) THE ECONOMICS OF CONTRACT CHOICE	速水佑次郎 大塚啓二郎		1993.2.16
第3号	日米経済関係の経済学的・経営学的研究	○ 仙波 憲一 本田 重美 高森 寛 堀内 正博 小菊喜一郎	日米の設備投資環境の比較分析—q投資理論によるアプローチ— 日米国際産業連関モデルと輸入調整の研究 The Bond Market Efficiency and The Term Structure of Interest Rates ハードランディング説の展望—アメリカ経済危機論争と日米関係—	1994.3.31
第4号	中国の将来像に関する研究	○ 石川 滋 杜 進 森本 三男 港 徹雄 奥崎 裕司 井出 静	第1章 中国の将来像：序説 第1章補論 中華人民共和国の歴史的背景 第2章 改革・開放下の中国の地域経済成長パターンに関する実証分析—過去・現在・未来— 第3章 中国国有企業の企業改革—過去・現在・未来— 第4章 中国自動車工業の発展と企業間分業体制 第5章 官僚制の歴史から見た現代中国 第6章 改革解放後中国人の価値観の変化	1995.3.31
第5号	東欧・中欧及び旧ソ連の市場化組織、個人、社会心理的側面	袴田 茂樹 寺谷 弘壬 佐藤 和男 ○ 丸山 孫郎 相澤 啓一 茂 牧人	ロシアの民営化と日本の対口人道支援 ロシア・旧ソ連の民営化とその諸問題 ポーランドの経済改革の初期段階と企業民営化問題 ポスト冷戦期のポーランド安全保障問題 YOUNG HUNGARIAN MANAGERS IN FOREIGN JOINT VENTURE FIRMS IN 1993 MANAGEMENT IN SOCIOCULTURAL ENVIRONMENT: HUNGARY1992 AVOIDING SOME INCORRECT ASSUMPTIONS IN THE MANAGEMENT REFORM IN CENTRAL AND EASTERN EUROPE BANKRUPTCY GAME, INACTIVE SAVING, SUBVERTED BONUS AND PRIVATIZED SOCIALISM; SURVIVAL STRATEGIES IN POST-SOCIALIST COUNTRIES POST-PROJECT ADDITIONS OF DATA AND ANALYSIS 統一ドイツにおけるナショナリズムをめぐるドイツにおける外国人問題	1995.3.31
第6号	国際コミュニケーションにおける言語と文化	○ 中田 清一 本名 信行 橋本 光郎 田辺 正美 Reniker, S. J. 狩野 良規 Evanoff, R. J. 竹下 裕子	第2言語獲得研究の系譜と展望 問題だらけの日本の英語教育 English in Singapore: A Description and an Interpretation Teaching Japanese as an International Language in Asia-A Case Study in Thailand ネットワーク英語学習のタイポロジー コミュニケーションと言語教育 Intercultural Ethics: New Ways of Learning to Get Along with Each Other Language & Culture in international 'Communication—The New Era in Chinese Film and Culture—	1996.3.31
第7号	ファイナンスの国際化と研究・教育	○ 諸井勝之助 高森 寛 堀内 正博 中里 宗敬 蜂谷 豊彦 斎藤 進	ファイナンスの国際化と研究・教育 —ファイナンスの基礎と若干の重要問題— 情報化・国際化の進展と研究・教育の革新 —ファイナンス研究・教育における新しい試みを中心として— 債券市場の効率性と価格形成 Computational Finance—理系出身者へのファイナンス教育— 日本企業の資本コスト意識 動的資産評価理論—離散時間・多期間モデル—	1997.3.21
第8号	冷戦後の国際政治学キーワードの再検討	○ 永井陽之助 土山 實男 山本 吉宣 山影 進 袴田 茂樹 ※ 大島 英樹	ポリティカル・エシックス—核と生命科学の倫理— インターナショナル・アナーキー 国際レジーム 国際関係の協力と制度—ASEANとAPECの場合— 秩序とスチヒーノスチー日本社会とロシア社会— ナショナル・インタレスト	1998.3.31

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第9号	日本の国際貢献としての「環境外交」の現状とその可能性	○ 太田 宏 菊池 努 河野 勝 渡邊 昭夫	序章 第1章 日本の環境外交の形成過程とその概要 第2章 国際貢献としての環境外交： グリーン・エイド・プランの国内政策過程 第3章 気候変動問題の政治的現状分析：京都議定書と日本の立場 第4章 ASEANと「煙害(Haze)」問題—「内政不干渉原則」を越えて— 第5章 環境分野での日米のコモンアジェンダ・プロジェクト—インドネシアの事例報告—	2002.3.31

<理工学研究センター研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第1号	機能性炭素化合物に関する研究	○ 松本 修 鮫島 達也 星 敏彦 光延 旺洋 犬塚 直夫 魚住 清彦	種々の炭素質膜の合成 新しい機能性を持つタンパク質のデザインと合成 機能性物質の電子構造と分子間相互作用 有機導電性化合物の合成 ダイヤモンドの低圧気相合成と評価 機能性物質の解析と評価	1992.2.21
第2号	高温超伝導体の研究	○ 秋光 純 池田 正幸 藤木 英夫 松本 修 國岡 昭夫 中田 時夫 永田勇二郎 澤 孝幸 内田 孝幸	新しい超伝導体の探索と超伝導機構の解明にむけて 銅酸化物高温超伝導体の理論 高温超伝導体関連酸化物反強磁性体の結晶構造の電子顕微鏡による研究 プラズマを用いた超伝導体生成の試み BSCCO 超伝導薄膜の作製とその応用性 良質の単結晶を用いた酸化物高温超伝導体の物証測定	1992.3.31
第3号	生産管理用知識ベースシステムの構築に関する研究	○ 田部 勉 辻 正重 平野 順三 坂元 克博 古谷野英一 黒田 充 阿部 俊一 安瀬美知子	プロジェクト総括・ファジィ理論・スケジューリング 生産管理業務統合化のための協調型ネットワーク構築法 スケジューリング用知識抽出と表現に関する研究 生産計画へのファジィ理論の応用研究 ファジィ理論による工程編成業務の省力化研究 ネットワーク型システムの信頼性研究	1992.3.12
第4号	画像解析にかかわるデジタル信号処理とその応用	○ 隆 雅久 豊田 吉顯 馬渡 鎮夫 二宮 理恵 矢頭 攸介 岡田 昌志 竹本 幹男 富山 健 小川 和雄 中村 厚子 鈴木 祥加 矢野 文彦	1. 光弾性画像におけるデジタル信号処理 2. 潜熱蓄熱によるエネルギー有効利用 3. デジタル信号の逆問題処理による高速亀裂の定量化と映像化 4. 不定形物体の画像認識と応用 5. ノイズ—色々なノイズ 6. ニューラルネット及びオブジェクト指向からのアプローチ 7. AE 原波形解析のための AE 検出波雑音対策 8. 高分子材料における破壊面形態のデジタル信号による定量評価	1992.3.31
第5号	生体機能をモジュールしたロボットの開発	○ 井出 英人 柏木 浩光 富山 健 林 洋一	総括。システム構成の検討 介護ロボットに用いられる音声信号処理に関する基礎的研究 インテリジェントロボットシステムの設計試作 高性能交流サーボシステムの開発	1991.12.20
第6号	動的 AI とそれに基づくインテリジェントロボットシステム	○ 富山 健 原田 実	第1章 研究プロジェクト総括 第2章 ロボットシステム 第3章 機械図面の自動認識 第4章 不定形物体の認識 第5章 動的 AI によるロボット制御	1993.2.15
第7号	遺伝子操作と化学合成による生理活性タンパク質の構造機能相関の解明	○ 鮫島 達也 梶 裕之 伊藤 尚 津吹 聡	遺伝子操作と化学的方法による酵素およびタンパク質の構造機能相関の解明 生理活性ペプチドの合成とその構造と活性に関する研究	1993.3.25

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第8号	重水素—固体系核反応に関する基礎的研究	○ 木村 幹 松本 修 宇山 晴夫 中村 弘	重水素—固体系核反応に係る計測法の開発 電解による重水素—固体系核反応の研究 常温核融合反応についての一考察	1993.3.31
第9号	耐環境性極限電子材料の開発に関する基礎的研究	○ 犬塚 直夫 太田 恵造 栗村 靖子 國岡 昭夫 中田 時夫 内田 孝幸 永田 勇二郎	ダイヤモンド薄膜の成長とエピタキシー 非晶質磁性体及び金属間化合物の構造と磁性との関係 高温センサ材料の研究 高温動作光センサの開発 酸化物導体及び酸化物超伝導体に関する研究	1992.7.31
第10号	居眠防止システムの基礎的研究	○ 二宮 理恵 井出 英人 矢頭 攸介 船田 眞理子	接触型から非接触型居眠り検出センサーへと 群発 a 波の検出装置の設計作製 映像データの解析 脳波…非定常な生体電気現象	1993.3.15
第11号	強相関電子系の理論的研究	○ 金 徳洲 池田 正幸 塩谷 百合	強相関金属電子系での電子格子相互作用の理論 銅酸化物超伝導体と強相関の効果	1994.3.25
第12号	機能的物質の合成と物性に関する研究	○ 西尾 泉 魚住 清彦 星 敏彦 小野 薫 稲吉 倫子	機能的物質の構造と物性 機能的物質の構造解析 機能的物質の電子構造	1994.3.25
第13号	デジタルデータの構造依存型雑音処理	○ 竹本 幹男 隆 雅久 岡田 昌志 豊田 吉顯 矢野 文彦 矢頭 攸介 小川 和雄 隆 雅久	アコースティックエ・ミッションにおける原波形解析と雑音処理 光弾性画像処理データの雑音処理と構造依存型応力解析 水溶液中で満たされた多孔質体の凍結過程の熱物質移動 スプライン平滑化技法の雑音処理への適用とその自動化手法の開発 雑音処理におけるマン・マシーンインタフェイスの開発 走査型電子顕微鏡画像データの雑音処理と画像処理	1994.2.26
第14号	ソーラーカーの開発・研究	○ 國岡 昭夫 中田 時夫 林 洋一 村尾 麟一 寺崎 和郎 田中 秀明 松浦 健児 武士 貞助 岩井 實	1. プロジェクト目的 2. 太陽電池の開発研究 3. ソーラーカー用原動機の開発研究 4. ソーラーカーの空力特性 5. 競技用ソーラーカーの試作 6. 競技会への参加 7. 今後の問題点	1994.3.31
第15号	メカトロニクス高性能化のための要素技術	○ 林 洋一 井出 英人 柏木 浩光 持丸 正義	超伝導モータと磁気軸受 ロボット技術とその応用 DSP によるデジタル信号処理 電力増幅器の高性能化	1994.2.21
第16号	戦略的生産管理システム	○ 辻 正重 坂元 克博 坂本 泰祥 古谷野英一 田部 勉 大石 進 河内谷幸子 安瀬美知子 阿部 俊一 安瀬美知子	第1章 はじめに 第2章 戦略的生産管理システム構築法 第3章 CIM 化における画像情報の利用 第4章 ネットワーク型システムの信頼性	1994.3.1
第17号	総合研究所研究用ネットワークのあり方	○ 富山 健 鈴木 宏昭 近藤 泰弘	第1章 研究プロジェクト総括 第2章 ネットワーク構成 第3章 ネットワーク機能 第4章 ネットワーク管理 第7章 まとめ 第5章 管理用 WS 上のソフトウェア 第6章 今後の課題	1995.3.1

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第18号	核酸の配列特異的開裂反応の研究	○ 光延 旺洋 鮫島 達也 藤澤 敬一 梶 裕之 桜井 宣彦	第1章 核酸修飾反応剤のデザイン 第2章 アリル基またはプロパルギル基をもったペントフラノシド誘導体の合成 第3章 プロパルギル2、3、5-トリ-0-ベンゾイル-B-D-リボフラノシドの官能基変換—エンジン骨格をもつ糖誘導体の合成を指向した反応 第4章 アリル リボフラノシド誘導体のアリル基の変換 第5章 2-C-アリルアラビノフラノシドのアリル基の変換 第6章 オリゴデオキシリボスクレオチドの修飾と開裂 第7章 各種反応剤の抗菌性	1995.3.15
第19号	新しい高温超伝導体の設計と探索	○ 永田勇二郎 秋光 純 富本 晃吉 内田 孝幸	1. 銅酸化物高温超伝導体の探索と電子物性の研究 2. 非銅系酸化物および化合物の探索と電子物性の研究 3. 報文リスト 4. 主要報文	1995.2.25
第20号	時系列処理の応用に関する研究	○ 橋本 修 井出 英人 柏木 浩光 二宮 理憲 持丸 正義	散乱解析の時系列処理 動作解析の時系列処理 音声認識、話者認識の時系列処理 生体電気信号の時系列処理 音声信号の時系列処理	1994.4.4
第21号	多階層動的システムの構造解析とその応用	○ 豊田 吉顯 富山 健 石津 昌平 矢野 文彦	視覚的システムの構築と実用化 時系列測定による動作の解析とシミュレーション 品質に着目した技術知識獲得 マン・マシン・インターフェイスの構築	1995.2.20
第22号	ファジー構造及びフィードフォア ループ構造を含むヘルスタイナ ミックスモデルの構築とその適用 —血液事業を例として—	○ 藤澤 敬一 長谷川輝紀 馬渡 鎮夫	第1章 研究プロジェクトの総括 第2章 日本の血液事業とその問題点 第3章 輸血学の臨床的研究の現状 第4章 血液在庫制御理論の構築とその適用 第5章 単一地域規模のヘルスタイナミックスモデル 第6章 今後の課題	1995.3.12
第23号	ハイブリッド光弾性応力解析シス テムの開発	○ 隆 雅久 馬渡 鎮夫 小川 和雄 富山 健 西尾 泉	関数近似型応力・ひずみ解析理論の確立 深さ方向情報を持った多重画像理解 空間に固定された密度揺らぎによる光散乱の研究	1996.3.31
第24号	ソーラーエネルギーの有効利用	○ 國岡 昭夫 中田 時夫 井出 英人 寺崎 和郎 松浦 健児 村尾 麟一 田中 秀明 武士 貞助 林 洋一	1. プロジェクトの目的 2. 太陽電池の開発に関する研究 3. ソーラーカーの特性解析 4. 競技会への参加 5. 今後の課題	1996.2.10
第25号	協調的意思決定支援システム	辻 正重 坂元 克博 坂本 泰祥 ○ 石津 昌平 田部 勉 伊藤 好美 大石 進 阿部 俊一 安瀬美知子	協調的意思決定支援システムへの展開とタイプ 新製品開発における協調的意思決定支援システム 管理業務における協調型意思決定支援システム開発 三次元座標測定機における測定時間の最小化と目的に応じた測定ポイントの選定 協調的意思決定支援システムのシステム評価と信頼性	1996.2.20
第26号	ネットワーク上のCAIプラット フォーム開発と評価	○ 原田 実 鈴木 譲 佐久田博司	第1部 要求文書からのオブジェクトモデル要素の抽出・分類支援システム EXCOM の研究開発 第2部 オブジェクト指向分析の教育支援システムの研究開発 第3部 1:1/N非同期通信による教室システム	1995.12.20
第27号	固体の磁性と電子相関	○ 池田 正幸 Peter Entel 塩谷 百合 杉原 稔 金 徳洲 秋光 純 永田勇二郎 藤木 英夫	高温超伝導体の反強磁性特性、強相関と電子格子相互作用 磁性固体の磁性と体積効果について 新しい高温超伝導体の探索、および、低次元スピン系の理論的に興味ある物性の発見 高性能な磁性材料の探索と物性測定 ペロフスカイト構造の遷移金属複合酸化物の電子顕微鏡による解析	1997.2.21

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第28号	ソフトウェアの生産性向上と開発環境整備のための基礎的研究	○ 稲積 宏誠 岩堀 信子 稲積 宏誠 西島 利尚 稲積 宏誠 榎山 淳雄 曾根 和美 田部 勉 原田 実	グループワークのためのプロセス記述—分散仕様と全体仕様の相互変換アルゴリズム 要求分析における議論モデルと ATMS を用いた履歴情報の有効利用に関する一考察 ソフトウェアプロセス研究の動向 ペトリネットによるソフトウェア開発のためのプロジェクト管理支援の1方法 オブジェクト指向分析システム CAMEO/ A と帰納推論によるルールの学習	1996.2.10
第29号	老化のメカニズムの解明を指向したタンパク質・核酸の研究	○ 伊藤 尚 佐藤 高則 鮫島 達也 光延 旺洋 西尾 泉	Isolation and identification of a target protein for Z-Leu-Leu-Leu-CHO that induces neurite outgrowth マストパランフラグメントによるカテコールアミン放出活性の抑制—ニコチン性アセチルコリンレセプターへの作用— ウシ血球銅・亜鉛スーパーオキシド・ディスムターゼの Subform の成因に関する基礎的研究 核酸の配列特異的修飾・開裂反応の研究：プロパルギルスルホン誘導体とその関連化合物の合成ならびにオリゴデオキシリボスクレオチドとの反応 老化と血液	1996.2.20
第30号	ソーラーカーの高性能化	○ 林 洋一 井出 英人 三栖 功 田中 秀明 松浦 健児	プロジェクトの総括 ソーラーカー AGU Aglaia の設計製作 AGU Aglaia の性能評価 競技会への参加 今後の課題	1998.3.3
第31号	表現関数構成型応力・ひずみ解析法の開発	○ 馬渡 鎮夫 隆 雅久 小川 和雄	第一部 表現関数型応力・ひずみ解析法における構造方程式 第二部 変位・応力・ひずみ表現関数の構成と離散化 第三部 表現関数構成型応力・ひずみ解析法における未定係数の決定法	1998.3.31
第32号	数理物理とその周辺	○ 中村 弘 小池 和彦 井上 政久	再び素粒子物理学 古典群の表現論における組合せ論的方法	1999.1.31
第33号	非線形問題の数値シミュレーションと実験による研究	○ 林 光一 岡田 昌志 斎田 暢三 西尾 泉 佐久田博司 三栖 功 立野 昌義	水素拡散ジェット火災の数値解析 粒子充填多孔質内における過冷却水溶液の凍結 流れの数値シミュレーションにおける粘性の評価—進行衝撃波の傾斜面からの反射形態の遷移について— 水を分散媒とするコロイド系の計算機シミュレーション 汎用解析用クラスライブラリの開発—“Engineer”class library— 非定常壁面せん断応力の計測技術の構築 2 平行板間の溶融はんだ自由表面形状	1999.3.31
第34号	コンピュータ入門教育環境と方法論	大畠 永生 稲積 宏誠 地主 創 藤木 英夫 小倉 裕司 倉次 秀夫 植田 晶子 石津 昌平 ○ 矢頭 攸介 高梨 公孝 安瀬美知子 竹田 賢	文科系学生に対するプログラミング教育 プログラム理解と理解度評価のための空欄補充問題作成 新学習指導要領にともなう情報科目の扱い方 問題作成における感性工学的アプローチ—教育者の感性に合った問題を提供するための方法論	2000.3.31
第35号	テンソル場 CT 法開発のための基礎研究	○ 隆 雅久 魚住 清彦 馬渡 鎮夫 小川 和雄 米山 聡 S. Berezhna	Nondestructive Determination of 3-Dimensional Stress Tensor Field in Elastic Bodies Hybrid Stress Analysis by Construction of Approximate Analytical Solution 三色光粘弾性法による時間依存性応力・ひずみ解析 白色円偏光を用いた新しい画像解析法と光粘弾性解析への適用 走査型超音波探針顕微鏡の動作原理 Crack Growth Behavior in an Epoxy Strip Above and Below Tg	2000.3.31
第36号	高機能性を有する無機薄膜材料	○ 重里 有三	第1章 研究プロジェクト概要 第2章 オゾン添加反応性直流マグネトロンスタッパによるITOの成膜 第3章 Early stages of ITO deposition on polymer substrate	

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第36号	高機能性を有する無機薄膜材料	小川 武史 永田勇二郎 澤邊 厚仁 松本 修	第4章 Thermochromic VO ₂ Films Deposited by RF Magnetron Sputtering Using V ₂ O ₃ or V ₂ O ₅ Targets 第5章 Evaluation of Fatigue Strength and Fracture Mechanism of Thermal Sprayed Material 第6章 Ba _{1-x} K _x BiO ₃ 結晶の輸送特性の研究 第7章 IrO ₂ 電極膜上におけるPZTの配向成長 第8章 プラズマCVDによる機能性薄膜の生成	2001.3.31
第37号	レーザーを用いた高度な計測技術の開発とその応用に関する研究	○ 岡田 昌志 竹本 幹夫 西尾 泉 三栖 功 林 光一	研究プロジェクトの概要 微小空間内における液滴の自然対流の可視化 レーザーを用いた機能物質の力学特性の解明 レーザーを使ったコロイド間相互作用の研究—粘性流体中の結晶：コロイド結晶— 壁面せん断応力変動と流れの可視化画像解析による断乱流における組織構造の解明 燃焼機構の解明—レーザーを用いてジェット着火を明らかにする—	2001.3.31
第38号	マルチボディシステムのダイナミクスと制御に関する研究	○ 小林 信之 渡辺 昌宏 富山 健 古田 貴之 二宮 理憲	第1章 研究プロジェクト概要 第2章 大回転と有限変形を厳密に考慮した柔軟マルチボディシステムの定式化とそのロバスト制御系の構築 第3章 生体における推進機構の解明 第4章 2足歩行ロボットの歩行シミュレーションモデル化手法の構築と知的制御系設計 第5章 腕の振り方が安定歩行に与える影響	2001.11.10
報告論集	機能性硬質表面処理材料の創製と評価	○ 小川 武史 重里 有三 澤邊 厚仁 小川 武史	研究プロジェクト概要 New Technologies in Fabrication of ITO Thin Films: Microstructure and Processing Internal Stress of ITO, IZO and GZO Films Deposited by RF and DC Magnetron Sputtering Epitaxial Growth of Diamond Thin Films on Ir (001) / MgO (001) Stacking by Two-step dc Plasma Chemical Vapor Deposition and Their Characterization ダイヤモンド薄膜剥離の観察とAE検出	2003.10.1
報告論集	生理活性物質の検索と合成	○ 木村 純二 小野 勲 光延 旺洋 稲積 宏誠	研究プロジェクト概要 光延旺洋教授追悼文 生理活性物質の新規合成法の開発 生理活性物質の光化学的研究 データマイニング技術の応用としての生理活性物質発見 海洋生物からの生理活性物質の探索	2004.2.28
報告論集	大規模PCクラスター並列計算機におけるノード間通信の最適化問題	○ 久保 健 古川 信夫 羽田野直道 山崎雄一郎 中田 寿穂	1. 概要 2. 大規模PCクラスター並列計算機におけるノード間通信の最適化 3. 量子スピン系対角化プログラム Titpack の並列化 4. 付録：MPIによる並列プログラミング 5. Ethernet 及び Myrinet 2 Kを用いたノード間通信の最適化 6. 成果報告 7. 教育用 Windows PC 環境における超並列計算機の構築について 8. 計算アルゴリズムの改良によるノード間通信の最適化	2004.12

<キリスト教文化研究センター研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第1号	信仰（キリスト教）と科学技術	○ 廣瀬 久允 高橋 道雄 小畑 耕郎	信仰と科学技術—技術編—	1992.3.31
第2号	メソジスト教会の歴史資料収集	○ KRUMMEL J. 気賀 健生 井田 昌之 清水 正	I Articles II The Biographies III Appendices	1992.8.1

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第3号	キリスト教生命倫理研究	石原 博子 棚村 政行 茂 牧人 ○ 東方 敬信 三輪 修三	生命観の変遷 生命倫理と法 自己意識としての生命 先端医療技術とキリスト教 生命倫理と地球時代の神学 技術、技術者、技術倫理	1993.2.27
第4号	キリスト教教育研究	東方 敬信 松川 成夫 佐藤 敏夫 大曾根良衛 ○ 伊藤 久男 野里 房代	キリスト教教育の存在意義をめぐって キリスト教に基づく教育の原理 日本における弁証法的神学とキリスト教教育 ドイツにおける初等学校の宗教教育 —Baden-Wuttenberg 州の Grandschule を中心として— プロテスタント・キリスト教学校の現状と課題 —アンケート調査にもとづいて—	1994.3.30
第5号	来日メソジスト宣教師資料収集	○ KRUMMEL, J. 気賀 健生 井田 昌之 矢部 義之	文化的移行を取り次ぐ者としての来日メソジスト宣教師 「研究用 TOOL 整備」のプロジェクト ネットワーク時代の出版 日本の近代化への多大な貢献と神の御業	1995.3.31
第6号	アメリカ・プロテスタント思想史	鈴木 有郷 ○ 東方 敬信 山岡 健 清水 正 古賀 節子 小玉 晃一	アメリカ・プロテスタント思想とアメリカのヴィジョン アメリカのエートスの変遷とプロテスタンティズム —1950年代から80年代を焦点に— アメリカ・プロテスタンティズムへの一考察 アメリカ社会への聖書の影響 アメリカのキリスト教とフェミニズム ティリッヒとアメリカ・プロテスタンティズム ティリッヒのプロテスタント論 アメリカ公共図書館の成立とプロテスタンティズム 相馬愛蔵・黒光夫妻と井口喜源治をめぐって	1995.3.31
第7号	日本における初期メソジスト各教派の史料蒐集	○ KRUMMEL, J. 気賀 健生 深町 正信 塩入 隆	1. 序文・日本における初期メソジスト各教派の史料蒐集 —初期メソジスト教会史料目録— 2. 青山学院特別資料室所蔵史料（各種年会記録・議事録等） 3. 北米メソジスト・エписコパル教会の宣教師史料 4. Source Materials for the Study of the History of the Japan Missions of the Evangelical Association/Church, the Methodist Protestant Church, and the Church of the United Brethren in Christ 5. カナダ・メソジスト教会関係史料 6. カナダ・メソジスト・ミッション東海静岡地区宣教師および文献・史料	1996.7.31
第8号	キリスト教と人権・平和問題研究	深津 容伸 ○ 鈴木 有郷 支倉 壽子 ※ 関田 寛雄 梶原 壽	エロヒストの編集—その人道主義的傾向— 平和への希求—紀元前八世紀の世界的視座— アブラハム・リンカンにおける奴隷解放と聖書の信仰の関連 現代の女性の人権を考えるためのノート —フェミニズムとキリスト教の対話— 在日韓国・朝鮮人の人権と意識変革の問題 M.L. キングの統合思想のゆくえ —アメリカ少数民族の人権問題—	1999.3.31
第9号	19世紀欧米におけるキリスト教教育に関する研究	○ 池田 稔 北本 正章 大森 秀子 茂 牧人 上野 亮	19世紀前半期イギリスにおける教育と宗教 —公教育体制成立基盤としての宗教・民衆文化：メソジスト派日曜学校の教育史的意義について— 近代イギリスにおける子ども観の社会史的展開とその宗教的背景 —Victorian Family の社会史的位相をめぐって— 19世紀アメリカにおける公教育とキリスト教 —『マクガフィーのリーダーズ』（初版）の分析— 〈絶対依存の感情〉の人間論 フレーザーにおける宗教教育思想に関しての一考察	2001.3.31

<学際研究プロジェクト研究叢書>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

号 数	プロジェクト名	所 員	内 容	刊行日
第1号	二一世紀における自由・権利・正義	○ 佐藤 節子 坂本 百大 石井 信之 関 英昭 梅津 順一 鮫島 達也 高木美也子	「権利」の実体化批判—権利拡大の諸相との関連— 自由・権利・正義の諸概念をめぐる二一世紀的転回 アダム・スミス思想体系の現在の有効性と将来的妥当性 —スミス正義・自由論の通事的意義— 「営業の自由」と「法人の設立」 二一世紀における民間非営利組織（NPO）の可能性 —歴史からの視点— 地球環境・エネルギー問題の動向 —二一世紀における問題解決への模索— バイオテクノロジーの権利と責任	1997.3.31
第2号	ヒューマニズム理念の再構築と共生	○ 伊藤 定良 芹沢 斉 茂 牧人 松尾 精文 丸山 千秋 三嶋 輝夫 酒田 利夫 ※ SCOTT REE	ドイツ・ナショナリズムとマイノリティ 外国籍住民の地方参政権 他者の他者性について—フッサールからレヴィナスへ— 町村合併に起因した争論における合意形成過程の事例分析 障害児・者と社会 外国人、しかも売春婦—伝デモステネス『ネアイラ弾劾』を めぐって— イギリス近世都市における危機と共生 Multiculturalism, Social Justice and the Politics of Identity in Canada	1998.3.31
第3号	変容する英語圏の社会と文化	九頭見一士 佐川 和茂 堀 真理子 ○ 芦原 貞雄	アイルランドに吹く風—変容する英語圏の社会と文化 ：アイルランド共和国の場合— 変容するユダヤ系アメリカ人の社会と文化 演劇とジェンダー —異性装の役割とその今日的意味についての—考察— 変容する英語教育 —文法中心からコミュニケーション中心へ—	1998.3.31
第4号	創造的問題解決法に関する学際的研究	○ 辻 正重 鈴木 宏昭 高森 寛 堀内 正博 Karl- Friedrich Lenz 本郷 茂 辻 正重 安瀬美知子 坂元 克博 小林 三郎 高梨 公孝	創造的問題解決に関する—考察 認知科学における創造的認知研究の動向と課題 —洞察問題解決のメカニズムを中心として— コンフリクト状況の創造的解決—メタゲームとドラマ理論— 問題解決の方法論としてのソフトシステム思考 法学からみた創造的問題解決法 経済における問題解決の取り組みと問題解決支援のための一 道具について 問題解決教育支援システムの開発 アサヒ・ビール（株）の財務分析—主成分分析による方法— 多ケース対応型問題解決法教育支援システム	1999.3.31
報告 論集	メディアの異文化間影響力	Browne, C.M. Culligan, B. ○ Jungheim, N.O. Menish, M.	CALL Lab Design 101: Proceed at Your Own Risk Comprehending the Aural in a Visual Media Perception of Gestures in Japanese Media: The Interpretation Refusals in Two Contexts Effective Utilization of Visual Media in the Classroom	2004.3.31
報告 論集	WTOの制度および管轄領域に関 わる分野横断的研究	○ 岩田 伸人 松下 正弘 谷原 修身 飯田 敬輔 高瀬 保 会田 弘継	序章：WTO情報とメディア 解題（序章）「情報化社会とWTO」 第1章：重層的通商政策とWTO 第2章：重層的通商政策とWTO（第1部） 第3章：重層的通商政策とWTO（第2部） 解題（第1～3章）「重層的通商政策とWTO」 第4章：WTOのセーフガード 第5章：米国における暫定セーフガード発動の仕組みと課題 第6章：TRIPSの問題 第7章：並行輸入 第8章：並行輸入の取扱いと医薬品貿易 第9章：中国とWTO 解題（第4～9章）「SG措置の問題」 第10章：WTO第4回閣僚会議の意義と展望 付記（総括）：WTO交渉とFTA交渉：「公正」と「効率」	2004.3.31

<市販本（センター別）>

○印 プロジェクト代表 ※印 執筆協力者

研究センター	タイトル（プロジェクト名）	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
人文学系	自然とヴィジョン—イギリス・アメリカ・アイルランドの文学— (イギリス・アメリカ・アイルランドにおける文学と自然)	○ 青山富士夫 橋本 清一 倉本 譲 高田 賢一 佐藤 紀子 佐藤 亨	第1章 逍遙詩人ワーズワス—地霊との交わり 第2章 『嵐が丘』における自然描写について 第3章 ソーロウ—神を求め、自然の仲間と生きる 第4章 過去の風景—マーク・トウェインと自然 第5章 シングとアラン島 第6章 グリーンマン、シェイマス・ヒーニー	2002.2.28	北星堂書店	2,800円
	コーパスに基づく言語研究 文法化を中心に (コーパスに基づく言語研究)	○ 秋元 実治 尾形こづえ 遠藤 光暁 近藤 泰弘 Elizabeth Closs Traugott	第1章 文法化 第2章 as/so far as と as/so long as 構文に見られる文法化とイデオム化 第3章 助動詞性と本動詞性—「venir +不定法」構文の文法化 第4章 中国語の“来”の文法化—『老乞大』諸本におけるテンス・アスペクトマーカーの変化を中心として— 第5章 日本語コーパス言語学とコンピュータ処理 第6章 Exaptation and Grammaticalization	2004.3.20	ひつじ書房	3,200円
	Language and Perspectives from Linguistics and Language Education (言語理解の理論と実際)	Hiroshi Yoshiba 谷 美奈子 ○ Donald L. Smith Shuichi Nobe Gregory Strong Peter Robinson	Chapter 1 Segment/Prosody Dichotomy and Cognition Chapter 2 言語理解と主題役割—心理動詞の場合 Chapter 3 English as a Shadow Lexifier of Japanese Chapter 4 The Motions of Clothing the Body in Japanese and English Chapter 5 Toward a Model of Gestures of Foreign Language Speakers Chapter 6 Developing an EAP Lecture Course and Assessing It with Action Research Chapter 7 Cognitive Prerequisites for Incidental Second Language Learning Chapter 8 Comprehension, Cognitive Complexity, and Task-based Language Production and Acquisition	2004.3.31	くろしお出版	4,500円
経 済	資本主義はどこに行くのか二十世紀資本主義の終焉 (資本主義はどこに行くか Quo Vadis, Capitalism)	○ 三和 良一 加藤 榮一 馬場 宏二 平出 尚道 田野 慶子 上田 章 杉浦 勢之	序 章 資本主義はどこに行くのか？ 第一部 二十世紀資本主義の歴史的位置 第一章 資本主義の発展段階—経済史学からの接近— 第二章 二十世紀福祉国家の形成と解体 第三章 資本主義の来し方行く末—過剰富裕化の進展と極限— 第二部 二十世紀資本主義への視座 第四章 アメリカ型資本主義の創出と経済政策思想 第五章 ドイツ資本主義とナチズム 第六章 バブル崩壊とグローバル資本主義 第七章 欲望の「見えざる手」	2004.3.15	東京大学出版会	3,800円
	事例で学ぶ GIS と地域分析 ArcGIS を用いて (GIS を用いた大学教育支援システムの構築と実証的検討)	○ 高橋 重雄 井上 孝 三條 和博 橋本 雄一 戸田 真夏 高橋 朋一	第1章 GISの基礎知識 第2章 データの入手と加工 第3章 ArcGISの基本操作 第4章 地形の分析 第5章 土地利用の分析 第6章 文化的事象の分析 第7章 人口の分析 第8章 都市環境の分析	2005.3.29	古今書院	3,000円

研究センター	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
経 済		吉崎 光哉 須田 昌弥 平井 誠 田中 耕市	第9章 農業の分析 第10章 商業の分析 第11章 数値地図の変換 第12章 地図画像の変換 第13章 測地系と座標系 第14章 GISをよりよく使うために —社会科学におけるGISの現状と将来—			
法 学	現代アメリカのこころと社会 (アメリカ政治社会の諸相)	○ 大石絃一郎 神長百合子 石井 光 田中 愛治	序 章 アメリカ社会とキリスト教 第1章 アメリカ政治社会と黒人 第2章 アメリカ女性の現在 第3章 アメリカと犯罪 第4章 揺らぐアメリカン・デモクラシーへの信頼 終 章 アメリカはどこへ	1997.3.31	朔北社	2,500円
	ニュージーランド先住民 マオリの人権と文化 (ニュージーランドにおける人権と法)	○ 平松 絃 申 恵丰 ジェラルド・P・マクリン	第1章 マオリの人権概史 第2章 マオリの人権状況 第3章 国際人権保障とマオリ 第4章 マオリの物的・知的財産権 第5章 マオリの宗教と法	2000.3.31	明石書店	2,400円
	現代オーストラリア法 (オーストラリアの司法システムと法学教育)	○ 平松 絃 金城 秀樹 久保 茂樹 江泉 芳信	第1部 オーストラリア法概説 第2部 現代オーストラリア社会と法の諸相 第1章 アボリジニの権利と法 第2章 オーストラリアの環境問題と環境法 第3章 オーストラリアの行政法と行政審判所 第4章 法学教育とIT	2005.3.15	敬文堂	2,500円
経 営	日本会計制度成立史 (わが国会計制度の成立にインパクトを与えた外国会計思考)	○ 小林 健吾 岡下 敏 万代 勝信 稲垣富士男 杉山 学 斎藤 真哉 小林 健吾 東海 幹男	序 章 会計士研究の方法 第I章 我が国への簿記の導入とその定着 第II章 ドイツ会計思考の導入 第III章 わが国の会計に影響を与えたアメリカの会計思考 第IV章 わが国における複会計思考の導入 第V章 監査思考の導入とわが国監査制度の確立 第VI章 工業会計における部門費勘定の処理 第VII章 NAA活動のわが国管理会計実践への影響	1994.1.23	東京経済情報出版	3,800円
	公益事業の評価と展望 (公益事業政策の動向と料金)	○ 浅沼 美忠 井口 典夫 東海 幹夫 野村 宗訓	第1部 投資・資本・料金の相互関係 第2部 経営効率と料金政策 第3部 情報開示と会計政策 第4部 制度改革と政策展開	1999.3.25	日本評論社	3,200円
	グループ経営の管理会計 (現代の企業組織の変革に関する会計学的考察)	○ 高橋 邦丸 田中 隆雄 高橋 邦丸 挽 文子 横田 絵理 東海 幹夫 尹 志煌	第1章 グループ経営の現状と課題 第2章 企業再生のための経営統合と持株会社 第3章 日本企業のコーポレート・ガバナンス 第4章 リソース・ベースト・ビュー (RBV) に基づいた多角化戦略 第5章 グループ経営戦略の策定と実行を支援するマネジメントシステム 第6章 連結体制後の海外日系子会社のマネジメント・コントロール——在米子会社責任者へのインタビューを通して—— 第7章 公共事業政策における再編・再生の課題——ゼネコン組織変革の会計情報分析—— 第8章 企業組織再編における連結会計情報の分析 第9章 株式交換・移転、会社分割等の組織再編会計	2004.3.30	同文館出版	3,800円
	ビジネスコミュニケーションの基礎理論 (ビジネスコミュニケーション (現代企業におけるビジネスコミュニケーションの諸問題))	○ 森川 信男 秋山 武清 樋口 和彦	第1章 コミュニケーションの基本概念 第2章 コミュニケーションの種類 第3章 コミュニケーションの発展と変容 第4章 言語とビジネスコミュニケーション 第6章 コミュニケーション教育の現状と課題	2005.9.30	学文社	2,000円

研究センター	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
国際政治経済	取引と契約の国際比較 学際的アプローチ (契約の概念と形態に関する国際比較)	深町 正信 ○ 速水佑次郎 本名 信行 港 徹雄 井出 静 櫻井 雅夫 斎藤 鎮男 太田 浩	1. 序論 2. キリスト教における契約の概念とその社会的含意 3. アジア農村共同体の基礎理念と契約形態 4. 雇用契約の概念と表現の日米比較：社会言語学的アプローチ 5. 企業間取引構造：日米欧比較分析 6. 経済改革下の中国国営企業の契約 7. 中国の契約についての歴史的展望 8. 日本法上の契約と国際合弁契約 9. 国際機関におけるコンセンサス 10. 社会契約による都市形成モデル：空間経済学的アプローチ	1922.10.10	創文社	4,300円
	The Economics of Contract Choice (契約の概念と形態に関する国際比較)	○ 速水佑次郎 大塚啓二郎	1. Agrarian Organizations and Contracts 2. The Basic Model 3. Optimum Contract Choice under Alternative Assumptions 4. Long-Term Contracts 5. Interlinked Contracts 6. Global Survey of Empirical Evidence 7. Contract Choice and Enforcement in an Agrarian Community: The Case of Upland Farming 8. Community and Market in Contract Choice: The Case of the Jeepny in the Philippines 9. Land Reform, New Technology, and Agrarian Contracts: The Case of a Philippine Rice Bowl 10. Towards a general Theory of Agrarian Contracts	1993.2	Oxford Univ. Press	—
	秩序と混沌 冷戦後の世界 (米ソ関係の総合的研究)	○ 永井陽之助 木村 明生 吉田 靖彦 土山 實男 阪中 友久 伊藤 憲一 袴田 茂樹 永井陽之助	1. 歴史の中の冷戦 2. ソ連邦の消滅と今後 3. 米ソ経済の比較と経済計算論争 4. 冷戦後の核抑止 5. 西太平洋の安全保障レジームを求めて 6. 変容する米ソ関係の展望と意味 7. ソ連社会主義とベレストロイカの再検討 8. 国際政治経済秩序の模索	1993.4.1	人間の科学社	1,800円
	アジアの21世紀 歴史的 転換の位相 (歴史的転換期を歩むアジアの位相と展望)	○ 天見 慧 杜 進 戸崎 肇 押村 高 井出 静	第一章 アジアの政治変容—民主化への模索と試練 第二章 新世紀に向かう東アジア経済と中国—通貨・金融危機の超克 第四章 アジアの環境問題 第五章 「アジア的価値」の行方—デモクラシーをめぐるアジアと西洋の対話 第六章 新たなアジア的 アイデンティティへの模索—中華世界の新たな展開を中心に 終 章 アジア太平洋地域の安全保障と新秩序形成	1998.3.31	紀伊國屋書店	2,000円
	現代アメリカの経済政策 と外交政策 (アメリカの対外関係と 経済政策)	○ 本田 重美 柘山 堯司 小菊喜一郎 仙波 憲一	日米の家計生産関数と家計内労働代替 アメリカの対外軍事政策と人道的干渉 ドル危機シンδροームのゆくえ—20世紀末米国における経済危機論議についての覚え書き アメリカの経済政策と設備投資動向	1999.3.31	三省堂	2,000円
	21世紀の国際コミュニ ケーション—言語・文化 論の研究課題と教育方法 (国際コミュニケーション の研究課題と教育方法)	○ 中田 清一 本名 信行 田辺 正美 Richard Evanoff 狩野 良規 村田 真一	国際コミュニケーションの教育における言語科学と第二言語獲得・教育 International Understanding Education and English Language Teaching in Japan When Japanese Speak and Listen to English Towards a Constructivist Theory of Intercultural Dialogue 社会人大学院生に修士論文は必要か ロシア文化論の教育課題	1999.3.31	三省堂	2,000円

研究センター	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
		林 世景 Hector C. Rueda de Leon	国際コミュニケーションにおける中国文化の研究 課題および教育方法 Are Latin American Studies Important for the Japanese ? Rosario Castellanos: vaticinadora de Chiahpas			
	知識管理活動とインターナショナルマネジメント (知的活動と国際マネジメント)	○ 石川 昭 吉田 耕作 堀内 正博 内田 達也 内山 義英 仙波 憲一 清水 康司 高森 寛 中里 宗敬	第1章 知識管理活動と国際マネジメント 第2章 ビジネス・スクールの国際競争力 第3章 ナレッジマネジメントと企業経営 第4章 ビジネスモデルの特許の論点 ：学際研究のヒント 第5章 研究開発投資と経常収支変動の異時点間分析 第6章 R & D活動と経済成長 第7章 遠隔学習とファイナンス 第8章 投資のタイミング・オプションとその価値 第9章 有効フロンティアの実証的特徴	2002.3.15	税務経理協会	2,800円
国際政治経済	21世紀ヨーロッパ学—伝統的イメージを検証する— (ヨーロッパの価値観の変容—21世紀のヨーロッパ学をめざして—)	○ 押村 高 支倉 寿子 茂 牧人 村田 真一 押場 靖志 狩野 良規	第I部 政治・社会の変貌 第一章 国民アイデンティティの流動化—ポスト産業化、グローバル化、EU 深化のなかで— 第二章 女性の社会参加、その光と影—フランスの事例を中心に— 第II部 文化の発展的継承 第三章 哲学ブームが示唆するもの—ハイデガーは無心論者か?— 第四章 地方が築く文化共同体—ロシア演劇の場合— 第III部 映画が占うヨーロッパ 第五章 そしてイタリア映画は行く 第六章 階級なき社会は可能か—イギリスの模索—	2002.5.15	ミネルヴァ書房	3,000円
	国際言語としての英語—世界へ展開する大学院eラーニングコースの研究開発— (インターネットによる大学院国際共同授業の研究開発)	○ 本名 信行 松田 岳士 田辺 正美 井田 昌之 瀬尾 昌也	第1部 国際協力によるコースの研究開発とその実施 第1章 G-SIPEB とその課題 第2章 AMLプロジェクトA*EN プロジェクト 第3章 コンテンツとシステムの開発 第4章 実証実験とコンテンツの修正 第5章 正規授業としての実施 第6章 国際メンタリングガイドライン 第2部 Web Based Lecture Series in International Communication: With a Focus on English as an International Language ～インターネットコースのコンテンツ～ Chapter1. Welcome to the Web Based Lecture Series in International Communication: Chapter2. Weekly Lectures	2005.3.1	アルク	2,940円
キリスト教文化	キリスト教と生命倫理 (キリスト教生命倫理研究)	○ 東方 敬信 石原 博子 大島 力 山岡 健 ※ 茂 牧人 ※ 東方 敬信 棚村 政行 三輪 修三 東方 敬信	総 論 なぜキリスト教生命倫理なのか? 第一章 生命観の変遷 第二章 旧約聖書における生と死 第三章 新約聖書における生命観 第四章 脳死をめぐる 第五章 先端医療技術とキリスト教 第六章 生命倫理と法 第七章 アメリカにおける代理母契約 第八章 技術・技術者・技術倫理—現代技術とその特徴 第九章 生命倫理と地球時代の神学	1993.3.25	日本基督教団出版局	1,700円

研究センター	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
キリスト教文化	来日メソジスト宣教師事典 (日本における初期メソジスト各教派の史料蒐集)	○ ジョン・W・クランメル	目次 序文 謝辞 凡例 略語票 メソジスト宣教師が日本に於いて任命された学校、団体、機関等 本文	1996.2.25	教文館	8,500円
	現代におけるキリスト教教育の展望 (キリスト教教育思想)	○ 伊藤 久男 佐藤 敏夫 東方 敬信 松川 成夫 大曾根良衛 野里 房代	1章 キリスト教学校と文化倫理学 2章 アメリカの宗教と教育 —信仰発達論をめぐって— 3章 イギリスの教育改革における宗教教育の問題 —「教育改革法1988」をめぐって— 4章 ドイツにおける基礎学校と基幹学校の宗教教育 —バーデン・ヴェルテンベルク州を中心として— 5章 日本における弁証法的神学とキリスト教教育 6章 プロテスタント・キリスト教学校の現状と課題—アンケート調査にもとづいて—	1996.3.30	ヨルダン社	2,200円
	キリスト教と現代 (現代キリスト教文化・倫理研究)	○ 山岡 健 関田 寛雄 山岡 健 清水 正 鈴木 有郷 東方 敬信 古賀 節子 小玉 晃一	序章 現代キリスト教文化・倫理 1章 キリスト教と現代の諸問題との接触 2章 キリスト教と現代の政治経済 3章 キリスト教と諸文化の接点	1997.3.31	日本実業	1,800円
	ジョン・ウェスレーと教育 (ジョン・ウェスレーと18世紀欧米キリスト教教育思想)	○ 大曾根良衛 東方 敬信 三浦 正 池田 稔 深町 正信 大森 秀子	ウェスレーとモラヴィアニズム ジョン・ウェスレーのキリスト教倫理 ジョン・ウェスレーにおけるキリスト教教育論の基底—キリスト教教育哲学からの一考察— ジョン・ウェスレーとキングスウッド・スクール ジョン・ウェスレーと日曜学校運動 アメリカにおけるメソジスト監督教会日曜学校運動	1999.3.30	ヨルダン社	2,000円
	聖書と共同体の倫理 (キリスト教と社会科学)	大谷登士雄 大島 力 ○ 東方 敬信 榎本 弘 小沼 進一 梅津 順一 芹田 敏夫	序—バベルの塔と信仰共同体 聖書の世界観と現代社会の諸問題—原初史(創世記1-11章)と現代— 平和の共同体の倫理 この世における「信仰共同体」と「その倫理」 あとがき—信仰共同体の冒険としての神の国 皇帝のもの、神のもの —皇帝への「納税問題」とイエス— アリストテレスと社会正義 市民社会とキリスト教 NPOとしてのキリスト教団体—経済学の視点から—	2001.3.10	教文館	2,000円
	民族主義とキリスト教 (民族主義とキリスト教)	牧野 信次 朴 憲郁 佐竹 明 梅本 直人 ○ 佐川 和茂 大庭 昭博 鈴木 有郷 野村 祐之 奥田 暁子	第I部 聖書から 1 旧約聖書における民族の問題 2 新約聖書と民族主義 イスラエルの問題 3 ヨハネ黙示録の民族主義 4 アレクサンドリアのユダヤ人と諸民族 —プトレマイオス朝時代における 第II部 現代の課題から 5 ホロコースト、民族主義、キリスト教 6 ボンヘッフアーにおける「民族」と「国民」 7 アメリカにおける民族主義とキリスト教 —黒人と白人の関係を焦点に 8 世界教会協議会(WCC)と民族性 9 近代日本の女性キリスト者と民族主義	2003.3.28	新教出版社	4,000円

研究センター	タイトル(プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
キリスト教文化	キリスト教と人間形成 ウェスレー生誕三〇〇年 記念 (キリスト教と人間形成)	○ 大森 秀子 大島 力 東方 敬信 深町 正信 藤本 満 池田 稔 大森 秀子 酒井 豊 吉岡 良昌	序 ——本書成立の経緯 一 族長物語(創世記一二一五〇章)と人間形成 二 新約聖書におけるキリスト教と人間形成 —道徳性発達理論とマタイによる福音書 三 ジョン・ウェスレーの人間理解 —神学的人間理解をめぐる 四 ウェスレーによる「人間形成」論 五 メソジズム信仰とイギリスにおける近代的人 間形成—ジョン・ウェスレーの宗教・教育活 動と労働者階級の文化および自己形成意識の 醸成 六 メソジスト系キリスト教大学における人間形成 —アメリカのプロテスタント大学の世俗化を めぐって 七 現実に開かれた確信の基礎をつくるもの 八 近代教育思想における人間形成論 —スピリチュアリティ育成の課題に向けて	2004.3.31	新教出版社	2,500円
		○ 村田 良平 押村 高 申 恵丰	21世紀のEUをどう見るか EUと世界、日本・EU関係の展望 機構改革と民主化にむけて 欧州統合と人権—域内における人権保護 —EUの対外政策と人権—	1999.3.31	勁草書房	3,000円
		須田 昌弥 佐川 和茂 後藤 雄介 ○ 金田由紀子 椿 清文 堀 真理子 田中 啓史	第一章 「ニューヨーク」を見る視点 第二章 ユダヤ人のニューヨーク 第三章 ニューヨークのヒスパニック／ヒスパ ニックの〈ヌエバヨール〉 第四章 画家と詩人のニューヨーク 第五章 ビックス、ビリー、そしてバード —三人のジャズの開拓者たち 第六章 女たちのブロードウェイ 第七章 黒い手に白球をつかんで —ニグロ・リーグの光と影	2001.3.30	三省堂	2,400円
		寺谷 弘壬 宋 連玉 夏目 博明 ○ 九頭見一士	第一章 少数民族と精霊文化 —アイヌ、サーミ、イヌイットの場合— 第二章 チェチェン戦争とチェチェン少数民族 第三章 辺境への女性人口移動 —帝国から植民地朝鮮へ— 第四章 良いアイルランド人 悪いアイルランド 人 第五章 アイルランド人がアメリカ人になるまで 第六章 ケルトが結ぶ日本とアイルランド 第七章 辺境からの創造 —ケルトの精神世界の展開—	2002.3.25	英宝社	2,000円
学際研究プロジェクト	サプライチェーン・マネ ジメント 企業間連携の 理論と実際 (サプライチェーン・マネ ジメントの学際的研究)	○ 黒田 充 三村優美子 藤野 直明 天坂 格郎 飯塚 佳代 坂元 克博 西岡 靖之 竹田 賢	1. 全体最適とサプライチェーン・マネジメント 2. 消費財流通変化とサプライチェーン・マネジ メント 3. 百貨店チャネルのアパレル流通におけるサブ ライチェーン・マネジメント改革の動向 4. 戦略的品質経営とSCMの新展開 —トヨタとNOKの協創タスクチームを例と して— 5. サプライチェーン・マネジメントに関わる情 報技術と業務改革 6. サプライチェーン・マネジメントとシステム 間連携技術 7. サプライチェーン・マネジメントにおける プランニング/スケジューリング統合技術 8. モジュール化戦略と延期・投機の原理に基づ いたサプライチェーン在庫モデル	2004.3.15	朝倉書店	2,800円

研究センター	タイトル (プロジェクト名)	所 員	内 容	刊行日	出版社	価 格
特別研究	日本の福祉 福祉の多様化と介護保険 制度 (日本の福祉の現状と課題 —国際比較の視点も含む—)	○ 小原 信 小林千登勢 高田 一夫 神長 勲 藤川 久昭 齋藤 真哉 本間 照光 稲生 勁吾 太田 浩 平田 雅博 石畑良太郎 三輪 修三 富山 健 宮治 裕 藤江 正克 渡邊 真理 木下 庸子	I 福祉と厚生の間で 1 福祉原論としての「配分」の哲学 2 福祉は心の豊さ 3 これからの福祉 II 福祉と制度 4 特別養護老人ホームに対する行政的監督 5 労働者福祉法制構築の試み 6 社会福祉法人会計の現状と課題 7 公的介護保険と社会的介護 III 福祉の現状と歴史 8 障害者の生涯学習 9 福祉厚生と経済学 10 高齢化するイギリス戦後移民の福祉 11 現代イギリスにおけるホームレス研究 IV 環境福祉論の構想 12 福祉工学とその周辺 13 「介護者支援ロボットシステム」の提案 14 福祉ロボット論 15 住まいと福祉	2001.7.20	以文社	3,500円

<特別研究プロジェクト研究成果>

AML II 研究叢書

号 数	研究部会	代 表	タイトル	刊行日
第1巻第1号	WG42 サイバー-ESP 教育システム	古谷 千里	IT と ESP アプローチによる専門英語教育—大学教育カリキュラムに関する提案書—	2002.3.31
第1巻第2号	WP43 モデルベースラーニング遠隔授業システム 開発	佐久田博司	動的コンテンツによる工学教育のための e-Learning 環境	2002.3.31
第1巻第3号	WP51 サイバービジネスプランニング開発	松島 桂樹	ビジネスプランニングを題材とした e-Learning 協 調型演習の有効性	2002.3.31
第1巻第4号	WP52 サイバーコンカレントマネジメント開発	玉木 欽也	「サイバーマニファクチャリング」教育方法の 研究・開発	2002.3.31
第1巻第5号	WP53 日本型戦略的ビジネスモデル開発	田中 正郎	ES におけるビジネスプロセスの実際	2002.3.31
第2巻第1号	WG24 学生サービス・モバイルラーニング	玉木 欽也	モバイルラーニング研究報告書2002—モバイル利 用の英語教育—	2003.3.31
第2巻第2号	WG42 サイバー-ESP 教育システム	古谷 千里	IT と ESP アプローチによる専門英語教育—WBT とモバイルを活用した語学教育—	2003.3.31
Vol.2 NO.2	WG42 The Cyber-ESP Education System	Chisato Furuya	The AML Research Project Report on the ESP Education System With the Integrated Use of WBT, Mobile Phone and Other IT Applications	2003.3
第2巻第3号	WP43 モデルベースラーニング遠隔授業システム 開発	佐久田博司	「動的モデルの e-Learning 環境への応用と評価」	2003.3.31
第2巻第4号	WP51 サイバービジネスプランニング開発	戒野 敏浩	ビジネスプランニングを題材とした e-Learning 協 調型演習の有効性	2003.3.31
第2巻第5号	WP53 ビジネスプロセスモデル開発	田中 正郎	ヴルウィップ効果シミュレーター	2003.3.31
第3巻第1号	WG24 学生サービス・モバイルラーニング	小張 敬之	モバイルラーニング研究報告書2003—モバイル利 用の英語教育—	2004.3.31
第3巻第2号	WG31 マルチメディア型総合学習	古賀 節子	問題解決学習のカリキュラムデザイン形成に関す る研究—実践事例の考察に基づくガイドラインの 提案—	2004.3.31
第3巻第3号	WP43 モデルベースラーニング遠隔授業システム 開発	佐久田博司	動的モデルの e-Learning における効果	2004.3.31

号数	研究部会	代表	タイトル	刊行日
第3巻第4号	WP51 サイバービジネスプランニング開発	戒野 敏浩	サイバービジネスプランニング教育の可能性と展望	2004.3.31
第3巻第5号	WP53 日本型戦略的ビジネスモデル開発	田中 正郎	販売管理におけるビジネスプロセスの実際	2004.3.31
第4巻第1号	WG24 学生サービス・モバイルラーニング	小張 敬之	モバイルラーニング研究報告書2004—モバイル利用の英語教育—	2005.3.31
第4巻第2号	WP43 モデルベースラーニング遠隔授業システム開発	佐久田博司	「協調型遠隔授業モデルの実現と評価」	2005.3.31

AML II 市販本

○印 プロジェクト代表

タイトル (プロジェクト名)	所員	研究分担	刊行日	出版社	価格
eラーニング実践法—サイバーアライアンスの世界—	○ 玉木 欽也 小酒井正和 松田 岳士 伊東 俊彦 戒野 敏浩 北野 正雄 倉田菜生子 齋藤 裕 佐久田博司 白井 賢一 成瀬 重雄 原 潔 古谷 千里 本名 信行 松島 桂樹	1章 eラーニングと人材育成 2章 eラーニングの仕組みと実践 3章 教育を支える学習管理システム (LMS) 4章 eラーニングを支えるITの標準化 5章 単位認定を目指すセルフラーニング 6章 コミュニケーション系eラーニングの新世界 7章 ビジネスプロセス志向の協調型演習 8章 即戦力IT対応型ビジネスパーソン育成への挑戦	2003.2.25	オーム社	2,900円
サイバーマニュファクチャリング—eラーニングで学ぶモノづくり— <実習 CD-ROM 付き> (AML II サイバーコンカレントマネジメント部会)	○ 玉木 欽也 渡邊 一衛 高橋 道哉 高橋 勝彦 Myreshka 松井 正之 山田 哲男 吉江 修 八木英一郎 越島 一郎 大綱 千鶴	サイバーマニュファクチャリングの世界 生産設計とプロセスエンジニアリング レイアウト・マテリアルハンドリング 生産システム設計 作業システム設計 需給マネジメント 生産計画 (MRP) システム エージェントベース・エクストラネットプロダクション プロジェクト・マネジメント	2004.4.2	トランスアート発売	3,800円

eラーニング人材育成研究センター研究叢書

号数	研究部会	代表	タイトル	刊行日
第1巻第1号	TF21 事業創造戦略プロフェッショナル	玉木 欽也	統合化 PLM 指向の事業創造プロセス研究	2006.3.31
第1巻第2号	TF22 情報戦略プロフェッショナル	齋藤 裕	マネジメント IT に関する研究	2006.3.31
第1巻第3号	TF26 モバイルラーニング	小張 敬之	モバイル利用の英語教育	2006.3.31
成果報告書	青山学院大学現代的教育ニーズ取組支援プログラム 「e-Learning 専門家の人材育成」	センター長 佐伯 胖 副センター長 玉木 欽也	平成17年度青山学院大学 現代的教育ニーズ取組支援プログラム 「e-Learning 専門家の人材育成」成果報告書	2006.3
第2巻第1号	TF21 事業創造戦略プロフェッショナル	玉木 欽也	統合化 PLM 指向の事業創造プロセス研究	2007.3.31
第2巻第2号	TF22 情報戦略プロフェッショナル	齋藤 裕	情報戦略プロジェクトマネジメント演習の授業設計	2007.3.31
第2巻第3号	TF26 モバイルラーニング	小張 敬之	モバイルツール利用の英語教育	2007.3.31
第2巻第4号	TF41 サイバーユニバーシティ基盤システム	権藤 俊彦	ラーニングシステムプロデューサーに関する研究ならびにeラーニングシステムの研究開発とその運用	2007.3.31

号 数	研究部会	代 表	タイトル	刊行日
成果報告書	青山学院大学現代的教育ニーズ取組支援プログラム 「e-Learning 専門家の人材育成」	センター長 佐伯 胖 副センター長 玉木 欽也	平成18年度青山学院大学 現代的教育ニーズ取組支援プログラム 「e-Learning 専門家の人材育成」 成果報告書	2007.3
第3巻第1号	TF22 情報戦略プロフェッショナル	齋藤 裕	情報戦略のマネジメントに関する研究	2008.3.31
第3巻第2号	TF26 モバイルラーニング	小張 敬之	モバイルツール利用の英語教育Ⅱ	2008.3.31
成果報告書	青山学院大学現代的教育ニーズ取組支援プログラム 「e-Learning 専門家の人材育成」	センター長 佐伯 胖 副センター長 玉木 欽也	平成19年度（最終年度） 現代的教育ニーズ取組支援プログラム 「e-Learning 専門家の人材育成」—世界に通用する 専門家育成プログラムの開発と普及— 成果報告書	2008.3
評価活動 報告書	TF13 eラーニングコース評価	センター長 玉木 欽也	「e-Learning 専門家育成プログラム」 評価活動報告書—持続可能なeラーニングの鍵	2008.9
第4巻第1号	TF21 事業創造戦略プロフェッショナル	玉木 欽也	統合化 PLM 指向の事業創造プロセスのモデル化 と管理方法の最終年度報告書	2009.3.31
第4巻第2号	TF26 学生サービス・モバイルラーニング	小張 敬之	モバイルツール利用の英語教育Ⅲ	2009.3.31
第4巻第3号	TF29 デジタル・ストーリーテリング	木村みどり	マルチメディア・テクノロジー利用の英語教育	2010.3.31
第5巻第1号	TF26 学生サービス・モバイルラーニング	小張 敬之	モバイルツール利用の英語教育Ⅳ	2010.3.31
第5巻第2号	TF29 デジタル・ストーリーテリング	木村みどり	マルチメディア・テクノロジー利用の英語教育	2010.3.31
第5巻第3号	TF42 情報発信技術	佐久田博司	Web ページを活用する英語語彙教育システム	2010.3.31
第5巻第4号	TF61 コンピテンシーポートフォリオ	玉木 欽也	産学連携による実践型人材育成プログラム およびコンピテンシにもとづく e ポートフォリオ の開発	2010.3.31
評価活動 報告書	TF13 eラーニング評価	センター長 玉木 欽也	「e-Learning 専門家育成プログラム」評価活動報 告書	2010.3

eラーニング人材育成研究センター市販本

タイトル（研究部会名）	著者等	内 容	刊行日	出版社	価 格
eラーニング専門家のためのインストラクショナルデザイン (eラーニングコース設計・運用 研究部会)	監修 玉木 欽也 著者 齋藤 裕 松田 岳士 橋本 論 権藤 俊彦 堀内 淑子 高橋 徹	第Ⅰ部 インストラクショナルデザインとe ラーニング専門家 第1章 eラーニングとインストラクショ ナルデザイン 第2章 分析 第3章 設計 第4章 開発 第5章 実施 第6章 評価 第7章 eラーニングを支える専門家 第Ⅱ部 eラーニング専門家による高等教育 eラーニングコース事例 第8章 情報ネットワークリテラシ基礎・ 応用 第9章 マネジメントIT 第10章 サイバーマニュファクチャリング 実習 第11章 組織的なeラーニング評価法	2006.5.10	東京電機大 学出版局	2,520円
ブレンディッドラーニングの戦 略 eラーニングを活用した人材育 成 (TF13 eラーニングコース評 価研究部会)	著者 ジョシュ・パーシ ン 監訳 赤堀 侃司 訳 松田 岳士 原 潔 望月 俊男 山田 政寛	序章 はじめに 第1章 ブレンディッドラーニングへの道 その歴史 第2章 ブレンディッドラーニングの経営 第3章 ブレンディッドラーニングのデザ インコンセプト 第4章 ブレンディッドラーニングの実証さ れたモデル 第5章 ブレンドモデル選択の8基準 第6章 予算の算出 第7章 メディア選択：的確なブレンド	2006.3.20	東京電機大 学出版局	3,360円

タイトル (研究部会名)	著者等	内 容	刊行日	出版社	価 格
	(研究協力者) 新目 真紀	第8章 コンテンツ開発 第9章 学習技術とインフラストラクチャー 第10章 プログラムマネジメント 開始、展開、支援今後の展望 付録			
BSCによる戦略志向のITマネジメント (TF21 事業創造戦略プロフェッショナル)	小酒井正和	序章 新たなITマネジメントの必要性 第I部 BSCを活用したITマネジメントのあり方 第1章 ITマネジメントにおける課題の変遷とわが国の現状 第2章 BSCを活用したITマネジメントの本質 第3章 無形の資産の重要性 第II部 BSCを活用したITマネジメントの実践 第4章 IT投資における総合評価の有効性 第5章 IT投資評価へのBSCの応用 第6章 IT投資選択と戦略への方向づけ 第7章 レディネス評価の意義 第8章 3つのITポートフォリオの活用 第9章 IT組織のBSC 終章 戦略志向のITマネジメントの構築に向けて	2008.8.16	白桃書房	2,625円
これ一冊でわかるeラーニング 専門家の基本 ICT・ID・著作権から資格取得 準備まで	編著 玉木 欽也 著者 大沼 博靖 権藤 俊彦 齋藤 長行 長沼 将一 山根 信二 石井 美穂 合田 美子 半田 純子 堀内 淑子 松田 岳士	第I部 eラーニングとビジネス 第1章 eラーニングの基礎知識 第2章 ICT活用による企業内教育と新たな人材開発 第3章 プロジェクトマネジメントとeラーニング 第II部 インストラクショナルデザインと学習理論 第4章 インストラクショナルデザインとは 第5章 分析フェーズ 第6章 設計フェーズ 第7章 教材設計と実施計画 第8章 教授方略 第9章 IDにおける評価 第III部 eラーニングにおける著作権と個人情報保護 第10章 eラーニングと著作権 第11章 eラーニングと個人情報保護法 第IV部 ICTとラーニングシステム 第12章 コンピュータネットワーク 第13章 通信プロトコル 第14章 ネットワークの構成要素 第15章 ラーニングシステム 第16章 ラーニングコンテンツ 第17章 セキュリティと情報セキュリティ 補足資料 eラーニングを活用している組織の実例	2010.3.30	東京電機大学出版局	3,570円
国際言語環境の認識と対応 一企業・行政における国際言語 管理の考え方	本名 信行 猿橋 順子	第1章 言語環境の認識と対応についての考え方 第2章 英語の国際化と多様化 ～国際言語環境の認識と対応の一例として～ 第3章 言語と文化の多様性と異文化間コミュニケーション 第4章 言語問題の危機管理 第5章 企業の言語問題と言語対応 第6章 国際言語管理の意義と方法	2010.3.31	(株)アルク 企画開発部	1,890円

総合研究所公開講演会等開催状況（2003年度～2016年度）

【2003年度】

日時	タイトル	講師等	場所	主催
03.7.7 18:00～ 19:30	公開講演会 「いのちとジェンダー —旧約聖書と現代—」	木田献一（山梨英和大学学長）	総研ビル 12階 大会議室	キリスト教文化研究部 「キリスト教の霊性」 プロジェクト
03.11.10 16:00～ 17:30	オープンセミナー 「米高等教育における On-Line Learning」 「LEARNING AT A DISTANCE」	Randall E. Johnson (Professor of Walden University)	総研ビル 9階 第16会議室	A 2 EN プロジェクト 後援：ALIC（先進学 習基盤協議会）
03.12.6 13:30～ 17:30	2003年度第1回特許セミナー 「特許出願支援をめぐる現状と課題」 講演 ①「早稲田大学における TLO の現状と課題」 —知的財産本部構想の動向— ②「JST の技術移転事業について」 —特許出願支援制度を中心として— ③「研究成果の権利化について」 ④「老後のための特許」 ⑤「特許とソフトウェア」	開会の辞 小松繁 (研究支援ユニットマネージャー) 挨拶 魚住清彦（理工学部長） 講師 ①勝田正文 (早稲田大学産学官連携推進センター 長・早稲田大学理工学部教授) ②細江孝雄 (独立行政法人科学技術振興機構技術展 開部部長) ③新井規之 (独立行政法人科学技術振興機構技術展 開部権利化推進課課長代理・弁理士) ④竹本幹男（機械創造工学科教授） ⑤原田実（情報テクノロジー学科教授） 閉会の辞 小松繁 (研究支援ユニットマネージャー)	相模原キャン パスD棟 215教室	共催：自然科学研究部、独立行政法人科学 技術振興機構、理工学 部 後援：理工学会

【2004年度】

日時	タイトル	講師等	場所	主催
04.5.19 12:30～	公開講座 テゼの讃美と祈り	ブラザー・ギラン（テゼ共同体） 通訳：植松功（日本聖公会）	ガウチャー 記念礼拝堂	キリスト教文化研究部 「キリスト教の霊性」 プロジェクト
18:00～ 19:30	公開シンポジウム 民衆のスピリチュアティー「東北学と琉球 弧」	斉藤利男（弘前大学教授） 村椿嘉信（日本基督教団沖縄教区牧師）	総研ビル 12階 大会議室	
04.6.30 14:00～ 16:00	2004年度第1回特許セミナー —楽しく特許をとって儲けるには— 講演 ①「特許申請のアレコレ」 ②「儲からない特許では申請できなかった話」—電動工具を例に— ③「壮大な思想に基く金のなる特許」 —21世紀にはどんな技術が必要とされるか？ “光ファイバー超音波検出システム”— ④「21世紀 COE プログラム研究成果に基くややマニアックな特許」—くつつきの強さをどうして測るか？なんの役に立つのか？—	開会の挨拶 降旗千恵（自然科学研究部長） 講師 ①竹本幹男（機械創造工学科教授） ②渡邊昌宏（機械創造工学科助教授） ③長秀雄（機械創造工学科助手） ④池田隆二 (機械創造工学科研究生・旭ダイヤモン ド工業株式会社技術研究所) 閉会の挨拶 竹本幹男（機械創造工学科教授）	相模原キャン パスF棟 204教室	共催：自然科学研究部、理工学部
04.7.16 16:00～ 18:00	国際学術シンポジウム 美しい国づくりと渋谷・原宿・青山の将来像 ～大学の地域参画 と協働型まちづくりの実践～ 基調講演 「美しい国づくりと回廊としての道への期待」 研究紹介：総合研究所ほか 渋谷・原宿・青山の将来像～大学研究機関 からの提言 パネルディスカッション 「都市文化の創造と国際都市への飛躍」	講師 中村良夫（東京工業大学名誉教授） パネルディスカッション 浅葉克己（アートディレクター） 岡本敏子（岡本太郎記念館） 財部誠一（経済ジャーナリスト） 浜野安宏 (ライフスタイルプロデューサー) 森地茂（政策研究大学院大学） モデレーター： 井口典夫（経営学部教授）	総研ビル 12階 大会議室	主催：課題別研究部 「協働型まちづくりの 実践的研究—渋谷・青 山地区における大学と 地域との連携実験—」 プロジェクト 後援：国土交通省関東 地方整備局・東京都・ 渋谷区・港区・渋谷区 商店会連合会・港区商 店会連合会・渋谷宮益 坂まちづくり協会・原 宿神宮前まちづくり協 議会・青山通りまちづ くり協議会

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
04.7.18 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム（第1回） 「ロボットと福祉」 「材料分析センターの紹介と見学」	講師 富山健（情報テクノロジー学科教授） 重里有三（化学・生命科学科教授）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
04.9.29 18:00～ 20:00	青山学院創立130周年記念公開講演会 第一部 講演 「グローバル化と日本文化」 第二部 ミニコンサート	講師 河合隼雄（文化庁長官・臨床心理学者） コンサート フルーツ：河合隼雄 佐伯胖 ピアノ：柚田早苗	ガウチャー 記念礼拝堂	総合研究所
04.11.9	公開講演会 マイスター・エックハルトと中世の民衆世界—スピリチュアリティをめぐって—	宮本久雄（東京大学大学院教授）		キリスト教文化研究部 「キリスト教の霊性」 プロジェクト
04.11.6 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム（第2回） 「空気軸受技術」 「表面変位・ひずみ・応力の全視野計測 —デジタル像相関法と 新しいハイブリッド解析法—」	講師 大石進（機械創造工学科教授） 隆雅久（機械創造工学科教授）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
04.11.17 14:00～ 16:00	2004年度第2回特許セミナー 学生・教職員のための特許セミナー 講演 ①「TAMA-TLO と技術移転」 —大学が支える新製品開発— ②「研究成果の権利化とその活用」 —研究成果を特許出願するには— ③「エピタキシャルダイヤモンドの選択成長に関する特許出願」 —出願した技術内容と応用例について— ④「私の特許創め考」	挨拶 降旗千恵（自然科学研究部長） 講師 ①井深丹 （TAMA-TLO（株）代表取締役社長） ②鈴木壯兵衛 （三好内外特許事務所副所長） ③澤邊厚仁（電気電子工学科教授） ④林光一（機械創造工学科教授） 挨拶 稲積宏誠（理工学部長） 竹本幹男（機械創造工学科教授）	相模原キャン パスF棟 204教室	共催：自然科学研究部、理工学部 後援：理工学会
04.11.29 15:00～	青山学院創立130周年記念公開講演会 「生命」を基本とする社会 —生命誌の視点から—	中村桂子 （JT 生命誌研究館館長・生命学者）	総研ビル 12階 大会議室	総合研究所
05.1.22 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム（第3回） 「企業経営」 「企業の改善事例」	講師 辻正重（経営システム工学科教授） 松本俊之（経営システム工学科助教授）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
05.3.28 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム（第4回） 「機械設計情報のインターネット による共有」 「理工学研究内容紹介と パイロットプロジェクト」	講師 佐久田博司（情報テクノロジー 学科教授） 水澤純一（情報テクノロジー学科教授）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市

【2005年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
05.6.29 14:00～ 16:00	2005年度第1回特許セミナー 青山学院大学理工学部と TAMA-TLO の 産学連携の現状 講演 ①「局所補正画像の生成方法 ～特許出願とこれから～」 ②「バイオ（DNA 関連）で特許出願」 ③「TAMA-TLO と技術移転」	挨拶 稲積宏誠（理工学部長） 講師 ①佐藤秀明（経営システム工学科助手） ②降旗千恵（化学・生命化学科教授） ③井深丹（TAMA-TLO（株） 代表取締役社長） 閉会挨拶 降旗千恵（自然科学研究部長）	相模原キャン パスF棟 204教室	主催：自然科学研究部 協賛：理工学部
05.7.16 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2005（第1回） 「風から動力を獲得する」 「ヘルスケアサービスと バイタルセンサ技術の動向」	講師 三栖功（機械創造工学科教授） 曾根氏（非常勤講師 NTT アドバンステクノロジー）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
05.10.4 14:00～ 16:00	2005年度第2回特許セミナー 知的財産、特許、産学連携 講演 ①「研究開発の新しいパラダイム ～知的資産のアウトカム理論～」 ②「研究成果を特許出願するために」 ③「TAMA-TLOの知的財産戦略」	挨拶：降旗千恵（自然科学研究部長） 講師 ①菊池純一 （法学部・大学院ビジネス法務専攻教授） ②月野洋一郎 （特許庁総務部技術調査課 大学等支援室） ③井深丹 （TAMA-TLO（株）代表取締役社長） 閉会挨拶 降旗千恵（自然科学研究部長）	相模原キャン パスD棟 407号室	主催：自然科学研究部 協賛：理工学部
05.10.31	第1回 eLPCO オープンフォーラム 基調講演 ①「eラーニングの推進と課題」 ②「教育改善の課題と戦略」 報告 ①「現代GPの事業の研究計画」 ②「サイバーキャンパス整備事業の 研究計画」 「eLPCO からのお知らせ」	開会挨拶：武藤元昭（学長） 講師 ①清水康敬 （独立行政法人メディア教育 開発センター理事長） ②井端正臣 （社団法人私立大学情報教育協会 事務局長） 報告者 ①佐伯胖（eLPCO センター長） ②玉木欽也（eLPCO 副センター長） 閉会挨拶：秋元実治（総合研究所長） 原田満里子（eLPCO 特別研究員）	総研ビル 12階 大会議室	eラーニング人材育成 研究センター （eLPCO）
05.11.19 14:00～ 16:30	青学ビジネスフォーラム2005（第2回） 「太陽光発電のはなし」 「昭和シェル石油（株）の CIS 系薄膜太陽 電池（研究開発の経緯：1993-2005）」	講師 中田時夫（電気電子工学科助教授） 榎屋勝巳 （昭和シェル石油（株）中央研究所）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
05.11.21 18:00～ 19:30	公開講演会 「モラルの再生へ向けて」	関根清三（東京大学大学院教授）	総研ビル 12階 大会議室	キリスト教文化研究部 「青年期におけるモラ ル教育の危機と可能 性」プロジェクト
06.1.21 14:00～ 16:30	青学ビジネスフォーラム2005（第3回） 「新しい航空宇宙用 エンジン開発研究の話その他」 「JAXA における計算科学」	講師 林光一（機械創造工学科教授） 小川哲（宇宙航空研究開発機構 （JAXA）総合技術研究本部計 算科学研究グループリーダー）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
06.3.18 14:00～ 16:30	青学ビジネスフォーラム2005（第4回） 「「光る」を知って「光らせる」 ：発光性複合高分子」 「パイロットプロジェクト ：1ワット風力発電機の試作」 「パイロットプロジェクト ：「青学との産学連携研究会」の活動」	講師 長谷川美貴 （化学・生命科学科専任講師） 小林昌純（㈱コバヤシ精密工業） 岩本邦彬（町田シニアコンサルタント グループ）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
06.3.30 13:30～ 17:30	第2回 eLPCO オープンフォーラム 平成17年度現代GP「e-Learning 専門家の 人材育成」事業成果報告会 挨拶 講演①「eラーニングと学びの変革」 講演②「eラーニング知的財産管理の組織 連携」 報告①「平成17年度現代GP「e-Learning 専門家の人材育成の活動報告」 報告②「TA 再教育のためのメンタリング 講座」 報告③「eラーニング専門家を支えるシス テム」 出版紹介 挨拶 「eLPCO からのお知らせ」	挨拶：半田正夫（常務理事・ 青山学院知的資産連携機構議長） 武藤元昭（学長） 江村由紀子（文部科学省高等教育 局専門教育課メディア教育係長） 講師 ①佐伯胖（eLPCO センター長） ②菊池純一（青山学院知的資産連携機構） 報告者 ①玉木欽也（eLPCO 副センター長） ②松田岳士（客員研究員） ③原潔（客員研究員） 出版紹介 「eラーニング専門家のためのインストラ クショナルデザイン」 「ブレンディッドラーニングの戦略—e ラーニングを活用した人材育成」 挨拶：魚住清彦（副学長） 秋元実治（総合研究所長） 原田満里子（eLPCO 特別研究員）	総研ビル 12階 大会議室	eラーニング人材育成 研究センター （eLPCO）

【2006年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
06.6.24 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2006 (第1回) 「産学協同による改善活動の事例」 「改善のすすめ」	講師 志田敬介 (経営システム工学科助手) 松本俊之 (経営システム工学科助教授)	相模原キャン パスK棟 209号室	主催: 総合研究所 協力: 首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
06.7.11 16:00～ 18:05	2006年度第1回特許セミナー 特許紛争解決 講演 ①「延伸高分子膜法による鮮赤色発光材料 の開発」 ②「搭状構造物用免震装置」 特別講演 ③「特許紛争解決 (国内法を中心に)」	開会挨拶: 稲積宏誠 (理工学部長) 講師 ①長谷川美貴 (化学・生命科学科専任講師) ②小林信之 (機械創造工学科教授) ③ Karl-Friedrich Lenz (専門職大学院法務研究科教授) 閉会挨拶 降旗千恵 (自然科学研究部長)	相模原キャン パスF棟 204教室	主催: 自然科学研究部 協賛: 理工学部
06.7.15	第1回 eLPCO 産学連携コミュニティ 講演 「社会における e ラーニング専門家の意義」 ワークショップ 「ロジカルシンキング講座」	講師 池田祐輔 (アルー株式会社取締役)		e ラーニング人材育成 研究センター (eLPCO)
06.9.21 13:00～ 17:45	第3回 eLPCO オープンフォーラム —現代 GP「e-Learning 専門家の人材育成」 事業成果中間報告会— 模擬授業、展示室、談話室、 パネルディスカッション 中間報告 「e ラーニング専門家育成プログラム」	開会挨拶: 武藤元昭 (学長) 秋元實治 (総合研究所所長) 報告者: 佐伯胖 (eLPCO センター長) 閉会挨拶: 魚住清彦 (副学長)	総研ビル 12階 大会議室	e ラーニング人材育成 研究センター (eLPCO)
06.11.4 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2006 (第2回) 「高品質・大面積ダイヤモンド基板の 開発と応用」 「大気圧プラズマ法による高密度ダイヤ モンドライクカーボン膜の大面積化」	講師 澤邊厚仁 (電気・電子工学科教授) 鈴木哲也 (慶応義塾大学理工学部 機械工学科教授)	相模原キャン パスK棟 209号室	主催: 総合研究所 協力: 首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
06.11.11 18:00～	公開講演会 『島ノ唄』の夕べ (映画上映とトーク・朗読)	吉増剛造 (詩人) 伊藤憲 (監督)	青山キャンパ ス11号館 1123教室	人文科学研究部 「『声』と『身体』の探 求」プロジェクト
06.12.7 ～21	eLPCO 教職員向け公開講座 —第1回 e ラーニング専門家育成 短期集中講座		青山 キャンパス	e ラーニング人材育成 研究センター (eLPCO)
06.12.14 13:10～ 14:40	2006年度第2回特許セミナー バイオテクノロジーと知的財産 講演 ①「知的財産立国における大学」 ②「オリンパスにおける知的財産への取り 組み」	開会挨拶 降旗千恵 (自然科学研究部長) 講師 ①門田かつよ (特許庁技術調査課大学等支援室 課長補佐) ②福岡荘尚 (オリンパス(株)ライフサイエンス カンパニー知的財産G) 閉会挨拶 降旗千恵 (自然科学研究部長)	相模原キャン パスO棟 102教室	主催: 自然科学研究部 協賛: 理工学部
07.1.20 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2006 (第3回) 「ゲノムとDNA チップ」 「ラマン分光とバイオ計測 : 光による分子診断」	講師 降旗千恵 (化学・生命科学科教授) 田代英夫 (独立行政法人理化学研究所 中央研究所主任研究員)	相模原キャン パスK棟 209号室	主催: 総合研究所 協力: 首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
07.2.5 13:30～ 15:30	公開講演会 「ソクラテスにおける宗教と倫理」	Dr. Mark L. McPherran (サイモン・フレイザー大学教授・ 哲学科学科長)	青学会館 本館2階 グリーンエリア 集会室A	キリスト教文化研究部 「青年期におけるモラ ル教育の危険と可能 性」プロジェクト
07.2.12 15:30～ 17:30	公開講演会 「多元社会における宗教的市民性教育」	Dr. Robert Jackson (英国ウォリック大学教育研究所教授・ 宗教プロジェクト部長)	青学会館 本館2階 グリーンエリア 集会室A	キリスト教文化研究部 「青年期におけるモラ ル教育の危険と可能 性」プロジェクト

日時	タイトル	講師等	場所	主催
07.3.28 13:30～ 17:15	第4回 eLPCO オープンフォーラム —現代 GP「e-Learning 専門家の人材育成」 平成18年度事業成果報告会— 講演①「高等教育と e-Learning」 講演②「e-Learning 専門家の資格に関する 海外の動向について」 講演③「e-Learning 専門家育成プログラ ムへの社会からの期待」 報告①「eLPCO の成果報告及び活動報告」 報告②「ヒューマン・イノベーション研究 センター (Aoyama HiRC) 設置構 想」	開会挨拶：半田正夫 (常務理事) 武藤元昭 (学長) 講師 ①片岡洋 (文部科学省高等教育局 専門教育課企画官) ②小松秀罔 (特定非営利法人日本イーラーニングコ ンソシアム (eLC) 会長) 寺田佳子 (特定非営利法人日本イーラーニングコ ンソシアム (eLC) 理事) ③戸田博人 (㈱富士通ラーニングメディア e-Learning 事業部長) 報告者 ①玉木欽也 (eLPCO 副センター長) ②佐伯胖 (eLPCO センター長) 閉会挨拶：秋元實治 (総合研究所所長)	青学会館 2階 「ミルトス」	e-Learning 人材育成 研究センター (eLPCO)
07.3.31 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2006 (第4回) 「青山学院大学のソーラーカー開発」 「風力発電機の産学連携」	講師 林洋一 (電気・電子工学科教授)	相模原キャン パス K 棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市

【2007年度】

日時	タイトル	講師等	場所	主催
07.6.1 18:30～ 20:00	ジョン・ハーパー教授特別講演 「ベンジャミン・ブリテンの《カール・ リヴァー》における東と西～能、西洋中世 の典礼劇、グレゴリオ聖歌～」	講師 Prof. John Harper (ロイヤル教会音楽学校総裁) 通訳 佐々木勉 (名古屋音楽大学准教授)	青山キャンパ ス11号館 1123教室	人文科学研究部 「「声」と「身体」の探 求」プロジェクト
07.6.12 ～29	第2回 eLPCO 公開講座 e-Learning 専門家育成短期集中講座		青山 キャンパス	e-Learning 人材育成 研究センター (eLPCO)
07.7.7 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2007 (第1回) 「現場中心型 M-Up 改善活動の改善事例」 「技能伝承の産学連携」	講師 大友和男・馬場純也 (㈱大友製作所) 松本俊之 (経営システム工学科准教授)	相模原キャン パス K 棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
07.7.18 13:00～ 18:20	サイバーキャンパス整備事業 国際シンポジウム International Symposium 2007 “International Cyber Community : Beyond e-Learning” 開式の辞 第1部 サイバーキャンパスシステム 第2部 教職員研修 第3部 国際協働英語 閉式の辞	開式の辞：武藤元昭 (青山学院大学学長) Sukegawa Takashi 第1部 玉木欽也 (eLPCO センター長) Supanee Sombuntham (タイサイバー大学助教授) 第2部 Anuchai Theeraroungchaisri (タイサイバー大学助教授) Lesley Garner (NASA, U. S. A.) 第3部 Fang Qi (深圳大学准教授) 本名信行 (国際政治経済学部教授) 三宅ひろ子 (特別研究員) 猿橋順子 (客員研究員) 竹下裕子 (東洋英和女学院大学教授) 小張敬之 (経済学部教授) 木村みどり (東京女子医大准教授) 合田美子 (客員研究員) 閉式の辞：魚住清彦 (青山学院大学 副学長)	総研ビル 12階 大会議室	e-Learning 人材育成 研究センター (eLPCO)
07.7.28 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2007 (第2回) 「核融合技術の産業界での活用」 「日本原子力研究開発機構における 産学連携と知財活用」	講師 狐崎晶雄 (元財団法人高度情報科学技 術研究機構常務理事) 田島保英 (独立行政法人日本原子力研 究開発機構産学連携推進部 長)	相模原キャン パス K 棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
07.10.27 14:00～ 17:10	2007年度第1回特許セミナー 特許のリスクとベネフィットを考える 講演 ①「研究開発の落とし穴—特許マップから見たフラットパネル技術の競争力—」 ②「国際標準となる特許とは—標準という視点から見た研究開発のあり方—」 ③「知財パッケージをいかに作るか—特許、論文、秘密、データの上手な管理方法—」	開会挨拶：澤邊厚仁 (電気・電子工学科教授) 講師 ①川崎昌義 (SBI インテクストラ株式会社 社コンサルティング部長) ②田中芳夫 (マイクロソフト株式会社 技術最高顧問) ③菊池純一 (法学部大学院法学研究科 ビジネス法務専攻教授) 閉会挨拶：澤邊厚仁 (電気・電子工学科教授)	相模原キャン パスO棟 102教室	主催：自然科学研究部 協賛：理工学部
07.11.10 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2007 (第3回) 「お金を稼ぐ変化に着目した仕事の見方 とバーチャル・ファクトリーへの活用」 「バーチャル・ファクトリーによる試作品 レス生産の特徴と効果」	講師 篠田心治 (東京理科大学理工学部専任講師) 下澤一裕 (富士ゼロックス㈱)	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
07.11.19 18:00～ 19:30	公開講演会 『能の中の六条御息所 (源氏物語) —「葵上」「野宮」』	講師 坂井音隆 (観世流シテ方 能楽協会会員観世会会員) 坂井音晴 (観世流シテ方 能楽協会会員観世会会員) 武田文志 (観世流シテ方 能楽協会会員観世会会員) 聞き手 廣木一人 (文学部教授)	青山学院 女子短期大学 L402教室	人文科学研究部 「[声]と[身体]の探 求」プロジェクト
07.11.21 13:10～ 14:40	公開講演会 「ルネサンス前夜にいたる教会史 —ローマとビザンチン」	多々谷有子 (関東学院大学教授)	青山キャンパ ス15号館 15402教室	人文科学研究部 「イギリス・ルネッサ ンス期の言語と文化」 プロジェクト
07.12.5 14:00～ 17:10	2007年度第2回特許セミナー 知的財産戦略 講演 ①「知的財産制度入門」 ②「事業経営と知的財産権」 ③「特許と商標を利用して成功するために 必要な視点」	開会挨拶：山口博明 (情報テクノロジー学科准教授) 講師 ①福田洋子 (特許庁総務部企画調査課活用企画班活 用企画係長) ②加藤孝雄 (加藤萬国特許事務所所長・弁理士) ③松井孝夫 (岡部国際特許事務所・弁理士) 閉会挨拶：山口博明 (情報テクノロジー学科准教授)	相模原キャン パスF棟 304教室	主催：自然科学研究部 協賛：理工学部
07.12.5 13:10～ 14:40	公開講演会 「ルネサンスと古典語 —ルネサンスのラテン語文学」	沓掛良彦 (東京外国語大学名誉教授)	青山キャンパ ス15号館 15402教室	人文科学研究部 「イギリス・ルネッサ ンス期の言語と文化」 プロジェクト
07.12.8 13:30～ 17:00	シンポジウム 「オスマン朝の官僚機構と文書行政」	講師：高松洋一 (非常勤講師) 討論者：小名康之 (文学部教授)	青山キャンパ ス15号館 12階史学科 第3研究室	人文科学研究部 「帝国官僚と支配—興 隆と崩壊」プロジェクト
07.12.10 ～08.1.11	第3回 eLPCO 公開講座 eラーニング専門人材育成短期集中講座		青山 キャンパス	eラーニング人材育成 研究センター (eLPCO)

日時	タイトル	講師等	場所	主催
08.2.1 10:00～ 16:00	日本・モンゴル国際学術シンポジウム 「グローバル化とエコツーリズム —モンゴルの観光・環境資源を どう活かすか—」 記念基調講演 ①「モンゴルの現状」 ②「モンゴルのエコツーリズム」 プレゼンテーション 報告①「モンゴルのエコツーリズム政策 への質問」 報告②「モンゴルにおける日本企業法務 の問題」 報告③「モンゴルの経済状況」 報告④《エコツーリズムの実践ケース》 報告⑤《モンゴル向け日本人旅行者を扱う 旅行社から》	開会の辞 伊藤定良（青山学院大学学長） 秋元実治（総合研究所所長） 講師 ①レンツェンドー・ジグジット （駐日モンゴル国特命全権大使） ②バツタルガ氏 （モンゴル政府道路交通省 観光局副局長） 通訳：ツェベグドルジ （モンゴル航空日本支社） 報告者 ①マイケル・サットン （WTO 研究センター客員研究員） ②原口薫 （原口総合法律事務所・弁護士） ③バジジヤルガル氏 （モンゴル政府貿易経済協力局副局長） ④関和典（青森県西目屋村村長） ⑤柳沢徳久 （サントクエンタープライズ株式会社）	青学会館 3階 「アロン」	主催：社会科学研究所 「日本・モンゴルの FTA（自由貿易協定） 結成に係わる研究」プロ ジェクト、WTO 研 究センター 共催：モンゴル国立大 学 後援：駐日モンゴル国 大使館

【2008年度】

日時	タイトル	講師等	場所	主催
08.6.18 11:00～ 12:30	公開講演会 「医療機器の高度化に伴う安全と危険 ～病院・在宅医療における機器の発展と 人間の思い込み～」	講師 松永直子 （神田訪問看護ステーション所長）	総研ビル 6階 603教室	創立20周年記念特別研 究プロジェクト 「科学技術の発展と心 的機能から探る安全と 危険のメカニズムに関 する総合研究」プロ ジェクト
08.7.5 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2008（第1回） 「IEによる改善活動の事例 ：マイクロオートメーション」 「改善活動の産学連携」	講師 吉田卓司（南開工業(株)） 松本俊之（経営システム工学科准教授）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
08.7.18 16:00～ 17:30	北里大学医学部・青山学院大学理工学部による共同研究会 講演会「糖尿病と遺伝子異常」	講師 藤田芳邦（北里大学医学部教授）	相模原キャン パスK棟 209号室	自然科学研究所
08.9.27 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2008（第2回） 「IEと周辺視による目視検査」 「IEによる目視検査の改善活動の 産学連携」	講師 佐々木章雄（㈱日立グローバル ストレージテクノロジーズ） 松本俊之（経営システム工学科准教授）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
08.10.4 13:30～ 18:00	青山学院大学総合研究所 創立20周年記念講演会 「地球規模における平和・安全・安心」 講演Ⅰ「国際紛争と平和構築」 講演Ⅱ「科学・技術社会における 安全と安心」 パネルディスカッション 「地球規模における平和・安全・安心」	開会祈祷・総合司会：大島力 （キリスト教文化研究部長） 挨拶：松澤健（青山学院理事長） 挨拶：伊藤定良（青山学院大学学長） 講師 講演Ⅰ：明石康（元国際連合事務次長） 講演Ⅱ：村上陽一郎 （国際基督教大学名誉教授） パネルディスカッション 司会：秋元実治（総合研究所所長） パネリスト 明石康（元国際連合事務次長） 村上陽一郎（国際基督教大学名誉教授） 福岡伸一（理工学部教授） 北村文昭（文学部教授） 閉会挨拶：岡田昌志 （青山学院大学副学長）	総研ビル 12階 大会議室	総合研究所

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
08.10.22 ～10.24	第12回 OECD/Japan セミナー 『グローバル化と言語コンピテンシー ～激動する言語環境にどう向き合うか～』			
08.10.22 10:00～ 21:00	基調講演1 「脳を育む：学習の脳科学」 —脳科学から「グローバル化と言語コンピテンシー」へ— 基調講演2 「OECD加盟国における言語的課題」 基調講演3 「グローバル化とカナダにおける言語コンピテンシー」 全体会1 「グローバル化と言語コンピテンシー」プロジェクトの概要 全体会2 「グローバル化と英語の多様性」 全体会3 「言語習得におけるモチベーションの役割」 レセプション	講師 基調講演1 小泉英明 (株式会社日立製作所フェロー、科学技術振興機構) 基調講演2 ルイス・フェリペ・ロベス・カルバ (国際連合開発計画) 基調講演3 サティヤ・プリンク (カナダ政府人材・社会開発省) 全体会1 ブルーノ・デラ・キエーザ (OECD教育研究革新センター) 全体会2 本名信行 (国際政治経済学部教授) 全体会3 宮本晃司 (OECD教育研究革新センター)	アイビーホール 青学会館	文部科学省、OECD/CERI (教育研究革新センター)、総合研究所
08.10.23 10:00～ 12:30	分科会1：国際コミュニケーションにおける英語の機能と役割 分科会2：言語習得への脳科学からのアプローチ 分科会3：グローバル化と日本の言語課題 分科会4：移民・マイノリティの言語的可能性 分科会5：多様化する言語環境への対応 ：言語監査の未来像 分科会6：学校外言語学習 ：メディアとICTの役割 全体会4 各分科会の報告			
14:00～ 16:30				
16:30～ 18:00				
08.10.24	学校訪問 (希望者のみ)			
08.12.14 10:00～ 18:00	国際会議 『拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—和解・安全保障・人の移動—』 セッション1. 紛争と和解—ヨーロッパと東アジアの比較研究 セッション2. ヨーロッパの安全保障戦略と、アジアの安全保障再編 セッション3. 統合の中の地域協力と人の移動	セッション1 司会：羽場久美子 (国際政治経済学部教授) 講師：柴宣之 (東京大学大学院 総合文化研究科教授) 李元徳 (国民大学教授、韓国) 押村高 (国際政治経済学部教授) 討論者：羽場久美子 (国際政治経済学部教授) セッション2 司会：山本吉宣 (国際政治経済学部教授) 講師：エティンヌ・ロイター (欧州委員会対外総局中国課上級顧問) 赤羽恒雄 (モンレー国際大学教授、 東アジア研究センター所長) 菊池努 (国際政治経済学部教授) 討論者：大賀哲 (九州大学准教授) セッション3 司会：中兼和津次 (国際政治経済学部教授) 講師：ボグダン・ムルジェスク (ブカレスト大学経済史教授) ボホロビッチ・ベアタ (横浜国立大学客員教授) 手塚和彰 (法学部教授) 討論者：岡部みどり (上智大学法学部准教授)	総研ビル 12階 大会議室	課題別研究部 「拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究」プロジェクト

日時	タイトル	講師等	場所	主催
08.12.20 13:00～ 14:30	公開講演会 「後期高齢者のリスクと管理 ～医療面から考えるサポートのあり方～」	講師 英 裕雄 (新宿ヒロクリニック院長)	総研ビル 4階 14404教室	創立20周年記念特別研究プロジェクト 「科学技術の発展と心的機能から探る安全と危険のメカニズムに関する総合研究」プロジェクト
08.12.20 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2008 (第3回) 「光合成の森」 「光産業技術の動向」	講師 園池公毅 (東京大学准教授) 菅田孝之 (イーラムダネット社長)	相模原キャンパスK棟 209号室	主催: 総合研究所 協力: 首都圏南西地域産業活性化フォーラム運営委員会、相模原市
09.2.7 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2008 (第4回) 「食品衛生として問題となる微生物、昆虫、節足動物、イネズミ達とその防除対策」 「神奈川県における里山の荒廃と野生動物とヤマビルとの関係」	講師 谷重和 (環境文化創造研究所理事) 石川恵理子 (環境文化創造研究所主任研究員)	相模原キャンパスK棟 209号室	主催: 総合研究所 協力: 首都圏南西地域産業活性化フォーラム運営委員会、相模原市

【2009年度】

日時	タイトル	講師等	場所	主催
09.4.13 13:10～ 14:40	研究会 「セルビアのEU加盟、日本への期待」	講師: ボジダル・ジェリッチ (セルビア共和国副首相) 司会: 羽場久美子 (国際政治経済学部教授)	総研ビル 12階 大会議室	課題別研究部 「拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究」プロジェクト、国際研究センター
09.4.18 13:00～ 17:30	谷家所蔵「谷干城関係文書」小展示会・シンポジウム 講演: 谷干城と近代日本 —「谷干城関係文書」を通じて— シンポジウム: 「谷干城関係文書」と谷田子爵家 —個人文書の特徴を考える—	司会: 岩田みゆき (文学部教授) 講師: 小林和幸 (文学部教授) シンポジウム パネリスト: 谷元臣 (谷家御当主) 黒沢文貴 (東京女子大学教授) 小林和幸 (文学部教授) 展示史料解説	青山キャンパス15号館5階 第13会議室	共催: 人文科学研究部 「18世紀～19世紀における文書行政の発展に関する比較研究」プロジェクト、科学研究費基盤研究C
09.5.28 15:00～ 19:00	ワークショップ 「フィンランド、ロシア、日本」 各報告・討論 ①「冷戦期のフィンランドとソ連—相互作用と協力—」 ②「欧州連合とフィンランド—諸政策、諸相、諸段階、ヨーロッパはひとつか?」 ③「小国のリアリズム vs 日本のイデオロジズム—戦後1945-48年小国のパーセプション」 ④「フィンランドと日本のナショナル・ヒストリーと神話—比較論」	司会: 羽場久美子 (国際政治経済学部教授) 主催者・共催者挨拶: フィンランド文化センター バルト・スカンディナヴィア研究会 青山学院大学 講師 ①サリ・アウティオ・サラモス (フィンランド・ヘルシンキ大学、アレクサンテリ研究所) ②ハンナ・スミス (フィンランド・ヘルシンキ大学、アレクサンテリ研究所) ③百瀬宏 (津田塾大学名誉教授) ④石野裕子 (津田塾大学非常勤講師)	総研ビル 10階 第18会議室	共催: 課題別研究部 「拡大ヨーロッパと東アジアの地域再編—地域統合・安全保障・社会政策の比較研究」プロジェクト、フィンランド文化センター、バルト・スカンディナヴィア研究会、国際研究センター研究会
09.7.11 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2009 (第1回) 「最新ネットワーク技術の動向 ～NGNとクラウドコンピューティング」 「最新ネットワーク技術の動向 ～企業通信とモバイル IP-PBX」	講師 内田直樹 (NTT サービスインテグレーション基盤研究所主席研究員 工博) 山田哲靖 (NTT ソフトウェア IP ネットワーク事業ユニットプロジェクトマネージャ 工博)	相模原キャンパスK棟 209号室	主催: 総合研究所 協力: 首都圏南西地域産業活性化フォーラム運営委員会、相模原市
09.7.18 14:00～ 17:10	2009年度第1回特許セミナー 「オープン・イノベーション時代の研究活動の在り方」 講演 ①「オープン・イノベーション時代における研究成果の取り扱い方」 ②「知財のストラクチャリングと研究開発のやり方」 ③「知財と益のソリューションと研究所運営」	開会挨拶: 澤邊厚仁 (電気・電子工学科教授) 講師 ①菊池純一 (法学部教授) ②久保田茂夫 (SBI インテクストラ株式会社取締役) ③高橋毅 (財団法人電力中央研究所知的財産センター所長) 閉会挨拶: 澤邊厚仁 (電気・電子工学科教授)	相模原キャンパスO棟 102号室	主催: 自然科学研究部 協賛: 理工学部

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
09.9.12 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2009 (第2回) 「世界の風力発電とベンチャービジネス」 「自然エネルギーの可能性と国内外の動向」	講師 鈴木兼四 (IPP ジャパン株式会社 代表取締役社長) 松原弘直 (特定非営利活動法人環境エネルギー 政策研究所)	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
09.9.21 13:00～ 16:30	ハンガリー語&日本語 スピーチ・コンテ スト プログラム ・日本人、ハンガリー語スピーチ・コンテ スト ・ハンガリー人、日本語スピーチ・コンテ スト ・ツインバロンの演奏	審査員 アルベルト・ヤーノシュ (ハンガリー大使代理) ヒダシ・ユディット (ハンガリー日本友好協会会長) キラノイ・ヤーノシュ (早稲田大学) 岡本真理 (大阪大学) 象栄美子 (ハンガリー友好協会理事) 田中義具 (ハンガリー友好協会理事長) 羽場久美子 (ハンガリー友好協会理事、 国際政治経済学部教授) ほか	総研ビル 12階 大会議室	主催：課題別研究部 「拡大ヨーロッパと東 アジアの地域再編—地 域統合・安全保障・社 会政策の比較研究」プ ロジェクト 協力：大阪大学、日本 ハンガリー友好協会、 東京大学 (文化セン ター)、城西大学、在 ハンガリー・日本大使 館
09.10.3 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2009 (第3回) 「月探査衛星“かぐや”のロマンと秘話」 「国際宇宙ステーション計画とその利用」	講師 高野忠 (宇宙航空研究開発機構名誉教授、 日本大学理工学部教授) 堀川康 (宇宙航空研究開発機構技術参与)	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
09.10.18 ～12.14	eラーニング専門家育成プログラム 第3回社会人向け基礎講座 コース ・eラーニングとビジネス ・インストラクショナルデザインと学習 理論 ・ICTとラーニングシステム ・eラーニングにおける著作権と個人情報 報	対面講座とeラーニングによる自己学習 講師 長沼将一 (eLPCO 客員研究員) 権藤俊彦 (eLPCO 客員研究員、特定非営利活 動法人日本イーラーニングコンソシ アム eLP 研修委員) 石井美穂 (HIRC 客員研究員) 合田美子 (大手前大学現代社会学部准教授、 eLPCO 客員研究員、特定非営利活 動法人日本イーラーニングコンソシ アム eLP 研修委員)	青山学院 ヒューマン・ イノベーション ・コンサル ティング株式 会社 セミ ナールーム ほか	主催：eラーニング人 材育成研究センター 協賛：ヒューマン・イ ノベーション・コンサ ルティング株式会社、 ヒューマン・イノベー ション研究センター 協力：株式会社デジタ ル・エデュケーション ・サポート、大手前 大学
09.11.18 11:00～ 12:30	公開講演会 「医療事故防止のために」	講師 赤松俊武 (弁護士)	総研ビル 6階 14603教室	創立20周年記念特別研 究プロジェクト 「科学技術の発展と心 的機能から探る安全と 危険のメカニズムに関 する総合研究」プロ ジェクト
09.11.22 13:00～ 17:30	青山学院創立135周年 青山学院大学開設60周年記念 青山学院大学公開講演会 冷戦終焉20年 「鉄のカーテン解体から、ベルリンの壁崩 壊へ」 The international conference on the 20th anniversary of the end of the Cold War Part I. 政策決定者の講演 「鉄のカーテンはいかに断ち切られたか。 ベルリンの壁はいかに崩壊したか民主化 はいかに達成されたか」 Part II. シンポジウム 政策決定者と日本代表のパネルディス カッション	主催者・共催者挨拶 伊藤定良 (青山学院大学学長) リュディ・フィロン (駐日欧州委員会 一等書記官) 福嶋教輝 (外務省欧州局副参事官) トーマス・ロイドル (在京オーストラリ ア大使館次席、全権公使) Part I. 講演者： 1. ランズベルグス・ヴィータウタス (元リトアニア国家元首 (元最高会 議議長)、欧州議会議員) 2. ランズフェルト・ヴェラ (作家、元ドイツ国会議員) 3. スタニスキス・ヤドヴィガ (1989年当時のポーランド連帯指導 者、ワルシャワ大学教授) 4. オプラトカ・アンドラーシュ (アンドラーシュ・ジュラ大学、 ウィーン大学教授、ハンガリー) Part II. シンポジウム 共同司会： 大野博人 (朝日新聞前ヨーロッパ総局長) 羽場久美子 (国際政治経済学部教授)	総研ビル 12階 大会議室	主催：青山学院大学 共催：オーストリア大 使館、ハンガリー大使 館、ドイツ大使館、 ポーランド大使館、リ トアニア大使館、駐日 欧州委員会代表部、東 京大学ドイツ・ヨー ロッパ研究センター (DESK)、朝日新聞社 後援：日本外務省、日 本ハンガリー友好協会

日時	タイトル	講師等	場所	主催
		ランズベルギス・ヴィータウタス ランズフェルト・ヴェラ スタニスキス・ヤドヴィガ オプラトカ・アンドラーシュ ロイドル・トーマス 山本吉宣 (国際政治経済学部教授)		
09.12.5~ 12.6	CHIR (国際関係史学会) 2009年東京大会プログラム 「冷戦と地域統合—ヨーロッパとアジアの 国際関係史比較—」 The Cold War and the Regional Integration: Comparative Studies on the History of International Relations between Europe and Asia			
09.12.5	Part I Comparative Studies of the Cold War in the International Relations between Europe and Asia 「ヨーロッパとアジアの国際関係史に関す る比較研究：冷戦と地域統合」 1. 欧州統合と冷戦の始まり 2. 冷戦の亢進と欧州・アジア 3. 冷戦と反体制派の成長	Part I 基調講演 渡邊啓貴 (在仏日本大使館 公使) 小倉和夫 (国際交流基金理事長、 青山学院大学客員教授) 1. 司会：柴宣弘 (東京大学教授) 報告者：アラン・アグラン (パリ・ナンテール大学准教 授) 川嶋周一 (明治大学専任講師) 倉科一希 (国際教養大学准教授) 2. 司会：石井修 (一橋大学名誉教授) 報告者：アルフレド・カナヴェロ (CHIR 事務局長、ミラノ大 学教授) 百瀬宏 (津田塾大学名誉教授) オラヴィ・K・フェルト (フィンランド・オウル大学 教授) 3. 司会：押村高 (国際政治経済学部教授) 報告者：ヴィルヘルム・フォッセ (ICU 教授) 下斗米伸夫 (法政大学教授) コンスタンティン・サルキー ソフ (山梨学院大学教授) 討論者：押村高 (国際政治経済学部教授)	総研ビル 12階 大会議室	課題別研究部 「拡大ヨーロッパと東 アジアの地域再編—地 域統合・安全保障・社 会政策の比較研究」プ ロジェクト
09.12.6	Part II Regional Integration and Disintegration in Europe and Asia 「冷戦終焉20年と、ヨーロッパ・アジアの 地域再編」 1. 冷戦終焉20年の欧州とアジア 2. 東アジアにおける地域協力と諸課題 3. 総括討論 4. 閉会の辞	Part II 総司会：押村高 (国際政治経済学部教授) 基調講演 ロベール・フランク (CHIR 会長、パリ大学教授) 1. 司会：森井裕一 (東京大学准教授) 報告者：趙宏偉 (法政大学教授) 羽場久美子 (青山学院大学教授) 舒旻 (早稲田大学准教授) 吉野良子 (青山学院大学総合研究所客 員研究員) 2. 司会：首藤もと子 (筑波大学教授) 報告者：デビッド・ロウエ (オーストラリア・ディーキ ン大学教授) アルフレド・C. ロブレス Jr. (デ・ラサール大学教授) ユグー・テルトレ (パリ大学教授) 討論者：天児慧 (早稲田大学教授) 3. 共同司会： 渡邊啓貴 (在仏日本大使館 公使) 羽場久美子 (国際政治経済学部教授)	総研ビル 12階 大会議室	課題別研究部 「拡大ヨーロッパと東 アジアの地域再編—地 域統合・安全保障・社 会政策の比較」プロ ジェクト

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
09.12.6		パネリスト： ロベール・フランク (CHIR 会長、パリ大学教授) アルフレド・カナヴェロ (CHIR 事務局長、ミラノ大 学教授) 百瀬宏 (津田塾大学名誉教授) アルフレド・C. ロブレス Jr. (デ・ラサール大学教授) 4. 押村高 (国際政治経済学部教授)		
09.12.21～ 12.22 10.1.9～10 10.2.6～7 10.3.6～7 13:00～ 17:30	「小学生向けリーダーシップ研修」	・コミュニケーション能力強化のための ゲーミング ・ロボット組み立て、迷路脱出プログラ ム作成	青山学院 ヒューマン・ イノベーション ・コンサル ティング株式 会社 セミ ナールーム	eラーニング人材育成 研究センター、 ヒューマン・イノベ ーション・コンサルテ ィング株式会社
10.1.23 ～3.23	eラーニング専門家育成プログラム 第4回社会人向け基礎講座 コース ・eラーニングとビジネス ・インストラクショナルデザインと学習理論 ・ICTとラーニングシステム ・eラーニングにおける著作権と個人情報	対面講座とeラーニングによる自己学習 講師 長沼将一 (eLPCO 客員研究員) 齋藤長行 (eLPCO 客員研究員) 石井美穂 (HiRC 客員研究員)	青山学院 ヒューマン・ イノベーション ・コンサル ティング株式 会社 セミ ナールーム	主催：eラーニング人 材育成研究センター 協賛：ヒューマン・イ ノベーション・コン サルティング株式 会社 ヒューマン・イノベ ーション研究センター
10.2.1	Research Conference on "Comparison of Group Decision Making among Chinese, Russian and Japanese Firms"	Program: Opening Remarks Presentation (Japan) By Prof. Mitsuru Morita (Aoyama Gakuin University) Presentation (Russia) By Prof. Anna Gryanznova (Moscow State University) Presentation (China) By Prof. Zhuchao Y	Room 540 (4th floor) Building #5, Aoyama Gakuin University	社会科学研究所「日 本・中国・ロシアの企 業組織意思決定の国際 比較実験経営学による 実証的アプローチ」プ ロジェクト
10.2.6 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2009 (第4回) 「人体通信技術とは」 「人体通信とICカードソリューションにつ いて」	講師 加藤康男 (慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員 [訪問]、株式会社カイザーテクノ ロジー 代表取締役) 近田恭之 (大日本印刷株式会社 IPS 事業本部 デジタルセキュリティ本部)	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
10.3.11～ 12	国際アジアシンポジウム 「世界同時不況を超えるアジア地域協力 東アジアの歴史的和解に向けて：欧州統 合に学ぶもの ―クーデンホーフ・カレ ルギー生誕115周年記念―」			
10.3.11 15:30～ 18:30	「東アジアの歴史的和解に向けて」 第1部： 「東アジアの歴史的和解と共通文化に向 けて」 第2部： 「東アジア歴史的和解・共同宣言に向 けて」	総合進行司会： 井出亜夫 (日本大学) 脇坂紀行 (朝日新聞論説委員) 開会挨拶： 高木誠一郎 (国際政治経済学部教授) 第1部： 問題提起： 羽場久美子 (国際政治経済学部教授) 報告者： 三谷博 (東京大学) 藤井省三 (東京大学) アンドリュウ・ホルバート (スタンフォード大学) パネリスト： 天兒慧 (早稲田大学) 河野健一 (長崎県立大学) 兼田麗子 (早稲田大学)、 林達 (日中韓学生交流委員会代表) 第2部： 特別公演： 西原春夫 (早稲田大学元総長) 共同声明提案： 羽場久美子・天兒慧・井出亜夫	総研ビル 12階 大会議室	主催：国際アジア共同 体学会、青山学院大学 科研・青山学院大学 総合研究所「拡大ヨー ロッパと東アジアの地 域再編―地域統合・安 全保障・社会政策の比 較研究」プロジェクト 助成：国際交流基金 後援：外務省、国連大 学、朝日新聞社、日本 EU学会 協賛：マザーズ・キス 財団、日本新技術促進 機構

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
10.3.12 9:00～ 18:00	「同時不況を超えるアジア地域協力」 記念講演 「日中韓は東アジア共同体構築のために何をなすべきか」 第1セッション 「世界金融危機後のアジア地域統合をどう進めるか」 第2セッション 「アジア共通政策のシナリオをどう描くか：安全保障、金融通貨とFTA」 問奏：「空山鳥語」「月夜牧羊女」ほか 第3セッション 「東アジア・グリーンニューディールと環境産業革命をどう進めるのか」 特別提言 「鳩山政権への提言」 総括挨拶 「日中韓歴史和解」及び 「アジア連携戦略」東京声明	午前の部 司会： 中川十郎（日本大学） 田中哲二（国連大学） 開催宣言： 羽場久美子（国際アジア共同体学会） 開会挨拶： 村松泰雄（朝日新聞論説主幹） コンラッド・オステルウォルター （国連大学長） ミヒヤエル・クーデンホーフ・ カレルギー 記念講演： 韓昇洲 （韓国元外交通商大臣、元駐米大使） 呉建民 （中国外交学院前院長、元駐仏大使） 第1セッション： 進藤榮一 （国際アジア共同体学会代表、筑波大 学名誉教授） 河合正弘（アジア開発銀行研究所長） ヴォルカー・スタンツェル （駐日ドイツ大使、文学博士） 午後の部 司会： 山本武彦（早稲田大学） 高橋一生（国連大学） 第2セッション 劉江永（清華大学日本研究所所長） 近藤健彦（元副財務官、明星大学教授） 金都亨（世宗研究所客員フェロー、 韓国国際経済学会元会長） 問奏：甘建民（二胡奏者） 第3セッション 金泳鎬（韓国通産資源省元長官、 柳韓大学長） 廣野良吉（地球環境戦略研究機関参与） 李志東（長岡技術科学大学教授） 羅星仁（広島修道大学教授） 特別提言 古賀一成 （衆議院議員、前両院議員総会長） 総括挨拶 谷口誠（元国連大使、国際アジア 共同体学会顧問）	総研ビル 12階 大会議室	主催：国際アジア共同 体学会、青山学院大学 科研・青山学院大学総 合研究所「拡大ヨー ロッパと東アジアの地 域再編—地域統合・安 全保障・社会政策の比 較研究」プロジェクト 助成：国際交流基金 後援：外務省、国連大 学、朝日新聞社、日本 EU学会 協賛：マザーズ・キス 財団、日本新技術促進 機構

【2010年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
10.5.22 13:30～ 16:00	「小学生向け 親子のシンポジウム」 講演 「『コミュニケーション塾』開講に向けて」 「子供への支援の必要性」 デモンストレーション 「模擬研修 ロボットづくりのグループ ワーク」 説明会 「仲間づくりが苦手な子供・若者」	講師 玉木欽也（eLPCO センター長） 川 良子 （ピアサポートネットしぶや理事長）	総研ビル 11階 第19会議室	主催：eラーニング人 材育成研究センター ：ヒューマン・イノ ベーション・コンサル ティング株式会社
10.9.18 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2010（第1回） 「食品安全のお話…生協での経験をもとに」 「体験的経営論…生協での経験をもとに」	講師 藤岡武義（公益財団法人生協総合研究所 元専務理事、日本生協連元常務理事）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
10.11.13 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2010（第2回） 「多国籍都市と他民族都市」	講師 小宮山昭（建築家）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
10.12.11 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2010（第3回） 「日本における移動体通信の発展と今後」 「YRP テストベッドのご紹介」	講師 太田現一郎 （工学博士 株式会社横須賀テレコム リサーチパーク YRP 国際 ICT 技 術戦略研究所 事業企画室次長） 佐藤美保 （株式会社横須賀テレコムリサーチ パーク YRP 国際 ICT 技術戦略研 究所 事業企画室主任） 中村稔 （株式会社横須賀テレコムリサーチ パーク YRP 国際 ICT 技術戦略研 究所 事業企画室室長）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市
11.1.22～23	青山学院大学 「地域統合の理論と制度化」国際会議 アジア、ヨーロッパの地域統合と理論・制 度の比較研究			
11.1.22 14:00～ 17:00	第1セッション 「アジア太平洋の理論・制度・権力」 「東アジアとリベラルな国際秩序—東アジ ア地域秩序形成における覇権、均衡、同意」 「ヨーロッパ統合モデル—アジアにどう関 係するのか？」 「アジア地域統合の基本原則」 「アジアとヨーロッパの地域統合の理論的 アプローチ」	開会挨拶 伊藤定良（青山学院大学学長） 土山實男（青山学院大学副学長） 仙波憲一 （青山学院大学国際政治経済学部長） 司会：猪口孝（新潟県立大学学長） ジョン・アイケンベリー （プリンストン大学教授） フレイザー・キャメロン （元 EU 政策センター所長） アマタフ・アチャリア （アメリカン大学教授） 山本吉宣（青山学院大学教授） 討論者：猪口孝（新潟県立大学学長）	総研ビル 12階 大会議室	主催：青山学院大学国 際政治経済学部・青山 学院大学科研・青山学 院大学総合研究所「拡 大ヨーロッパと東アジ アの地域再編—地域統 合・安全保障・社会政 策の比較研究」プロ ジェクト
11.1.23 10:00～ 17:00	第2セッション 「アジアの地域統合の制度化」 「東アジアの制度化に関する中国の見解」 「地域交流の視点からみた東アジア共同体」 「『東アジア共同体』と日韓関係」 第3セッション 「リスボン条約後のヨーロッパ地域統合の 再編と制度化 —アジアの経済発展をにらみつつ— 「拡大 EU とポーランドの役割」 「リスボン後のヨーロッパ地域統合の高次 の制度化」 「比較地域主義は可能か—東アジアとヨー ロッパを事例として」 「東アジア共同体—拡大ヨーロッパの制度 と規範との比較考察」	司会：袴田茂樹（青山学院大学教授） 高木誠一郎（青山学院大学教授） 平野健一郎 （国立公文書館アジア歴史資料セン ター長） 木宮正史（東京大学准教授） 討論者：天児慧（早稲田大学教授） 司会：森井裕一（東京大学准教授） アントニン・カミンスキ （ワルシャワ大学教授） アンドリュウ・モラフチク （プリンストン大学教授） 遠藤乾（北海道大学教授） 羽場久美子（青山学院大学教授） 討論者：押村高（青山学院大学教授）	総研ビル 12階 大会議室	主催：青山学院大学国 際政治経済学部・青山 学院大学科研・青山学 院大学総合研究所「拡 大ヨーロッパと東アジ アの地域再編—地域統 合・安全保障・社会政 策の比較研究」プロ ジェクト
11.2.19 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2010（第4回） 「あかつき搭載赤外カメラによる金星探査」	講師 岩上直幹（東京大学理学部准教授 あかつき搭載赤外カメラ責任者）	相模原キャン パスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域 産業活性化フォーラム 運営委員会、相模原市

【2011年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
11.5.14 13:30～ 17:00	公開シンポジウム フンボルト理念の終焉？ —現代日本の大学教員の課題— ◆主題講演 「フンボルト理念の終焉？ —現代日本の大学教員の課題— ◆講演に対する応答 ◆主題講演者とリスポンデントによる ディスカッション ◆全体での質疑応答	潮木守一 (元桜美林大学大学院国際学研究所教授、名古屋大学大学院国際関係開発研究科教授) リスポンデント 西山雄二 (首都大学東京准教授) 東方敬信 (青山学院大学教授) 深井智朗 (聖学院大学総合研究所教授)	総研ビル 9階 第16会議室	キリスト教文化研究部 「キリスト教大学における学問体系論の研究」プロジェクト
11.7.23 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2011 (第1回) 「企業経営とリスク管理」	講師 荒川弘熙 (IPA (独立行政法人情報処理推進機構) リサーチフェロー)	相模原キャンパスK棟 209号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域産業活性化フォーラム運営委員会、相模原市
11.11.5 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2011 (第2回) 「放射線と原子力」	講師 孤崎晶雄 (元日本原子力研究所部長 [核融合] 元高度情報科学技術研究機構常務理事 現青山学院大学理工学部客員教員)	相模原キャンパスO棟 325号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域産業活性化フォーラム運営委員会、相模原市
11.12.17 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2011 (第3回) 「第二ビジネス世界創造」への挑戦	講師 有馬修二 (NTT アドバンステクノロジー株式会社 テクニカルアドバイザー)	相模原キャンパスO棟 325号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域産業活性化フォーラム運営委員会、相模原市
12.1.28 14:00～ 16:00	青学ビジネスフォーラム2011 (第4回) 「産学連携と光ベンチャービジネス」 「日本サーモニクス株式会社の産学連携」	講師 菅田孝之 長田智司	相模原キャンパスO棟325号室	主催：総合研究所 協力：首都圏南西地域産業活性化フォーラム運営委員会、相模原市
12.3.10 13:30～ 17:00	公開シンポジウム テイリッヒとパネンブルクの神学的<学問論> ◆主題講演 「テイリッヒとパネンブルクの神学的<学問論>について」 ◆講演に対する応答 ◆ディスカッション	Prof. Gunther Wenz (University of Munchen) 司会 茂牧人 (総合文化政策学部教授) パネリスト 西山雄二 (首都大学東京准教授) 濱崎雅孝 (京都大学他非常勤講師) 西谷幸介 (国際マネジメント研究科教授)	総研ビル 11階 第19会議室	キリスト教文化研究部 「キリスト教大学における学問体系論の研究」プロジェクト
12.3.15 13:00～ 17:30	公開シンポジウム 現代文明と私たち—大学からの発信 災害と人間 ～核時代の生そして再生を問う～ 第一部 パネリストによる発題 「震災と原発—核時代に生きる」 「宇宙・自然史における人間と災害—フクシマの教訓」 「歴史と災害—過去と現在の対話」 「原発事故・放射能汚染と市民の知る権利—市民メディアの役割」 「天災・人災と復興—被災地支援の活動から見えてくるもの」 「災害に強い社会と都市づくり—被災地の経験と今後の課題」 第二部 パネルディスカッション	総研司会：小池和彦 (総合研究所自然科学研究部長) 会式祈祷：西谷幸介 (総合研究所キリスト教文化研究部長) 挨拶：本間照光 (研究所長) 山北宣久 (本学院院长) 仙波憲一 (本学学長) 安斎育郎 (立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長、立命館大学名誉教授) 柴田徹 (本学名誉教授) 飯島渉 (本学文学部教授) 白石草 (非営利メディア OurPlanetTV 代表理事) 奥田知志 (東八幡キリスト教会牧師、北九州ホームレス支援機構代表) 黒石いずみ (本学総合文化政策学部教授) コーディネーター： 申恵丰 (総合研究所社会学研究部長) 挨拶： 佐藤泉 (総合研究所人文科学研究部長、人権教育委員会委員長)	総研ビル 12階 大会議室	主催：青山学院大学総合研究所 共催：青山学院大学人権教育委員会

【2012年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
13.3.9 10:00～ 12:30	特別講演会 人文学と制度 ◆講演 (映画『哲学への権利』の一部上映あり) ◆コメント ◆質疑応答	西山雄二 (首都大学東京都市教養学部准教授) 中井章子 (青山学院女子短期大学 現代教養学科教授)	青学会館1階 フィリア	キリスト教文化研究部 「キリスト教大学の学 問体系論の研究」プロ ジェクト

【2013年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
13.6.23 14:00～ 17:30	これからの国のかたちを考えよう ～文明と憲法～ ご挨拶 第一部 「文明と憲法—宗教的観点から」 小スピーチ 「神道から改憲を考える」 「文明の視点からみる平和のかたち」 平和のためのアート リードオル ガン演奏 第二部 白熱教室 「これからの国のかたちを考えよう —左右対立を超えて」 友愛平和の祈り 閉会挨拶	本間照光 (総合研究所前所長) 小林正弥 (千葉大学教授) 芳村正徳 (神道神習教教主、教派神道 連合理事長) 東方敬信 (青山学院大学名誉教授) 久世望 (日本リードオルガン協会会長) 小林正弥 本山一博 (玉光神社権宮司) 稲垣久和 (東京基督教大学教授)	総研ビル 12F 大会議室	共催：総合研究所 友愛平和の風 協力：財団法人尾崎行 雄記念財団、賀川豊彦 記念松沢資料館、地球 平和公共ネットワーク
13.10.13	映画「トークバック」上映会 およびキルティングワークショップ			課題別研究部 「人権教育の手法に関 する多国間分析と青山 モデルの構築」
14.3.5 9:30～ 17:30	国際シンポジウム The Political Economy of Latin American Regionalism 開会 PART I Regional Integration in Latin America : History, Theory and Lessons from the Asia-Pacific 1. What to Expect from Latin American Economies in the Current Global Context? 2. The Political Economy of Latin American Regionalism and Free Trade Agreements 3. Latin American Regionalism in a New Global Context: Diverse Models, Diverse Strategies 4. Institutional Interplay: Regional Institutions in an Evolving Regional Architecture of the Asia-Pacific 5. Economic Integration and International Cooperation in Latin America and East Asia PART II Present and Future of Regional Integration in Latin America 閉会	Philippe De Lombaerde (国連大学地域統合比較研究所副所長) 式部透 (米州開発銀行アジア事務所所長) 司会：幸地茂 (国際交流センター副所長、 国際政治経済学部准教授) Alicia García Herrero (BBVA リサーチ 新興市場チー フ・エコノミスト) Philippe De Lombaerde (国連大学地域統合比較研究所副所 長) José Briceño Ruiz (ベネズエラ ロス・アンデス大学准 教授) 菊池努 (国際政治経済学部教授) 細野昭雄 (JICA 研究所シニアリサーチアドバ イザー) 司会：岩田伸人 (国際交流センター所長、 経営学部教授) 幸地茂 (国際交流センター副所長、 国際政治経済学部准教授) H. E. Mr. André Corrêa Lago (ブラジル大使) H. E. Mr. Patricio Torres (チリ大使) H. E. Ms. Marcos Rodríguez (キューバ大使) H. E. Mr. Leonardo Carrión Eguiguren (エクアドル大使) H. E. Mr. Martha Zelayandia (エル・サルバドル大使) H. E. Mr. Seiko Ishikawa (ベネズエラ・ボリバル共和国大使)	国際連合大学 本部5F エリザベス・ ローズ会議場	社会科学部 「ラテンアメリカにお ける地域統合・地域主 義の新たな展開」 共催：総合研究所 WTO 研究センター 国連大学地域統合比較 研究所 米州開発銀行

【2014年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
14.12.7 14:30～ 16:30	Elizabeth Closs Traugott 教授 講演会 演題: The pivotal role of linguistic context in constructional change	講師 Professor Dr. Elizabeth Closs Traugott (Stanford University)	17号館6階 本多記念国際 会議場	人文科学研究部 「英日語の『周辺部』 とその機能に関する総 合対照研究」 共催: 日本語用論学会
15.1.31 14:00～ 15:30	講演会 創造から新しい創造へ キリスト教から見た津波・フクシマへの 一つの観点	講師 スコット・ヘイフマン教授 (英 セント・アンドリュース大学)	17号館8階 17810教室	キリスト教文化研究部 「3.11以降の世界と聖 書一言葉の回復をめ ぐって」
15.3.5 9:45～ 17:30	国際シンポジウム LATIN AMERICA IN THE PACIFIC RIM 開会 <u>SESSION 1: Latin America and Asia-Pacific: Interactions in the Pacific Rim</u> 1. Latin American in the Pacific Rim: Trends and Agenda 2. Opportunities and Challenges in Trade Relations between Asia and Latin America 3. Macroeconomics of Trade Diversification: The Case of Latin America's Trade with Asia-Pacific <u>SESSION 2: Global trends inside and outside of the Pacific Rim</u> 1. Latin America-Asia Economic Relations: What to Expect Next? 2. Reshaping World Trade Agenda: Mega-FTAs in Asia-Pacific and the Japan-EU Economic Partnership 3. The Transatlantic Trade and Investment Partnership: Implications for Latin America and Asia <u>SESSION 3: Trade Policies in the Pacific Rim: Latin America Strategies</u> 1. The Case of Chile 2. The Case of Colombia 3. The Case of Peru 4. The Case of Mexico <u>SESSION 4: Japan and Latin America in the Pacific Rim</u> 1. Japan and Latin America 2. Beyond Free Trade: Trade, Investment and International Cooperation 3. Official Development Assistance Programs and Projects through JICA in Latin America and Caribbean 閉会	仙波憲一 (青山学院大学学長) 竹本和彦 (国連大学サステイナビリティ 高等研究所所長) 司会 幸地茂 (国際交流センター副所長) Antoni Esteveordal (米州開発銀行統合貿易局局長) Juan Blyde (IDB 統合貿易局 Lead Trade Economist) Keiji Inoue (ラテンアメリカ・カリブ経済委員会国 際貿易統合格部 Deputy Director) Won-Ho Kim (韓国外国語大学国際地域大学院学部 長、教授) 司会 幸地茂 (国際交流センター副所長) Alicia Garcia Herrero (BBVA リサーチ新興市場チーフ・エ コノミスト) 渡邊頼純 (慶應義塾大学総合政策学部教授) Philippe De Lombaerde (国連大学地域統合格部研究所副所長) 司会 幸地茂 (国際交流センター副所長) 岩田伸人 (国際交流センター所長) H. E. Mr. Patricio Torres (チリ大使) H. E. Mr. Roberto Vélez (コロンビア大使) H. E. Ms. Elard Escala (ペルー大使) Mr. Armando Arriaga (メキシコ大使館 臨時代理大使) 司会 幸地茂 (国際交流センター副所長) 岩田伸人 (国際交流センター所長) 高瀬寧 (外務省中南米局局長) 細野昭雄 (JICA 研究所シニアリサーチアドバ イザー) 高野剛 (JICA 中南米部部長) Philippe De Lombaerde (国連大学地域統合格部研究所副所長) 式部透 (米州開発銀行アジア事務所所長)	国際連合大学 本部5F エリザベス・ ローズ会議場	社会科学部 「ラテンアメリカにお ける地域統合・地域主 義の新たな展開」 共催: 総合研究所 国連大学地域統合格部 研究所 米州開発銀行 協賛: WTO 研究セン ター コロンビアコーヒー生 産者連合会

【2015年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
15.11.18 17:30～ 19:45	国際セミナー 総研プロジェクト「市場調査」研究活動 の紹介と投資家調査概要報告 招待講演 Selective Disclosure: The Case of Nikkei Preview Articles	プロジェクト代表 亀坂安紀子 濱尾泰 (Professor, Columbia Business School, University of Southern California)	17号館3階 17311教室	課題別研究部 「株式市場に関する国 際比較調査～投資家心 理からのアプローチ ～」

【2016年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
16.6.4 14:00～ 17:00	第7回自校史研究会・シンポジウム 明治期の青山学院と朝鮮—自校史に学ぶ— 開会挨拶 基調講演 「本多庸一とその時代」 対論者コメント 対論者コメント 全体討論	研究プロジェクト代表 杉浦勢之（総合文化政策学部教授） コーディネーター 梅津順一（青山学院院長） 講師 金文吉（キム ムンギル） （韓国文化研究所所長釜山外国 語大学校名誉教授） 対論者 嶋田順好（宮城学院学院長） 対論者 李省展（イ ソンジョン） （恵泉女子学園大学教授）	15号館5階 第13会議室	課題別研究部 「自校史研究と教育実 践モデルの開発—青山 学院史研究—」
16.7.1 18:00～ 20:00	シンポジウム 苦難と不条理の中でいかに聖書を読むか 第一部 発題 Ⅰ 伝わらぬ哀しみを抱えて—哀歌の場 合 Ⅱ 苦しみと奇跡物語のはざままで 第二部 共同討議 「苦難の中で聖書を読むとはどういうこ とか」 第三部 祈りと黙想のとき	発題者 大宮謙 （社会情報学部准教授・宗教主任） 福嶋裕子 （理工学部准教授・宗教主任） 左近豊（美竹教会牧師）	日本キリスト 教団 美竹教会	キリスト教文化研究部 「3.11以降の世界と聖 書—言葉の回復をめ ぐって」

総合研究所公開講演会等開催状況（1989年度～2002年度）

【1988年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
88.10.17 15:00～	ウェスレー記念講演会（第1回） 「18世紀の英国とメソジズムの果した功績」	講師 リチャード・P・ハイツェンレイター （南メソジスト大学パーキンス神学校 教授）	総研ビル 11F 会議室	キリスト教文化研究セ ンター
88.10.19 15:00～	ウェスレー記念講演会（第2回） 「最近のウェスレー研究の現状と傾向」	通訳 鈴木有郷（恵泉学園女子大学教授）		
88.12.3 10:30～	総合研究所開所式		総研ビル 12F 大会議室	

【1990年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
90.11.26 18:00～ 19:30	公開講演会 「生と死を考える ーキリスト教生命倫理の方法をめぐって」	アルフォンス・デーケン （上智大学文学部教授）	総研ビル 12F 大会議室	キリスト教文化研究セ ンター「キリスト教生 命倫理」プロジェクト

【1991年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
91.10.27	パネルディスカッション 「土地税制」		総研ビル 12F 大会議室	経済研究センター 「各国における財政制 度・財政政策の実態調 査と国際比較」プロ ジェクト（共催：日本 財政学会）
91.12.10 13:20～ 14:30	公開講演会 「いのちをみつめて」	日野原重明（聖路加看護大学学長）	青山 キャンパス 11号館2F 1123教室	人文学系研究センター 「死生観の比較文化論 的研究」プロジェクト
91.12.27 13:30～ 17:30	シンポジウム 「どこへいく日本の クリエイティブディレクション ～1990年代のクリエイティブ ディレクターの在り方を考える～」	基調報告 小林保彦（経営学部教授） コーディネーター 小林保彦（経営学部教授） パネラー 坂田耕 （㈱マツキャンエリクソン博報堂上級 副社長兼政策本部長） 高橋俊明 （㈱電通第3クリエイティブディレク ション局次長兼クリエイティブディ レクター） 奥野貴司 （日本広告業協会クリエイティブ委員 会委員長）	総研ビル 11F 第19会議室	経営研究センター「国 際環境の変動と企業の 対応行動」プロジェク ト
92.1.18 1.19	シンポジウム 「米ソ関係の総合的研究会議」 ①「冷戦の終結」 ②「ソ連（ロシア）問題」 ③「冷戦後の安全保障レジーム」 ④「米ロ関係とロシアの将来」 ⑤「冷戦後の世界」	出席者 有賀貞（一橋大学） 井沢正忠（拓殖大学） 岡部達味（東京都立大学） 木村汎（国際日本文化研究センター） 中嶋嶺雄（東京外国語大学） 西村司明（一橋大学） 宮里政玄（国際大学） 山内昌之（東京大学） 山本武彦（早稲田大学） 山本吉宣（東京大学） 渡辺昭夫（東京大学） 報告者 伊藤憲一、木村明生、阪中友久、 永井陽之助、袴田茂樹、山本満、 吉田靖彦、土山實男 討論者 天羽民雄、池田清、長井信一、 速水佑次郎（国際政治経済学部教授） 中山賀博（本学元教授）	総研ビル	国際政治経済研究セン ター「米ソ関係の総合 的研究」プロジェクト

【1992年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
92.7.18 13:00～ 17:00	理工学研究センター研究報告会（第1回） （1991年度終了の研究プロジェクトによる 公開講演会）	鮫島達也、木村幹、富山健、犬塚直夫、 二宮理恵	青山 キャンパス 11号館2F 1123教室	理工学研究センター
92.11.10 18:00～ 19:30	キリスト教文化講演会 「現代アメリカにおける平和思想 —核兵器の恐怖を体験して」	ジョセフ・R・オダネル （元アメリカ合衆国広報・文化交流局局 員、ホワイトハウス専従カメラマン）	総研ビル 12F 大会議室	キリスト教文化研究セ ンター「アメリカ・プ ロテスタント思想史研 究」プロジェクト
92.12.8 13:10～ 14:30	公開講演会 「日本人の死生観」	相良亨（東京大学名誉教授）	青山 キャンパス 11号館2F 1123教室	人文学系研究センター 「日本と西洋における 死生観の研究」プロ ジェクト
92.12.21 17:00～ 19:30	公開シンポジウム 「グローバル時代のマーケティングコミュ ニケーションを探る」 ～英国広告に学ぶ理論とケーススタディ～ 講演 「英国サーチ&サーチ社の広告クリエ イティブのグローバル化と実際」	開会挨拶 小林保彦（経営学研究センター室長） 問題提起 仁科貞文（文学部教授） 小林保彦（経営学部教授） 講師 狐塚康己 （サーチ・アンド・サーチアドバンタ イジング(株)バイス・プレジデントク リエイティブディレクター） 宮澤節夫 （株式会社南北社クリエイティブ局長）	青山 キャンパス 6号館2F 621教室	経営研究センター「グ ローバル時代の日本市 場に関する総合的研 究」プロジェクト

【1993年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
93.10.9 12:30～ 17:30	理工学研究センター 研究報告会（第2回） （1992年度終了の研究プロジェクトによる 公開講演会）	池田正幸、西尾泉、竹本幹男、坂本泰祥 寺崎和郎、井出英人	理工学部 4号館3F 4307教室	理工学研究センター
93.12.9 19:35～ 20:45	公開講演会 「終末期患者をめぐる生命倫理」	星野一正 （日本生命倫理学会会長・京都大学名誉 教授）	青山 キャンパス 11号館2F 1123教室	人文学系研究センター 「日本と西洋における 死生観の研究」プロ ジェクト
93.12.8	公開講演会 「グローバル時代のチャンネル戦略」	宮野入達久 （(有)TM インターナショナル代表取締 役社長）	青山 キャンパス	経営研究センター「グ ローバル時代の日本市 場に関する総合的研 究」プロジェクト

【1994年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
94.10.15 1300～ 17:30	理工学研究センター 研究報告会（第3回） （1993年度終了の研究プロジェクトにおけ る公開講演会）	富山健、光延旺洋、永田勇二郎、 石津昌平、馬渡鎮夫	理工学部 4号館3F 4307教室	理工学研究センター
94.12.9 13:00～ 14:00	人文学系研究センター講演会 「ここが地球の真ん中です」	永六輔（放送タレント）	青山 キャンパス 11号館2F 1123教室	人文学系研究センター 「東西死生観の現代的 展開」プロジェクト
95.3.27 ～28	公開シンポジウム 「アジアのなかの日本語と英語」 3.27 「第二言語獲得理論と日本語教育の発展」 ①講演会：10:00～11:30 ②シンポジウム：13:00～16:30 3.28 「アジアの国際言語としての英語」 ③講演会：10:00～11:30 ④シンポジウム：13:00～16:30	①大津由紀雄（慶應義塾大学教授） ②発題者 長友和彦（お茶の水女子大学教授） 広瀬正宜（国際基督教大学準教授） 西原鈴子 （国立国語研究所日本語教育セン ター指導普及部長） ③ Foo Chee Jan （Director, Language Teaching Institute, Regional Language Center, Singapore） ④発題者 Suphat Sukamolson （Associate Professor, Chulalongkorn University, Bangkok Thailand） 竹本裕子 （東洋英和女学院大学助教授） 榎木蘭鉄也（桃山学院大学講師）	総研ビル 11F 第19会議室	国際政治経済研究セ ンター「国際コミュニ ケーションにおける言 語と文化」プロジェ クト

【1995年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
95.10.16 18:00～ 19:30	公開講演会 「戦後50年以降—日本の課題」	大木英夫 (聖学院理事長、東京神学大学教授)	総研ビル 12F 大会議室	キリスト教文化研究センター「現代キリスト教文化・倫理研究」プロジェクト
95.11.24 16:20～ 17:50	公開講演会 「Gender and Mobility in the Plays of Samuel Beckett」	Dr. Mary Bryden (英国レディング大学 サミュエル・ベケット国際研究所主事)	青山 キャンパス 1143教室	学際研究プロジェクト 「変容する英語圏の社会と文化」プロジェクト
95.12.7 15:25～ 16:45	公開講演会 「死に生きる—ホスピスの現場より」	下稲葉康之 (福岡亀山栄光病院副院長、 ホスピス長、香住丘福音教会牧師)	青山 キャンパス 11号館2F 1123教室	人文学系研究センター 「東西死生観の現代的展開」プロジェクト

【1996年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
96.6.17 16:20～ 17:50	公開講演会 「演劇の東と西」	六代目尾上松助 (歌舞伎俳優)	青山 キャンパス 11号館2F 1173教室	人文学研究センター 「東西の言語・文化の比較研究」プロジェクト
96.10.26 9:00～ 20:15	公開映画上映会 「ショアー」 (クロード・ランズマン監督 フランス映画)	解説 高橋哲哉 (東大教授) 平野新介 (非常勤講師)	総研ビル 12F 大会議室	人文学系研究センター 「現代文明における生と死」プロジェクト (共催：青山フランス文学会)
96.12.19 16:00～	公開講演会 「これからの若手研究者への期待 —私立大学理工系における研究所の役割—」	大附辰夫 (早稲田大学理工学総合研究センター 所長・理工学部電子通信学科教授)	理工学部 1号館3F 1334教室	理工学研究センター

【1997年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
97.5.23 18:00～ 19:30	公開講演会 「みことばはわが足の灯 —ローズンゲンの精神史—」	宮田光雄 (東北大学名誉教授)	大学礼拝堂	キリスト教文化研究センター「キリスト教と人権・平和問題」プロジェクト
97.10.20 18:00～ 19:30	公開講演会 「M. L. キングの統合思想のゆくえ : アメリカ少数民族の人権問題」	梶原寿 (名古屋学院大学)	総研ビル 12F 大会議室	キリスト教文化研究センター「キリスト教と人権・平和問題」プロジェクト
97.12.4 14:45～ 16:15	公開講演会 「年齢神話をくつがえす —21世紀の高齢化社会にむけて」	松山美保子 (大妻女子大学教授)	青山 キャンパス 11号館2F 1173教室	人文学系研究センター 「現代文明における生と死」プロジェクト

【1998年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
98.10.8 11:00～ 12:30	公開講演会 「中国泉州糸繰り人形」 ①講演 ②デモンストレーション ③実演	泉州市木偶劇団 林文栄 (泉州市木偶劇団・副団長)	総研ビル 12F 大会議室	人文学系研究センター 「演劇とその成立要素」プロジェクト
98.10.3 14:00～	公開講演会 (第1回) 「統計の研究をどのようにすすめたか」 —Statistical Science 誌上にて David Findley と話した線に沿って研究上の経験を語る—	赤池弘次 (元統計数理研究所所長)	総研ビル 第18会議室	経済研究センター「情報処理技術の展開と経済行動分析への応用」プロジェクト
98.11.28 14:00～	公開講演会 (第2回) 「統計とはなんだろう」 —統計的思考あるいは統計的推論の種々相について思いつくままに語る—	赤池弘次 (元統計数理研究所所長)	6号館1F 第4会議室	経済研究センター「情報処理技術の展開と経済行動分析への応用」プロジェクト

《総合研究所創立10周年記念事業》

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
98.12.8 14:45～ 16:15	公開講演会 「死を考え、死を支える —ホスピスでの経験から—」	柏木哲夫 (大阪大学人間科学部教授)	総研ビル 12F 大会議室	人文学系研究センター
98.11.19 18:00～ 19:30	公開講演会 「深刻化するアジアの通貨危機 —今、日本は何をすべきか」 ①「国際金融環境と新興市場危機」 ②「通貨金融危機から経済危機へ —韓国のケース」	①篠原興 (国際通貨研究所専務理事) ②深川由起子 (本学経済学部助教授)	総研ビル 12F 大会議室	経済研究センター
98.11.20 13:10～ 14:40	公開講演会 「転換期のアジアと法システム」	安田信之 (名古屋大学大学院教授)	青山 キャンパス 930教室	法学研究センター (共催: 青山学院法学会)
98.10.7 11:00～ 12:30	公開講演会 「個を生かす経営」	丸山茂雄 (ソニー・ミュージックエンタテインメント代表取締役社長)	総研ビル 12F 大会議室	経営研究センター
98.10.31 98.11.1	「International Conference On Global Governance」 (グローバル・ガバナンスに関する国際会議)	Oran R. Young, Stephen Krasner G. Jhon Ikenberry (ダートマス大学教授)	総研ビル 12F 大会議室	(主催: 国際政治経済学部) 協力参加: 国際政治経済研究センター
98.10.3 15:00～ 16:30	公開講演会 「岐路に立つ日本の大学理工学部」 —国際化はこんなところにも—	村上陽一郎 (国際基督教大学教授)	理工学部 7号館	理工学研究センター
98.10.3 10:30～ 12:00 13:00～ 14:30	テーブルセッション 「理工学部でどんな研究をしているのだろうか」 1. 顔熱画像を用いたひとの感情分析 2. シミュレーションを用いた電波の観察 3. 戦略的生産管理システムのフレームワーク 4. ソフトウェア開発のプロジェクト管理支援 5. 見えるからわかる数学モデル 6. セラミック薄膜のウルトラC 7. ダイヤモンド? 8. 大きな環状構造をもつ抗生物質の合成 9. ソーラーカーの高性能化 10. 好熱性細菌はなぜ熱に強いのか? 11. 超伝導が開く新しい夢 12. 脳の覚醒状態を外から見るとは? 13. 弾性波動の逆解析 (実体波からラム波へ) 14. 氷で涼しい 15. 強い磁石を作る 16. データは語る 17. やっと解かれた Fermat 予想 18. 賢いロボット召使いたち 19. 理工系でコンピュータに馴染むためには 20. パソコンによる未知の流れ 21. レーザーで物を動かす!? 22. ハイブリッド応用力解析法開発への挑戦	発表者 1. 井出英人・田中久弥 2. 橋本修 3. 坂元克博 4. 田部勉 5. 佐久田博司 6. 重里有三・澤邊厚仁 7. 松本修・伊藤健一・澤邊厚仁 8. 伊藤尚、光延旺洋 9. 林洋一 10. 鮫島達也・佐藤高則 11. 秋光純 12. 二宮理憲 13. 竹本幹男 14. 岡田昌志・姜持東 15. 永田勇二郎・佐保博章 16. 稲積宏誠 17. 小池和彦・井上政久 18. 富山健 19. 矢頭修介 20. 林光一 21. 西尾泉 22. 隆雅久	理工学部 8号館	理工学研究センター
98.6.22 18:00～ 19:30	公開講演会 「異文化接触の快と不快」	小塩節 (フェリス女学院院長)	総研ビル 12F 大会議室	キリスト教文化研究センター
98.9.25 13:00～ 17:30	公開シンポジウム 「これからの福祉—パラダイム転換期の日本における福祉問題—」 基調報告 ①「これからの福祉—自由と保障—」 ②「福祉は心の豊かさ」 ③「福祉原論としての配分の哲学—パラダイム転換期における日本の福祉—」	①高田一夫 (一橋大学教授) ②小林千登勢 (女優・エッセイスト) ③小原信 (国際政治経済学部教授) パネリスト 三輪修三 (本学元教授) 本間照光 (理工学部教授) 神長勲 (法学部教授) コーディネーター 石川良太郎 (経済学部教授)	総研ビル 12F 大会議室	特別研究プロジェクト

【1999年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
99.6.24 12:40～ 17:45	Aoyama Media Lab. (AML) プロジェクト 中間成果報告会 ①「AML プロジェクトの全貌」 ②「AML プロジェクトの活動と今後の計 画」 ③「新製品開発プロジェクト協調型演習」 ④「グローバル・コンカレントエンジニア リング協調型演習」 ⑤「Stanford 大学 Project-Based Learning (PBL) の紹介と WP2 との共同研究」 ⑥「生販物統合化情報システム協調型演 習」 ⑦「グローバル・サプライチェーンマネジ メント協調型演習」 ⑧「集合教育型遠隔授業システム」 ⑨「一貫教育におけるマルチメディア型総 合学習」 ⑩「新教育基盤機能について」	報告者 ①玉木欽也 (経営学部教授) ②佐藤政俊 (日本ユニシス株) ③浪川博之 (株オフィックス) ④岸波宗洋 (経営学部助手) ⑤ Dr. Renate Fruchter (PBL Lab. Stanford Univ.) ⑥析海洪 (SAP ジャパン株) ⑦玉木欽也 (経営学部教授) ⑧佐久田博司 (理工学部助教授) ⑨古賀節子 (文学部教授)・ 小田光宏 (文学部助教授) ⑩羽田昭裕 (日本ユニシス株)	総研ビル 12F 大会議室	特別研究プロジェクト 「AML」プロジェクト
99.10.29 12:40～ 16:30	Aoyama Media Lab. (AML) プロジェクト 公開授業 ① AML プロジェクト実証実験の紹介 ②新教育システムを利用した仮想新製品開 発会議 ③業務プロセスの統合型ソフトウェアを利用 した演習の紹介 ④青山一世田谷キャンパス間での遠隔授業 の紹介 ⑤マルチメディアを利用した初等部の授業 の紹介—ビデオ上映	開会の挨拶 半田正夫 (総合研究所所長) ①玉木欽也 (経営学部教授) ②WP1: 新製品開発プロジェクト協調 型演習 WP2: グローバル・コンカレントエ ンジニアリング協調型演習 ③WP3: 生販物統合化情報システム協 調型演習 WP4: グローバル・サプライチェー ンマネジメント協調型演習 ④WP5: 集合教育型遠隔授業システム による図形科学及びCG 演習 ⑤WP6: 一貫教育におけるマルチメデ ィア型総合学習	総研ビル 11F 第19会議室	特別研究プロジェクト 「AML」プロジェクト
99.11.19 12:30～ 13:10	公開講演会 「中国貴州省安順地戯」公演	講師: 封培文、李業成 実演者: 蔡官地戯団	青山 キャンパス チャペル前庭	人文学系研究センター 「演劇とその成立要素」 プロジェクト
99.12.8 18:00～ 19:30	公開講演会 「ブロードウェイ・ミュージカルの変遷 —マイノリティ問題—」	大平和登 (在ニューヨーク演劇評論家・演劇プロ デューサー)	12号館 1235教室	学際研究プロジェクト 「ニューヨーク都市文 化研究」プロジェクト

【2000年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
00.4.28 12:40～ 17:30	Aoyama Media Lab. (AML) プロジェクト 成果報告会 ①「AML プロジェクトの全貌」 ②「WP7 サイバーキャンパス基盤システ ムについて」 ③「WP1 新製品開発プロジェクト協調型 演習」 ④「WP2 グローバル・コンカレントエ ンジニアリング協調型演習及びスタン フォード大との共同研究」 ⑤「WP3 生販物統合化情報システム協 調型演習」 ⑥「WP4 グローバル・サプライチェー ンマネジメント協調型演習」 ⑦「WP6 一貫教育におけるマルチ型総合 学習」 ⑧「WP5 集合教育型遠隔授業システム」 ⑨「AML II プロジェクトのビジョンと活 動内容」	報告者 ①玉木欽也 (経営学部教授) ②野村章 (日本ユニシス株) ③松島佳樹 (岐阜経済大学教授) ④岸波宗洋 (経営学部助手) ⑤斉藤裕 (経営学部助手) ⑥田中正郎 (経営学部助教授) ⑦小田光宏 (文学部助教授) ⑧佐久田博司 (理工学部助教授) ⑨原潔 (日本ユニシス株)	総研ビル 12F 大会議室	特別研究プロジェクト 「AML II」プロジェ クト
00.6.19 13:30～ 15:00 18:00～ 19:30	神学討論会 (パネル討論会) 「アメリカと日本の教会と神学」 公開講演会 「命の尊厳一般してはならない」	パネリスト 芳賀力 (東京神学大学教授) 越川弘英 (巣鴨ときわ教会牧師) 鈴木有郷 (文学部教授) 司会: 東方敬信 (経済学部教授) 講師 スターリン・ハワーラス (デューク大学教授)	総研ビル 12F 大会議室	キリスト教文化研究セ ンター

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
00.6.21 13:30~ 15:00	キリスト教文化研究会 「キリスト教信仰と文化的影響」		総研ビル3F キリスト教 文化センター	キリスト教文化研究セ ンター
00.7.6 13:00~ 18:00	第1回オープンフォーラム ①「AMLプロジェクトからAMLⅡプロ ジェクトへの展開」 ②「AMLコンソシアムについて運営、 参加方法等のご紹介」 ③AMLⅡ各研究部会の紹介とデモンスト レーション	報告者・内容 ①玉木欽也(経営学部教授) ②原潔(客員研究員) ③WG11:新製品企画&事業計画研究部 会 WG12:サイバーデザイン&マニユ ファクチャリング(CDM)研 究部会 WG13:日本型戦略的ビジネスモデル 研究部会 WG21:マルチメディア型総合学習研 究部会 WG31:サイバーキャンパス基盤シス テム研究部会	総研ビル 12F 大会議室 19会議室他	特別研究プロジェクト 「AMLⅡ」プロジェ クト
00.9.11	フォーラム 青山学院大学総合研究所プロジェクト (現代の組織変革に関する会計学的考察) 「東北大学フォーラム」	報告者:挽文子(一橋大学助教授) 横田絵理(武蔵大学助教授) 高橋邦丸(本学専任講師・所員) 討論者:田中隆雄 (東北大学大学院教授・客員) 東海幹男(本学教授・所員)	東北大学川内 キャンパス 経済学部 研究棟	経営研究センター 「現代の組織変革に関 する会計学的考察」プロ ジェクト
00.11.30 13:00~ 16:40	第2回オープンフォーラム ①講演「遠隔教育システムの最新国際標 準化動向」 ②仮想業務教育支援ソフトウェアを活用し た「サイバービジネス演習」の実践 ③サイバービジネス演習におけるサイバー キャンパス基盤システム ④サイバービジネス演習システムのデモン ストレーションと研究部会フォーラムの 紹介 WG11:新製品企画&事業計画研究部会 WG12:サイバーデザイン&マニファク チャリング研究部会 WG13:日本型戦略的ビジネスモデル研 究部会 WG31:サイバーキャンパス基盤シス テム研究部会	①仲林清(株エヌ・ティ・ティエックス) ②玉木欽也(経営学部教授) ③原潔(客員研究員) ④「サイバービジネス演習における新製 品企画&マーケットリサーチ」 岸波宗洋(経営学部助手) 小酒井正和(客員研究員) WG12 「IF7プロジェクト((財)製造科学セ ンターIMSセンター)の紹介とサイ バービジネス演習におけるエクストラ ネット・プロダクション教育」 齊藤裕(経営学部助手) WG13 「日本型戦略的ビジネスモデルとSCM 教育」 田中正郎(経営学部助教授) WG31 「サイバーキャンパス基盤システムの運 用状況と今後の研究課題」 白井賢一(日本ユニシス株)	総研ビル12F 大会議室	特別研究プロジェクト 「AMLⅡ」プロジェ クト

【2001年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
01.4.21 13:30~ 17:30	学術シンポジウム 「中国WTO加盟の実現と日本の提言」	講師 金柏松 (中国大使館経済商務処一等書記官) 松下満雄(前WTO上級委員) 高瀬保(元GATT事務局部長) 遠藤實(元ジュネーブ代表部大使) 経済産業省通商機構関係者 コーディネーター 山浦広海(福島大学経済学部教授)	総研ビル 3F 第10会議室	学際研究プロジェクト 「WTOの制度および 管轄領域に関わる分野 横断的研究」
01.5.16 16:00~ 18:00	消費者シンポジウム 「価格の不思議」	井本省吾(日経新聞記者)	総研ビル 6F 14604教室	学際研究プロジェクト 「WTOの制度および 管轄領域に関わる分野 横断的研究」
01.5.23 13:00~ 15:00	消費者シンポジウム 「価格と流通」	十合暁(前専修大学経営学部教授)	10号館 18教室	学際研究プロジェクト 「WTOの制度および 管轄領域に関わる分野 横断的研究」

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
01.5.28 18:00～ 19:30	公開講演会 「新約聖書と民族主義 —ヨハネの黙示録の世界—」	佐竹明 (フェリス女学院大学学長)	総研ビル 12F 大会議室	キリスト教文化研究センター「民族主義とキリスト教」プロジェクト
01.5.30 13:00～ 15:00	消費者シンポジウム 「価格と流通」	奥村洋彦 (学習院大学経済学部教授)	総研ビル 6F 14604教室	学際研究プロジェクト 「WTOの制度および管轄領域に関わる分野横断的研究」
01.5.30 13:00～ 19:30	第3回オープンフォーラム 講演 ①「AML II コンソシアム2001年度推進計画」 ②「eラーニングの普及をめざすALIC」 研究報告とデモンストレーション ③「サイバー教育を実践したサイバービジネス演習の成果報告」 ④「サイバーキャンパス基盤システム研究部会」 ⑤「マルチメディア型総合学習研究部会」 ⑥「モデルラーニング遠隔授業システム研究部会」	講師 ①玉木欽也 (経営学部教授) ②伊藤健二 (ALIC) 報告者 ③田中正郎 (経営学部教授) ④白井賢一 (日本ユニシス株) ⑤小田光宏 (文学部助教授) ⑥佐久田博司 (理工学部助教授)	総研ビル 12F 大会議室	特別研究プロジェクト 「AML II」プロジェクト
01.7.2 13:00～ 18:00	学術シンポジウム 「WTOの貿易関連知的所有権 (TRIPS) 協定の諸問題」 冒頭解説 ① WTO 新ラウンド交渉の現状と途上国の参加問題 ② TRIPS 協定の意義と効果 第1セッション テーマ: TRIPS 協定と生物多様性条約 (バイオ技術と特許を含む) 第2セッション テーマ: 並行輸入の取扱い (医薬品と貿易)	冒頭解説・解説者 ①外務省経済局 ②高瀬保 (客員研究員) 第1セッション コーディネーター 角田政芳 (東海大学) 討論者: 山根裕子 (政策研究大学院) 熊谷健一 (九州大学) 山名美加 (国際高等研究所) 第2セッション コーディネーター 山根裕子 (政策研究大学院) 討論者: 松居祥二 (弁理士・AIPPI) 木棚照一 (早稲田大学) 角田政芳 (東海大学) 高瀬保 (客員研究員)	総研ビル 12F 大会議室	学際研究プロジェクト 「WTOの制度および管轄領域に関わる分野横断的研究」 後援: (財) 日本関税協会
01.10.17 14:00～ 18:00	公開講演会 「WTOのセーフガード措置 (SG) 発動の諸問題」 主要議題 ① SG 措置の役割と世界情勢の変化 ② SG 協定上の諸問題と紛争解決 ③ SG 協定実施上の諸問題 ④日本農業と SG ⑤日本産業と SG	パネリスト 森川卓也 (財務省関税局関税課長) 金田直樹 (農水省総合食料局国際調整課課長補佐) 仁坂吉伸 (経産省通商政策局審議官) 米本雅春 (全国農業共同組合中央会 農業生産対策課長) 海老名誠 (富士総研理事) 高瀬保 (客員研究員) 服部信司 (東洋大学) 渡邊頼純 (大妻女子大学) 岩田伸人 (所員) コーディネーター 松下満雄 (成蹊大学、元 WTO 上級委員会委員)	総研ビル 12F 大会議室	学際研究プロジェクト 「WTOの制度および管轄領域に関わる分野横断的研究」
01.11.2 13:00～ 18:00	第4回 AML オープンフォーラム 講演 ①「WEB ベース協調授業の国際化に向けた連携」 ②「AML プロジェクトと公開授業内容の紹介」 公開授業 ① ALIC との協賛による協調型学習 ②サイバーコンカレントマネジメント研究部会 ③モデルラーニング遠隔授業システム研究部会 ④日本型戦略的ビジネスモデル研究部会 ⑤サイバービジネスプランニング研究部会 ワークショップ ①マルチメディア型総合学習研究部会 ②サイバーコミュニケーション研究部会 ③サイバーESP 教育システム研究部会	ご挨拶 佐伯胖 (総合研究所所長) 講師 ①原潔 (日本ユニシス株) 伊藤健二 (ALIC) ②玉木欽也 (所員) 公開授業担当者 ①戒野敏浩 (経営学部専任講師) ②玉木欽也 (所員)・齋藤裕 (所員) ③佐久田博司 (所員) ④田中正郎 (所員) ⑤松島桂樹 (客員研究員) ワークショップ担当者 ①小田光宏 (所員) ②本名信行 (国際政治経済学部教授) ③古谷千里 (客員研究員)	総研ビル 12F 大会議室 9号館 920教室 931教室 11号館 1143教室 1144教室	特別研究プロジェクト 「AML II」プロジェクト

【2002年度】

日 時	タ イ ト ル	講 師 等	場 所	主 催
02.6.15 13:00～ 15:00	第1回 特許セミナー 「今、なぜ特許なのか？」 —大学・企業における知的財産を考える— 講演 ①「化学企業における知的財産の考え方」 ②「製薬会社における特許の重要性」 ③「成功事例を通じて考える大学における特許の重要性」 ④「特許の喜怒哀楽と艱難辛苦」	開会の挨拶 魚住清彦（理工学部長） 講師 ①神森忠敏 （旭硝子(株)知的財産主幹技師） ②佐伯保治 （エーザイ(株)研究開発本部研開特許部課長） ③澤邊厚仁（所員・理工学部教授） ④水澤純一（理工学部教授） 閉会の挨拶 竹本幹男（理工学研究センター室長）	世田谷 キャンパス 4202教室	理工学研究センター
02.7.2 14:30～ 18:00	学術講演会 「中国と WTO, 現状と将来の課題」	Dr. James V. Feinerman （ジョージタウン大学法学部長） 遠藤實 （元ジュネーブ国際機関日本府代表部特命全権大使）	総研ビル 12F 大会議室	学際研究プロジェクト 「WTOの制度および管轄領域に関わる分野横断的研究」（共催：経営学部）
02.10.2 18:00～	講演会 「キリスト教とイスラム教 —相互の対話は可能か—」	オリヴィエ・ミエ（パーゼル大学教授）	ガウチャー 記念礼拝堂	キリスト教文化研究センター（共催：宗教センター）
02.10.19 13:00～ 15:00	第2回 特許セミナー 「TAMA—TLOの活動と活用について」 「理工学教員の特許 —特許申請・取得をめぐる悪戦苦闘」 講演 ①「TAMA—TLOの活動と活用について」 ②「剪断変形と伸縮変形を利用した非共振型圧電体モータ」 ③「エンジニアの仕事の質と特許取得の意義」 ④「特許 VS 卒業研究」 ⑤「何を特許にし、いくら儲かったか」	開会の挨拶 魚住清彦（理工学部長） 講師 ①古瀬武弘 （TAMA-TLO(株)特許流通アドバイザー） ②魚住清彦（理工学部教授） ③天坂各郎（所員・理工学部教授） ④富山健（理工学部教授） ⑤竹本幹男（所員・理工学部教授） 閉会の挨拶 竹本幹男（理工学研究センター室長）	世田谷 キャンパス 4207教室	理工学研究センター
02.11.5 13:00～ 17:00	AML コンソシアム 第1回 AML & A ² EN オープンフォーラム ①基調講演 「アジアにおける e ラーニングの現状と展開～アジア・e ラーニング・ネットワーク (AEN) を中心に」 ② A ² EN (Aoyama & Asia e-Learning Network) プロジェクトの取り組みと今後の展開 ③単位認定型セルフラーニング ④国際コミュニケーション ⑤モバイル利用の英語教育	挨拶 深町正信（院長） 講師 ①大嶋淳（ALIC: 先進学習基盤協議会） ②玉木欽也（所員・経営学部教授） ③情報リテラシーへの実践と学習効果測定法 北野正雄（日本ユニシス(株)） ④国際共同授業の実験とノウハウ 本名信行（国際政治経済学部教授） 松田岳士（国際政治経済学研究科 博士後期課程） ⑤ TOEIC 準備学習の実験 古谷千里（客員研究員） 小原恒太（(株)ビスコム・ジャパン）	総研ビル 12F 大会議室	特別研究プロジェクト 「AML II」プロジェクト「A2EN」プロジェクト

編集後記

2018年度の総合研究所報が無事に刊行のはこびとなりました。これも執筆者と研究所スタッフの皆様のご尽力のおかげであり、厚く御礼を申し上げます。

本年度で30周年を迎える総合研究所は、本年度から発足した統合研究機構の下に総合プロジェクト研究所と並んで位置づけられ、新たなスタートを切りました。同時に、2016年度開始のプロジェクトを以って公募を停止していた研究プロジェクトは、「研究ユニット」と名称を改め募集を行い、10件の研究ユニットが採択され新たに研究を開始しました。各ユニットの研究テーマや概要は本所報もしくは総合研究所のウェブページをご覧ください。また、博士後期課程の学生や助手・助教の研究支援を行う「アーリーイーグル研究支援制度」の募集も行われ、本年度は後期博士課程の学生の12名および助手・助教の10名が本支援制度に採択されました。さらには科学研究費獲得に対する基盤研究強化支援推進プログラムも開始されました。総合研究所が青山学院の研究の発展に貢献できるように所員一同で活動していく所存です。皆さまのご協力を賜ることができたら幸いです。

(横山 暁 記)

青山学院大学総合研究所報 第26号

2019年3月15日発行

編 集 総合研究所編集委員会

発 行 青山学院大学総合研究所

所長 菊池 努

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

03-3409-7472 (TEL)

03-3409-4184 (FAX)

印 刷 ヨシダ印刷株式会社

150th
140th



青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13～16節より)



Aoyama Gakuin since 1874